評議員
文學博士 萩野由之
文學博士 黑板勝美
文學博士 松本愛重
文學士 笹川臨風
文學士 菊池謙二郎
文學博士 三宅米吉
（イロハ順）

黑川眞道編

國史叢書

石田軍記 全
仙道軍記 全

國史研究會藏版

時に間斷なく、往・今・來は一線の上に繋れり。夫れ現在は過去の生む所にして、未來を説き得るもの、現在に其の基脚を置けばなり。顧ふに世の人、多く現在を重んじて過去を輕んず。過去を輕んずるものにして、現在の眞想を窺知し得るものなく、現在の眞想を窺知し得ざるものにして、安ぞ未來に想到するの餘裕を存せんや。言ふ迄もなく我國の現在は、數千年に亘れる過去の産物なり。皇室の尊嚴・國民の性情、將又文物發達の徑路・治亂盛衰の顚末等、仔細に之を觀察すれば、現在の由つて來る所以を明かにし、隨つて未來の赴趨する所を察するに難からざるなり。

抑過去を觀察するには、根本史料に據らざるべからずして、一篇の成書に據るを非なりとす。蓋人各見る所あり、自家の見地は、是れ他人の見地にあらず。一篇の成書に賴りて、過去を知らんとするは、卽ち自家の見地を沒却して、他人の見地に傾倒するものなり。讀史餘論・日本外史は、各其の著者の心に映り眼に現れたる日本歷史にして、之を以て眞箇の日本歷史と稱し得べからず。自ら眞箇の日本歷史を知らんと欲せば、根本史料たる當時の記錄に由りて研鑽討究せられざるべからざるなり。是惟に日本の過去を正當に知り得るのみにあらず、研究の興味、亦實に津々たるものあらん。本叢書は眞に我國を了解せんと力むる特志者に、根本史料を提供せんと欲して刊行す。

蓋世には現在にのみ齷齪して、過去を觀察する興味と餘裕とを有せざるもの多しと雖、又孜々として往を彰にし今を知り來を考ふるの士尠しとなさず。此の書、或は少數篤學の士に容れらるゝも、多數俗庸の人に迎へられざるは固より期する所なり。さばれ需要の多少を論ぜず、必ず全部の刊行を大成すべし。敢て爰に之を聲明す。

國史研究會主幹

解題

石田軍記　十五卷

本書內容は、最初豐太閤治世より筆を起し、秀賴誕生、秀次讒言、秀次自殺、秀次公達并に妾等の誅戮、秀吉薨去、秀賴大坂在城、上杉景勝征伐として家康會津へ進發、諸大名關東に發向する事、石田三成陰謀、家康江戶城に歸着、伏見落城、丹後田邊城攻、關ヶ原合戰前に於ける諸大名の動靜の數々、家康關ヶ原に發向、三成大垣より關ヶ原に出張、關ヶ原合戰、筑前中納言裏切、三成大敗、佐和山城・大垣城落居、小西・石田・安國寺等捕はる、右三人六條河原に頸を刎ねらる、終りに闕國を諸將に與へられしかば、人々家康の萬歲を祝したりと筆を止めたり。

本書の內容、大略以上の如くにして、此の內三成の最大事件として、豐臣秀次の讒言と、關ヶ原合戰とは、最も作者の注意して記せしものと思考せらるゝなり。

本書は、絶版を命ぜられしものと見え、絶版書目に掲載せられたり。但内容は、前條掲げたるものにして、別段三成を稱讃せし事蹟をも記さゞれども、石田軍記と題せれば、内容の如何に拘はらず、石田の事蹟を記せりとの疑あれば、絶版を命ぜられたるなるべし。されば にや、予が藏本の如きは、所々缺丁缺卷さへあり。是れ恐らくは絶版當時、版木の幾分かを破棄せしものか。然るを其の後いつの頃よりか、書肆が内々缺丁缺卷のまゝ、賣捌きたるものなるべし。いづれも作者及出版の年月を掲げず。幸にも帝國圖書館本は全本なれば、補寫することを得て、玆に採收することゝなしたり。

石田三成の事を記せる本に、本書と同名異本あり、又類本あれば、掲げて研究者の參考に供すべし。國書解題に左の種類あり。

一、石田軍記　五冊

解題に云、石田三成に關する軍記なり。三成が、秀吉在世の時に寵愛を受け、秀次を讒せし事などより說き起し、秀吉の薨後、幼主秀頼を擁して、諸大名を談ら

ひ、德川家康と難を構へて、關ヶ原の大戰に及べること、終に小西行長等と共に、誅戮せらるゝに至りし始末等を記したるなり。

一、石田軍記　寫本四卷

解題に云、關ヶ原合戰を中心として、當年前後の軍戰を記せり。一名「關原物語」ともいふ。第一卷は、東軍會津進發の事より、木曾川の川越、同新加納合戰の事に至り、第二卷は、岐阜落城の事より、野州曾根城に於て、敵の火付を召捕る事、第三卷に、安藝中納言を味方に引入るゝ事より、關ヶ原合戰の事に至り、第四卷に、江州佐和山城落居の事より、三成・行長・安國寺伏誅梟首の事に至る。凡そ廿九箇條より成れり。

一、石田城跡集　寫本一冊

解題に云、石田三成歿落の後、其舊城下の傳說を集め記したるものなり。記者の名明かならず。

一、石田三成記　寫本一冊

解題に云、秀吉薨後、石田三成に關する軍記にして、三成謀叛の始より、其殘落の終に及び、德川氏が征夷將軍に任ぜられし事に筆を止めたり。

一、石田三成記　寫本二卷

解題に云、石田三成に關する記事を主として、秀吉・家康等の事を錄せり。最初太閤秀吉の事、大津落城の事より、家康進發、秀秋降參、秀忠對軍となることに至る。以上廿七箇條より成れる略記なり。

此の他、近くは文學士渡邊世祐氏の編纂せるものあり。

一、稿本石田三成　一卷

本書は、石田三成の事蹟を、諸書により研究し記したるものにして、明治四十年の出版に係れり。

石田三成の事蹟は、以上列擧せる外許多あるべけれど、繁にわたれば略しつ。由來三成の事蹟の書物は、德川氏時代に於ては、出版すること能はず。寫本にて傳はりたれば、遂には世に顯はれずなりしものもあるべしと信ぜらるゝなり。

仙道軍記　二卷

仙道とは、大日本地名辭書に云、「中山道の訛にして、古陸奥中央の山道にあたり、數郡に汎稱す。即ち阿武隈（逢隈）の河盂にして、南北に延長し、白河（東西）・石川・岩瀬・田村・安積・安達・信夫・伊達九郡の域是なり」と見えたり。

本書は、其の仙道の内なる岩瀬郡須賀川の地に居城を構へし二階堂家の始末を記したるものなり。抑二階堂家の先祖藤原爲綱は、遠江を受領し、承久の亂に、鎌倉に來り評定衆となり、子孫相續いで同所に居住せり。其の後裔式部大輔某、足利持氏に仕へ、奥州岩瀬郡を與へられしかば、一族治部大輔某を領國に遣し、同郡須賀川の地に城廓を構へ、これを守らしめたり。式部大輔は嘉吉三年逝去し、子の遠江守爲氏家を繼ぐ。此の時に當り、治部大輔爲氏の幼少なるを侮り、己れ恣の振舞あり。爲氏遂に須賀川に至り、一族の戰爭となり、治部大輔敗績して自殺す。よりて爲氏須賀川に留り居住す。其後裔盛義に至る。盛義天正九年逝去し、

繼嗣定まらず。爲に盛義の妻家事を督す。此の虛に乘じ、伊達正宗遂に二階堂家を亡ぼし、其の地を併呑す。これ本書の主眼として記せし所なり。豐臣秀吉に至り、蒲生氏郷を會津に封し、此の地を領せしめ、伊達正宗を仙臺に封したりしかば、是より須賀川の地は、蒲生氏に歸したり。最後には秀吉の德を頌し、薨去の後豐國大明神と祀られ、天下泰平國土安穩の御代となれりと筆を擱きたり。

本書一名「藤葉榮衰記」といふ。續群書類從卷六、百廿九に收めたれども、未だ出版に至らず。但史籍集覽には組入れ出版せり。然れども今回採收せし本書と全く異本なり。且本書は二卷本にして、集覽本は三卷本なり。又排列の順序、書出し等異り、集覽本には奧書なく、本書には正德の奧書あり。恐らくは此の書の方は原本ともいふべく、集覽本は其後書き改め、「藤葉榮衰記」と命名せしものか。記して後考を竢つ。

本書作者詳ならず。但奧書に、「正德五乙未八月念八烏試毫於奧州山東長沼鄉」と見えたれば、正德五年の作なることは知られたり。按ずるに本書は、二階堂の創

業より筆を起し、同家滅亡に至る迄の事蹟を悉く記したれば、恐らくは同家の遺臣などの筆に成れるもの歟。姑く記して後考を竢つ。

また家藏に、「奥州仙道表鑑」三卷あり。　正德甲子奥陽松苻散松一逕の序文あり。作者は序文中に芳山子とあり。　葦名家・二階堂家・田村家・結城家・佐竹家・石川家・石橋家・會津家・伊達家・二本松家・大崎家・相馬家・最上家・岩城家等の事蹟を記し、最後に豐臣太閤奥州下向、蒲生氏鄕會津恩賜に筆を擱きたり。此の書前書の參考となるべきものなれば、其の大略を記して紹介することゝなしぬ。

黑川眞道識

大正三年六月

例言

一、本編には石田軍記十五卷並に仙道軍記二卷を採收す。

一、石田軍記は原本片假名なりしも、本編には悉く之を平假名に改めたり。

一、石田軍記には、原本の特長とすべき文字及び熟字頗る多く、而も其用法古雅の掬すべきものあり。依つて本書は、毫も此等の文字と熟字とを改竄する事なく、且傍ら一々振假名を施し、原本の面影を窺ひ知るの一助とはなせり。

一、原本假名交り文中に、反讀の字句を挿入せる個所少なからざりしも、此等は讀誦の晦澁を避けんが爲め、皆讀下しに改めたり。

一、原本の記述多くは語尾を示さず。今悉く語格を正して本編の體を備へしむる迄には、甚しき手數を重ね、且讀惡き個所には振假名を施したる等、讀誦の平易を期せんが爲め、一字句の參照讐校に實に數日を要したるもありき。

一、本書の終卷に何々イとあるは、原本の註記にして、當編輯部にて、補入したるものに

はあらず。

一、仙道軍記は、原本古寫本にして筆路巧みに、文字殊に假名に於て典雅を極め、爲に校訂上、熟慮考竅を重ねたる場合少なからざりしも、假名には漢字を補塡したれば、讀誦の平易を計るに於て、遺憾なきに庶幾からん乎。其能はざりしものは、稀に假名のまゝとしたるもあり。

目次

石田軍記

卷之一

仙道軍記

卷之上

目次終

石田軍記巻之一

太閤秀吉公治世の事

夫能扶㆓天下之危㆒者、則據㆓天下之安㆒。能除㆓天下之憂㆒者、則享㆓天下之樂㆒。能救㆓天下之禍㆒者、則獲㆓天下之福㆒也と、能く天下の危きを救うて、則天下の福を獲る者は、前關白秀吉公なり。公は本尾張の州愛智郡中村の人にして、天性勇悍ありて、母の家に在ることを意とせず。漸く人となり、肇めて松下加兵衞に從うて、僕使となる。然るに十六の春の頃、熟思案して曰、予(われ)松下如き小身の者に事ふるとも、幾許(いかばかり)人に知らるるの勳功あらんや。如かじ命を捨て、主を求めんにはと、則松下が家を出でて、大將軍信長公に仕へ奉る。誠に胯の下を潜りて、漂母に食を乞ひし程の身體なりしかども、智謀飽く迄群を拔き、武略至つて世に超えたり。此に依つて年を追つて次

第に昇進して、今は棧道・陳倉をも、越えつべきの勢とぞなれりける。此時にして天下大に亂れて、七雄群を爭ひ、隣國相討つて八狄治まらず。便ち信長公の命を得て、遂に山陰道に向つて合戰するに、金鼓一度擊つて攻むれば、雷公電を擊つが如く、旌旗二般靡して鬪へば、礮を以て卵に投ずるが如くに拆く。乃し備前・備中・播磨・但馬・因幡を伐つて、而も五箇國の大守とぞなり給ふ。然る處に信長公の家臣明智日向守光秀逆心を起し、賊兵を率ゐて、洛陽の本能寺にして、信長公父子を弑し奉る。爰に秀吉は、備中高松の城に在つて、毛利右馬頭元就と戰ひ、雌雄未だ決せざる最中に、將軍父子、明智日向守が爲に討たれ給ふと聞きて大に驚き、悽み悲み給ふ事甚だ深し。則金鼓を納め旌旗を捲いて、元就と和融せんと議して、軈て使者を遣し、無二の志を演べ、且又明智を滅すべきの計策をぞ談じけるに、元就聞きて、義仁なりとして其心を感じ、慇に秀吉の請に應じ、元就も使を以て、先づ信長公の變を弔ひ、次に軍勢を慰めらる。剰へ軍馬を行裝して、兵糧を運送せんことを約せらる。秀吉は、漢の蕭何を得たる思して、悅喜淺からず。急ぎ都へ打つて上り、山崎表に於て明智

と合戰す。其形勢は、圓石を千仞の山に轉すが如く、積水を萬仞の谿に決るが如く、欻ちに光秀を討滅して、則先君の讐をぞ報い奉らる。是よりして武名天下に播し、威風四海に扇ぐ。奇正するあれば、天下其の戰に當る者なし。直に大將軍となつて、朝鮮國をも征伐し、高く關白の職に居て、從一位に昇らる。城廓を京都・伏見・大坂に構へて、天下列國の大名小名をして、朝覲番衞せしめられしは、咸陽の昔に超え、金殿玉樓美盡し善盡して、鳳絃鸞聲の嗹しきは、秦の宮人にも過ぎたり。然りと雖、世繼の若君なきに依つて、甥の三好秀次を養子とし、關白を譲りて、京聚樂の城に据ゑ置かれ、其身は大坂伏見の城に隱居して、太閤の御所とぞ申しける。

秀頼公誕生の事

斯くて太閤秀吉公は、江州淺井備前守長政の息女、艶色類なしと聞及びて、娶り給ひて妾とせられけるが、文祿元年壬辰の冬よりも、懷胎の心地なりしに因つて、四箇の大寺に課せて、貴僧高僧を請ぜられ、大法祕法を修し、變生男子の法をぞ、別けて行

はせ給ひける。明くれば文祿二年八月廿日、安產成就の爲の御祈禱に、大坂の城中にして、連歌の會をぞ促し給ふ。其頃の宗匠花下紹巴の發句に、

大般若はらみ女の祈禱かな

一二は過ぎて產の紐とく　　　脇　昌　花

秀頼誕生

昌花未だ百韻滿たざるに、若君誕生あるこそ不思議なれ。天下の大名は言ふに及ばず、下萬民に至るまで、千秋萬歲の其聲は、欣々然として阡陌に滿てり。頓て元服あらせ給ひ、秀頼公とぞ申し奉る。三歲になり給ひし頃、秀吉公寵愛の餘り深く思慮し給ひしは、我一世の後に、秀頼が敵とならんずる者は、關白秀次なり。如何はあらんと宣ふ時、石田治部少輔三成といふ奸臣、折を得たる思ひして、早秀次公、豫て逆心の風聞有之由、御前近く馴れ倚つて、低語してぞ讒しける。是ぞ秦の趙高が、權柄を檀にし富貴を極めんと欲して、扶蘇を上郡に弑し、蒙恬を謀らんとするに同くして、後に至りて、關原軍の張本とはなれりける。

石田三成讒ニ秀次公ニの事附秀次公家臣評議の事

一令逆なる則ば百令失し、一惡施す則ば百惡結ぶ。太臣主を疑ふ則ば衆姦集り聚まるとかや。されば石田治部少輔三成、密にして遠き慮を、秀吉公の他界の後に廻らして、天下を奪はんと謀りけるは、冷じくぞ聞えける。聿に以後の大病となるべき者は、關白秀次公と、東君內府公とに歸せり。何卒して二公を失ひ奉りて、事を遂げんとのみ日夜巧みける。文祿四年乙未の春の頃より方便を作して、秀次公謀叛の街談をば流して、兒女に謠はしむ。猛獸の將に搏たんとするときは、耳を弭れて俯伏すとかや。暴虐殘賊暇を伺うて讒を容れ、人を傷るに言を以てす。劔戟よりも甚だしと。然りと雖、秀吉公聊許應あらざれば、三成猶も深く思察して、計をぞ企みける。秀吉公より後見の爲に、中村式部少輔・田中兵部大輔兩人を附置かれしに、兩人の者共、強く諫言せし故に、秀次の御前、次第に疎くなりにける。其頃田中は、攝河兩國の堤普請の奉行として、彼地に居けるを、夜通しに召寄せて、先づ石田が宅へ呼

入れ、奥の亭に請じ、二人頭を指合せて、三成密語申しけるは、何に田中殿、御自分の命をば、三成が助け候といへば、田中も思寄らざる故大に駭き、珍しき仰かなといひければ、三成重ねて、今度の一大事、爭でか遁れ給ふべき。御首は某續ぎたりといひけるにぞ、田中太だ氣色を變じ、何と申さるゝぞ石田殿、過言がましき仰に候。日本の諸士の中に、田中が身上、白地にいはん人は覺なし。御邊が當時出頭して、諸事思ふ儘に振舞はるとて、首を續ぎたるは、命を助けたるは抔、無用の誇言に候。假令讒言するとも、上には豈用ひ給はんや。若罪科紛なきに於ては、速に我首を捕つて、見參に入れ奉られよと、臂を張り、刀の柄に手を懸けて、思ひ切つたる有樣は、樊噲にも增れる風情なり。時に石田申す樣、事の仔細を述べざれば、御氣に障りたるも尤なり。秀次公、御謀叛を企て給ふ事、隱れあらざれば、太閤の上意に、中村は病氣付きて引籠あるなれば、知らぬ事もあるらんが、兵部は豫て淵底を知らぬ事はよもあらじ。當世の人の心は、賴み難きぞかし。急ぎ兵部を謀り寄せ、腹切らせよと仰せられしを、此三成御前へ祗候して、斯程不覺を思立ち給ふ分野なれば、爭でか彼等に

御心を許し給ふべき。況や兩人の者共、度々諫言仕る故、機嫌を損ひ、近所にも參り難き仕合なれば、存知ざるこそ必定に候はんと、種々に陳じ申す故、それはさもあるらん。されども用意支度せんに、不審の立つべき事多からんに、兎角を知らぬといふは心得ずと、苦々しき上意なりしを、彼者共、豫て物語仕る事の候へども、御野心あらんとは、努々存知も寄らざる事にこそ、其議なし。愈萬事に目を配り、意を付け候樣に計らひ申さんと、言葉を盡して退出仕ると談りければ、田中聞きて、某が身の上を、何者が讒言しつらんと思ひ候に、存の外なる一大事を承り候。仰の如く頃日は、外樣者の儀になり候へば、爭でか大事の企を知らせ給ふべき。上意に、惡しと思召すも至極せり。さり乍ら夢にも存ぜざる段は、如何樣にも陳謝申すべし。此上は愚意を盡して、窺ひ申さんといひければ、三成悅んで、御邊は普請場に、早々歸り給ふべし。上意の使者を以て申さんとて、田中を河內へぞ還しける。其後上意ありとて、使者を以て申し遣しけるは、堤の普請は、誰にても申付け置かれ、秀吉公御成前なれば、急ぎ歸京候て、聚樂の御殿、萬事心を付けられ、掃除等に至るまで氣を配り、然

るべき御掟の由傳へける。田中は夫より聚樂へ參り、萬端に心を付くれども、差して思當りたる事はあらざれども、覺束なき事も多かりけるにや、昨日今日の兎角の樣共を、石田が許へ告げければ、三成、略は就りとして、同年の七月八日に登城して、秀次公の逆心、事既に露顯仕る條、速に征伐なくんば、天下の大事近き憂たらんと、則一味同心の大名を誌して、認め置きし謀書をば、太閤にぞ見せ奉る。秀吉驚き給ひ、此上は擬議するに及ばずとて、石田治部少輔三成・增田右衞門尉長盛・長束大藏大輔正家・德善院玄以法印等を以て、急ぎ聚樂の城を御拔きあれと仰付けられければ、こは如何と思ひ乍ら、急ぎ聚樂へ參りて、四人の使者申されけるは、先づ高野山の方へも御越ありて、一旦の御憤を靜められ、御誤なき通り仰せ披かれなば、其虚名、などか晴れさせ給はざるべきやと、理を責めて申上げられければ、秀次公も、暫し案じ煩はせ給ひ、所詮聚樂にて、兎にも角にも作るべきと、思ひ定め給ひけるが、然りと雖天恩父子の義を重んじ、一先づ高野山へ趣かんも是ならんかと、御心をぞ苦しめ給ひける。實にや樹靜ならんと欲すれども、風此を動す習にて、秀次公奥に入らせ

給ひ、宗臣白井備後守・木村常陸守・熊谷大膳正、此三人を一間所に召され、我今進退爰に谷れり。面々の心底如何とありければ、白井備後守、自餘の辭をも顧みず、今聚樂を御披あらんは、中々勿體なき次第なり。愚案ずるに、此三人の内一人伏見へ遣され、一往理を盡させ、其上にも御承引なく、討手の向はんずるに於ては、我々眞先懸けて討つて出で、一命を塵芥よりも輕んじ討死して、叶はぬ時節到來せば、御腹召され給はんに、何の仔細か候はんと、氣色忘じてぞ申しける。其時熊谷大膳申しけるは、備後守申さるゝ處も、一理あるに似たりと雖、某退いて愚案を廻らすに、此城にて一戰を勵し、御腹召されんずる事、流石天照太神より、讓を受けさせ給ふ王城を、穢さるゝ恐其一。次に太閤より、讓り得させ給ひし聚樂なれば、天道の惡む所其二。次に昨今(きのふけふ)まで、六十餘州に關白と仰がれ、今更下路(おろ)々々と籠城に及ばん事、日本の諸士の、言甲斐なく思はんも其三。彼是世の誹多ければ、唯今宵志賀の山越に、東坂本へ移らせ給ひて、父子の禮儀なれば、一旦帝都を退き、讒者の實否を糺し、其明(あきら)めなきに於ては、討手向ふべし。其時は大嶽を本城とし、我々は唐崎表へ打つて出で、日

本を引請けて合戰に及ばんこと、願ふ所の幸なり。凡御人數も、三萬餘はありぬべし。若し御運盡きさせ御腹召されんに、何の殘念かあるべきと、募り切つてぞ申しける。斯る所に木村常陸申す樣、此節に臨んでは、如何に退き給ひて、御誤なき通を盡させ給ふとも、太閤に限つては、御宥免あるべからず。秦の子嬰が果し降れるを項羽許さず、終に弑しつ。今以て和漢相同じ。迚も迫りたる御身の上なれば、四人の使者を忽に討ち果し、今宵伏見へ取懸け火を付け、城を枕として、相戰ひ申さんは、弓矢取つての面目なり。君も戰場に御名を殘し給へかし。然らずんば京中を燒拂ひ、御帝を此城中へ御幸なし奉り、一支支へなば、太閤も、などか天子へ弓を引き給ふべき。先づ京中の兵糧を取籠め、玉藥を用意して、城を固く堅めなば、〜と仰あらんは治定なり。其時は十分の利を得給ふべしと、手に取る樣にぞ勸めける。善を見て怠り、時至りて而も疑ふとやらん。秀次公も、一所懸命の思案なれば、只十方にくれて御言葉もなし。常陸重ねて申す樣、君の斯程まで、言甲斐なく渡らせ給ふこそは口惜しけれ。唯今伏見へ御出あらんか、高野へ御登あらんか、何れの道にも、都へと

ては再び還し給ふべからず。路にて雜兵の手に懸り給ふか、遠國へ流され給ひて、俊寛が思ひをなし給ふか、又は御介錯もなき御生害あらん時は、後悔あるとも反るまじと、居長高になつてぞ諫めける。爰に阿波木工頭進み出で、常陸守申す所も當理なれども、伏見の大殿は、心早き大將にて候へば、君の御謀叛必定と思召さば、緩々の沙汰あるべからず。卽時に押寄せ給ふべし。只石田が種々に讒し申すにてぞあらん。太閤御心底には、承引なきと存じ候。さあらん時は、何心もなく御參勤あらば、彌御心も解けさせ給ふべし。唯今伏見へ押寄せたりとも、捗々しき利を得させ給ふ事思も寄らず。其故は、彼方は譜代重恩の士なれば、十騎が百騎にも對ふべし。此方は大勢なりとも、諸國の借武者にて、伏見に親を持ち子を居きたる者、或は妻愛に心引かされ、何の用にも立つべからず。又此城に籠りたりとも、嚴しく合戰せば、頓て勝負も窮まるべきか。遠攻に打圍まれ、數日を送らば、兵糧乏くならん。爾時は親類緣者に付きて降參し、敵には力を附くるとも、味方の用に立つ者は候まじ。さりとは賴なき人の心の替り易きことは、古今其例多ければ、今更言ふに及ばず。

人の身と、理を盡してぞ申しける。元より驕したる秀次公にてましませば、實にもと思召し、聚樂を出で給はんとの志、御運の程こそ拙けれ。

秀次公於高野山伏誅の事

去程に關白秀次公は、文祿四年七月八日、御輿一挺に道具をも差置き、御供二三十人歩立にて、聚樂の城を出でさせ給ひ、伏見の城へと急がせ給ふに、五條の橋を打渡り、大佛殿の前を過ぎ行かせ給ひけるに、何とやらん、前後の體騷しく閃いて、行違ふ人も立迷ひければ、供奉の人々、是は早討手の向ひたると見え候。雜兵の手に懸り給はんより、東福寺に御輿を入れられ、御心閑に御腹召され候へかしと申上げければ、扨は法印めに、謀られつる事の無念さよ。是より引返し、聚樂にて腹切らんと仰せける處に、御跡より若黨共馳來り、早五條邊には、敵數千騎入廻りて候へば、還御は思も寄らずと申しければ、秀次公、さるにても弓矢取る身の、假初にも乘るまじきは輿車ぞかし。馬上ならば、何者なりとも蹴散らして通らんに、犬死すべき事の口惜し

さよ。常陸が言葉の末、今ぞ思ひ合はせ給ふとある所へ、増田右衞門尉參り迎ひ、馬より飛んで下り、輿の前に畏りて、以の外の御惡心に候へば、一先づ高野山へ忍ばせ給ひ、速々に野心なき通を、仰披かれ候へと申しければ、秀次公の仰に、聚樂を出づるより其覺悟なれば、今更驚くべきに非ず。城に居て理を申すは恐多く思ひ、是までは出でたるなり。只今無實にて果てなん事、何よりも無念なれ。捨つる命は、露塵よりも惜からず。秀次程の者に、最後を知らせざる事やある。尋常に腹切るべしと宣へば、右衞門尉承つて、いかで御生害に及ぶべきや。一旦の御憤なれば、時節を伺はせ、御自筆の御書を以て、御心底言上あらば、和睦ありて、讒者の輩を、如何樣にも仰付けらるべしと、辯舌を盡して進め奉る。秀次公何とか思召されけん、夫よりも武士共に前後を打圍まれ、大和路に差懸り、夢路を辿る心地にて、南を指して赴かる。將憂ふに則ば、内外相信せずとかや。物の哀は、聚樂に殘りし人々なり。太閤の御對面も叶はせ給はず。我君は、路より武士共に圍まれて、高野とやらんに、登らせ給ふと聞えければ、皆呆れ果てたる有樣は、悉達太子の王宮を出でさせ給ふに、六

萬の采女一度に咄と喚び、三后貴妃髮を亂して啓えしも、是には爭で增るべき。孺き君達・卅餘人の上﨟達、其儘前後を知らで泣沈み、倒れ臥してぞ歎かるゝ。御子五人持ち給ふ。嫡子は仙千代丸とて、五歲になり給ふ。次をば百丸殿とて四歲。三男は於十丸とて、玉を磨ける如くにて、秀次公の御寵愛、最淺からずぞ思はれける。平日太閤へ御參勤の折節には同車にて、片時も離れ給はぬに、此度は何とて連れさせ給はぬぞ。急いで父の御座す方へ倡ひ行け。我も〳〵先に行かんと、三人の若君達、聲々に泣渡らせ給へば、母上達詮方なさに、大殿は、西方淨土と申して、目出度國へ入らせ給ひ候。頓て御迎參り給ふべしといひも敢ず、淚に搔暮れ給へば、末々の女童に至るまで、皆婉轉びてぞ泣叫ばるゝ。こは何と成行く世の中ぞや。斯くあるべきとだに知るならば、たとひ地獄の底までも、御供申さであるべきか。神ならぬ身の淺間しさは、御爲と計り心得て、跡に殘りし墓なさよと、悲む聲は暫も止む事なし。中にも厚恩深き人々は、順禮者の姿に身を窶し、跡を戀うて出でけれども、此彼にて改められ、力及ばず。夫よりは諸國巡るも多かりけり。斯くて秀次公は、高野

山へ登り給ひ、木食上人の坊へ案内ありければ、上人急ぎ驚き請じ奉り、只今の御登山は、思召寄らざる事なりとて、墨染の袖をぞ濕らされける。秀次公、何とも物を宣はずして、御袖をば顔に押當てゝ、涙に噎び給ひしが、我れ斯樣の事のあるべきとは思も寄らずして、世に在りし時は、心を付くる事もなく、今更淺間しくこそ候へ。自らが露命も早窮りたれば、今にも伏見より檢使來らば、自害すべし。爾らん跡は、誰をか頼み申すべきと、御涙ぐませ給へば、上人、御諚には候へども、當山の衆徒一等に訴へ申さんに、縱ひ太閤、御憤り深く座すとも、などか承引し給はざらんやと、頼もしくぞ申されける。秀次公、頓て法體とならせ給ひ、道意居士とぞ申しける。供奉の人々も、皆髻切つて、偏に後世の祈にて、上使をば今や〳〵と待ちたりける處に、福島左衞門太夫・福原左馬助・池田伊豫守を大將として、都合一萬餘騎、七月十三日の申の刻に伏見を立ち、十四日の暮方に、高野山にぞ著きたりける。三人の上使、則ち上人の庵室に參りければ、折節入道殿は、大師の御廟所へ詣でんとて、奥院に御座しけるを、上人より、此由申されければ、頓て御下向ありて、三人の上使に對面ある。

左衞門太夫畏つて、御姿の替らせ給ふを見奉り、涙を流しければ、入道殿御覽じて、如何に汝等は、入道が討手に來りたるよな。此法師獨り討たんとて、事々しき振舞かなと仰せければ、左馬助畏つて、さん候、御介錯仕れとの上意に候と申せば、扨は我首を討つべきと思ふか。如何なる劔をや持ちたるぞ。入道も腹切らば、首討たせん爲に、形の如く太刀をば持ちたるぞ。いで汝等に物見せんとて、三尺五寸ありける金作の御帶刀するりと拔き、此見よとぞ仰せける。是は左馬助若輩にて、推參申すと思召し、重ねて物申さば、討つて捨てんとの御所存とぞ見えにける。三人の小性衆は、御氣色を見奉り、少しも動きなば、中々御手には懸けまじきものをと、互に目と目を見合せて、刀の柄に手を掛け居たる有樣は、如何なる天魔鬼神も、退くべきとぞ見えにける。入道殿は、御帶刀を鞘に納めて、如何に汝等、入道が今迄命存へたるを、さこそは臆したると思ふべし。伏見を出でし時、其夜如何にもなるべきと思ひつるが、上意を待たずして切腹せば、すはや身に誤あればこそ、自害をば急ぎつれとて、所以なき者共を、多く失はれん事の不便さに、今まで存へしぞかし。今は最後の

用意すべし。由なき讒言にて、我こそ斯く成行く共、我に仕へし者共は、一人も罪ある者はあるまじければ、能きに言上し、申扶けて、入道が饗應にせよ。相構へて面々頼むぞと宣ひしは、有難き御志とぞ感じける。扨座を立たせ給ひて、最後の用意をぞ務まれける。爰に上人を始め、一山の衆徒出合ひ、三人の上使に對ひ、當山七百餘年以來、此山へ登りし人の命を害せし事、其樣なし。一端此由言上申さではと、一同に申されける。三人の使聞きて、去事にては候へども、迚も叶ふまじき事にて候と、再三の問答にても、衆徒の評議止まざれば、福島進み出で、衆徒の議尤さもあるべし。去乍ら時刻遷りなば、勘氣を蒙り、腹切れと有るべきなれば、是非に於て言上と思はれば、先づ斯く申す者共を、衆徒の手に懸けられ、其後は心次第と、膝を立直して申しける。さすが出家の事なれば、上人を始め一山の衆徒も、力及ばず立たれける。

其夜は評議に時遷り、漸く曙になりぬれば、巳の刻計に御最後の有樣、さも神妙にぞ見え給ひける。附隨ひ參りたる人々を召して、汝等是迄の志こそ、返々も淺からね。多くの者の其中に、五人三人最後の供するも、前世の宿緣なるべしと、御涙をぞ流さ

る丶。如何に若き者なれば、最後の程も心元なし。其上自ら腹切ると聞かば、雜兵共亂入り、事噪しく見苦しかるべしと、則ち山本主殿に、國吉の脇指を下され、是にて腹切れとありければ、主殿承り、某は御介錯仕り、御跡にこそと存じ候に、先へ參り、死出三途にて、倶生神共に道淸めさせ申すべしと、莞爾と笑うて戲れしは、悠にこそは見えにける。彼脇指を押戴き、西に向ひ十念して、腹十文字に搔切つて、五臟を繰出しけるを、御手に懸けて討ち給ふ。今年十九歲。次に岡三十郎を召して、汝も是にて切るべしとて、厚藤四郎の九寸八分ありけるを下さる丶。承り候とて、是も十九にて、さも神妙に腹切れば、御手に掛けてぞ討ち給ふ。三番に不破の萬作には、しのぎ藤四郎を下され、汝も我手に掛れと仰せければ、辱しと御脇指を頂戴し、生年十七歲、日本に隱なき美少年、雪よりも白き肌をば押開き、初花の漸綻ぶる風情なるを、嵐の風に吹散らさる丶氣色にて、弓手の乳の上に突立て、目手の細腰まで曳下げたるを御覽じて、いしくも仕りたりとて、太刀振上げ給へば、首は前にぞ落ちたりける。誠に彼等をば、人手にも掛けじと思召す、御寵愛の程こそ淺からね。入道殿は立西

堂を召して、其方は出家の事なれば、誰かは咎むべき。急ぎ都へ上り、我後世を弔ひ候へと仰せければ、是まで供奉仕り、唯今暇給はり、都へ上り候ても、何の樂候べき。厚恩深き者なれば、出家とても遁るべきや、僅の命存へて、都まで上り、人手に掛らん事、思も寄らずと、申切つてぞ居られける。此僧は博學多才、和漢の書に闇からず、富樓那の辯を持ちたれば、御前去らず祗候して、酒宴遊興の伽僧となられしは、國士筵中總て宜しからずの詩を見られざるにや、最後の供まで、仕らるゝこそ不思議なれ。次に篠部淡路守を召して、此度蹤を慕ひ、是まで參る志、生々世々まで報じ難し。汝は迚もの事に、我介錯して後、供せよと仰せける。淡路畏つて、今度御蹤を慕ひ參らんと存ずる者、幾許あるべき。中に某武運に叶ひ、御最後の供申すのみならず、御介錯まで仰付けらるゝ事、今生の望、何事か之に過ぐべきとぞ悦びける。入道殿、心地よげに打笑ませ給ひて、兩眼を塞ぎ、迷故三界城悟故十方空と觀念して後、さらば御腰物と仰せける時、篠部四方ざまの供饗に、一尺三寸の正宗の脇指の、中卷したるを差上ぐる。右の手に取り給ひ、左の手にて心本を揉下げ、弓手の脇に突立て、目手へ

きつと引廻し、御腰骨少し掛るヽと見えしを、淡路立廻りけるに、暫く待てと宣ひて、又取直し、胸先より押下げ給ふ所を、頓て御首をぞ討ち奉る。惜むべきかな。御年卅一を一期として、南山千秋の露と消え給ふ。哀といふも餘りあり。則ち立西堂、死骸を納め奉りて、是も供を申しける。淡路守は、關白の御死骸を拜し奉りて後、三人の檢使に對ひ、某身不肖なれども、此度慕ひ參りたる恩分に、介錯仰付けられ候は、誠に弓矢取つての面目と存じ候といひも敢ず、一尺三寸平作の脇指を、太腹に二刀刺しけるが、切先五寸計り後へ突通して、又取直し、首に押當て、左右の手を掛けて、前へふつと押落しければ、首を膝に抱いて、體は上に重なりける。見る人目を驚かし、適れ大剛の者かな。腹切つたる者は世に多けれど、斯る樣は傳へても聞かずとて、諸人一同に、噫といつてぞ感じける。木村常陸も、攝津茨にて腹を切る。子木村志摩助は、北山に凌ぎ居たりしが、父の最後を聞きて、其日寺町正行寺にて、自害してぞ失せにける。熊谷大膳は、嵯峨の二尊院にて腹を切る。白井備後は、四條大雲院、阿波木工は東山にて、腹をぞ切つたりける。有爲轉變は世の習、生者必滅の理とは

いひ乍ら、昨日まで聚樂の春の花の宴も、今朝は野山の秋の露と、皆散り果て給ふぞ哀なる。

秀次公之君達被ㇾ誅事附卅餘人嬪妾の事

大將諫を拒く則ば英雄散じ、策從はざる則ば謀士叛く。財を貪る則ば姦禁められず、内に顧みる則ば士卒婬す。一ある則ば衆服せず、二ある則ば軍式なし。三ある則ば下奔北る。四ある則ば禍身に及ぶと、大將たる者の、先づ恐づべきは女色なり。扨も關白秀次公は、類なき好色にて、洛中近國はいふに及ばず、遠國田舍の端までも、大名小名の息女に寄らず、士民百姓の娘に限らず、容色の美婦を尋出して、都へ聚め給ひしかば、唐の玄宗の、三千の美女を、華清宮に置かれしも斯くあらんと、事荒しくぞ聞えける。中にも勝れたるを選み出し、別けて卅餘人の夫人をぞ寵愛せられける。金銀を鏤めたる聚樂の殿に、玉の簾に錦の茵、庭には牡丹杓藥咲亂れ、梅や櫻の春の花の宴には、色を盡せし重の絹、裳を飜して婉媚きしは、人面桃花相映じて紅

と、崔護がいひしも是ならん。鸞臺鳳閣の秋の夜は、月を嫉む娥眉の景、遠山を畫ける風情して、絃歌魂を惱ましめ、蘭麝心を痛ませしを、羨まざるはなかりけり。是ぞ杜牧が、月明に花落ちて又黄昏と、作りし折ならんに、早いつしか今は打替へて、君野山の塵となり給ふと聞くよりも、鬒髪は蓬の如くに取亂し、翠黛は淤の如くに消失せて、御髮を落し髻を拂ひつゝ、高野へ送る人もあり、黒谷へ遣す方もあり、思々の寺にぞ納めらる。杜陵が、風翻萬點將愁人といふも愚なりしに、八月二日に、若君・上臈・夫人達を、誅すべきとの上使立ちければ、彌が上なる悲こそは増さりける。扨あるべきにあらざれば、我も／＼と、最後の出立せられしは、芙蓉の嵐に向ひ、紅葉の霜を待ちしに似て、花麗にも又哀にぞ見えにける。檢使には石田治部少輔・增田右衞門尉を先として、橋より西の片原に、布皮敷いて並居たり。斯くて若君達を車に乘せ、上臈達を警固して、上京を引巡り、一條二條を引下し、三條の河原へ懸りしは、牛頭馬頭阿訪羅刹が、十惡の罪人を、無間叫喚の大地獄に挈るも、是にはいかで勝るべき。橋にもなりしかば、檢使車の前後に立向ひ、先づ若君達を害し奉れと下

知すれば、靑侍雜兵共走寄り、玉の樣なる若君を車より抱卸し、替らせ給ふ父上の御首を見せ奉れば、仙千代丸は、長くも御覽じて、こはそも何とならせ給ふぞやと、噎といひて歎かるゝを、母上達を始め、貴賤男女警固の武士に至るまで、前後を忘じ、共に淚に咽びしが、太刀取の武士共、心弱くて叶ふまじと眼を塞ぎ、心本を一太刀宛に害し奉れば、母上達は、人目も辱も忘れ果て、音を擧げ、こは何とて、我をば先に害せぬぞ。急ぎ我を殺せ我を害せよと、空しき死骸に抱付きて、臥轉るゝ有樣は、燒野の雉の身を捨てゝ、煙に噎ぶに異ならず。夫よりも目錄に合せ、次第々々に直居らるゝ。一番に上﨟、一の臺の御局、前大納言殿の息女にて、卅に餘らせ給ひける。是ぞ今はのすさみとて、

存へてありつる程を浮世ぞと思へば殘る言の葉もなし

二番に小上﨟於妻御前なり。三位中將殿の息女にて、十六歲になり給ふ。紫に柳色の薄絹の重に、白袴引しめ、練貫の一重絹帔け、綠の髮を半切り、肩の廻にゆら〳〵と振下げて、君の御首を三度拜しつゝ、斯くなん詠ぜられける。

槿の日影まつ間の花に置く露より脆き身をば惜まじ

三番に、姫君の母上中納言の局於龜の前なり。攝津國小濱の寺の御坊の娘にて、年は卅三、榮に少し過ぎ給ふが、西に向ひ、南無極樂世界の敎主彌陀佛と觀念して、

賴みつる彌陀の敎の違はずば導きたまへ愚なる身を

四番には、仙千代丸の母上於和子の前なり。尾張國日比野下野守が娘にて、十八歳になり給ふ。練貫に經帷子を重ね、白綾の袴着て、水晶の珠數を持ち、若君の御死骸を抱きつゝ、泣々大雲院の上人に十念授かり、心靜に回向して、斯くぞ詠じ給ふ。

後の世を掛けし緣の榮えなく跡慕ひ行く死出の山路

五番には、百丸の母上なり。尾張國の住人山口將監が娘、十九歳になり給ふ。白裝束に墨染の衣を帔き、若君の御死骸を懷に抱きつゝ、紅の房付きたる珠數持ちて、是も大雲院の十念を受け、心靜に回向して、

夫や子に誘はれて行く道なれば何をか跡に思殘さん

六番にには、土丸の母上於ちやの前なり。美濃國竹中與右衞門が娘にして、十八歳。

白裝束に墨染の衣着て、物每に輕々しくぞ出立たる。豫て禪の知識に參學し、飛華落葉を觀じ、世理無常を悟つて、少しも諜ぐ氣色なく、本來無一物の心とて、

現とは更に思はぬ世の中を一夜の夢やいま覺めぬらん

七番には、十九の母上於佐子の前なり。北野の松梅院の娘にて、十九歲になり給ふ。白紋に練貫の單衣の重に、白袴引しめ、戾の衣帔け、左には御經を持ち、右には珠數、西に向ひて、法華普門品を心靜に讀誦して、入道殿幷に若君、我身の菩提を回向して、

一筋に大慈大悲の影たのむこゝろの月のいかで曇らん

八番には、於萬の前なり。近江國の住人多羅尾彥七が娘、廿三になり給ふ。練貫に白袴引しめ、紫に秋の花盡摺りたる小袖帔け出でらるゝ。折節病中の事なれば、見る目も最悲しく、心も消え入るやうにぞ覺えける。是も大雲院の十念受け掌を合せて、

何處とも知らぬ闇路に迷ふ身を導き給へ南無阿彌陀佛

九番には、於與免の前なり。尾張國の住人堀田次郎右衞門が娘にて、廿六。是も白

裝束に、珠數と扇子を持添へ、西に向ひ十念して、

　　說置ける法の敎の路なれば孤り行くとも迷ふべきかは

十番に、於阿子の前なり。容よりも猶勝りたる心にて、情深くぞ聞えける。每日法華讀誦怠らず。最後にも此心をなん、

　　妙なれや法の蓮の花の緣に引かれ行く身は賴もしき哉

十一番には、於伊滿の前なり。出羽最上殿の息女にして、十五歲になり給ふ。東國第一の美人の由傳聞き、樣々に仰せられ、去る七月上旬上洛なりしが、旅の疲にて未だ見參なかりける内に、此難儀出來ければ、淀の御方より、如何にもして申し請け參らせんと、心を碎るゝ故、太閤默し難くや思召しけん、命を扶け鎌倉へ遣し、尼になせとありければ、伏見より揉みに揉みて、早馬を打たせけるに、今一町計にして害しける。哀といふも餘あり。最後の際婲しくも、

　　つみを切る彌陀の劒に掛る身の何か五つの障あるべき

十二番には、阿世智の前なり。上京の住人秋葉が娘にて、卅に餘られける。月の前

花の宴、事に觸れて歌の名人とかや。最後の時も、先を爭はるれども、目錄窮りたれば、力なく辭世に、

迷途にて君や待つらん現とも夢とも分かず面影に立つ

彌陀たのむ心の月を知べにて行けば何地に迷あるべき

十三番には、小少將の前なり。備前國本鄕主膳が娘にて、廿四歲になられける。是ぞ關白公の御裝束を承はりし人ぞかし。

存へば猶もうき目を三津瀨川渡るを急げ君や待つらん

十四番には、左衞門の後殿なり。岡本某が後室にて、卅八とかや。琵琶・琴の名人にて、歌書の師をぞせられける。是ぞ今はの氣色にて、

暫くの浮世の夢の覺め果てゝ是ぞまことの佛なりけり

十五番には、右衞門の後殿なり。村瀨何某が妻とかや。村井善右衞門が娘にて、卅五にぞなられける。廿一にて村瀨に離れ、今又重きが上のさよ衣、重々の憂涙、よその袖さへ乾る間もなし。

火の家に何か心の留るべきすゞしき道にいざやいそがん

十六番は、妙心老尼なり。同坊の普心が妻にてありけるが、夫に離れし時も、自害せんとしたりしを、無理に止めて、御伽婆にぞなられける。最後の供を悅んで、

先達ちし人をしるべに行く路の迷を照らせ山の端のつき

十七番は、於宮の前なり。是は一の臺の御娘、父は尾張の何某にて、十三にぞなられける。母子を寵愛ありし事、只畜生の有樣ぞと、太閤深く嫉み思はるゝとかや。最後の體、おとなしやかに念佛して、

秋といへばまだ色ならぬ裏葉迄誘ひ行くらん死出の山路

十八番には、於菊の前なり。津國伊丹兵庫が娘にて、十四歲にぞなられける。大雲院の上人に十念授かりて、心靜に取直り、

秋風に促はれて散る露よりも脆きいのちを惜みやはせじ

十九番には、於喝食の前なり。尾張國の住人、坪內市右衛門が娘にて、十五歲とかや。武士の心に男子の姿ありて、器量類あらざれば、兒の名をぞ付けられける。緗に練

貫の一重衣の重に、白き袴引しめて、君の御首を拜し奉り、殘りし人に打向ひ、急がせ給へ。三津瀨川にて待連れ參らせんと、檢使の旁にも暇乞し、西に向つて高聲に、斯く二三返ぞ吟じける。

闇路をも迷はで行かん死出の山清(すめ)る心の月をしるべに

廿番には、於松の前なり。右衞門の後殿の娘にて、十二とかや。未だ幼く座すれば、唐紅に秋の花盡し縫うたる薄衣に、練貫を舭け、袴の裝を攪取(かいと)りて、母上の死骸を拜しつゝ、

殘るとも存へ果てん浮世かは終には越ゆる死出の山路

廿一番には、於佐伊の前なり。別所豐後守が內なる客人といふ者の娘にて、十五の夏の頃、始めて見參し、新枕の後、中打絕えて召さゞれば、拙き身をぞ恨みけるが、又ある酒宴の折に、君やこじ我や行きなんと謠ひしより、一入勝りて寵愛せられけるが、後に如何は思ひけん、痛はる事候とて久く出でざりしが、最後の御跡を慕ひ參らるゝこそ、婋(やさし)くも哀なり。法華經を讀誦して、斯くばかり、

末のつゆ本の雫や消え返り同じ流れの波のうたかた

廿二番には、於古保の前なり。近江國の住人鯰江權之介が娘にて、是も十五の春の頃よりり寵恩深くして、閨の袖の香淺からず成染めて、花月の戲に、後世の事は思ひも寄らざるが、此期には、大雲院の十念を受け回向して、

悟れるも迷ある身も隔なき彌陀の敎を深くたのまん

廿三番には、於假名の前なり。越前國より、木村常陸守が呼びし女﨟とかや。十七歳にぞなりにける。心勝れて賢かりければ、浮世をば泡の如くに觀念して、

夢とのみ思ふが內に幻の身は消えて行く哀れ世の中

廿四番には、於竹の前なり。一條邊にて、或方の拾はせし娘とかや。類なき美人にて、昔の如意の妃にぞ思合はせられたり。佛元古來今なく、心又去來の相なしと悟りて、

來りつる方もなければ行末も知らぬ心の佛とぞなる

廿五番には、於愛の前なり。古川主膳が娘にて、廿三とかや。法華轉讀の信者にて、

草木成佛の心をば、

　草も木も皆佛ぞと聞く時は愚なる身も賴もしきかな

廿六番には、於藤の前なり。大原三河守が娘にて、洛陽の生れ、廿一にぞなられける。槿花一日の榮、夢幻泡影と觀じて、大雲院の十念受けて、

　尋ね行く佛の御名をしるべなる道の迷の晴れ渡る空

廿七番には、於牧の前なり。齋藤平兵衛が娘にて、十六とかや。是も十念を受けて、西に向ひ手を合せ、

　急げ唯御法の舟の出でぬ間に乘後れなば誰を賴まん

廿八番には、於國の前なり。尾張國大島新左衛門が娘にて、廿二なりしが、肌には、白帷子に山吹色の薄衣の重（かさね）に、練貫に阿字の大梵字書きたるを掛けて、裳を取り歩み寄りて、入道殿・若君達の御死骸を拜し奉り、君の御首に向ひ直居（なほ）らるゝを、太刀取西に迎はせ給へといへば、本來無東西、急ぎ討てとありて、其儘に、

　名計を暫し此の世に殘しつゝ身は歸り行く元の雲水

廿九番には、於杉の前なり。十九歳。去し年より勞氣を痛はり、鳳閣鸞臺の枕も遠ざかりければ、浮世を恨み、如何にもして姿をも替へばやと願はるれども、叶はずして、最哀を催されける。

　捨てられし身にも緣や殘るらん跡慕ひ行く死出の山越

卅番には、於紋とて、御末の人、心靜に回向して、

　一聲にこゝろの月の雲晴るゝ佛の御名を唱へてぞ行く

卅一番は、東とて、六十一歳。中居御末の女房預かりし人にて、夫は七十五にて、三日已前に、相國寺にて自害しける。

卅二番に於三、末の女房とや。

卅三番は津保見。卅四番は於知母なり。

右卅餘人の女﨟達を始めて、午の刻より申の終までに、蕣の花に先立つ朝露となられしは、知るも知らぬも、見る人聞く人毎に、肝も烈け魂消えて、涙に暮れぬ者はなし。殊更に死骸をば、親類だにも給はらで、大きに穴を窯らせ、旃多羅が手に掛けて、

淺野吉長讒せらる

手足を取りて抛入れし分野(ありさま)は、昔波斯國の瑠璃太子、淨飯(じやうぼん)王宮を攻破りて、五百の釋女美人を穴殺にせられし哀れさも、是にはいかで勝るべき。斯く最後に臨んで、歌を詠ぜられし風情共、萬年の後までも、聞くに涙に噎(むせ)びぬべし。色を詠するは、不義を後にして、己が嫉を先んずると、世史に誹り記せるも是ならん。聖智ある明將の所爲(しわざ)には非ず。太閤の强暴なる、支那を動かせども、慈愍は嫉妬に勝つ事を得ず。婦人孺子億萬を殺したりとも、何の益かあらんや。諸人誠に、御代の短かゝるべき事とぞ申しける。是皆(みなもと)原は、石田が惡逆より出でたるの謀害なり。

淺野吉長・六角義鄕被讒言の事

淺野左京大夫吉長が郎等に、水野新八郎といふ者ありけるを、事ありて暇を出せし其意趣にや、吉長も關白殿と一味の由、證據分明に訴へければ、吉長も切腹にぞ究りたるが、吉長申しけるは、御前にて糺明の上、言上の輩と對決を願ひ奉り度旨歎きし故、太閤御前にて僉議に及び、則ち一味の誓牒に、吉長の判あるを取出し、如何にと

六角義郷譏せらる

仰せらるゝ時、吉長承り、此判は一年以前に仕替へ申すなりと答へける。さらば其證據を見んとありし故、諸大名へ遣せし書札共を取寄せられ、披見せらるゝに、吉長申す通り疑なかりけり。是に依つて謀判の新八郎を、吉長にぞ下されける。忝しと退出し、即時に首を刎ねて、本懷をぞ達しける。扨又六角右兵衛督義郷は、家臣に多羅尾道賀といふ者あり。其娘は義郷が妻なりしを、比なき美人の聞ありし故、聚樂へぞ取られける。卅餘人の一なり。是に依つて石田嫉み思ひて、秀次公と一味の由譏しけれど、死罪を赦免ありて、本知を歿收せられたり。此兩人の危き事は、薄氷を踏むに異ならず。何れも石田三成が所意の取持とぞ聞えける。

石田軍記卷之一終

石田軍記巻之二

秀吉公薨去の事

蓋欲レ樂レ身者不レ久而亡、欲レ謀レ遠者勞而無レ功矣。石田治部少輔三成思ひけるは、太閤薨去の後にして、天下を謀らん時に、我爲に天魔疫神となるべきは、先づ關白秀次公・内府公なり。秀次は思の儘に喪したれば、此上の大病は、唯内府公のみにあり。如何にもして是を滅し失はんと、晝夜腦を摧き胸を惱ましけるが、爰に計策を廻らし思ふは、内府公に敵對せん者は、上杉景勝なり。此を略らんには、直江山城守兼續に如くはなしと深く案じて、賂に金銀を布き、昵ぶに玉帛を締んで、則ち水魚の間とぞなりにける。扨桃花の春の頃、霖雨の徒の折を見て、石田、直江を招き、叮嚀に饗應して、酒宴酣なりし時に、密語きて申しけるは、匹夫にして天下を呑み、微賤にして雲

客に交らん事、大丈夫の志に非ずや。太閤の御厚恩、身に餘りて深ければ、在世の内には、爭か二心あるべき。他界の後にして、兵卒を發し、我天運を啓かんと思ふなり。其時に於て大病たる者は、唯内府なり。如何にもして是を喪し失はん事を、惱み煩ふとぞ語りける。直江も元來大膽者なれば、すはや善事こそ出來たりと悦んで、心の内に思ふ樣は、内府君を滅して、石田天下を取るならば、我は上杉景勝を喪して、關八州の管領となるべしと察しけるが、卻て惟ふは、上杉は三百年來越後の國守たる故に、百姓已下までも上杉譜代なれば、貳なき地にして、我れ景勝を討つならば、數に渠等又我を討つべければ、所詮上杉を他國へ國替させ、他國にて謀叛を企てしめば、計則ち就りぬとして、石田に低語きけるは、若し義兵を擧げんと欲るゝ共、本懷遂げ難からん。所以者何となれば、内府は大智大勇の武將にして、今八箇國の大守なり。其背强きが上に、蒲生氏鄉と云大剛の者、内府の昵近にして、奥州に在りて前に横ふ。中々容易く喪されんや。内府を討たんと謀らば、先づ氏鄉を亡し給ふべし。彼歿卻して後、鶴千代丸幼少なれば、罪科を牒し合せて會津を追放し、其跡へ上

蒲生氏鄉死去

杉を入置きて、彼れ逆心を企つると風聞せば、內府必ず討ちに來るべし。其時に至り、御邊は上方よりして、推掛け給へ。我は會津より上杉が先驅として、內府を立挾み討亡すべきに、那の仔細かあらんと、漢の張良を欺きて、手に取る樣にぞ勸めける。石田聞きて、是ぞ日本一の軍法と、手を拍ち髀を擊いて悅びける。則ち文祿四年の春の頃、瀨多野掃部に內通して、氏鄉を、掃部が茶の會盟に請じ、酒を勸め毒を飼ひけるに依つて、二月七日に四十歲にして、俄に死失せけるぞ哀なり。石田・直江は喜び合ひて、氏鄉が宗臣蒲生四郞兵衞に內通し、餘の家臣共と不快ならしめて、則ち蒲生が家を四郞一人に任せ、心の儘にぞ配せける。其上に隱密の御朱印迄を下しけり。四郞之に依つて、萬事に付け無作法のみなれば、昔出頭せし老臣亘八右衞門等、劇だ渠が不義を憤るに依つて、四郞も中惡しければ奇怪に思ひ、須加太左衞門・中島加內兩人に通じ合せて、會津の城にて、闇討にぞ仕たりける。此に依つて蒲生源左衞門・稻田數馬・町野左近等四郞と意恨になり、天下の騷とは聞えけり。彼等を伏見へ召上せられ、對決に及ぶ時、四郞懷より、蒲生家の支配一人に課付け給ふ御朱印を差上

げけるに因つて、命をば助けられ、知行四萬石を歿收し、加藤清正の預として、高麗へぞ渡されける。さて蒲生氏鄕の息秀行をば、家中騷動の罪科に事寄せ、百廿萬石を取上げ、唯十八萬石になして、宇都の宮へぞ移しける。會津をば元より議したる事なれば、慶長三年の春、則ち上杉にぞ給はるとかや。斯る所に秀吉公、御心例ならず。瘦顇日に增して萬藥驗を失ひ、百醫手を拱く。太閤も再び痊愈の功あらじと思召して、遺言して宣ふは、我卒せば東山に葬りて、神祠を祭り廟號を諡すべし。亦秀賴の後見には、江戶の德川內府は、繼統といひ武將といひ、其上智仁勇の三德を兼ね備へ、萬事に付け大寬の志ありて、能く諸人を懷け、黎民を惠むの思あれば、天下の爲に、補佐是に過ぎたる仁なければ、賴むなりとぞ仰せける。扨加賀大納言前田利家は、執權たるべしとありて、則ち東國には會津の上杉景勝・水戶の佐竹義宣・仙臺の伊達越前守政宗・最上出羽守、西國には浮田直家・同備前中納言秀家・廣島の毛利元就・島津又七郎義久・鍋島加賀守直茂・長曾我部土佐守等、日本の大名殘らず召寄せられ、天下堅固に守るべしと仰ありて、八月十八日に、六十三にして、伏見の城に於

て、遂に薨去ならせ給ふ。之に依つて天下列國の大名郡牧まで、一同に伏見の城に會盟して、聲を呑んで哀傷せられける。則御遺命に任せ、東山に廟祠し、勅許ありて、豐國大明神と賜はりける。斯くて内府君、秀頼公の後見として、古の周公の、成王を輔佐し、忠仁公の清和帝を扶翼し給ひしも、是には如何で勝らんとぞ感じ奉る。天下の諸侯は、朝覲番衛怠らず、殿中の近侍は、御宴踏歌間もなく、浦邊の鹽屋、山野の竈戸まで賑へば、緇素萬民に至る迄、悦ばざるはなかりけり。然りと雖項羽咸陽を望み、沛公函關に入るの時にして、諒闇さへも行はれざるとかや。石田三成、内府君後見をば惡み思ふと雖、遺言の上、秀吉公の取立の衆も、過半石田と不和の者多かりければ、内府君に屬する人多くして、獅虎の間とぞなれり。佐竹義宣も、豫て石田と昵しければ、義士に二心なしと思ひ、内府君に參勤をもせざりけるが、其頃古田織部とて、理休茶の湯の門弟にして、義宣が朋友なり。吉田彧時義宣の宅へ行きて、頻に會盟の義を勸め諫むれども、佐竹承引せざれば、力なく歸りぬ。然るに内府君、石田と別心なく、委細調りて、石田が子隼人を名代として、向島内府君へ參勤しけるとな

ん。古田此を聞き、則ち佐竹へ通じて、斯樣々々とぞ申しける。爾れども承引なし。吉田も斷金の交默し難く、案じ煩ひ居けるが、細川越中守に、由を斯くとぞ語りける。細川聞きて、古田が心中感あり。佐竹の義志頼ありとて、自身も倶に加はりて、則ち古田同道にて佐竹が處へ往き、相議して三人打連れて、內府君へ會盟とぞ聞えける。斯る所に佐竹家中にも、一味せざる者共多かりける。然れども義宣思ひけるは、今相違に於ては、全く命を惜むに似て、愧を街に謠はれん事、口惜しかるべしといひて、向島にぞ詣でける。內府君、本より寬仁の大德備はり給ひければ、則ち禮を調へ、慇懃に饗應し給へば、義宣も淚を流して、我屋に歸りける。府公則ち本多佐渡守・酒井左衞門を以て使者となし、細川越中守同道にて、名代の儀をぞ述べさせ給ふ。素より天下後見のことなれば、日本の大名諸侯、殘らず伏見向島にぞ祗候すとかや。石田隼人、內府君參會に、三成、佐竹へ其の理やせざりけん、是よりして不快なりとぞ聞えける。

秀頼公自ニ伏見一大坂在城の事

斯くて太閤の薨去の後、扶蘇を弑し、蒙恬を計らんと欲するの佞臣あれば、風雨長閑(のどやか)なりと雖、世上未だ靜謐ならず。此に依つて秀賴公も、大坂へ御在城あらんとの評議究まりて、翌年己亥正月十日、伏見をこそは立ち給ふ。內府君も、如何なる深き賢慮やまし〱けん、左鉄右鎗日に輝かし、前馬後騎列を作し、行逘整々として隊伍を亂さず、警衞凜々として、人の目も驚かす程にぞ出立たせ給ふ。秀賴公、大坂へ入城あらせ給ひて、明くる十一日には、內府君登城見參あらせ給ひて、千秋萬歲の祝賀を調へさせ給ひ、十二日には、伏見へ歸城とぞ聞え給ひける。其夜より何とやらん、大坂中騷動しければ、行逘の人々も、こは目覺しき事こそ出來たりと、馬に鞍置き甲引掛け、鎗鐵炮を嚴しく備へて、用心をぞ堅くせられける。夜半計に何者とは知らず、旅館の四方を窺ひ、入らんとする者ありけるに依りて、彌早く大坂を立たせ給ひ、御乘物には村越總右衞門を入れ、府君は馬乘あり、或時は騎馬の內に混(まぎ)れ給ひ、守口よ

京・伏見騒動

り御船に召し、急がせ給ふ處に、牧方邊にて、大筋の羽織着たる者共、鐵炮に火を付けて、松陰に雲霞の如くに控へたり。すはやと思召して、御船は北の岸邊を上させけるに、敵にはあらで、府公の宗臣井伊兵部少輔直政なり。肌には具足を着、上には常の衣服して、猩々緋の羽織に、彌八鹿毛といふ駿馬を牽かせ、其勢三千餘騎、皆下には具足を着せ、上には常の衣裝にて、伏見より御迎の爲に參り候と、直政馬より飛んで下り、川涯へ祗候せる分野は、是ぞ漢王彭城の戰に、獨り村老の家より、夜明けて還御し給ふに、滕公夏侯嬰が尋ね來りしも斯くあらんと、悅び給ふは限なし。則ち府公は、彼彌八鹿毛に召し、飛ぶが如くに伏見へ入らせ給ふ。直政は徐々と、御蹤より打ちたるは、又類あらじの勇士やと、譽めぬ者こそなかりける。扨其後伏見も何とやらん靜ならず、諸大名一手になりて攻懸らんと、京・伏見騒動止む隙もなかりければ、門前には大竹の菱垣を縛せ、虎の口を持ちて大門を押開き、長柄鐵炮夥しく玄關にぞ備へらる。新庄駿河守是を見て、斯る大軍の備に門をも打たせず、精兵を選ばるゝこと、用心なきに似たり。早く門を閉ぢよと申しける。上聞あつて、門を閉ぢ

て用心するは、大勇の儀に非ず。却て敵の侮を得る者なり。門を開いて軍兵の備をするに、何の恐かあらんと仰せけるに、駿河守も、偏に大勇の智謀をぞ感じ奉る。大津の宰相高次も、大津の城へ移らせ給へと、頻に願はれけれども、公は我勢三千あらば、上方の百萬にも當るべし。敵若し寄せ來るならば、上の臺に登り、金札の宮の邊にて圓備に立て、手痛く一戰し、打破りて通らんに、何の仔細あらんと、事可笑くぞ思召しける。斯る所に江戸よりは、本多中務の代番として、榊原式部大輔康政・本多佐渡守・長谷川七左衛門、代官共を召連れ、其勢一萬餘にて、二月廿五日に尾張の宮にぞ著きたりけり。此に於て伏見の騷動を聞き、則ち晝夜を分かず打ちけるに、路すがらも諸大名既に伏見へ取懸け、合戰最中と聞えければ、廿六日の晩方膳所へ馳著きて、康政は早醍醐筋を、伏見へ駈通らんとしける處に、井伊兵部直政の疾飛脚に行逢ひて、事の次第を尋ぬるに、伏見騷動には候へども、合戰には未だ及び申さず。斯樣々々と語るを聞き、康政も安堵して、則ち膳所に陣取り、秀頼公よりの下知なりと僞り、伏見騷動の定まるまで、東海・東山兩道、三日の人留とぞ觸れにける。折し

も此騒動、諸國に聞えければ、東國より上る人、常に餘りて夥し。勢多・野路・草津・大角・森山・野州・大山・石部・水口に宿りし人は、幾千萬といふ數知れず。康政、時分は好しと意得て、三日の未の刻に、關を開いて人通しと告げけるに、三日の間の欝氣者共、一度に吶と責込めば、京は尺地もなく、人間にてぞ埋まりける。扨てこそ關東勢百萬餘騎亂れ入ると、上を下へと返しけるを幸に、康政も、花麗に威し立てたる小具足を着、亂髪に帕して、信濃駿の太く逞しきを打立ち、七千餘騎、伏見を指して下りけるは、韋駄天の雲を駈る形勢にて、人間の樣には見えざりけり。城にもなりしかば、急ぎ見參ありて、公御悦喜淺からず、御手づから酒肴をぞ下されける。國を治め家を安んずるは、人を得るなりといへる、誠に當家の四天王と申せしも、面目にぞ聞えける。康政は奉行に命じ、御倉より料足數千貫取出し、兵卒共に分配して、汝等内府の軍兵十萬餘騎駈集まる故、兵糧の支度難儀に及ぶと言觸らし、諸方の店屋物を買取れと下知すれば、逸り切つたる奴子共、伏見・京・淀へ數千人入亂れ、赤飯・饅頭・餅・團子・酒・肴に至る迄、一つも殘らず買切れば、荒家に飢饉の往くが如くにて、町人百

姓共、一盞求めて氣を散ずべき便もなく、呆れ果てたる所爲なりければ、石田一味の人々も、此形勢に驚いて、過半は心變りとぞ聞えけるは、いみじかりける計略なり。

內府公會津御進發の事

去程に烏兎推移りて、秀賴公も今年は七歳にぞならせ給ふ。諸國の大名參勤怠なく、近所の侍士出仕隙なし。然るに前田肥前守利長は、父利家逝去なれば、喪禮を執行はんと、去年の冬より加賀へ下り、喪の最中なる故、毛利元就、秀賴卿の執權にぞ代りける。此時にして直江山城守兼續は、豫て謀りし事なれば、上杉中納言景勝を勸めて、香橋原といふ處に新城を取立て、夥しく普請をぞ創めける。上杉、直江に向ひ、近世の城普請等は、古に違ひ、公方に伺ひ、御許の上にて務むべき由なれば、先づ普請を止め、一往伺ひ申さんとありければ、直江聞きて、いやとよ去年の秋、京より罷下り候節、內府・利長・秀家・元就・生駒・堀尾・中村、其他諸奉行に至る迄、相談事濟ましたりと、言を巧にして謀るにぞ、石田や直江が、久しき巧とは夢にも知らず、然

らば仔細あらじと、會津七口城々の要害を修理し、普請をぞ始めける。此事都鄙に隱れあらざれば、大坂の評議區とぞ聞えける。抑上杉家累代、武勇の家にして、會津・奧州・出羽・庄內・佐渡、合せて百五十萬斛を領し、直江山城守は、米澤の城主にて、卅二萬斛を治め、石田治部は佐和山の城主にて、十八萬斛の預地、合せて廿五萬石をぞ支配しけるとなん。斯く騷動の折節に、上杉の家來藤田能登といふ者、景勝が心に違つて會津を退き、京へ馳上り、上杉逆心の樣をぞ訴へける。之に依つて內府公より、伊奈の圖書を使節として仰せけるは、何とて上意を伺はず城の普請をなし、參勤を止めて、秀賴公に、繼目の禮をも勉めざるやとありければ、其返事に、太閤御在世の時、上洛の儀五ヶ年免許あり。城普請は、直江山城守上意を得たれば、仔細あらずと、事もなげにぞ申しける。圖書歸りて、復答申上ぐるを聞召し、無禮無義の族、如何で緩慢の沙汰に及ぶべき。今涓々を塞がずんば、後に漫々をなさんと、直に御出馬ありて、其實否を糺さるべきとぞ聞えける。之に依つて大坂諸奉行の面々、何れも合會あつて評定せられけるは、此度景勝叛逆の聞えこれあるに依つて、內府公直に御

鎭罰あるべき由、我々斯くてあり乍ら、聽流しに致すべきやうあるべからず。叶はぬ迄も一應御止め申し、御承引あるに於ては、何とぞ相謀りて、無爲の沙汰になるまじきものにてなし。其上にも暴威を逞うせば、早速申給はりて、退治の功を致すべしと、各膚胸一致にして、頓て登城せられける。則ち井伊兵部少輔直政を以て申入れらるゝは、此度上杉、背違せしむるの所行、糺明遂げられん爲、御出馬之あるべき由、其聞え承り及び候。尤景勝武勇の家族たりと雖、直に御手を下されんこと、勿體なき御事に候。縱ひ何程の强勢を震すとも、太閤の遺命に背き、天下に向つて弓挽き候はんこと、天罰遁るべからず。暫く隱便の御沙汰候とも、何條事をも仕出し候はん。其内に何とぞ密計を廻らし、和睦せしむる樣に仕るべし。若又異儀に及はば、其時卽時に蹈殄さんに、何の仔細か候はんと、事もなげにぞ申されける。公聞召し、各の評議、尤其義なきに非ず。而し未だ遠慮の至らざる所あり。其所以は、今幼君不豫の砌を幸に、此の如くの雅意を働くこと、必定渠に合體の者ありと覺えたり。古にいはずや。群吏明黨各進レ所レ親、招ニ擧姦枉一抑ニ挫仁賢一背レ公立レ私同位相訕。

家康、上杉景勝征伐の爲め進發

謂是亂源。事延引に及び、城普請相調ひ、隣國攻め靡くに及んでは、勇々しき大事たるべし。且我直に向ふこと、敵に催促を受け、心體當惑の者共、我旌旗を見て、多分は走付くべし。先んずるは人を征するに理ありとかや。彼是以て緩怠すべきに非ずとて、同年六月十六日に、攝州大坂を打立たせ給ひける。其日の御裝束には、彌八鹿毛といふ名馬に、金輻輪の鞍を置かせ、虎の皮の泥障に、金地の鐙を掛け、紫の手繩に、猩々緋の尻鞦、飛羅兜の着籠に、紺繻子の御上着、蜀錦の羽織を召し、御鎧・冑・小刀・太刀・弓・鐵炮・鎗・長刀に至る迄、金銀を鏤め珠玉を磨き、天を輝し地を轟かしてぞ出立たせ給ひける。御供には酒井宮内少輔・同右衛門大夫忠重・大久保加賀守忠常・同治右衛門忠佐・本多美濃守忠政・同息内記忠朝・奥平美作守信昌・同息大膳大夫家昌・平岩主計頭親吉・小笠原兵部大輔秀政・同信濃守長脩・松平玄蕃頭家清・戸田左門一西・息采女正忠成・同伯耆守忠俊・松平和泉守忠次・阿部備中守正次・本多豐後守廣重・高力左近大夫・菅沼大膳亮定利・大須賀出羽守・內藤三左衛門尉信成・松平內膳正忠慶・天野三郎兵衛尉康景・石川長門守康通・本多縫殿助康俊等、都合其勢一萬餘騎、

美を盡して打立ち給ひける。其由々しさ、上下萬民打續き、牧方・淀・伏見迄、見物の貴賤巷を爭うて、耳目をこそは驚かしける。同十七日、公伏見に入御まし〳〵て、會津發向の軍法を定め給ひける。白川口は兩御所、信夫口は陸奥守政宗、米澤口は山形出羽守義光、津川口は前田肥前守利長、魁首(さきて)は堀久太郎、遊軍村上周防守義明・同溝口伯耆守宣勝、追手搦手一同に亂入るべき旨、豫て相觸れられ、道中路次の御掟、法令の箇條を出させ給ふ。其詞に曰、

一、喧嘩口論堅停止之上、若於違背之輩、不論理非、雙方共可誅罰。或作傍輩之思、或倚知者之好、荷擔之輩於(テハ)有之、可爲本人(ヨリモ)於曲事旨、急度可申付。自然於令用捨者、縱後日相聞候(エ)共、可爲重科事。

一、於身方之地、放火幷濫妨狼藉停止事。附作毛取散(リラシ)、田畠之中不可陣取事。

一、於敵地猥不可取男女之事。

一、不先驅(さきて)相斷而不可出細作(ものみ)事。

一、指越於先手、縱言(フトモ)使高名、背軍法上、可爲斬罪事。

一、無子細而有他備相交輩、武具馬具共可取之。若其主人及異義者、倶以可爲曲事之事。

一、人數押之時、不可爲岐道之由、堅可申付。若於漫通可爲重科事。

一、爲時使而雖差遣何樣之者、不可爲違背事。

一、諸事不可漏奉行人之指圖事。

一、持鎗者爲軍役之外間、可指置長柄事。

一、武具・馬具・弓・鐵炮・玉藥、兼入念而求置、應身上可所持事。附不可爲押買狼藉事。

一、酒宴大酒令停止事。

一、博奕堅令停止之事。

一、小荷駄押事、兼日不軍勢相交樣可申付。若有相交族者、其者可爲曲事。但路次中右方就可押通事。

一、出陣之中不取放於馬樣可申付事。

一、敵勝負之間、放馬候事不苦。其放馬雖捕得、身方之馬其主人可返渡事。

一、舟渡之儀不雜他之備、一手可越渉。其馬以下同前之事。

一、無下知而不可陣拂之事。

右條々若於違背輩有之者、忽可處罪科者也。仍如件。

慶長五年七月日

是ぞ韓信が破楚の大將軍となりて、教軍場に、十七箇條の軍令を册して、軍政司曹參に命じて、門々に張り東征に向きしにも勝りて、東關萬里の道中に、多勢と雖、一箇の過失なかりしかば、農民工商に至る迄、賢智大德の惠やと、悉皆安堵の思をぞなしにける。さて伏見の城番には、鳥井彥右衞門尉元忠、西の丸には內藤彌次右衞門尉家長、大手の番には松平主殿助忠利・松平五左衞門尉近正、西の丸の加勢には、若狹少將勝利等を差置かせ給ひ、十八日の晝、伏見を御出馬あらせ給ひ、大津にぞ休ひ給ふ。路次の行裝整々として、玉屑を電門に飛ばすが如くにぞ見えたりける。大津の城主京極宰相高次迎ひ奉つて、山海の珍物を調へて、叮寧にぞ饗應せられける。其

日は、石部の旅殿に入らせ給ふ。

長束大藏獻膳并島左近夜討巧の事

爰に石田三成は、今度内府君東征の事、思ひ儲けたる巧なれば、喜ぶことは限なし。豫て水口の城主長束大藏大輔家政に、調し合せ議しけるは、會津發向の折節には、泊り必ず石部・水口ならん。其時に御邊水口の城に請じ、御膳を獻り申すべしと約して、内證に大力士を集め、手配を定め、内府を城に待請けて、隙を窺ひ、胸𠡠して討つべしとぞ申しける。長束心得たりと領掟し、頓て長束父子、石部の御泊に參じつゝ、明日の獻膳をぞ願ひける。公對面あらせ給ひて、望に任せらるとあれば、父子倶に城へぞ歸りける。扨又石田が家臣に島左近とて、命知らずの大剛の者あり。五日以前より、伏見へ細作を淩ばせて、御出馬日限、旅泊の時分を告げさせければ、左近佐和山の城に居て思案を廻らし、石田に申しけるは、内府今宵石部に在陣の由承る。殊に手勢近習の侍五六十騎、家臣井伊兵部少輔が勢兵も、卅騎には過ぎず。是ぞ天の

島左近等家康を夜討せんと謀る

與なり。只今人數五百給はる者ならば、夜討にし、本望を達しなんとぞ申しける。三成聞きて、卒爾の謀然るべからず。長束と調し合せたれ、水口の城にて仕果すべし。周章て丶物を仕損ずる時は、由々しき大事となるべしとぞ制しける。左近聞きて、仰には候へ共、天狗も鳶鴉と化する則ば、蛛巢に繞はれ、小虵も蛟龍と變ずる則ば、人を呑むの勢あり。内府は今小虵なり。關東へ下る則ば、雲を得て大龍となり、却て其時は一呑に呑まれ給ふべし。所詮今夜彼地に打越し、風上より此彼に火を放つて、燒討にするならば、即時に攻滅し、勝利を得ん事掌の内に候と、章邯を火攻にし夜討にせし、漢の術をぞ申しける。三成聞きて、實に尤と思ひ、さらば急ぎ夜討の用意せばやとて、島左近を大將とし、柏原彦右衞門・河瀨左馬助・新藤縫殿助・後藤又助・百々宮内・早崎平藏・礒野平三郎・香築間隼人・三田村織部・丁野助之丞・馬渡外記・口分田伊織・淺井新六・島新吉・渡邊新之助・川崎五郎左衞門・山本淸三郎等を先として、宗徒の兵共八百餘騎、雜兵三千人、袖印に白き一文字を付け、誰といはゞ勇と答へよと、合語を定めつ丶、大船二十餘艘に取乘つて、蘆浦・觀音寺の邊より、草津・石

部の上手へ廻りて、子丑の刻に石部へ押寄せんと、鼢をなして進みしは、危かりける次第なり。斯る所に公思召しけるは、江州伊勢地は、敵地入り難りたる事なれば、如何ならん敵の密計かあらめと、御思案を回らし給ふ所に、井伊直政祗候し、近寄りて低語き奉るは、近頃毎夜打續き不思議の夢を見候。殊更昨夜は現の樣に、亡父來り告げけるは、暫も近江路に宿すべからず。不意の大事必ずあらんと、荒々しく申しける。夢中の譫語は、勇士の取るべきに非ざれども、殷の高宗の、傅說を夢に見て、賢弼を求め得、晉の王濬が三刀を夢に見て、益州の大守となりし事あれば、菲儒腐俗の小智に碍られて、夢は皆妄想と、撥無するに墮つべけんや。唯疾く此處を御立ちあれかしと申上げられければ、其夜の戌の刻計に、俄に石部を御立あつて、水口を夜通しに打過ぎさせ給ひ、途中より長束が方へ、御使者を遣され、明日立寄るべきの約諾に候へ共、急用に就き通らせ給ふとて、來國光の御脇指下されければ、長束も手に取る樣に思ひしに、案に相違の事なれば、無念乍らも忝なしと領掌し、土山まで送り奉り、空しく水口へぞ歸りける。扨島左近が夜討の者共は、斥候五三人遣しけるに、內

府公は早立たせ給ひて、更に人音もなしとぞ申しける。此は如何なる仕事ぞと呆れ果て、取る物も取敢ず、遽て蹉きてぞ歸りける。公は夫より伊勢關に泊らせ給ひて、大難を遁れ給ふぞ不思議なる。翌日は四日市に着き給ふに、桑名の城主氏家内膳正、使者を以て申上ぐるは、例年の賀儀に任せ、數寄屋にて麁茶を獻じ度由謹んで言上すれば、則ち明朝の饗膳をば受け給はんとありて、其上熱田へ越ゆべきの船をも仰付けらるべしとの返答あれば、氏家由を聞いて、何の謀やありけん、悦んでぞ待ちたりけるに、又井伊直政近寄りて私語き申上げけるは、昨夜も關の宿にて、惡夢心痛仕候ひて、日竟意靜ならず候。只今是より直に御船に召し、三河地へ渡海あらせ給へと諫めしは、張良が沛公を扶け、樊噲に命じて、軍馬を驅進ませて、行くこと九十九里にして、安平縣に到り、又四十里趨りて、扶風縣に到りし有様も是ならんと、聞く人皆感じける。則ち公頷かせ給ひ、頓て氏家方へは、小栗大六を使者にて、急用出來に因つて、昨夜渡海致すなり。來春上京の節、目出度芳茶を申受くべし。先づ謝禮の爲迄斯の如くとありて、程なく三州の佐久島にぞ着き給ふ。田中兵部少輔吉政、

船場に急ぎ走向ひて、其日の御膳をぞ奉りける。石田三成は、謀りし事一々に相違しければ、啓え焦れて悔えけるが、書翰を以て、直江山城守方にぞ先づ申遣しける。

細書則及返報候。內府方一昨十八日伏見出馬候。兼日之調略任存分、天之與令祝着候。我等無油斷支度仕候間、來月始佐和山罷立、大坂可令越境候。輝光・秀家其外無二之味方彌可心安候。其表手段承度候。中納言殿以別書申進候。可然御心得奉賴候。恐惶謹言。

六月廿日　　石田三成

直江山城守殿

斯くて公の御船を、廿一日には、笹島にぞ繫けられける。爰に池田三左衞門輝政、希有の魚鳥共買求め、不時の茶菓を調へて、最丁寧にぞ饗應し奉りける。廿二日は白須賀、廿三日は濱松、廿四日佐夜の中山にて、山內對馬守忠豐饗膳を具へ、廿五日には駿府二の丸、中村式部大輔一氏家臣横田內膳が宅に入らせ給ひ、朝獻畢りて、一氏折節大病を得て、肩輿に扶けられ、伏して御目見を遂げ申上ぐるは、今度供奉を缺き、

家康江戸に歸着

本懷を失ふ事、遺憾少なからず。愚子一學は幼少なれば、役に立ち難し。則ち弟の彥左衞門を以て、軍勢を催すべし。御心安かれと、誠を表に顯(ほか)して、額に汗を流し述べければ、公、一氏が手を取らせ給ひて、其志を感じ給ふとありて、御淚を浮め給へば、式部も倶に肝に銘し、淚沈(なきしづ)みてぞ退りける。廿六日沼津にて、中村彥左衞門尉一榮(かづよし)、種々の饗應を設けて慰め奉る。三島に到りて大久保加賀守忠隣、四方の美物を盡して朝獻を進めらる。則本多佐渡守御迎に祗候すとかや。七八日は小田原・藤澤、九日には鎌倉へ御參向ありて、山谷海邊迄、名所舊跡殘りなく御巡見まし〳〵て、七月朔日には、神奈河に泊らせ給ひ、同二日は、江府の城にぞ着き給ふに、後陣の勢は、猶伊豆・駿河に支へけるとぞ聞えける。誠に千里の行路無事なりし、御運の程ぞ目出度けれ。

諸大名發二向關東一の事

內府源君、會津御發向の聞え、天下に隱れあらざれば、仁義の諸侯、武勇の士卒、此彼(こゝかしこ)

より聞傳へ、是ぞ日本武國の思出と、馬物具を取出し、我滅らじと磨立て、郎從兵卒に至る迄美麗を盡し、金甲天を輝し、霜刃星を並ぶるが如く、關東へと急ぎける。其行裝、三韓征誅以後の壯觀と、老若男女に至る迄、頸を延べてぞ見物す。先づ一番は福島左衞門大夫正則・同息刑部正元・同掃部正賴・池田三左衞門輝政・同備中守長吉・同吉左衞門・堀尾信濃守忠晴・長岡越中守忠興・同息與一郎忠利・中村彥左衞門尉一榮・京極修理亮高知・淺野左京大夫幸長・稻原藏人通茂・田中兵部大輔・同息民部長顯・山内對馬守忠豐・藤堂佐渡守高虎・同猶子宮内高定・加藤左馬助嘉明・中川修理大夫秀重・有馬玄蕃頭豐氏・蜂須賀長門守・生駒讃岐守正俊・寺澤志摩守廣高・織田有樂齋・同息河内守長孝・富田信濃守信高・古田兵部少輔信勝・同織部正重勝・金森出雲守重賴・同法印・九鬼長門守隆倘・德永左馬助・戶川肥後守正則・天野周防守景俊・分部左京亮政壽・小出遠江守吉晨・市橋下總守昌成・石川玄蕃頭貞政・桑山相模守一貞・宇喜多左京允成正・皆川山城守信政・成田左馬助氏憲・仙石越前守忠俊・水谷左京助勝俊・眞田安房守昌幸・同伊豆守信幸・同二男左衞門佐幸村・森右近大夫忠政・山川民部朝信・多

賀谷左近頼賁・日根野徳太郎吉明・松平飛驒守忠昌・松倉豐後守・佐久間河内守政豐・龜井武藏守玆經・秋田城之助實秀・佐藤三河守筒元・鈴木越中守重愛・黑田甲斐守長政・山名禪高・信井伊賀守定次・一柳監物直盛・仙石少貳秀久・同息兵部少輔忠政・池田備後守知政・同息彌右衞門・丹羽勘助氏信・舟越五郎右衞門・本田若狹守重氏・村越兵庫頭・長谷川甚兵衞・岡田勘右衞門・三好新右衞門・同入道爲三・津田長門守・同小平次・神保長三郎・秋山右近・赤井五郞作・中川半左衞門・岡田庄五郎・能勢宗右衞門・森宗兵衞・筈尾半左衞門・兼松又四郎・柘植平右衞門・別所孫四郎・野間久左衞門・堀田權八・同若狹・溝口源太郎・伊丹兵庫・山岡道彌・同息修理・奧平藤兵衞・河村助左衞門・山城宮內・平野九左衞門・落合新八郎・佐久間久右衞門・同源六・大島雲八・祖父江法齋・佐々喜三郎・野村喜太郎・遠藤左馬助・中村又藏・淸水小八郎・石川伊豆守、都合其勢五萬八千餘騎、天地を轟して打出でたるは、音に聞えて夥し。是ぞ御代長久の始とぞ申しける。早江戶になりぬれば、公一々次第を點檢あらせ給ひて、限なく悅喜まし〳〵、諸將の長途を慰し、兵卒の疲倦をぞ休め給ひける。諸軍、公の慈惠を感じ奉りて、誠に睿智

武勇の賢君なりと、靡かぬ草木はなかりけり。右くて會津進發の軍法を議し、江府御留守の仕置を定め給ひける。即ち松平因幡守康元、御留守人となし、石川日向守を御城代とし、板倉四郎右衛門を町奉行とし、伊奈熊藏御代官とし、其外諸士の番頭、門樓の警固、隙なく役所をぞ守らせ給ひける。

石田軍記卷之二終

石田軍記巻之三

石田治部少輔謀叛の事

內貪外廉、詐レ譽取レ名、竊レ公爲レ恩、令二上下昏一、飾レ躬正レ顏、以穫二高官一是謂二盜端一とかや。太閤秀吉の寵臣石田治部少輔三成は、江州石田村の地士佐五右衞門が子なり。然るに佐五右衞門、久しく此處に住すれば、村邑の長とぞ聞えける。或時に、其妻懷姙したりけるが、月滿ずる頃ほひに、煩ひ惱んで既に死に向はんとす。同國の長光寺觀世音は、昔し聖德太子の夫人、產の蓐に臨み給ふ時に、甚だ苦み疾ませ給ひて、百肢千節も碎け零つるが如く泣き悲しみ給ひ、祈願あらせけるに、觀音卽ち大光明を放つて、夫人の家を照し給へば、誕產安全なりしより、長光寺とは名づけたり。是を念ひて、佐五右衞門彼觀音に參詣し、種々の願を結びけるが、卽時に安產しけるこ

石田三成秀吉に寵ひらる

そ不思議なれ。即ち名を佐吉と付けて、限なく寵愛しけるが、早弱冠に及びしかば、智計群に越え、器量類あらざれば、父母の悦も彌增りける。家貧うして育ひ難く、近里の眞言寺へ、扈從にぞ遣しける。或時秀吉公參詣の折節に御覽じて、擧動艶に、立居他に勝れて見えければ、卽ち召して夜閨を同うし、玉枕を比べさせ給ひ、周の慈童、韓の東野が振舞をぞ作しにける。其より次第に昇進して、廿萬石の大名とはなるとかや。秀吉公在位の日には、上意に阿り尊寵を媚び、太宰嚭が讒を逞うし、世繼・扶蘇を殺すの暴逆をなしにける。之に依つて權勢年々に盛にして、榮華歲々に大なり。鹿を指して馬といはんも、怪むに足らず。然りと雖内府公は、寬仁大度の德あつて、智信勇武備はらせ給ひける故、太閤も其德貞を感じ給ひて、秀頼公の後見、幷國家の政務等に至る迄、御賴ありて薨じ給へば、內府公も身命を顧ず、諸事の成敗、正しく執行はせ給ひ、和漢の書に闇からず、軍略の法には妙を得させ給ふ。物を扶け人を哀み給へば、天下の諸侯は北星に向ふが如く、四海の民は風に草の偃すに似て、恩惠を戀ひて靡かぬ者はなかりけり。故に石田妬み忌む事際なく、何とぞして

三成兵を蓄ふ

此大病を退治せんと、晝夜胸を焦してぞ案じけるが、また直江山城守へぞ牒し合せ、書をぞ遣しける。

六月廿九日之御狀到來、其表諸口丈夫被申付之旨、大慶不過之候。先書申入之通、越後之儀上杉御本領候間、中納言被下置候旨、秀頼公御內意候。彼國成次第、手段御油斷不可有候。中納言殿勘當而越後殘居候浪人歷々有之由、柳崎三河守・丸田左京・宇佐見民部・萬貫寺・加治等御引付御尤候。此節候間、聊不可有油斷候。堀久太夫方大坂奉公之志候、能登上條民部可指遣候。尙追々可申入候。恐惶謹言。

七月十四日　　石田治部少輔三成

直江山城守殿

斯くて石田は、佐和山・大垣の城普請をし、思の儘に塹壘を掘立て、武具・馬具・兵糧・矢種・玉藥に至る迄、山の如くに調へて、諸方に觸をなし、浪人を餘多抱置き、謀叛の用意とぞ聞えける。偖又京都より、假爲金匠八上手を尋出し、佐和山へ呼寄せて、金

銀を夥しく存置き、旌を擧げ馬を馳らし、時に望んで足輕已下町人百姓等に、褒美の爲の用脚に、豫ての計策とぞ聞えける。折しも奥州の動亂彌頻なるの由、日々に聞えければ、帷幄の籌策已に成りて、勝つ事を千里の外に得たりと、焦周が思をなし、讚美をぞなしにける。偖大谷刑部吉隆が許へ、使を以て申しけるは、近頃苦勞を憚ると雖、相談事急なる儀候。愚城まで來駕に於ては、千萬身に餘りて盡し難く思ふべしと、懇に言遣しける。折節に刑部も、奥州進發の爲に、一萬餘人を引率し、越前の敦賀を立ち、佐和山へぞ着きたりける。石田大きに喜びて饗應し、終つて後奥の亭へ招き寄せ、傍の人を遠除けて、二人首を聚めて私語(さゝや)きけるは、世上の體を窺ふに、秀頼公の御事は、ありてなきが如く渡らせ給へば、眼前に是を見て、其儘に捨置かん事、且は不忠といひ、又は無念の至なり。假令事成らず、骸は曠原に曝すとも、此義を天下に遺しなば、草葉の陰なる先君も、嘸嬉しく思すらめ。今内府の威微なるを討たずんば、後必ず大山の勢をなしてん。其時には、龍を海に追ひ、虎を山に獵るが如くにして、如何で理を得ん。其時に及び、臍を噬むとも益あらんやと、忠を君に標(あらは)

し、姦を人に讓り、趙高が沙丘に李斯を欺誑き、上郡に蒙恬を喪はんとするの謀に、辯を逞うし舌を振つてぞ申しける。大谷聞いて首を低れて、暫くありていひけるは、御邊の欝憤、一往其理あるに似たれども、今の時節、左様の事を企てらるゝは、石を抱いて淵に入り、薪を負うて焼野を行くに異ならず。其上先年諸大名の心に背かれし砌、既に大事に及びしかども、内府の首尾を調へさせ、數ならぬ某等、種々に取持つて、事なく卿安穩に暮らせるに非ずや。却て斯の如くの企を發されば、遺恨ある輩は、必定敵となりぬべし。愁に身命を失ひ、後代迄の嘲を取り給はんより、奥津へ發向せられんには如かじとぞ諫めける。石田重ねていひけるは、我此大軍を企つる事、全く以て我身の爲ならず。聊か君の爲にして、義に依つて命を輕んじ、恩の爲に身を捨つるは、是忠臣勇士の志なり。丈夫の一言、再び萬金にも易へじと、不通切に色を變じて申しける。大谷聞いて、某病身なれども、遙奥州へ下らんと思ふも、天下無爲の爲なれば、暴虎馮河の族に、言を盡さんにはと、佐和を出で、濃州垂井まで趣きしが、流石年月交りし情も今更捨て難く、垂井に三日逗留し、平塚因幡守と相議

増田長盛
長束家政
石田三成
等陰謀

して、種々に諫言し、關東へ下向ありて然るべしと、再三强ひて申せども、石田終に承引せず。　吉隆、心底には染まざれども、日頃刎頸の契斷金の交、今更約を返して見放つも、義士にあらず。　是非なく石田に與力して、佐和山へぞ歸りける。　三成斜ならず悦んで、則ち荷擔の輩、増田右衞門尉長盛・長束大藏大輔家政、石田治部は其張本として、相共に密談をぞしたりける。　増田・長束一同に、偖如何計りて宜しかるべし。　先づ面々本國に引歸り、籠城をや致すべし。　但我々樞機の諸大名を密に語るべしやと、談話分明ならず。　時に治部少輔進み出でて申しけるは、何れもの思策、尤其理なきに非ず。　併し退いて遠慮を廻らすに、一先づ諸國を劫し、大坂へ呼寄せずんば、事成り難かるべし。　其故は、樞機に應じて來る輩は、本より我々が內證を以て言遣すことなれば、彼是の心底を疑惑して、有無を明かに說く者あるべからず。　諸方一度に馳せ集るに於ては、人の心自ら一統して、秀頼公の忠戰を、致さゞる者はなかるべし。　其上秀頼公の御印は、我等儘なれば、表に公の印を押し、裏に我々承るの連判を以て遣さんに、爭でか遲滯せしむべき。　此儀如何といひければ、一座同音に、

大軍大坂に聚る

是に過ぎたる事あらじと、各評議一決して、すぐに密書を調へて、國々へぞ廻らしける。誠に當時の權を高うして、斯る奇恠を企て、諸士を欺誑して、己が身方に引入れんとの謀、不敵とやせん、莫大とやいはん。治部が無道類なし。眞實がましく僞文を巧み、則ち表には秀賴卿の御判を押し、裏には治部・刑部が兩判を加へければ、是全く石田が叛逆とは知らずして、同心の面々、在合せたる諸侯大夫はいふに及ばず、關東下向の人々も、或は濃州・尾州より引返し、或は三河・遠江より、直に佐和山に駈行くもあり。上方の騷動は、夥しくぞ聞えける。是に依つて早速大坂へ馳せ集る人々は、安藝黄門元就・同甲斐守秀元・吉川駿河守元春・岐阜中納言秀信・安國寺慧瓊・島津兵庫頭義久・同弟中務少輔昌久・同又八郎忠恒・筑前中納言秀秋・備前中納言秀家・長曾我部土佐守成親・同式部卿・法印鎭定・高橋右近長行・同九郎・有馬修理亮政純・稙見和泉守純昌・秋月三郎種長・相良宮内少輔賴定・福原右馬助・伊藤民部大輔祐慶・筑紫上野介廣門・久留米藤四郎秀包・立花左近將監宗茂・鍋島信濃守勝茂・太田飛騨守政信・熊谷内藏助直陳・木村宗左衞門尉・堅田兵部少輔廣澄・宗對馬守義知・毛利壹岐守

勝信・同豐前守勝長・小川土佐守祐忠・同左馬助・澤田武藏守・山崎左馬助・小野木縫殿助・小西攝津守行長・增田右衞門尉長盛・長束大藏大輔家政・平塚因幡守・戶田武藏守・原隱岐守・宮部兵部少輔・別所豐後守・木下備中守・石川掃部頭・南條中書忠成・脇坂中書・九鬼大隅守吉隆・多賀出雲守・荒木平太夫・石川備中守・奧山雅樂助・大友宰相義統等を先として、五畿七道の大名郡牧まで、都合其勢十三萬三千八百餘騎、同年の七月十九日に着到し、大坂の城をぞ堅めける。さて石田は、思ふ儘の相圖就りぬれば、諸將と相議して、關東へ申遣し、其返狀を待たず、內府を討伐すべきとの軍談究めて、急ぎ濃州關ヶ原に於て一戰を遂げ、勝負を決せんとぞ勵みける。

兩御所爲景勝退治江戶御進發の事

內府公には、江戶に於て諸大名と軍令を議し給ひて、慶長五年七月十九日に、先づ黃門君を一番の大將として、結城宰相秀康卿・薩摩守忠吉卿・蒲生藤三郎秀行・同下野守忠朝・本多中務大輔忠勝・井伊兵部少輔直政・榊原式部大輔康政、都合其勢六萬九千三

家康江戸を發す

百餘騎、天地を轟かして打立たせ給ふ。先例に任せられ、榊原は魁首たり。先陣既に佐久山・大田原に至れば、後陣は古閑・栗橋にぞ控へたり。公は廿一日の曉天に、御出馬あらせ給ひて、鳩谷に御宿陣なされける處に、一兩日以前より、諸軍低語きけるは、上方の皷動專なる由、浮説止む事なし。然りと雖其實否未だ慥ならざれば、彌兩君は御駕を進めさせ給ひ、廿二日には岩付、廿三日には小山に屯し給ふ。爰に越前の堀尾帶刀吉晴は、以前遠州濱松の城主なりしを、太閤薨去の後に、公より越前の府中五萬石を加增し給ひて、去年入城する所に、會津騷動に依りて、一子信濃守忠晴を、遠州濱松より供奉させて、吉晴は、孫の勘解由・甥の宮内を府中に置き、則ち濱松に馳けて公に謁し奉る。君其意を感悅ましく〵て、見參最丁寧なり。吉晴に上意あるは、北國は、汝楯なりと思ひて手當なし。早く歸城すべしとありし故、辭するに及ばず、急ぎ越前に歸りけるが、三州二河に到りて、木村彌一右衞門に行逢ひたり。彼は東國へ通ずといひて、馳別れぬ。夫より暫く打過ぎて、加々野江彌八が向より來るに遭ひ、吉晴馬より下りぬ。彌八も則ち馬より下りて、良久しく物語しけるが、其

より打連れて、岡崎の旅店に入りて、少時茶を呑み酒を勸めて休息しけるに、刈屋の城主水野和泉守忠重は、折節所勞ありて、起臥穩ならざれ共、吉晴と兼約せし故に、刈屋より池鯉鮒へ出向ふ所に、吉晴は加々野江を同道して、水野が館にぞ往きたりける。扨三人、旅の疲を散ぜんと酒宴して、遊興を設けゝるが、水野思惟しけるは、豫て彌八は、石田と昵近の親友なれば、景勝退治の御供に事寄せて、透間を窺ひ、公を窺ひ奉らんとの謀ならんと悟りて、放ちは遣らじものをと拳を握りて、加々野江に申しけるは、御邊定めて聞及ばれん。某加州大聖寺の城番に退るなり。斯入魂の上なればゞ、是より北國へ同道申さん。若彼地に至り、御働の武功あらんに於ては、我々公へ訴へ證人となりて、恩賞は莫大に行はせ申すべし。去來北國へ同道仕らんといひければ、彌八聞きて何の會釋もなく、腰を擡げて申しけるは、世間無爲の時にも非ず。今眼前に差當りたる會津の戰場をば捨置いて、腰脫役の加賀へは思も寄らざる事、得こそ參らじと、傍若無人に返答せしかば、水野も大に立腹し、是非共に同道致し、御邊が命を申請けんとありければ、彌八聞きて嘲笑ひ、無用の事な申されそ。加州

水野忠重加々野江彌八に討たる

堀尾吉晴加々野江彌八を討つ

へは不通に下らぬぞと、無禮交りにいひければ、水野腹に据ゑ兼ね、居體高になつて、斯く貴邊が一命を貰ひ蒐る上は、弓矢八幡、北國へ同道せんと罵れば、彌八、すは我隱謀顯はれけるよと心得て、愛宕白山、北國へは下らぬぞといひさまに、脇指拽拔いて、水野を只一討にぞ截つたりける。吉晴は沈醉して、壁に倚掛つて唾りしが、驚き覺めて立たんとする所を、彌八持ちたる脇指にて、吉晴の頬先をぞ切つたりける。吉晴は太刀拔く隙のあらざれば、引組んで押合ひしが、彌八は音に聞えし大力、吉晴は老年といひ、手は負ひたり。是非なく取つて、其儘組伏せられたり。されども心利きたる名譽の勇士にて、何の間にや拔きたりけん、彌八が脇腹を、下より腕も碎けよと二刀刺透し、引翻して首をば討ちたりける。此騒に、外なる水野が家臣共、吉晴こそ逆臣にて、我等が主人と彌八とを討ちたるぞ。洩すな者共と、四五十人の侍共、一度に咄と切つて入る。吉晴は些とも噪がずして申しけるは、各始終の有様を、一々能く聞きて得心せられよ。我誤はなきぞと、次第を語らんとすれども、彌外より人數推重なりて、何の差別も聞居けず、上を下へと騒動して、無方に切つて蒐りしかば、

吉晴足にて燈臺を蹴倒し、座中乍に黑闇となれば、騷ぎ入りたる者共十方を失ひ、躑躅する其間に、吉晴は我供從の者共が中へ、赤になりて立退いて、危き命をぞ助かりける。微妙の方便、時に取りての功名と、諸人後にぞ申しける。偖水野が家臣共は、吉晴を討取らんと憤り罵りて、此や彼をぞ尋ねけるに、其夜座席にありて、觴酒を提げ盤を握りし竹本庄助・鈴木與八郎等の水野が扈從、委細の通を知るに依つて、大勢を押止め申しけるは、我等座席にありて、始終を能見屆け、樣子を存知たり。卒爾ばし給ふなと、制しけるにぞ靜まりける。吉晴は深手餘多負ひながら、直に刈屋に行き、今夜の始末を述ぶべきとありしかども、郎從共此に隨はざれば力なく、岡崎にぞ入りにける。一日逗留して瘡を繕ひ養性して、濱松にぞ還りける。水野が刈屋の家中には、委細の首尾をも詮議せず、吉晴逆心を企て、水野と加々野江を討ちたりと、無體に早馬にて、其夜中に野州小山にぞ注進す。兩君聞召し、兎角の御言葉もなかりしに、其頃吉晴の子信濃守は、黃門君の軍兵に勤仕してありけるを、逸雄の若者共、搦め捕れと言上す。君聞召され、彼者人となり、少年より能く知れり。全く以て苦し

からず。假令其父吉晴に逆心ありといふとも、其子別心なきに於ては、豈同罪に處すべけんや。されば古より、朝敵の親あれども、其子別心なきは、必らず勅賞あるとかや。今の世にも、何ぞ其類なからんやと、上意ありしこそ由々しけれ。誠に賢察の明君かなと、諸軍感涙肝に銘じける所に、刈屋より早馬にて、和泉守が扈從に、鈴木與八郞・竹本庄助と申す者、其座にありて、始終の爲體委細に見屆くるの條、先づ加々野江當座の口論に依りて水野を討ちしに依り、堀尾則ち彌八と組み、下より突殺せしとの旨、一々次第を注進し奉る。兩君聞召し、堀尾何の別心あらんや。早速彌八を突殺すの條、老年といひ、手柄拔群の至なりと、御褒美限なくぞ悅ばせ給ひける。其翌朝上使を以て、吉晴が武勇を感ぜられ、手瘡心元なく思召すの由上意ありければ、吉晴は身に餘りて、辱く思ひ奉る。其外信濃守を始めて此を承り、便ち御前に祗候して、御仁心の芳惠、更に盡し難きの由、感涙を流して言上す。偖彌八は、何故に水野を討ちたるぞと、其意趣を穿鑿するに、元來彼者は尾張浪人にて、隱もなき勇悍の大膽者(ふてきもの)なり。慶長元年の頃にや、江州膽吹山の谷間に、盜賊數多集りて、形を

鬼神の姿に似せて、往來の旅人を追却し、近郷の男女を劫すに依つて、野人山樵畏れ慄き泣き悲しみ、旣に難儀に及べども、誰ありて是を伐平げんといふ人もなく、適其行粧を聞く者、忽疫瘧の如く、身心震ひ憚いてぞ恐れける。折節加々野江是を風に聞きて、傍の人にいふ樣は、聞かであらんは是非もなし。由を知りて、其儘置くべき樣やある。去來彼者を伺ひ見んと、密語きて居たりしが、則ち樵夫の體に樣を替へ、鐵棒を杖にして、山深く谷底へ分入り、彼方此方と薪を樵る風情して尋ね求むる所に、峨々たる巖を楯に擬き、大木の茂りたる其內を棲として、大の男五六人、鬼面赤態を蒙り、皮の衣を被ひて、種々の手鋒を提げ〳〵、駈廻る分野は、實に鬼神の如くに見えにける。加々野江得と見果せて、愚民等が恐るゝも道理かな。さりとては片腹痛き事ぞかし。いで物見せんと獨言して、彼鬼の傍近く立寄りて、から〳〵と笑ひければ、盜賊原是を見て、愚人夏の虫、飛んで火に入るとかや。誠に鼯の巢に、鼠の入りたるも斯くならん。されども山賊の事なれば、身に掛けたるは綴なり。鎌より外に所得もなし。好々構ふな骨折にと、罵り笑つて居たりける處を、仕すました

りと、彌八蹈込んで鐵棒を押取り舒べ、大將と覺しき大の男の眞向を、瓜破にぞしたりける。殘る奴原是を見て、逃がさじといふ儘に、思々の得物を引提げ、我れ劣らじと討つて懸る。彌八是を物ともせず、弓手妻手に薙倒し、南無阿彌陀佛と高音に唱へ、扨々腰骨弱き鬼共かな。嘸閻魔王も愁歎ごさめれと、騷がぬ體にて歸りしを、見る人聞く人押並て、鬼に勝る勇力やと、感ぜぬ者ぞなかりける。而るに年頃石田三成、甚だ饗應し入魂して、無二の友とぞなりにけり。是に依つて加々野江を招き寄せ、三成申しけるには、御邊今度僞りて東國に與力し、何とぞ透間を伺ひ、內府を一太刀打つて給はり候へかし。若又其謀叶ひ難くば、何にては東將の內を殺害あるに於ては、御恩賞に子孫を取立て、如何樣にも榮華にして世に出さんと、最懇に語らひ、賴み入るとぞ申しけるに、加々野江少しも辭退せず、日頃の好は斯樣の爲なり。丈夫の一言は、萬金にも易へ難しとや。安き事なり。追付東國へ打越し、望を達し候はんと肯ひしかば、石田大きに悅喜して、委細の證文を書渡し、首途を祝はんとて、太閤より拜領せし貞宗の太刀をぞ、加々野江に遣しける。其證文、彌八が膚の守袋

にありけるを取出し、小山へ注進せしに依つて、水野と吉晴が功名、彌宜しく世上に流布すとかや。斯くすさまじき加々野江が、老年の吉晴に、やみ〳〵と討たれし事、天罰とやいふべかりき。

兩公從₂小山₁江戸御歸府の事

斯くて內府公は、小山に着陣あらせ給ひて、先づ常陸の大守佐竹右京大夫義宣が方へ、島田治兵衞を以て、今度景勝別心に就きて、敵味方の實否を問はしめ給ふに、佐竹陳謝し申しけるは、全く內府公に對し奉りて、何の遺恨あらん。殊更妻子共を大坂に留め置き候事なれば、曾て別心を存すべからず。然し乍ら會津の先驅は、少し思ふ所是あるに依つてなり難し。又景勝に與する儀には、毛頭あらずとぞ返答しける。是に依つて水戸表を厭へさせて、兩君は會津へ攻入るべしとの軍議最中に、上方悉く叛逆の由、七月廿四日に、委細の注進聞えければ、疑ふべき所なし。如何はあらんと、御評定區々なる所に、宇都宮にて此由を聞召し、則諸大名相共に、小山の御

家康江戸へ歸着

陣所へぞ急ぎ給ふ。其行程十八里の所をば、片時の間に打たせ給ひけり。兩君は密談事畢らせ給ひて後、井伊・本多を以て諸將に命じて曰く、逆徒の黨類に與力の輩は、是より馳上つて、彼方に加はるべし。遺恨更に是なし。又此方の一味の旁は、先會津を攻滅して善からんか、但し上方の凶徒を討夷げんかと、兩條を課せ談ぜらるゝに、滿座の諸侯口を緘んて、是非の沙汰もなし。時に福島太夫正則申されけるは、某に於ては、全く貳なし。君の御出馬あらせ給はゞ、淸洲の城を明渡し、貯ふ所の兵糧共を、悉く捧げ奉りて、先駈は某仕るべしと、さも潔く詞を放つて言さるゝ。其氣色、忠義面に顯れてぞ聞えける。是よりして諸將異口同音に、御方同意と進み立つてぞ申さるゝ。兩君一々聞召し屆けられ、先づ上方發向の評議一決して、江戸の城にぞ御歸府ありしかば、諸大名殘らず、人質をぞ出されける。兩公手當の御閑談ありし處に、秀康卿宣ひけるは、會津表の厭には、身不肖には候へ共、某と蒲生とを召置かれなば、聊御氣遣なく、上方御進發然るべく候はんかと、言上し給ひける御風情、忠義の程、骨髓に徹りてぞ聞えける。折節本多佐渡守、御前に詰められしが、手を拍ち涙

を流して、御先祖賴義公にも勝らせ給ひて、能き若君達を持たせ給ふ、御果報の程ぞ有難きと、稱歎し言上あれば、君も一入御悅喜ましく〳〵て、則ち此儀にぞ定め給ひける。是に依つて會津表の手當には、宰相秀康卿・蒲生藤三郞秀行・里見安房守忠義・佐野修理大夫信吉、此外上野・下野の軍勢は、結城・宇都宮を堅めけり。堀久太郞は、越後國に留めらる、村山因幡守義明・溝口伯耆守宣勝等を、是にぞ附置かる。最上侍從山形出羽守義光は、出羽の國に留められて、小國日向守勝賴附隨ひぬ。此等の諸將に、委しく軍法を談ぜられ、軍功ある輩には、恩賞行はるべきの旨を傳へられ、就中義光・秀治・秀行へは、上使を以て、恩地を兼約なされけり。伊達陸奧守政宗方へは、島田治兵衞を遣はされ、今度其方家中一同に、御方に軍忠の志あらんに於ては、要害の地に引籠り、出張あるべからず。此旨納得の上は、猶上意の趣を述ぶべしと申しければ、政宗は元來大勇の將なれば、島田に對しいひけるは、我等領令に蟄居して、何の働になるべきやとて、快からざる顏色なりければ、島田申しけるは、御邊の働、心許なきとには更に非ず。上方の働の障にならんかとの仰なり。其段心得らる

上杉景勝戰備を固む

るに於ては、猶公の命ありと雖、述ぶるに及ばずとあるに依つて、政宗幷に家中一同に、如何樣とも上意に任せ、二心なく忠義を盡すべしとありしかば、島田申しけるは、豫て內府の御內意は、今度の合戰は、勝利疑あるべからず。凶徒追討の後、會津を政宗に給はるべし。然れども此の如きの事は、御邊の心底如何なりとの上意なりと語りければ、政宗領掌して、堅約ありしかども、後に所以ありて、會津は蒲生にぞ給はりける。さて上杉景勝は、城の普請は上意を遂げ、在國は太閤御存世の砌、五箇年の暇を得たれば、別に背ける事もなけれども、推付けて征伐の聞えありければ、弓矢取る身の、一箭發たでは叶ふまじと、則百卅萬石の家中諸士殘らず呼集め、菩提處の雲洞菴と、謙信の御影堂の毘沙門堂に於て、一紙の起請文を書かせて、妻子をば會津の城中へ籠置き、口々には燒草を積み重ねて、嚴しくこそは固めける。偖景勝は、家老物魁(ものがしら)を呼寄せ、軍議を相究めらる。先づ會津に七口ある中に、南山・背炙(せなかあぶり)の口は會津を見下し、中々籠城なり難き處なれば、內府父子白川に着陣あらば、逆寄に仕掛け、野間の合戰を遂げ、勝に乘らば蹤を追ひ、江戸は舍(お)き、京都迄も切て上るべし。打負

けば、士卒諸共に白川を枕にして、討死を遂ぐべしと相議して、下野と奥州の堺、白坂より白川の間に、草籠原といふ廣野こそ能き戰場なりとて、竹木を伐拂ひ、地形を刈夷げて、白川の城を、大手の一の木戸として、一番の合戰には、安田上總介二萬餘騎、二番には、島津下之齋三萬餘騎にて白川の城に籠り、內府兩公着陣あらば、草籠原に推出し、一戰を勵まんと、趙の陳餘・李左車が、韓信を待ちし勢をなして、上下の諸軍、皆經帷子血脈を首に掛け、若し勝つ事を得ずんば、白川の城へ引籠り、六萬の勢、同じ枕に討死せんと、勇み進んでぞ待つたりける。景勝は唯一騎、南山・背炙の口の峯に登り、長沼の地形を見下し、其より樵夫に案內させ、山中の小路鹿通の筋を通り、白川口堺の明神へ拔け、具に人數押の樣を見分し思ひけるは、昔趙王趙歇が、漢の兵の攻め來ると聞きて、陳餘と共に廿萬の勢を率ゐて井陘に出張し、兵糧運送の路を絕ち、張耳三萬の奇兵を領じ、小路より敵の後へ廻りて、戰ひ惱ますの議あり。是ぞ今當りたる處なりと、料りて歸りけるが、內府の先魁榊原式部大輔康政、旣に大田原に攻め來るの由を聞き、則ち八千餘を召連れ、潛に會津を出で、南山・背炙の口

を踰え、此山を背に當て長沼に陣取り、一戰の時に、山中より不意に推掛けて敵の後へ廻り、內府の旗本へ緊しく切つて蒐り、卽時に勝負を決せんとの、幄策をぞ廻らしける。爰に一宗臣等申しけるは、八千は餘に少勢なり。責めて三萬の人馬を用ひ給へと諫むれども、謙信以來の吉例なりとて承引せず。直江・齋藤・千坂等申しけるは、謙信御代の古兵共は、過半死に失せたれば、物に狎れざる者のみなり。然れば小勢にては、勝利覺束なしといひければ、景勝申さるゝは、勝利を得るは、八千に過ぎざれども、皆の諫言餘儀なしとて、許容せられけり。是に依つて千坂・齋藤・新津・三室寺、三萬餘騎にて長沼へ駈着きたれども、景勝の指圖にて、三里跡に陣取らせてぞ待ち居たりける。爾る所に石田治部が謀叛に付、五畿內西國一圓に動亂し、伏見歿落の注進、櫛の齒を拔くが如し。故に小山より引返し、江戸へ御歸城ありければ、景勝略(はかりごと)相違して、齶(あき)落れ果てゝぞ居たりける。若上方の騷動なくて、白川へ赴き給はんに、景勝不意に後より攻め來らば、誠に以て御大事、羊の角を、籓籬に突貫きたるが如くならんに、さりとは御運强き明君やと、諸人感じ奉りけり。

五畿內・四國・西國の諸大名、咸く石田が謀を夢にも知らず、秀賴卿の命として、大坂表に馳集り、陸には軍馬の勢、整々として九蒼を響かし、海には大船を雙べ、浩々として碧天に接して、夥しくぞ聞えける。偖城中には軍議一決して、先づ西の丸內府公の留守居佐野肥後守を追出し、毛利元就を入替へ、關東方一味同心の諸侯郡牧の人質を取つて、皆本丸に入置かんとぞ卉利きける。長岡が宅は、城邊近き所なれば、最初に使を以て、奥方早々本丸へ來り給へとありければ、忠興の室、詞を盡し理を立てゝ、重々斷り給ふと雖、曾て許容なく、剩へ雜兵を押入れて、內室を奪ひ取らんとす。此由を奥聞き給ひて、少も騷げる氣色なく、家の後見小笠原正齋を呼寄せて仰せけるは、今日襲ひ來る不義の奴原、一往追散らさんは易けれ共、彼黨類は多勢にして、此方は無勢の事なれば、一端の勝利あるとも、終には力盡くべければ、我れ數ならぬ身といひ乍ら、忠興が妻として、時に至つて、賤しき雜兵の手に掛りなば、今の

長岡忠興の妻自害

世の嘲といひ、末代までの恥ぞかし。所詮自害して、黄泉の下にて怨を報ずべし。相殘る家中の諸侍は、必ず自害すべからず。何とぞして一方を打破り命を全うし、主の行末を見屆けよと、最懇に言付けて、跡能く仕舞へ正齋とありしに、早事既に急なれば、花の樣なる若君の八歲になり給ふと、十歲の娘君と、誠に荒き風にも當てじと生立養育みしを、膝の元へ抱き寄せて、心本を刺透し、其太刀を取直し、南無と唱ふる聲と共に、慶長五年七月十七日に、果敢なくなり給ふは、哀と云ふも餘あり。正齋は甲斐々々しくも、自害し給ふ太刀を納めつゝ、其儘奥の持たせ給ふ長刀にて、御首を刎落し、則ち屋形に火を掛けて、小笠原・河北・石見三人、諸共に自害せし最後の體、爽にぞ聞えける。さて又若君・娘君の二人の乳母、懇に給仕せし四人の女房共是を見て、去來待ち給へ。死出の山・三途の川とやらんに、早くも御供申さん吾君といふ儘に、燒立つ中に飛入りて、夕の煙と共に立去りしを、聞く人袂を絞り、見る者淚に沈まぬはなかりける。彼奥方の振舞、誠に勇士の女房は、誰も斯くこそありたけれと、其行粧を感じつゝ、目を驚かし舌を卷きてぞ居たりける。總て武士たる奥方

の、能き手本と謂つべし。淮南子曰、嫫母は天下の悪女なれども、貞正の名ありて美しき所あり。西施は天下の美人なれども、不潔の業ありて醜き所ありとかや。今の世の大身小身の婦人女子、多くは文君が夜奔りて相如と淫し、綠珠が身を投げて、君の前に死することを忘れたり。是に依つて辱を子孫に遺し、醜きを門葉に貽めらる。忠興の妻の如きは、鏡といふべかりき。是よりして諸大名の、人質をぞ止められけるとなん。忠興は東國にありて、此由を聞くよりも、恨み骨髓に徹り、府君の勝利を得給はゞ、石田三成を微塵になさんものをと、齒嚼なしてぞ歎きける。背漢の王陵が、母を項羽に殺されて、王陵深く項羽を怨み、高祖に身を委ね、命を捨てゝ戰功ありしを、今忠興に思合はされて、理とぞ聞えける。是ぞ又內府公、御利運の祥瑞とかや申すべき。

伏見落城の事

去程に石田三成は、帷幄の策、水に車を巡らすが如く、風に舟を發つが如き思して、

諸大名に會合し、伏見の城へ取掛けて、速に攻殘さんとぞ議りける。先陣の大將には、筑前中納言秀秋・備前中納言秀家・島津兵庫頭義久・毛利輝元・增田右衛門尉長盛・長束大藏大輔家政、其外弓鐵炮の頭を相副へて、都合十萬餘騎とぞ聞えける。伏見の方はいふに及ばず、近邊の在々處々に至るまで、周章翊き色を失ひ、資財雜具を持運び、上を下へと翻しつゝ、泣叫ぶ形勢は、如何なる大風洪水も、是には勝らじとぞ見えにける。斯くて七月十五日、伏見本丸の大將鳥井彥右衛門尉元忠、諸將を集め申しけるは、近日凶徒大勢押寄すると風聞あり。御方は無勢の事なれば、九牛が一毛とやいはん。然れども合戰の習、必ず勢の多少には依るべからず。運の通塞・士の剛臆に依つて、勝負を得ることとなれば、今度各持口に於て、命を塵芥よりも輕くし、名を萬代に思ひて一戰を勵み、忠を盡し給へと軍議決して、先づ內府公の御臺所・女中・君達を退け奉らんとぞ評定しける。爰に府君會津發向の折節に、鍋島加賀守直茂に仰せけるは、若東國へ發赴せば、女中・君達を賴み置き給ふとの上意ありし時、直茂承つて、幸に三千の人馬、國元より引越し候へば、御心安かれ。警固し奉らんと、

大坂勢伏見城を攻む

領掌申上げられければ、則御盃を賜はりて、內府の君も御快く立たせ給ひける。是に依つて加賀守警固を承つて、女中・君達をば、京都の方にぞ退け奉る。偖鳥井元忠は、今は心安しと、諸將に酒肴を勸めつゝ、早用意し給へ旁と、物の具を肩に引掛け、冑の緒をしめ、馬を陣場に牽出し、寄せ來る敵を、今や〳〵と待け居たり。斯る所に十萬餘の軍兵共、四方八面より、一度に咄と音を揚げ、金鼓の聲地を動かし、鐵炮の音天を響かして、百千の雷の落つるが如く、須彌も碎けよとぞ打掛けたり。鳥井櫓に上りて見ければ、敵の勢、稻麻竹葦の如くに圍みたれば、木幡が嶽も宇治川も、平地にやなりぬらんとぞ怪しまる。扨寄手は揉みに揉うで、七月晦日の子の刻より、緊しく夜を晝に續いて攻むれども、城中の軍兵、身を捨てゝ防ぎ戰へば輙く落つべきとは見えざりしに、江州永原の軍兵共、俄に心替して、松の丸より、夜の中に敵を引入れたれば、續いて秀秋の軍勢、雲霞の如くに亂れ入り、鬨を上げけるに、城中の諸士、思ひ寄らざる事なれば、前後を取卷かれて、大半討死したりける。鳥井が兵卒、其次第を見屆けて、元忠に、斯樣々々の仕業にて、內より破るゝ事なれば、落城は程あ

鳥井元忠戰死

らじ。人手に掛り給はんより、早く御自害候べし。則御供申さんと勸めしかば、元忠聞きて、昔より大將たる者の、敵に圍まれて自害を急ぐは武勇に非ず。叶はぬ迄も戰うて、一人なりとも敵を討たんこそ本意なれ。然れども我れ味方が原にて、信玄の戰に創を蒙りしより、歩行合期し難しと雖、最後の軍に目覺まさせんと、八月朔日の早天に、本丸の城門を押開き、兵卒に扶けられ名乘りけるは、是へ出でたるは、内府の御内に、昔味方が原にて、甲斐の信玄と一戰を遂げ、數箇處の瘡を被りて、合期なり難き鳥井彥右衞門といふ者なり。最後の思出に、一戰仕らんといふ儘に、四尺餘の大太刀を、眞向に差翳し、兵卒を鶴翼に備へ魚鱗になし、是を專と鬪ひて、虎鷺・輪違・車切・毒龍・眞影・拂截、飛越え跂超え、右往左往に薙廻つたる形勢は、桓溫・張公・諸葛孔明が働も、是にはいかで勝るべきと、舌を震うてぞ懼れけるが、十餘合まで透間もなく戰へば、深手薄手數知らず、身は唯朱に染かへり、太刀を逆手に取直し、今は天運是迄と、さも花麗に、腹を切つて死したりしを、譽めぬ者こそなかりけれ。松下主殿助・同五左衞門尉も、倶に討死をぞしたりける。其中に、西の丸を預りし内

藤彌次右衛門が死生、明白ならざれば、兩君の御氣色宜しからずとかや。又若狹少將勝俊は、西の丸の加勢にて座せしが、諸將と不和なれば、敵の未だ襲ひ來らざる以前、伏見を立退きて、洛東の靈山に閑居して、其名を長嘯と改め、松風に吟じ溪泉に嘯いて、敷島の道に心を澄し、和漢の歌に、思を浮べてぞ住まれける。勝俊は、太閤政所の舍兄木下肥後守家定の子、金吾中納言秀秋の弟とかや聞えし。又家定の庶弟木下佐渡守は、兄と不和なるに依り、加藤清正を賴み、肥後の熊本にあつて、軍事を略りしが、太閤御逝去の後は、肥前の國寺井の邑に住きて、鍋島の家中となれりとかや。

石田軍記卷之三終

石田軍記卷之四

丹後國田邊城攻幷玄旨古今傳授の事

同五年の秋、石田三成、丹後國田邊の城主細川兵部大輔藤孝を攻亡さんと、幄策を廻らして、同國宮津の城主一色式部を招き寄せ、心を盡して饗應しければ、今は骨肉の思をぞなしにける。誠に緡微にして餌明なれば、小魚之を食み、緡調ほりて餌香しければ、中魚之を食むとかや。式部は藤孝の妹聟なりしが、智慮短くして、三成が餌に掛つて、與せしこそ拙けれ。式部は、彼が秀頼公を守立てんといふに託せて、己れが天下を奪はんとするを夢にも知らずして、其謀に欺かれ、藤孝と子の忠興とを、味方になせと勸めけるを宣つて、窓に使者を以て、藤孝と忠興との方へ申遣しけるは、各吾等、太閤の厚恩莫大なれば、心を飜して、秀頼公の味方に屬し給へと、頻にこそ

は申しける。藤孝父子は、式部をこそは御方に附けん者をと思はれける處に、却て案の外なる事なれば、惘然れてぞ居られけるが、其返答に、課越るゝの通、如何にも秀頼公の味方に屬し申すべし。去乍ら先づ此方へ來り給へ。對面の上、直に心底を談り合はせんとありければ、式部は委細を聞きて悦合へず、頓て忠興方へ行かんとぞ出立ちける。さて忠興は藤孝に申合せ、一色を田邊の城に呼寄せ、内府の御方に勸め、若承引なきに於ては欻に討果し、石田が一方の羽翼を鎩ぐべしと、密談してぞ待ち居たり。斯る處に一色來りければ、忠興對面して申されけるは、御邊能々思案を廻らして了簡せられよ。太閤の厚恩を報ぜんと思ひ、御子秀頼公を守立てんと思ひ給はゞ、先づ石田を打亡し給ふべし。其所以は、彼石田が心底を推し察るに、秀頼公を守立つるといふに託せて、義兵を擧げ、却て秀頼公を囮にして、吾と中惡き諸大名を滅し、後日に天下を奪はんとするの謀計なり。仍つて内府公を敵とし、諸大名を輕無にして、關白秀次公を失ひ奉り、筑前金吾を流言し、太閤に讒言して、浪人の身となせしめき。是れ其證據にあらずやと、拳を握つてぞ申されける。一色聞きて、さ

りとは大膽なる言分かな。東國方こそは、後日に必ず秀賴公をなき者にして、自ら天下を掌握せんとの兆、鑑に掛けて見え侍るに依つて、石田と申合せ、太閤の御厚恩を蒙むること莫大なれば、孤君秀賴公を守立て、先君の御厚恩を報じ奉らんと思ひ、一命を塵芥よりも輕んじ、忠義を盤石よりも重んぜし吾等を疑ひて、貴邊父子が高恩を忘れ、忠を失はんことこそ無慚なれと、あらけなく申しける。忠興聞きて、入らざる廣言立をいはんより、我等が言に從ひ、內府に與し、忠を盡されよと申せしかば、一色以の外に氣色を損じ、厚恩を忘れ、敵になりたる東軍方には與せじとて、其目弁、忠興を伐たんとするの樣子にぞ見えにける。折節口論の最中に、忠興の刀の柄後へ廻りけるを、家臣に長岡佐渡といふ者是を見て、用ある體にて忠興の背へ廻り、刀を蹴たる風情にて取つて戴き樣に、刀の柄を、主の左の脇へ寄せければ、忠興心得て、拔討にぞしたりける。一色も最後ぞと、太刀拽拔きて打つて蒐る處を、忠興二の太刀にて眞向二つに討破りけるにぞ、終に空しくなつたりける。一色が家來共、此有樣を聞付けて、主人を討たせて置くべきか。いで物見せんといふ儘に、百四五十人

三成、細川藤孝を攻む

の侍共、面も震らず切つて入り、東風西風閗き叫んで、火花を散らして戰ひける。忠興方には、長岡佐渡・有吉武藏を先として、其外當番の士共、鎗長刀の鞘を脫し、鐵棒熊手を追取り舒べ打つて出で、此を詮と戰ひけり。其間に、田邊の諸家中の士共、我れ劣らじと馳合せ、內外より攻めければ、一色が侍共、一人も殘なく、枕を並べて討死をぞしたりける。此事四方に隱あらざれば、石田聞きて肝を消し、大坂表の諸大名、色を失ひ見えにける。是に依つて石田申しけるは、細川父子、先君の厚恩を忘れ、秀賴公を背いて東軍に從ひ、一色を討ちけるこそ惡き所爲なれ。此上は逆臣とい ひ、一色が怨の程も悲しければ、急いで田邊の城主藤孝を攻亡さんと軍議して、小野木縫殿助・藤懸三河守・高田豐後守・別所豐前守・小出大和守・椙原伯耆守・生駒左近大夫等を先陣として、丹後・但馬の勢を相副へて、都合八萬三千餘騎をぞ遣しける。其頃忠興は、內府君に從ひて、關東に赴きければ、田邊の城には、藤孝が手勢計なるべし。勢の附かざる其內に、卽時に踏殺さんと、八萬の兵十方より取圍み、一度に閧を咄と擧げて、七月廿日より九月の十二日まで、晝夜を分たず攻め戰へども、本より期

したる城中の精兵共、緊しく四方を堅めつゝ、弓鐵炮石火箭を、時雨の如くに撃掛くれば、竹柵の仕寄も微塵になり、鐵の楯も次第に網の目の如くなれば、寄手も攻呫んでぞ見えにける。軍半の事なるに、其頃公家にも殿上にも、古今集の傳授中絶えて、天子にも御傳あらせ給はざる所に、細川藤孝入道玄旨法印が身にありければ、若藤孝討死せば、日本の神道歌傳、永く絶えなんと、忝も後陽成院歎き思召して、時の傳奏三條大納言實條卿・烏丸大納言光廣卿に、賀茂の大宮司松下を相添へて、田邊の戰場へぞ遣はされける。兩軍相挑んで戰半なるに、勅使急ぎ輦より下りさせ給ひて、兩陣へ向つて仰せけるは、今度天子の敕使として、三條大納言・烏丸大納言、遙是迄來りたり。兩軍慥に承れ。今本朝の歌道の祕傳、鳳闕には絶えたる如くにて、武家に相續せり。抑古今傳授と謂つぱ、中古濃州の士東下野守平常緣より、紀州の種玉庵宗祇に傳へ、宗祇より三條大納言逍遙院實隆卿に傳へ、實隆卿より稱名院公條卿に傳へ、公條より三光院實澄卿に傳へ、其より圓智院公國卿に傳ふ。公國早世の折節、其子香雲院實條、未だ七歲なりし故に、細川兵部大輔藤孝入道玄旨に傳ふ。藤孝

は文武二道に達し、義勇の名將にて、我師範たる圓智院の息實條卿に傳へん爲に、田邊の城へ迎取りて養育し、歌學神道盡く傳授しぬれども、未だ幼弱なれば、古今の傳ばかりを殘されける。實條既に成長に及ばれし故、帝都へ返し奉りけるに、天子の寵遇、他に超えて聞えさせ給へば、輔佐の大臣ともならせ給はんと思はれて、藤孝も悅び合へず、古今の傳授をも遂げて、師恩を報ぜばやと思はれし處に、高麗西征の觸あるに依つて、則ち異國合戰の用意に取紛れ、實條卿を呼迎へて、傳授せん隙のあらざれば、武士の習、何國にても討死せん事を計り難く思ひ、若し討死せん時に於ては、本朝の歌道の傳授永く絕えなん事を歎き、則ち古今の箱を、幽齋の孫聟烏丸大納言光廣に遣し、高麗陣の間、其方に預け奉る。若し討死致すならば、此箱を、實條卿へ渡し給はれとありて、一首の和歌をぞ送られける。幽齋、

人の國ひくや八島も治まりて再びかへせ和歌の浦波

藻鹽草かきあつめつゝ跡留めて昔に返せ和歌の浦浪

古今の箱預り給ふとて返歌に、光廣卿、

萬代とちかひし龜の鏡しれいかでかあけん浦島が箱

斯の通りにて、高麗陣の時、藤孝入道玄旨は、筑紫の名護屋に詰められける。其子朝鮮にて軍功大なるを以て、秀吉公御遺言にて、豐前の臼杵の城をぞ加恩に預けられける。歸陣の後に、光廣より箱を返すとて、

明けて見ぬ甲斐もありけり玉手箱再び歸る浦島が波

御返しをとて、幽齋、

浦島や光を添へて玉手箱明けてだに見ず返す波かな

と互に諷吟なして、傳授の箱を贈り返し、公家武家共に悦び合へる折節に、圖らず石田三成軍兵を催し、諸卒を遣して、玄旨が在城を取圍み、大軍緊しく攻戰ひ、落城近きにありと奏聞に達する故、驚かせ給ひ、玄旨若し討死するに於ては、本朝の神道歌道永く絶え、神國の掟も空しくなるべし。古今の傳授を再び禁中に殘されん爲に、敕使相向ふなり。此陣暫く引退いて、古今の傳授あらしめよと、宣旨委細に演べ給へば、兩陣畏つて、則ち戈を伏せ冑を脱ぎ、鳴を靜めてぞ承りける。是に依つて兩陣

細川玄旨古今集の傳授を三條實條卿に傳ふ

闘ひ止みぬれば、敕使宣旨の通を玄旨に仰せけるにぞ、入道法印有難き敕詔なりと、頓て本丸の城に請じ奉り、燒香灑水して、古今の箱を取出し、三神五社を掛け奉りて、祕密の傳授一言半句も殘さずして、三條大納言實條卿に傳授せられける。其上に源氏物語の奧儀、廿一代集の口訣切紙、和歌の三神人丸の正體、八雲の大事、二時計が其間、叮寧に認めて、神國祕密傳授の印信とて、一首の和歌をぞ奉上られける。

古も今も替らぬ世の中に心の種を遺す言の葉

と讀みて、實條卿に對つて、古今の箱并に源氏物語・廿一代集の箱共にぞ渡し奉る。斯くて烏丸光廣卿も、次を以て傳授し給ふとかや。最目出度ぞ聞えける。玄旨法印は、古今の傳授、此時に永く絶えもやせんと、是のみ苦しみ思はれける所に、再び禁闕に遺し奉り、神國の光を彌雲の上に輝かすと、千喜萬悅、更に喩へん方もなく思ひ奉れり。偖傳授畢つて後、兩人の敕使は、大宮司松下を以て、寄手の大將共に、敕命の趣を宣べさせ給ひけるは、今度敕使として、三條大納言・烏丸大納言爰に向ひ下つて、藤孝入道玄旨法印に、天子古今の傳授ましませば、玄旨は則ち天子の神道歌傳の

國師なれば、此陣遄く引取るべしと仰せければ、牙を嚙みし小野木縫殿助・谷出羽守・藤懸三河守・別所豐後守・小出大和守・杉原伯耆守・生駒左近大夫等を先として、寄手の軍兵共、何れも謹んで領承し、異儀に及ばず、圍を解きて兵卒をぞ引きにける。抑此藤孝は、尊氏將軍十二代の後胤、義晴公の四男なり。母は還翠軒義賢の息女にて、飯川妙佐の娣なり。萬松院義晴公、東山鹿谷に移住し給ひし時に、寵ぜられて懷姙し、男子を設けさせ給ひ、是を後に兵部大輔藤孝とは名けたり。義晴公の嫡男は義輝公、二男は北山鹿園院の周嵩、三男は南都一乘院門跡覺慶、四男は則ち藤孝なり。後には此妾を、三淵伊賀守に嫁せられて、大和守とは、別種の兄弟なりとかや。慈母の嫁する時に、藤孝も俱に行いて、三淵が繼子となりて育はれける處に、其頃泉州岸和田の城主細川右馬頭元常に子なし。幸に三淵と緣ありし故に、兵部大輔藤孝を養ひて子として、細川をぞ續がせける。細川は代々天下の大亂を鎭め、帝都を守護するの籓籬にして、將軍方執權の家なり。末の世に至りても、又玄旨法印文武兼備へ、殊更神道歌傳祕極を受流へられしこそ、彌彼家の中興なれ。子越中守忠興、永岡と

名乘ることは、昔藤孝、京南勝龍寺の軍功ありし故、則ち彼在處永岡の庄を、信長公より、采邑の地に拜領せしに依つて、永岡とは名乘りけるとかや。

岐阜中納言秀信與二石田一一味の事

石公の曰く、姦雄相稱して主の明を障蔽し、毀譽並び興つて主の聰を壅塞し、各私する所に阿ねて、主をして忠を失はしむとなん。中納言秀信は、信長公の御孫信忠公の御子にて、岐阜卅萬石の城主なり。今度會津へ出張あらんと議し給ひて、家中の諸士を集めつゝ、面々其軍令を相定め、七月朔日に打立たるべき所に、石田が許より、河瀨左馬助を使者にして申しけるは、此度大坂表よりして、秀頼公御旗を擧げさせ給ふ間、貴邊御手引を賴み入らせ給ふとの上意にて、斯樣々々と辯舌を巧み、信がましく述べ遣しけるを、秀信聞きて、一種の心智兩地の秋になつて、兎角分ち難く、夜に入りて、宗臣木造左衛門佐・百々越前守其外家老中を呼集めて、石田が使の趣をぞ閑談せられける。大事の評定なれば、何れも耳を傾け口を噤んで、座中は唯鎮魂の

體にぞ見えにける。斯る所に木造申す樣は、忠諫せざれば、良臣に非ずとなれば、其所存の通を、何れも了簡し給へ。先づ此度大坂方の儀は、偏に辭退し給ひて然るべきや。其故は、設令石田に御心寄せらるゝ共、既に會津出張の大軍を促し乍ら、石田が一往の勸に、早御同心とあれば、世間の聞え輕々しく、其上是は彼黨が逆叛も推察せしめ候。軍識にも、主察ニ異言一乃覩ニ其萌一とあれば、宜くも存ぜず。御家の大事、必定なからんかと覺え候。能々智謀を廻らされ、使者を好きに饗應し、追付此方より返答あらんと、御歸し候はん事然るべしと言上すれば、何れも此儀に一同して、各御前をぞ立ちにける。秀信獨り居て思案せられしが、心にや叶はざりけん、近習の出頭人入江左近・伊藤平右衞門・高橋一德、彼三人を招き寄せて、委細を密談ありけるに、左近が曰く、大坂の奉行は言ふに及ばず、西國・四國の諸大名悉く一味の上なれば、天下一統に、大坂方の下知に隨ふべき事、疑あらざれば、彌會津出勢の儀を止められ、石田に御同心に於ては、以後の御爲繁昌ならん。早速御許容の返事仰せられれば、石田感悅斜ならず思はれんと、三人の者共、異口同音に申しける。秀信實にもと得心

織田秀信石田に與す

あるこそ滅亡の基なれ。翌日自筆の返簡を以て、石田が方へぞ送られける。さて其後家老共登城の折に、秀信申されけるは、彌大坂方に一味をなし、其旨書札を調へて、今朝石田が許へ贈らるゝの由物語ありしかば、何れも驚きて、兎角料簡にも及ばず、急ぎ退出して相談しけるは、亡父信忠公の遺言に任せ、家中大小となく德善院の下知を受けて、執行ふ事なれば、彼方に訴へんと、則ち木造・百々兩人、窃に岐阜の屋形を忍び出で、早打にて上京し、德善院の數寄屋に於て對面を遂げ、右の次第を具に演べけるを、玄以聞き給ひて仰天し、是ぞ御家の破滅、天魔惡神の所爲なり。各一命を捨てゝ諫言し、適くも會津へ出陣なし給へとあるに依つて、兩人委細を承つて還る所に、秀信は佐和山へ越し給ふとて、鳥本の宿物騷しき樣子を聞きて、すは是非に及ばざる事共かなと思ひ、凌び通らんとするを、石田豫て斥候を遣し、兩人出京を待ちて、路次に人を附置き申しけるは、秀信も近日打越され候。是非に佐和山へ立寄られよと留むれば、强ひて辭退もなり難く、彼地に行きしかば、種々の饗應にて、三成兩人に對面し、今度秀賴公、大軍を思召立ち候に付、中納言殿を御賴あるの條、各も得

心候て、主君と倶に軍功を盡さるべし。恩賞は望に任せ沙汰し申さんと、太刀・黃金を當座の引出物と出しけるを、兩人の者、忝しと領掌して、最早堪忍もなり難く、一太刀と思ふ所存は頻なれども、若仕損ずる者ならば、秀信の御爲如何と思ひ、進む心を引留め、佐和山を出立ちて、岐阜にこそは歸りける。彼者共は、餘りに胸を据ゑ兼ね、私宅にも立寄らずして、其儘直に登城し、物魁家老分の者共を呼集めて、德善院玄以法印の心底口上の趣を委細に披露し、當家の興廢、唯此一擧に極まりぬ。然る上は、各存念遠慮なく申さるべし。多分の方に付きて、料簡致すべしと申しければ、飯沼十郎兵衞進み出で、熟思案仕るに、今度佐和山へ打越し候事、以の外卒爾なる上なれば、關東御出陣も、早なり難き所なり。近日石田是へ來るべきなれば、願ふ所の幸なり。當城に於て三成が首を刎ね、關東へ御注進あらば、莫大の御忠勲たるべし。討手は則ち某に仰付けられ候へと、勇義鐵壁を徹つてぞ聞えける。滿座の諸士一同に、此儀尤も然るべしと、齒咬をなして諫むれども、秀信、曾て承引なきこそ無念なれ。昔西魏の魏豹・許負といふ者が妄誕に欺かれ、沛公を背いて項羽に與し、天下を

三分にせんと謀りしに、大臣周叔諫めけるは、心を專にして漢に事へ給はゞ、天の祐あつて、坐ら魏國を保つて、王爵の貴きに居給ふなれば、人臣の望、恐らくは其上あるべからず。妄に言を信じて、輕々しく兵を起し給はゞ、身を亡し家を失ひ給はんこと、此一擧にあり。願くは能く是を察し給へといへば、魏豹大きに怒り、我れ今大儀を思立つに、斯く不吉の言を出して我心を亂すは、汝必ず漢に內通して、我を滅さんと巧む者ならんと罵るを、周叔聞きて、臣久しく大王の厚恩を蒙る。安ぞ異心あらんや、今忠言を以てすれども、敢て用ひ給はず。後日に必ず悔え給ふなといへば、魏豹益怒つて、左右に命じて追出させける。其後沛公の臣酈食其は、故舊の情を思ひて、魏豹に往きて說きけるは、大丈夫は、心兩つ持つべからず。事反復すべからず。貳ある時は、疑多くして敗を取る。反復多き時は、事輕々しくして辱を取る。先生初め楚に從ひ、久しからずして漢に降れり。今心に不平を懷いて、又謀叛せんとす。何故に反復多きや。恐らくは敗鬪あらん。況や時の勢を論ずれば、楚は勢大なれども、暴にして愚なり。漢は勢微なれども、寬にして大智あり。好し愚人は楚を强し

とすれども、智ある人は、楚の丁（つひ）に滅びて、漢の方に興らん事を知つて、其萌（きざし）を見て、興亡安危、論ずることを待たず、青天白日の明かなる如くなれば、先に漢に事へ給ふは、誠に計（はかりごと）を得たり。今又萬全の漢を棄てゝ、危亡の楚に與せんとの貳（ふたごころ）を懐き給ふは、是豈大丈夫の所爲ならんや。早く兵を調へ心を専らにして、漢に事へられば、自然に安く富貴を保つて、永く魏王の位を失ふことなけんといへども、魏豹敢て從はず。我既に此の如く思立ちたれば、爭でか心を動さんや。縱ひ蘇秦・張儀再び生れ來て、晝夜說くとも、此心移すべからず。先生も言を費さるゝ事なかれとあれば、酈生も叶はざるを見て、滎陽へぞ歸りけり。果して灌嬰・曹參に、馬の上にて生捕られたり。秀信も、木造や玄以法印の諫言を受けずして、東漢の內府君に背き奉つて、西楚の三成に與力し、岐阜の城の麓なる瑞龍寺山に、三箇所の砦を構へ、石田が援兵と言觸らし、樫原彥右衛門・同息左京・河瀨左馬介・松田十太夫に、三千餘騎を相副へて、堅めけるぞ不覺なれ。木造・百々が、周叔・酈生に習つて諫めし言の葉を、後に八月廿三日の落城に思ひ出されて、涙に暗（く）れ給ひけるこそ愚なれ。

六角義郷石田の使者を斬る

江州六角右兵衛の許へ從二大坂一遣二使者一事

去し七月廿一日に、秀賴公の御下知として、江州先方前右衛督義郷が許へ、使者を以て申されけるは、今度北國表の大將として、發向あるならば、本領は相違なく安堵たるべきの旨、三成已下の諸奉行連判の狀をぞ渡しける。義郷は、連牒を披き閲て、委細を聞屆け、使者に對面し申されしは、今此砌に臨んで家人共を召集め、軍兵を催し、北國表の大將をせよとや。誠に以て三成には、能くも似合ひたる料簡の催促なり。是ぞ一揆とやいはん。何か是に過ぎたる恥あらんと、殊の外に氣色を損じ、則ち使者をば斬つてぞ捨てたりける。偖此義郷は、關白秀次公伏誅せられ給ひし時に、石田が讒言に因つて、浪人せられしとかや。今度の振舞、實に道理なりと、諸人も密語しけるとなん聞えし。大坂方の僉儀には、此度義郷、北國へ發向あるならば、國中の諸卒駈集まつて、手痛き一戰を勵まんと思ひて、彼地に打越さんは必定なり。さあらん時には、其跡は人少にて、要害もあるまじ。其上味方に固むるなれば、心安く國

國への便をも通ずべしと、范亞父が計も戻かしく憶ひて申遣す所に、案に相違しぬれば、則八月二日の夜諸將寄集りて、先づ前田肥前守利長が、關が原へ上らば、防がん手當、延引に及んでは凶かりなんと、義鄕が替に、山口玄蕃・同息左馬助・成田庄左衞門父子四人を大將として、都合其勢一萬餘騎、加賀・越前の境なる、大聖寺の城に差向けんとの評議區々なる處に、小西攝津守行長申さるゝは、會津表、形の如く難儀に及ぶと聞ゆれば、東國・北國の手當は遲からぬ事なり。先づ急いで近江の逆徒等を退治あらんこそ、然るべく存候。義鄕假ひ御方の催促に應せずとも、使者を斬るといふ事やある。前代未聞の所業なれば、片時も遁すべきに非ず。若是を其儘閣きなば、以後の狼藉、算を亂すが如くならん。早速軍兵を馳せて、渠等を誅伐せらるべしと、疊を敲き理窟を開いてぞ述べにける。石田聞きて、少時工夫しけるが、仰の通り最も義鄕が仕方、奇怪千萬言語道斷なれども、彼は元江州の大守なり。今其人を討果さんと披露しなば、國中の者共昔の好を思ひ、必ず擧つて一揆を發すべし。天下の安危は、唯美濃と近江に縮る事なれば、風なきに波を起す樣にて、却て味方の騷

となり、僅の敵に、天下を失はん事本意ならず。大志小節に拘はらずとあるなれば、今度西國方勝利を得るに於ては、義鄕を踏殄さんは、掌の中なるべしと、呵囉々々と打笑ひければ、何れも此儀に同じつゝ、北國手當の勢をぞ差遣しける。

眞田父子義絕して牛角となる事

去程に眞田安房守昌幸は、宇多下野守が婿にして、石田が相婿なれば、三成とは骨肉の交りとぞ聞えける。さて又次男左衞門佐幸村は、大谷刑部少輔が婿なれば、何れも石田が爲には、後門の狼前庭の虎の如くにぞ見侍る。是に因つて今度も西軍の方に與して、石田とは鐵壁の志となれりとかや。長男伊豆守は、本多中務が聟なれば、關東に勤仕して、勳功を拔んずれば、內府君の懇情も他に超えさせて思ひ給ひける。斯くて父子兄弟、關東・西軍に義心を勵せば、忽吳越の隔をなして、終に龍虎の間となるぞ哀なる。伊豆守、靜に思案しけるは、父子兄弟讎敵となるは、我朝に於て其例少からず。義朝・信玄等の大將、皆以て此の如くなれば、今更驚くべきに非ず。然れ

眞田昌幸
信之義絕

ども身體髮膚は父母に禀けて、此軀を相續し、父は天なれば、敵對すること豈其理あらんや。道に背いて立つべきの義なしと、種々に工夫して、何とぞ父を諫めて、一所に働き、共に軍功を盡し、君の爲に死なんこそ本意なれと思ひて、則ち安房守が許に行きて、詞を正し術を替へて、色々に理を立て、諫言を盡すと雖、昌幸曾て承引なかりしかば、力なく所詮仕官を棄て、如何なる深山幽谷にも隱れ忍び居ばやと念ひしが、此難儀に望んで退くといはゞ、內證の心底は知らずして、我身を遁れしと、諸人に嘲哢せられなば、却て大家に疵を付くるに似たり。其上不孝を先んずれば、又君を末になし奉るの不忠を懷く。進退兩楹にあつて、此に究れりとあぐみしが、父も天なり君も天なれば、忠孝に何の厚薄を存ぜんやと料簡して、退く意を取直し、我身を放して、內府君に奉らんとぞ決しける。誠に兵者不祥之器、天道惡之。不得已而用之。是天道人之在道、若魚之在水。得水而生、失水而死と、伊豆守が天道に於けるは、魚の水を得たると謂つべし。今度父子兄弟三人、龍虎獅子の勢をなして、下野の小山までは、內府君の御供し下りける處に、石田三成が羽書を飛して、眞田三人に

申しけるは、其許の亂軍は、豫て思ひ儲けたる處の幸なり。何とぞ透間を窺ひて、內府を討ち奉らるゝに於ては、秀賴公への忠節第一なるべし。其軍功には、伊豆守には上野國を給はり、安房守には信濃國、左衞門佐には甲斐國、三箇國宛行はるゝの由、誓紙を遣すと雖、伊豆守是を見ること、腐鼠の如くに思うて、則ち扒き棄てたりけり。偖其後、前には會津騷動急にして心を碎き、後には上方の蜂起跨つて思を惱す所に、又石田箇條を認めて、安房守が許へ遣しけるにぞ、彌父子の義絕とはなりにける。

三成が狀に曰く、

去三日之御狀、今六日子上刻至₂佐和山₁參着、令₂拜見₁候。

一、先書度々申入候、披見候哉。其國一箇國之仕置、貴所江被₂仰付₁之旨、輝元・秀家・增田右衞門・長束大藏・德善院等、自₂拙者₁可₂申達₁旨被₂申候間、其心得而、深志・河中島・諏訪・小諸・中州迄儀、成程弓矢御才覺可₂被₁仰付₁候。何上方妻子有₂之衆候間、不₂可₁有₂異儀₁候。若於₂愚意之輩₁、押付成敗有₂之而可₂有₁拜領₁旨、各相談之上被₂定申₁候間、其旨可₂被₁仰付₁候。被₂移₁時日₁則其詮不₂可₁有₂之候。但御手餘₂

衆此方可承候。美濃衆可被差向之旨評定也。羽右近儀各別之遺恨候。其故御若輩之秀頼公掠、新地拜領、曲事被仰候。

一、會津江被飛脚差越、可被仰入儀肝要候。

一、越後之儀久太差而承引無之條、上方闕國多候間、越後景勝被遣、久太上方拜領樣有増候。

一、川中島之儀、御手餘候付、可承候。此方被仰付事可有之候。

一、羽肥前江戸置老母并家老之人質候故、其補之事候哉。于今御請不申、剩丹五郎左衞門手前人數出之由申付而、北國如形人數被遣候。羽久太上方無二之覺悟候。越後筋間越中亂入候申遣事。

一、丹後國之儀、一國平均所務半申付候。幽齋事色々附懇望、赦一命流罪候。長島越中事、破御法度誑内府、申掠御若輩之秀頼公、新知取之條遺恨深故、彼妻子大坂居候、燒討被仰付事。

一、先書申候大坂西丸内府留守居之者五百餘人追出遣伏見城、西丸移居輝元候。

其以後伏見城鳥井彥右衛門爲大將而千八百餘人置候各申談、去朔日四方乘破、不殘一人討取、城中御殿此間雜人原踏荒候故、悉懸火不殘一宇燒拂事。

一、內府會津佐竹敵被仕、僅三萬四萬之人數而抱分國十五城、廿日路上事成者候哉。路次筋之面々今度出陣之上方衆、如何內府次第申候、廿年以來太閤之御恩思替內府去年一年之懇切、秀頼公不忠仕、剩捨大坂之妻子等可申哉、其上內府此頃各差而懇意無之由承候。右分別無之、手前人數上方勢一萬計語而上候共、尾參之間可討取儀、誠天之與候。然則會津・佐竹・貴殿、關東袴着而亂入可有之被存候。唯被捨天道仕置見之間、上申事可有之。唯今遣候備如右可被相極事。

一、此書立載候衆、何無二之覺悟而可心安候。日本之諸侍妻子入置大坂之間、於仕置者可心安候。兎角手立不及愚意之輩、可討取覺悟專要候。此方仕置而明後尾州表、被遣之樣、岐阜中納言與申談候。不可有御氣遣候。一手之筑紫衆佐和山殘置、用次第可打出候。尾州表輝元人數一萬計、吉川・安國寺召連、長束・

大藏同道而昨日被打立候。其外勢州表書立之次第候。鈴鹿越被打出、輝元儀自然内府被上候者、濱松迄着之時分、人數二萬召連至勢州出馬可仕相定候。此書立之人數五三日以前、悉從國々馳上相交候。於仕置可御心安候。其上金銀玉藥料入用之事可承候。自秀頼公可被遣也。太閤御貯之金銀并闕地、何御忠節次第其々可被下之事。

一、今度伏見表手柄仕候九州衆、内府江州十萬石令割符、當座引出物金銀相添感狀被下候。

一、定而可聞及、水野和泉守三州池鯉鮒居候處、加々野江彌八出陣仕立寄致口論、彌八和泉差殺候其座、堀尾帶刀居合碍、具足被斬候、痛手而早相果體聞、帶刀新知取候事仕合相違存。中村式部病死之由吉事切々承候。御用無之共可預御飛脚也。御内儀方大坂御入、一段無事候。宇多河内父子當地爲留守居、今日當地被參候。下野事先日伏見之節、所取合而家中之者少々手負候得共、父子共無事、可御心安候。今度九州衆不大形秀頼公御奉公振而抛命、無二之體見申事

候。輝元同前候。恐惶謹言。

八月六日　　石田治部少輔

眞田安房守殿

斯くて安房守は、委細を見屆けて、上方動亂の由を聞き、俄に上州犬伏の宿より引返し、伊勢崎に要害を構へて楯籠り、城をば緊しく堅めつゝ、寄せ來る敵を、今や〳〵と待ち居たりけり。

前田肥前守利長攻二大聖寺一事附大谷刑部の事

前田肥前守利長は、東軍一味にて、加州金澤を堅めて、小松の城主丹羽長重を押へんが爲に、岡島備中守を三道山に遣し戍らせけるが、同年八月三日に、利長は、大聖寺の城山口玄蕃頭を攻めんと議して、兵卒四萬五千餘騎を引供して、小松の南三谷海道へ推出して、惣構を責破らんとぞ謀りける。舍弟の前田孫四郎利政は、二萬餘騎を率して、能州より取掛けて、諸手一同に攻入らんとぞ通じ合せける。其間に利長

前田利長
丹羽長重
合戰

申しけるは、先づ小松の城を攻落し、軍神の血祭して、御方を軍勢に競はせんは如何にとありければ、高山聞き、小松の城には、物に馴れたる長重睨み居候得ば、心安くはなり難き様に相見ヽ候由申しければ、利長も重ねての返答なかりけるが、爰に長重は惣構へ出で、町屋の上に登り見るに、肥前守が大軍、東は手取川・三道山より三谷に到りて、野も山も整々として、皆旗・長柄・長刀凛々たり。星を散らす如くに辟易す。味方の色も臆してぞ見えにける。時に坂井與右衛門、音を怒つていふ様は、勝負は大將にあつて人數に非ず、昔韓信、張良に怒つて、楚の勢雲霞の如くなるも、我は腐木の様に思ふといはずや。伊花糸目醒まさせんとて、古田五兵衛に、千四百餘兵を淺井口に遣し、櫻木源太には、八百挺の鐵炮を相添へ、潟の海へ船に乘せ、二方より、不意に利長が後へ回りて擊惱ませば、忽に後陣の前田孫四郎・高山南之坊右近をば、馬場村へ押取り込む。古田・櫻木勝に乘つて、頻に打立ちける程に、小松勢彌後陣に喰付けば、利長も難儀に及ばんと思ひ、則ち馬を駐めて牀几に腰を掛け、備を立直しける所に、丹羽長重は、南部無右衛門と寺澤勘右衛門を斥候に出して、利長

が旗本を見せけるに、高山右近是を見、小松の斥候は軍略を知らず、物に狎れざる者なり。彼れ討取れと下知すれば、兵卒七八騎驅出でけるが、追失つてぞ歸りける。初め小松方より古田・櫻木打出でし折に、若し肥前守が軍兵、今井橋の方に回り來らば、則ち跡を切取れとて、伏兵五六十騎に鐵炮を持たせ、御幸塚の方に差置きけるを、斥候の南部・寺澤、物にや馴れざりけん、利長の人數今井橋に來ると思ひて、小松の城に取掛ると注進すれば、小松の城には大きに騷動し、長重は未だ町屋の上にありしが、注進を聞きて、則ち潟へ出張せし古田・櫻木に、早々引取れと使を立つれば、兩人急ぎ小松に退きけるを見て、孫四郎・高山右近も、馬場村を駈出し、却て古田・櫻木が蹤に付きて、追へども顧みず、城に入りしかば、前田・高山も念なく引返しけり。小松には、寄せ來る敵を今や〳〵と待ちし處に、利長は城を後になし、大聖寺の方へぞ推回りける。長重不審に思ひ、斥候を呼びて問ひけるは、利長此城へは蒐らずして、西を指して打通るは、如何なる故ぞといへば、南部・寺澤申しけるは、大呂村一屋にて見候へば、今井橋・御幸塚に人數伏兵是ある故注進すと。古田・櫻木大きに怒つて

曰く、其伏兵は、此方より遣し置きたる鐵炮人數なり。先刻淺井口・潟の合戰に勝利を得て、利長軍兵を馬場村へ押籠めしに、さて〳〵是非なき仕合かなと、齒噛をなして瞀えければ、長重も、以の外に斥候の者を白眼付けて、天晴希有のうつたへものと、まつくろになつてぞ怒りける。斯くて肥前守は、思の外手痛き一戰して鬪ひければ、高山がいひし事も符合せりと思ひ、小松を差置きて、志す所の大聖寺を責破らんと、兄弟一手になりて、六萬餘騎の勢四方より取掛け、一度に咄と音を揚げ、弓鐵炮箭鳴の響は、白山も碎け、立山も地に破れ入るかとぞ聞えける。斯くて城主山口玄蕃頭父子、幷に成田庄左衞門・同喜太郎・飯田又六・松井宗助等一萬二千餘騎、城門を押開き、喚き叫んで切て出で、代州の夏悦・張同が勢をなしてぞ防ぎける。されども敵は六萬の兵、味方は一萬の勢なれば、叶ふべきとも見えざれば、遂に本丸にぞ取籠りける。前田利政之を見て、急に攻掛け、息をも繼がせず、揉みに揉んで伐ちしかば、鐘の丸をも打破られ、防ぐに方便なく、織田孫左衞門以下五百餘人、枕を並べて討死す。寄手も、手負死人は數知らず。大將山口父子は、翌四日に自害をぞ仕たりける。

此時に大谷刑部少輔吉隆は、鯖並に陣取りて、山口玄蕃が加勢の援兵奥山雅樂亮・木下宮内を伴つて、東國方の堀尾帶刀、吉晴が府中の城代堀尾宮内・同勘解由を攻めんと思ひ、越前の府中に押寄せけるに、兩方既に合戰に及ぶべかりしに、城兵異儀あつて、諸卒和せざれば、堅むるに堪へずして、大谷に和睦を請ひし處に、大聖寺落城の由、北庄青木紀伊守より告げ來れば、刑部大に驚いて、府中を捨置き、北庄の後詰をせんと旗を卷きけるを、奥山・木下等申しけるは、府中の敵を蹤に居きなば、大なる害あらん。先づ府中の城を攻破りて、其後北の庄へ向はれなば、然るべからんといふを、大谷聞きて、北の庄落城の時は、小松の丹羽長重も、丸岡の靑山伊賀守も、忽に力盡きて、味方の弱り千萬ならん。唯府中を此儘置く時は、其苦勞なく、能き留守居を置く如くなれば氣遣なし。北國手に入らば、府中は攻めずして取るべしと議して、誘北の庄へ推詰めんと、堀尾が和睦を幸にして、府中の圍を解き、二萬七千餘兵を一手になして、月の夜を便とし、四日の丑の刻に、北の庄へぞ着きにける。斯る所に利長の緣者に、中川宗半といふ者、秀賴公の近侍なりしが、大坂より加州に下りけ

るを、大谷北の庄にて聞付け、則宗牛を迎へ押止めて、是非をいはせず、一通の謀書を調へ、利長の許へぞ遣しける。其文に曰く、

此度北國筋大谷刑部請取、四萬餘騎而取向候。一萬七千北庄口推詰、三萬餘船手而加州着岸、可金澤攻取催之間、不可有御油斷候。恐惶謹言。

八月三日　　　中川宗牛

肥前守殿

利長は是を披き閲るに、宗牛は音に聞えし能書なれば、紛もなき自筆自判の狀にして、疑ふべきに非ざれば、誠ぞと心得て、八月七日に、細呂木・大聖寺より、金澤にぞ引きにける。是は刑部が利長を欺き、軍議を妨げんとの智謀なり。是に因つて大谷は、青木紀伊守と相談し、奥山雅樂亮と木下宮内とに、蜂須賀阿波守人數を率ゐて小松に到り、丹羽長重に對面し、軍議一決して、上田主水・寺西備中を加へ置きて、刑部は夫より關が原へぞ趣きける。奥山は北國別儀なければ、迚もの事に、上方へ馳上つて、石田と倶に働き、天晴武勇を顯し、名を萬代に揚げんものをと思ひ澄して、疾

や遲しと、江州海津邊迄馳往きしが、早關が原敗北すと聞きて、則ち腰脱けゝれば、漸く直に京へ上つて髮を剃り、名をば宗巴と改めて、今出川に隱れ居て、空しく果てにけるとなん。

石田軍記巻之四終

石田軍記卷之五

前田利長與二丹羽長重一淺井畷合戰の事

斯くて利長卿、大聖寺に在陣ありしが、宗牟が謀書に依つて、爰を立退かんと相議して、先手は加越の境、細呂木・金澤・上野・五本村・長崎邊まで到りて屯しぬ。其の時に肥前守の魁首山崎長門・高山右近・太田但馬・長九郎左衞門四組引分つて、御幸塚に上つて陣を張り、九郎左衞門は殿後にて、跡より打たせて、丹羽長重が籠る小松の城を壓へ、本の道を攻入らんとするを、小松より見て、すはや利長寄せ來るぞと、城中も町中も、上を下へ翻しければ、則ち長重軍令を定めて、諸方をぞ堅めける。先づ丹羽五郎助は櫓に上り、敵の寄するを見ば、太皷を撃つて諸軍に告げよ。坂井若狹は大手を守るべし。同與右衞門は、先陣たるべしとぞ約しける。斯る處に若狹申しける

は、若輩には候へ共、先駈を某に仰付けられれば、本望たるべしといひけるを、長重聞きて、汝は與右衛門子なれば、大手を申付くるなり。家老の子に似合はざるの願なりといつて、則ち長重は城を出で、町の家に上り、敵の安否を見るに、利長は三谷・本江へ掛り、三道山に引取り、小松鎮の四備は、御幸塚に陣をぞ張つたりける。肥前守が斥候歩卒の上坂主馬介は、今井橋まで出でけるが、小松方より伏兵を、大呂村に置く所に、伏兵と斥候と、早熊と猪との如くに睨み寄つて、鐵炮箭軍、岩石も碎け海岸も崩るゝ計に闘ひけるが、互に加はる人馬にて、大勢とぞなりにける。小松方は、宵より船を潟の湖に回し、合圖を定め、横合に船より上り、手痛く無二無三に戦へば、肥前守も打立たれ、上坂忽に敗軍して、御幸塚に引いたりけり。小松方も、是をば勝にして、相引にぞ仕たりける。偖利長の御幸塚の四段の衆、翌八日の早天に、三道山へ引取り、三谷へ廻れは、路遠して間違あり。天井橋・潟の湖を渡つて、淺井縄手へ蒐らんと、軍議一決しける所に、松平久兵衛進出でて申しけるは、淺井畷を引取らん事、偏に然るべからず。其故は、小松の城下に近うして、而も足場凶く、兩方深田にして、

路の廣さ僅に二間餘なり。斯る處を俄に取夾まれなば、味方の大難是に過ぐべからず。其上小松の城中に、言甲斐なき者共が籠つたりとも、一中も中ずして、おめ〳〵とは通さじ。御料簡あるべしと諫めけるを、山崎長門・長九郎左衛門・高山右近、此を聞きて、若輩といひ無功といひ、差出でたる儀なりとて、片腹痛き風情して、嘲り笑つてぞ居たりける。久兵衛重ねて申す樣、何れも能々見給ふべし。此度小松の城より、敵の勢出でん事必定なり。其時は某唯一人、一番に鎗を入れて、唯今の面目を雪ぎ申さんと、廣言吐いてぞ立ちにける。司馬が曰、戰は、陣することの難きに非ず。人をして、陣すべからしむることの難きに非ず。人をして用ふべからしむること難し。之を知ること難きに非ず。之を行ふこと難しと、利長の、理を枉げて通らんと宣ふは、行ふ事の難きとやいふべけん。爰に丹羽長重は、佐々七兵衛を、今井橋へ細作に遣しけるが、早御幸塚の高山・山崎・長・太田、段々に打立ちて、今井橋へ出で、一屋より大呂村・北淺井・南淺井・本江へ掛りて、東の山崖迄引取るの由告げ來れば、長重が家臣江口三郎左衛門聞きも敢ず、物に馴れたる兵

卒七八百を引具して、大物見に出でんと、町口へ駈けゝるに、斥候は騎切りて來り、肥前守勢今井橋を越え、大呂へ出で、淺井繩手に掛るといふを聞きて、是ぞ天の與なり。追蒐け討取れ、其門開けと下知すれば、門番の古田五兵衞・櫻木助右衞門、長重の證文なきに於ては、門を開かずといふにぞ、江口は樊噲が勢をなし、眼を怒らかし、推參なり、我が出づるに何の科かある。其門開けといふ儘に、馬牽き寄せ打騎つて、八百の甲兵鶴翼になつて、大呂・一屋の北へ駈出づれば、肥前守の四段の備、魚鱗になつて、東を指して推通るを見て、右の方に備へて、小松へ由を斯くとぞ注進す。長重も則ち騎出でんとするを、水岡越後守・永原實報院、馬の口に取付きて諫言し、惣門の內にぞ控へたり。是に依つて城內より、究竟の兵古田五兵衞・坂井彌五左衞門・澤野次郎左衞門・佐々多右衞門・森野次左衞門・園七兵衞・松村孫三郎等、江口が手に加はつて、其勢千餘人、利長の陣と三町程隔て、長九郎が殿末に喰付きて、江口は旗を押立て、麾を振擧げて、擊てや者共と、鐵炮石火箭、雷の落つるが如くに打掛れば、さしもの金澤勢辟易して、危くぞ見えにける。長重も此音を聞きて駈出づれば、利長

淺井畷合戰

方、除口にてはあり、長重が加はると見て、崩れ立ちてぞ引きにける。江口は勝に乘つて龍が馬場まで追蒐けたり。古田・坂井・佐々・森野・園、適れ功名をぞ仕たりける。其内に小松の城偖利長方の長九郎左衞門は、備を立直し、江口と暫く揉合ひける。坂井與右衞門・大屋與兵衞は五百餘より、思々に驅出で、或は大呂・一屋へ馳集まる。

騎にて、北淺井へ打出で、沼を前に當てゝ待掛けし所に、長九郎唯一騎、歩卒廿餘人にて、沼の東へ打ちけるを見て、則ち鑓押取り、沼を渉つて突掛りけるに、九郎は徐々と本鄕の方へ引きにけり。江口は沼を阻てゝ、南淺井と大呂との間に出張して、長が本鄕へ引かば、早く告げよと斥候を遣しけるが、唯今なりと申來るに依つて、江口が內より、松村孫三郎、葦毛の馬に騎り、眞先に沼を打越えて、九郎が先備の中に騎込む所を、鎗玉に揚げて、馬より下に衝落し、深手五ヶ處負はせたり。既に首を取られんとしける處に、小松方より小池新兵衞駈付け、鑓にて突拂ひ、松村を肩に引掛けてぞ退いたりける。續いて森次左衞門、此を詮と切廻り、首二つ三つ打取つて、猶駈入らんとしけれども、膝口に深く鎗手を負ひたれば、小松方へぞ引きにける。江口

は旗を振つて進み入り、九郎が先備を追崩し、首數廿五まで伐取れば、長が勢も崩立ちて、本鄕の方へと引きけるが、太田但馬守取つて返し、二千餘騎、山代橋の南三町程に、踏止まりて控へたり。其內より水越縫殿助唯一人、馬より下りて鎗提げ、戻橋の際に伏して、時々立上り、鎗を振つて、小松勢を招きける。城の兵是を見て、惡き敵の仕方かな。微塵になさんと進み出づるを、坂井與右衞門旗押立て、騷ぐな者共、能き合圖に鑓をばさせんと制して駈せける所に、金澤方の松平久兵衞駈來り、山代橋の東にて馬より下り、水越が伏して居たる處へ往き、兩人一度に橋を渡り進んで懸れば、小松方より成田助九郎・吾孫子佐太夫、鑓提げて橋の上へ出向ひ、水越と松平と一つになりて、受けつ發いつ、附入つて突きけるを見て、小松勢の魁首に、拜衞次太夫・不破杢兵衞・宮田小兵衞駈着けて、成田と吾孫子と鑓先を並ぶれば、但馬守が內よりも、井上勘左衞門・岩田傳左衞門・大野甚之丞、眞暗になつて、松平と水越に加はつて鎗を構へ、折敷きて睨み逢ひしを、敵味方諸共に、是ぞ北國一の見物と、手を握り汗を流し、齒咬して控へけり。さて松平立上れば、拜衞も進みける。續いて

兩方八人一度に立上り、松平は成田と合せ、拜衞は井上と組み、早拜衞を突伏せたれども、嶮き場なれば、首を搔くこと能はず、兎角する處、八幡別當堯仙法印駈來りて太刀を拔き、拜衞が首を取らんと、一太刀切つたれども、烈しき鑓下にて、遂に叶はずして捨てたりける。水越は不破と出合ひて、無二無三に戰ひしが、不破は鐵炮に當つて倒れたり。是も嚴しき鎗先にて、首をば取らでぞ置きたりける。小松方は二人討たれて、足弱になりけるを、金澤勢、橋の上より七八間突立つれば、成田・吾孫子・宮田、引色に見えける時、跡に控へたる小松方の胴勢二百騎計、崩立ち騷ぎけるを、不破與左衞門踏堪へ、鎗を振回し防ぎければ、岡田縫殿助後より進み出で、吾孫子・成田を押退け打掛りけるに、金澤方松平・水越・大野・井上・岩田引取りて、間斷になれば、岡田追駈けて、鑓を抛付けたり。されども胴勢、猶も崩れ騷いで靜まらざれば、櫻木源太母衣を掛け、馬より下立ち、太刀引拔いて、いざ成田・吾孫子に續けや者共と、勢懸つて進みけるに、肥前守が上坂主馬・鷹巢刑部も驅せ來れども、松平・水越も、物別れになつて引取れば力なく、共にぞ引いたりける。長重は先魁の鑓始を聞き、柴

絲にて威立てたる鎧を着、腹帶調度しめ、鍬形打つたる冑の緒をしめ、栗毛馬の太く逞きに騎り、金枝蔓の馬印に、紅の緌を懸け、淺井畷へ駈出では、韋駄天の如くにぞ見えにける。味方の軍兵、是に勇み進んで蒐りしかば、何かは以て耐るべき。太田も叶はじとや思ひけん、本郷の方へぞ引退きける。江口三郎は、南部無右衛門・永原實報院二千餘騎、畷の路傳に、三谷本道へ出で、蓮大寺村の高き處に屯して、但馬が引取るを伐てや者共と、麾振擧ぐれば、二千餘騎一手になりて、時雨の如くに射立つるにぞ、金澤勢富田源太郎を始とし、手負死人は山の如くに見えたりける。高山右近は、後陣の戰を聞き、唯一騎引返しけるが、江口が深追して、蓮大寺に鬩ふと聞きて、是ぞ天の與、昔韓信、趙歇を攻めしに、趙王、陣餘・李左車と、廿萬の兵を井陘に引きて出張しけるに、其跡に韓信騎卒二千人を勝つて、密に小路より廻し、山中に埋伏せて、城兵の出づるを見るならば、味方の軍兵を能々勇め揃へ、急いで跡より城の虛を伺ひ、攻入つて乘取れと下知しければ、早兵卒共後に廻つて、敵の出でたる跡に乘籠んで、趙の旌幟を拔捨て、赤旗を立て、緊しく門を堅むとかや。天晴彼圖に乘り

たりと思合せて、使を太田・山崎・長が方へ遣し、早々引返し候へ。直に虚に乘じて、小松の城を伐取らんといはせければ、三人其儘備を亂し、驅還つて、高山と軍議しけるに、江口は是をば知らずして、猶蓮大寺に屯して待掛けたり。斯る處に坂井與右衞門・南・淺井、長重が陣に駈けて、大敵前にあり、深追して、必ず敵の計に中り給ふ事なかれ。三道山の敵、虚に乘つて掛橋口へ乘入らば、味方の勢は敵の跡になり、城に入るべき樣あるべからずと諫むれば、長重尤なりとして、小松の城にぞ引きにける。江口をも急ぎ引かせければ、坂井與右衞門は、五百餘騎にて萩谷に控へて、長重が歸城の左右をぞ待ち居たり。さて金澤の太田・高山・山崎・長が四段の備は、淺井畷へ打つて出で、小松を乘取らんと思ひしに、長重は勝を持つて、早城に引取れば、近邊には人音もせざれば、空しく三道山にぞ退きたりけり。肥前守は、淺井口の合戰最中なりと聞きて、三道山より馳せ來るに、長重が馬印を見て、すは幸なり。掛橋口より小松の城へ騎込(のりこ)んで、留主を攻取らんと、人數を呼びに、三道山へ使を立て、旗本一萬餘騎、金の熨斗の指物に、或は金混布の短冊を付け、光り渡つて馳せ來る。然れども長

重は城に入り、坂井は掛橋口を堅むれば、是非なく兵をば引きたりけり。今度坂井與右衞門が諫言は、范增・酈食其にも增れりと、感せぬ者ぞなかりける。抑此小松の城は、惣構大竹の籔にして、三道山へ近く、天守もなく、搔上の櫓計りなりしを、此度金澤勢寄せ來ると聞きて、長重俄に天守を上げ、外廓門々に至るまで建並べ、鐵炮箭窻、思の儘にしつらはせ、構の大籔を伐捨て、其蕪を鍛ぎて、劔を立てたる如くにし、堅固に城をぞ守りける。淺井畷は、城より南十五町にして、又掛橋口は、艮にぞ當りける。肥前守も豫て用意を聞き、流石長秀が子なりと感じつゝ、爰をば閣きて、大聖寺へ向ひけるを、最初高山が申せし言も、圖に合ひたりとて、私語してぞ申しける。丹羽長重は、太閤の御世には、拔群の武名あるに依つて、八十萬石の大守たりしを、佐々内藏助と一黨し、逆心の企ありと、家臣長束大藏大輔・戶田武藏守、秀吉公へ訴へけるに依つて、本領を沒收せられ、若州にて僅の所領を給はり、其後加州松任へ移されし。次で小松にて十萬石の領知をぞ給はりける。此時に大坂に居て、先手を國へ遣すとて、鑿・作穂・鋸等の道具を、千人前買ひ調へて下しけるを、家中の諸士共嘲

笑ひけるは、早速に入部の用意はなくて、謂れざる番匠大工の道具、何の役にか立たん。誠に八十萬石の所領をば失つて斯くなられしも、尤至極かなと、腹を抑してぞ申しけるが、此般の軍の用意に、悉く入りければ、謗りし詞を引替へて、張良・韓信にも劣らぬ大將かなと、譽めけるこそ笑しけれ。其後肥前守了簡に、長重は無雙の勇將なり。小松は要害の地なれば、假令合戰に利を得るとも、多く士卒を失ふべし。扱を入れて和せんには如かじと、使者を以て申さるゝは、內府君の御前は、能きに計らひ申すべし。唯偏に無爲の儀然るべき旨、慇懃にいひ送られしかば、長重も、當る所の理を察して、則ち和睦の儀を調へて、人質を取替せば、其より利長は長重を招請し、千肴萬酒の饗應にて、頃日の苦身勞情をぞ慰めらる。さて互に小松合戰の次第を語りて、遊興をば添へられけるとかや。以後にも軍咄の度每に、淺井畷の事を思ひ出せば、今も汗をば流すとて、利長も長重も、戲言をせられしは、猛くも尤にぞ聞えけり。

大坂勢阿濃津城を圍む

勢州阿濃津落城の事

大坂には、七月十九日に、諸大將寄集つて、勢州表東軍方一味の城を攻殄さんと相議して、阿濃の津富田信濃守信高を先づ伐たんとぞ定めける。則ち安藝宰相秀元・宍戸備前守・吉川廣家・久留米秀包・長束大藏大輔・中江民部少輔・長曾我部宮內少輔・山崎右近進・蒔田權之助・松浦安太夫、都合其勢六百餘騎、八月廿三日、須臾に馳着けて、七重八重に押圍め、鬨を咄とぞ揚げにける。城よりは音をも合せず、遠箭を射かけて惱せば、寄手も心は勇み進めども、此城二方は打續きたる深田なれば、中々輙く攻落すべき樣もなく〳〵、案じ煩ひてぞ圍みける。偖信濃守信高は、野州小山の御陣に在りけるを、內府仰せけるは、大坂より多勢を以て、勢州表を攻むべきとの用意注進あり。昔より東西の戰場は、必ず美濃・尾張なれば、若し勢州の通路易からざれば、東軍も難義なり。急ぎ本國に馳上りて、武勇を勵むべしとあつて、江州大溝の城主分部左京亮政壽を相添へてぞ上せ給ひける。兩將は、三州吉田より、船百餘艘を揃へ

て、渡海する所に、沖中にて、大坂方の船大將九鬼大隅守が賊船に逢うたりけるが、彼賊黨共、早富田が船に、鎰引懸けて押寄せたり。富田騷がぬ男にて、船耳に衝立上りいひけるは、先年秀吉公、朝鮮國征伐の時、九鬼殿も某も、倶に異國に趣きて、晝夜合戰に取結び、身命危かりし事數知らず。其折も、互に扶けつ助けられつして、目出度本國へ歸りたり。諸大名多けれども、其より刎頸の契約をなし。以後までも事あらば、聊餘所には見なさじとの誓なるを、旁も定めて見もし聞きも及ばれん。今日斯る振舞、後日に聞き給はゞ、主人も快くは思はれじと、富樓那の辯を以て說きけるにぞ、賊船共、誠ぞと心得て、御免々々といひ樣に、綱を解き鎰をば放つて、稻葉が船かと見損せしと私語きて、遙にこそは漕行きけれ。富田・分部の兵卒共は、蘇生したる心地して、順風に帆を揚げて、萬里を一時と急ぎしかば、程なく津の城にぞ着きたりける。分部は、自分の館は要害惡しくて、抱へ難しとて、倶に津の城へ加はつて、東の口を堅めけり。吉田兵部信勝も、東國より八千餘騎にて、松坂の城に籠りけるが、敵未だ寄せ來らざれば、手勢を分けて、千餘騎を津の城に遣し、南の口をぞ持たせけ

る。同廿四日には、城中より兵卒を出して、西來寺の伽藍を燒き拂ひける處に、俄に風替つて、町屋に火移りしかば、炎一時に燹上り、無間地獄も斯くやあらんとぞ見えにける。折節に宍戸備前は、得たりや噎と東門に攻蒐れば、分部左京、鑓押取つて衝いて出で、只今寄せ給ふは、宍戸殿と覺えたり。分部左京參りさうと高らかに名乘つて、青龍半月に突結び、暫し戰ひけるが、宍戸を頓て突伏せたり。分部も、深手を負うてぞ引きたりける。輝元は麾振擧げて、西南の口を伐破り、三の丸へ亂れ入らんとしけるを、吉田が勢に分部も加はつて、防ぎ戰へ共、敵雲霞の如くに群がつて、太刀先を揃へて攻めければ、味方も足亂れて、我先にとぞ引く所に、毛利が奇兵、附入りせんと騎込みしを、富田が軍兵に、上田吉之丞といふ荒者、五寸餘の馬に騎り、三尺八寸の大太刀を、電光稲妻の如くに閃かし、刀八毘沙門の龍馬に騎つて駈ける風情して、敵の三の丸へ入らんと、門際迄、群り込んだる中に破つて入り、是ぞ豫ての思出と、四方八面に薙廻れば、さしもの大勢一人に切立てられ、嵐に木の葉の散る如く、一度に潑と引除けば、其儘城戸をぞ堅めける。敵も味方も、上田が分野を見て、

富田信高の妻驍勇

あつぱれ一騎當千、偏に鬼神の身分かと、怖れて近付く者ぞなかりける。斯る處に當瀨山より、鳥銃・石火矢を射懸くれば、兵樓(やぐら)殿守も打崩され、西來寺の餘煙吹掛かるにぞ、城も危く見えければ、城主信濃守、本丸の追手に駈出で十餘合まで戰ひしかば、佐々孫市・安塚平八郎等九人、枕を並べて討死を仕たりける處に、本多志摩守馳せ來り、四方の敵勢追散らして、富田に申しけるは、雜兵の手に掛り給はんより、本丸に入りて御自害あれと諫めて、防ぎ鬪ふ間に、富田は本丸へ入らんとする所に、毛利が兵に中川淸左衞門、紫の縨を懸け葦毛馬に騎つて、信濃が跡より打つて、城に附入りせんと、大勢押し來るを、富田取て返し、鎗振廻し突拂ふ所へ、分部右馬助も駈合せて、爰を詮と鬪ひけるに、城中より容顏美麗なる若武者、緋威の鎧に、中二段黑皮にて威したるに、半月打つたる冑の緒をしめ、片鎌の手鎗押取り、富田が前に進み出で、踊り擧りて振廻し、受けつ搦んづ、西江水に構へて衝掛り、早中川をば突殺して、五六人に手を負はせ、殘る奴原四方に押散らし、鎗提げて立ちし風情は、さながら牛若殿の古も斯くならんと、何れも目を醒して感じける。富田は定めて、分部が扈從

ならんと思ひて、彼若武者は、左京之助の少年かと問ひければ、右馬之助申されけるは、曾て見知らず、左京が家の子に非ず。其上內冑を見れば、年頃廿四五にて、眉を拔き假粧し、鐵醬つけ臙脂さしたれば、必定女に極まりたりと言合ひて、富田引品に立寄りて、內冑を見入れたれば、彼若武者馳せ寄つて、未だ討たれさせ給はで、浮世に存命へ給ふかやといふを見れば、富田が女房なり。僅是まで參る事、討死し給ふと聞きしに依つて、同場に枕を並べ討死せんと思ひ、斯く支度して參りしに、御目に懸る嬉しさは、申すも愚なりと、喜び泣に淚を流さるれば、信濃守は肝を消し、御身如何なる事にて、斯る働や仕給ふ。先づ此方へ入り給へとて、本丸にぞ伴はれける。此奥方は、宇喜多安心が娘、隱もなき美人、心賢くありける故、此度の働も、義經の靜、木曾殿の巴、山吹も、是には爭で勝らじと、見る人聞く人驚かぬはなかりけり。偖寄手の軍勢は、術を盡し種々に攻むれども、城兵更に屈せずして、堅固に戍つて緊しく防ぎ戰へば、虎口を少し退けて、廿五日の早天より、竹箭を以て仕寄り、翌日に至つて矢文を射、高野の興山上人の扱になつて和睦を調へ、城を明渡しぬれば、蒔田權之

助・中江民部・山崎右京請取つて、番をぞ勤めける。富田夫婦は、同州の一身田専守寺に引込り、後に入道して高野山に在りけるを、關が原平均の後、内府君富田を召出され、戰功を感じ給ひて、伊豫國宇和島十萬石をぞ賜はりける。折節信濃が門に、何者がしたりけん、

城を退く信濃よしとは見えねども伊豫長閑に命信高

自二關東一使者行二加藤清正一事

其頃加藤肥後守清正は、肥後に在國して、天下の安否を思案しける所に、内府公より、飛脚を以て羽檄を遣し給ふ。則ち清正拜見を遂げ奉りて、委細の返翰を認め、家の郎に明石加兵衞とて、異國にても覺ありし者を相副へて上せけるが、四國の内にて惡風に逢ひ、鹽待して明し暮し居たりしに、大坂鼑肩の洲なるに依つて、海上浦邊の番士共怪み思ひ、蟻の如くに集り、蜂の如くに群つて、仔細を語れと尤めける。加兵衞、才智の譽ある者にて、透間を伺ひ、其處を走り除き、或寺に馳入りて、所持の書箱

を取出し、火中せしこそ才角なれ。斯る所に大勢追來りしかば、急ぎ自害を仕たりけり。諸人あぐんで、何の仔細も知らざれば、言語を絕して歸りけり。明石が忠心、比類なき武勇の所爲といふべきにや。昔時源九郎義經、奧州の衣川より、駿河次郎淸重を以て、諸國の大名に廻文を遣しけるに、駿河、鎌倉の繁榮を一見せばやと思ひ、彼方此方を翔廻るに、梶原平三に見尤められ、遁れ難くや思ひけん、其儘火を鑽出して、義經の廻文を燒き、其身も卽時に墓なくなりたりしを、上下押並べて、惜まぬ者ぞなかりしとかや。今明石が身の上に思ひ合せて、彼駿河にも劣らぬ勇士やとぞ申合へりける。

東西兩軍諸城一味の事

大坂方に一味の諸城

大坂一味の諸城、先づ桑名の城には、氏家內膳正、七千八百餘騎にて控へたり。濃州高須の城には、高木八郎兵衞。同福束の城には、丸毛三郎兵衞。同太田の城をば、原隱岐守八百餘騎にて要害し、又尾州犬山の城には、石川備前守。加勢の大將には、濃

州郡上の城主稻葉右京之進貞通・同息彥六一通、濃州黑野城主加藤左衞門、伊勢の關長門守、濃州岩手の城主竹中丹後守重門、都合其勢七萬七千餘騎、大坂の弓鐵炮を加へて楯籠るとかや。是皆秀信の軍令とぞ聞えける。爰に濃州長松の城主武市式部は、會津出勢の人數なりしが、引替へて石田に與力して、福束の城に加勢に往きしぞ不運なれ。福束落城以後、長松へ歸城せしかども、東國の大軍、赤坂に着到する其勢を見るに、紅白の旌旗天を輝し、金銀刀槍星を並ぶるが如くにて、野も山も紅錦を敷き、雲も天も玉屑を飛ばすに異ならざれば、武市も是に顚倒して、鎧を着るに力なく、太刀を帶ばんとすれば腰脫けて、八月廿三日の夜に入つて、漸々長松を引拂ひ、伊勢の氏家內膳・同志摩・寺西備中と一所になつて、桑名の城にぞ籠りける。海上表には、九鬼大隅守・來島助兵衞・菅野平右衞門、賊船に取乘つて、伊勢・尾張の津々浦々を放火して燒亡しけり。

大津落城の事

大坂勢大津城を圍む

斯くて京極宰相高次は、內府君に一味せしに依つて、關東御下向の時、高次名代として、家老の山田大炊助を、潛に關左へ下しける。伏見騷動の折は、大津の地要害凶しく、其上兵卒少くして、籠城なり難き事を慮りて、暫く謀を回らし、石田と一味の由を標し、北近江より北國へ發向せしが、東軍上方へ進發の由を聞付けて、九月一日より取て返し、江州前原より、終夜船にて上り、五十餘騎は、比良の麓より陸を打たせて合圖を究め、高次城へ入ると均しく、大津町を燬拂ひ、粟津の此方に逆茂木を引き、相坂の峠に柵を振つて往還を遮り、緊くこそは堅めけれ。西軍方の立花左近は、其頃勢田に在城せしが是を聞きて、醍醐越に、大坂へ飛札を以て注進しけるは、京極宰相逆心して、頃日大津へ歸りて柵を振り、町を燬拂ひ通路を止めて、要害堅く守り候。早速踏殄さずんば、後の害ならん。某關が原に赴くも忠、大津を攻めんも亦忠なれば、如何軍議を伺ひ奉ると申しけるに、大坂よりも、立花が志尤なり。頓て多勢を差向けんとありて、久留米侍從・筑紫上野介義冬・南條中書忠成・毛利七郎兵衞元安・同輝元・石川掃部頭賴明・杉谷越中守・松浦伊豫守・多賀出雲守・宮部兵部・荒木平太夫・增

田作左衞門・高田小左衞門等を先として、都合其勢六百餘騎、九月七日より、大津の攻口へ、稻麻竹葦の如くに打圍み、琵琶湖も踏翻る程に、鬨を咄とぞ揚げにける。其よりして夜を晝に續いで、揉みに揉んで戰ひける。鐵炮の音は天に鳴渡つて、心も比叡入る樣に思ひ、箭筈の響は地に轟きて、肝も三井に沿はず、夥しくぞ聞えける。遂に九月十二日に、三の丸をぞ乘取りける。此時に松浦伊豫守も、討死をぞ仕たりける。高次の家臣山田越中・赤尾伊豆二人、踏留まりて防ぎ戰へども、續く味方のあらざれば、念なく兩人共に二の丸へ引入りて、城中緊しく堅むれば、俄に落つべきとは見えざりけり。斯る處に寄手、三井寺より大筒にて、殿守の二重目を打ちたれば、松の丸殿の女中二人、鐵炮に中つて、吽ともいはず、微塵になつてぞ失せにける。其有樣に、松の丸殿も驚かせ、悶絕し給へば、御口に祕藥を入れ、御顏に冷水を洒ぎしかば、漸く蘇生あらせ給ふ。折節に輝元、增田が計ひにて、高野山の興山上人を大坂へ招き寄せ、一々次第を言含め、大津へ遣し扱せし故、九月十四日辰刻に、城を開渡して、高次は直に三井寺雲光院へ入りにける。

京極高次大津城を開退く

是より前にも、和睦の儀ありと雖、高

次曾て承引なかりしに、此度の和睦は何故ぞといへば、二の丸の軍臣に、大坂と一味の者ありて、矢狹間を閉ぢて、鐵炮をも打たせざる故に、城中疑をなし、扱をぞ聞きにける。其者は、後西國邊に吟ひ行きて、果てたると聞えける。君子は義を以て難きに死し、死を視ること歸るが如し。時に望んで臆する則ば、本意を失つて、我家に歸るが如きの勇を忘る。吁惜哉此人、勇を忘れたりといふべきか。

筑前中納言秀秋返二忠于東軍一事附諸將內通の事

今度中納言秀秋は、伊勢の津の城を攻落し、美濃に打出で、南宮山に城を構へ、要害の山取して控へける處に、關東より、德永法印が許へ、折々飛脚にて、上方濃州へ出張したる敵方の諸軍を、味方に引入るべき智略を勵くべき旨、仰せ含められしに依つて、德永式部卿法印壽昌が方より、南宮の禰宜右衞門太夫を使にして申されけるは、天下の安否時運到來して、諸國の武將、東軍一味の志を通じ、贄を捧げ聘を獻じて、麾下に屬せんことを冀ふに、貴邊より曾て兎角の音信もなし。不審し。如何な

る御所存に候らん。多年の知音も、斯樣の時節、互の是非を相談あるべき爲なれば、一往の儀あらんと待ちけるに、有無の便なし。誠に天下に人多しといへども、繼統といひ、智謀といひ、御邊に過ぎたるはあらず。是に依つて內府公、賴み思召すとの志、深切に候故、遮りて使者を以て申入るゝ所なり。今若し御方に屬し給はゞ、本領安堵の儀相違なく、且又何程の御望も達すべし。毛頭僞なきの段、誓紙を認めて送られけり。秀秋、彼禰宜を陣所へ呼入れて對面せしに、禰宜は立烏帽子に、大紋の直垂を着て、祇候したりけり。秀秋申されけるは、我等內府公とは、日頃別して懇に申し通せし事なれば、內々此方より使者をも進ずべきと存ずる處に、却て返報になりたり。然し乍ら只今の口上、何とも心得難し。天下に身方の士なき間、賴む抔との事ならば、承引致す事もあらんに、諸國の武士附隨ふ程に、參れとの儀に於ては、得こそ參るまじけれ。其上斯樣の使節には、名字正しき家の子などをこそ立てらるべきに、長袖の使者、以の外不審とありて、神文をぞ返されける。禰宜歸りて、法印に委細を申屆くれば、法印熟思案しけるが、是は如何樣、不通切なる返事には非ず。一

小早川秀秋、家康に與す

往武士の意地を含んで、申越さるゝと覺えたり。今一度促し見るべしとて、德永法印、掃部を呼んで、一々次第を言含め、彼禰宜に相添へて、件の神文を遣しけり。元より秀秋も、誘ふ水あらばと思へしにや、頓て領掌し、東軍方に從ひ、忠義を抽んずべきとの神文に血判して、則ち掃部に相渡し、引出物として、せてん二卷掃部に與へ、黄金一枚右衞門太夫に給はりけり。斯くて法印は、仕濟したりと悅んで、此旨急ぎ關東へ注進し、早々御出馬あらせ給へと、申遣しける處に、公は早相州小田原迄御出張の砌にて、此注進を聞召し、大悅斜ならず思召し、德永に御書をぞ下されける。

去廿六日之一書、委細逐二披見一所、其表種々被レ情二入一之由令二祝着一。今月三日小田原迄令二出張一候。早速其許可レ使二出陣一間、各有二談合一而御待尤チニ候。恐惶謹言。

九月三日　御判

德永法印

偖其頃、毛利宰相秀元吉川駿河守元安・脇坂中務少輔安治・小川土佐守祐忠・朽木河內守利綱等は、初より池田輝政・淺野幸長・藤堂高虎を以て、合戰の最中に、裏切すべき

との旨をぞ內通せられける。三人は悅び合へず、公に由を斯くとぞ申上げけるに、君聞召し、御悅喜淺からざれば、則ち其趣を通じけり。仍つて御方に屬し、軍功を勵まされける。扨此外の大將達は、何故に返忠あられけるぞといへば、最前秀賴公の上意とあるに依つて、後先をも鑒みず、何れも此度と思ひ、武勇を磨き、催促に應ずと雖、天下の樣子を見聞するに、石田三成反逆を企て、終には天下の權を、己れ奪ひ取らんとするの謀事、彌顯然すれば、諸將も今は惡き所爲なりと憤りて、其怨を晴らさんとの志とぞ聞えける。

東國軍勢上方に進發するの事

斯くて七月の末、東軍一味の上方勢より、江戶へ言上しけるは、石田治部少輔三成・備前中納言秀家、美濃表へ出張して、岐阜中納言秀信を相語らひ、國中の士卒を駈催し、岐阜と大垣とを根城にして、不破に新關を据ゑ、東海・東山兩道の路を差塞ぎ、西國・北國の往來を斷切りしに依つて、威勢孟賁が如くにして、眼光近國を眩し、事旣

家康、江戸城に於て軍議を催す

に大儀に及ぶの間、先づ奥州の軍を暫く差置き給ひて、急ぎ御上り遊され候へと、方方より同時に、櫛の齒を挽くが如くに注進ありけるにぞ、物に馴れざる者共は、此由を聞きて、世は已に大亂になりぬと、魂を冷し肝を銷し、前後を考へ、危踏む者も多かりき。されども内府君は、何となく御快げに見えさせ給ひ、仰せけるは、樫木も兩葉にて去らざれば、必ず斧柯を用ふるとかや。其儘に差置くべきに非ずとて、便ち諸將を江戸の御城へ集められ、最丁寧に饗膳を賜はりて、數獻を勸め、偖上意あるは、各の今度上方の軍立、如何思はれ候や。心底を殘らず申さるべしとありければ、列座の人々承つて、評議區なる所に、德永式部卿壽正法印進み出でて申しけるは、末座未練の軍談は、歷々の前にて、卒爾千萬には候へ共、存寄りたる趣を申上げざらんも却て不忠なるべきなれば、某愚案を聊申上候。抑此度西國方の企は、少兒の戯の樣に覺え待るなり。其故は四國・西國の大名、數を盡して美濃表へ出張致す事なれば、敵定めて雲霞の如くならん。天下の安危、此一擧にありと存じられ候。さり乍ら大將もなき寄合勢なれば、恐るゝに足らざるなり。熟と測惟るに、備前中納言秀家・安藝

中納言秀元・筑前中納言秀秋彼三人は、皆同位にして國守なれば、互の相談の事はありぬとも、何れを大將として、下知に隨ふべきとは思はれず、又岐阜中納言は小身なりといへども、信長公の嫡孫なれば、其家統を心中に挿んで、今度の諸將の中には、誰の令にも附き申されまじければ、內證の威勢、諍に日暮れて、兎角の異論忽に出來んぞ。幾程か候べき。戰の全勝する所以の者は軍政にあり。士の戰を輕んずる所以の者は、命を用ふるにあり。大將なくして、三軍誰の命に從つて、戰勝つ事を得んや。又石田三成が奉行貌したり共、如何に渠風情が下知に從ふ諸侍あるべきや。誠に三軍は得易く、一將は求め難きなれば、將の心も心、士の心も心、其本亂れて、末何ぞ備はらん。若し下知をなす者あらば、相猜みて要れず。御味方に參る輩多かるべし。假使降參せず共、諸事に就いて面々裁判となり、各の振舞して、一和の議定あるまじければ、心惡き事一つも候はず、御勝利を得ん事、掌を指すが如くに見え候。恐れ乍ら此料簡少しも相違あるまじきなり。然乍ら敵勢共、美濃國に到りて、未だ足を溜めざる先に、討手の勢を向けられんも善からんかと。無碍辯(むげべん)を以て水を流し

てぞ申しける。君聞き給ひて、道理に叶ひたりとや思食しけん。衆と好を同うすれば、成らずといふこと靡きなれば、合戰の趣は、偏に勇士の心に任すべしとぞ宣ひける。此御一言に諸大將達、勇む心ぞ顯れけるに、早福島左衛門太夫正則進み出でて申されけるは、今度美濃路の合戰、一方の御先手、仰ぎ願はくは某に御免候はゞ、敵を一當抗り見申さんとぞ望みける。内府君許容あらせ給ひて、御心には、諸葛孔明を得させ給ふ樣にて、元曆の古、源賴朝卿生食といふ馬を、佐々木に給はつて、宇治川の先陣したりし佳例を思食し、信濃駒の黑栗毛の、五寸に餘つて太く逞きに、貝鞍置かせて御庭前に牽かさせ、正則にぞ下し給はりける。今度の軍の成敗、福島に許させ給ふなり。斯の馬に騎つて、逆徒を思ふ儘に退治すべきとの上意ありければ、正則は骨髓に徹し、謹んで領掌し、忝さは身にも餘りてぞ思ひ奉る。内外の諸士見聞して、羨まざるはなかりける。偖德永は、濃州の案内者なれば、福島に加はつて、軍忠を勵むべし。殊更諸士に拔んで、軍略を申せし分別の程神妙なりとて、是にも御馬をぞ下されけり。是より段々に上らるべしとありて、御座を立たせ給へば、何

徳川勢江戸を發す

れも、我屋にぞ歸られて、上方進發の用意とぞ聞えける。同八月朔日に、内府君より、本多中務・井伊兵部を以て宣ひ給ふは、先づ追手の大將には福島太夫正則、搦手は池田三左衞門輝政との由ありければ、兩將豫て願ふ處の幸なりと、愼んで領掌し奉りけり。斯る折節に、正則、井伊・本多を以て訴へけるは、尾州に杉浦と申して、僅に一萬石取る者候。日頃中惡く候へば、今度の障にもなりや仕らんと存ずれば、打果し度事に候と望みけり。其儀も、心に任せよとの上意の由、兩人より委細告げ來れば、安堵して、彌支度をぞなしける。扨又井伊兵部少輔直政・本多中務大夫忠勝は、檢使にぞ定め給ひける。是より次第に江戸を打立ちける。大將には一番に福島左衞門太夫正則・加藤左馬助嘉明・細川越中守忠興・黑田甲斐守長政・田中兵部少輔吉政・筒井伊賀守・藤堂佐渡守高虎・京極修理進高知、二番に池田三左衞門輝政・淺野左京大夫幸長・有馬玄蕃頭豐氏・松下右兵衞・山内對馬守一豐・堀尾信濃守忠氏・池田備中守長吉・一柳監物、三番には蜂須加長門守至鎭・生駒讃岐守正俊・寺澤志摩守廣高・金森出雲守重賴、御横目には武藤掃部・津田新十郎・澤井左衞門・平井彌次右衞門・同兵右衞

門・吾孫子善十郎・生駒隼人・森勘解由・林藤十郎・小坂助六・堀小三郎・安井將監・吉田平内・堀内將監・稻熊市左衞門・武藤清兵衞・能勢六左衞門、是等は河越方の軍に附いて働くべしとの仰にて、都合其勢十萬餘騎、天地を響かし、東關を轟かして出立ちけり。大將達は言ふに及ばず、家の子郎等に至るまで、花麗を盡し、鎗・鐵炮・弓・長刀の莊達ちたる形勢は、元弘の昔に增して、夥しくぞ聞えける。同十四日に、尾州の清洲にぞ着きにける。諸軍蟻の集りたる如くなれば、在々處々に屯して、暫く上方勢の働く方術を窺ひ、岐阜を攻めんか、大垣を破らんかと、手配の軍議最中に、正則は江戸にて御意を得たる事なれば、時日を移さず、杉浦を攻滅さんと思ひ、手勢にて貝を吹立て取圍めば、杉浦も爰を最後と、城戸を押開き突いて出で、命限に戰ひし所に、福島が扈從に間島源次郎、鎗にて衝付けたりしを、杉浦心得たりといふ儘に、手鎗を振廻し、源次が冑の眞向打破れば、深手負うて危く見ゆる所に、香兒伊織入替りて暫く鬪ひしが、遂に杉浦が首をぞ取りたれは、福島は勝鬨揚げて陣屋に還り、馬の息をぞ休めける。去程に東將達は、岐阜を攻めんか、大垣を破らんの詮議決定せざれば、駿府よ

り御駕を發せられよと、毎度羽檄を飛して、勸め申さるゝ處に、內府君より、村越茂助を御使にて、先づ諸將の勞を謝せられ、次に村越に命じ給ふは、諸將若し我出馬を問はゞ、其表の樣子に依りて駈上るべし。敵味方の實否を、未だ心得難しと答ふべしとあれば、村越は上意を承り、早々に駈上りて、淸洲に到り、井伊・本多に向つて、上意の趣を具に演說すれば、兩人聞きて、君の思召さるゝ處も至極せり。然れども時の運を慮るに、天地の利に如かず、天地の利は人の和に如かず。東軍一和して二心なきは、是れ無妄の象なり。故に諸士動いて健なり。剛中にして應ず。大に亨るに正を以てす。天の命なり。天の下に雷行き、物每に無妄を與ふ。先王以て茂に、時に對して萬物を育す。萬物を育へば大畜なり。剛健篤實の輝光、日に其德を新にすと、剛は上にして而も賢を尙び、能く健に止り給へば大正なり。此大正無妄の節に中つて、天命何ぞ邪ならん。是に因つて日月の運行、海水の滿干、一として違ふなき於越なば、內府も御悅喜たらんと、辭を盡して申さるれば、正則も理に伏して、兎角の違亂に及ばず、是にぞ同じける。されども北の方は岐阜に近し。敵必ず出でて

防ぐべし。搦手より合戰を始めば、當手の恥辱ならんと、正則餘儀なくぞ聞えける。兩検使の判斷に、輝政は軍法を堅められ、正則は河を渡り、其後相圖の狼煙を見て、上の瀬・河田の渉を越さるべしとありしかば、此議最當然なりとて、各の約をぞ定めらる。

石田軍記卷之五 終

石田軍記 巻之六

伊藤彦兵衛明ニ退ケ於ク大垣城ヲ事 附三成移ニ大垣ニ事

大垣の城は、伊藤長門守より、子息彦兵衛相續いて城主たりし處に、東國の大軍、既に尾州に參着すと、夥しく沙汰せしかば、石田三成思ふ樣は、敵を居ながら待ち受けんこと、策(はかりごと)なきに似たり。大垣に出張して雌雄を決せんと、則ち使者を以て、伊藤が方へ言遣しけるは、今度關東凶徒の輩を追伐の爲め、秀頼公の御名代として、西國の諸大名を引率し、某美濃表へ出張せしむ。之に依つて其方の城を暫く借りて、關東より打上る軍勢を討夷げんと存候。早速城邊の在鄕へ明退きて、城を借し給はらば、莫大の忠儀たるべし。但又一戰を遂げ、軍功を勵まるゝに於ては、恩賞は望に應ずべしと委細述べけるを、彦兵衛使の趣聞屆け申しけるは、是は珍らしき御借物な

り。能く料簡もあるべし。事にも依り時にも依るなり。今の時節に大軍を請けながら、我居城を明渡し、要害もなき處へ屯し居らん事、天下の嘲哢、先祖の恥辱、以後までも遁れ難し。斯く存ずる上は、片時も城を明渡し申すことは、思も寄らざる事に候。聊以て關東の贔屓にも非ず。此段能々申されよと返答しけるを、三成聞きて大きに腹を立て、先づ借りて見せんぞと、則ち福原右馬助・平塚因幡守を呼び、急ぎ大垣へ馳行きて、是非の事をいはせず、直に城に入るべしと委細申含め、權柄の使者をぞ立てにける。兩人は早々馳行きて、當城を借らん爲、是まで參り向うたり。急ぎ城を明渡され候へと、綷もなげに申しければ、伊藤聞きて、兎角の返答にも及ばず、命を限りに支へんと、更に騷走る氣色もなく、屹と睨んで居たりけり。福原思案しけるは、何とぞして智略を廻らし、干戈を動かさず、城を取らんと慮つて、伊藤が家來を密に招き寄せていふ樣は、今度城を借るべきとの事、私の宿意ありて、其を果さん爲に非ず。秀賴公の上意といひ、東軍を誅伐の御名代なれば、前後を能々分別して、主人に諫言を加へられ、早速城を明渡し、近所に居住あらんこそ、忠義にても候

石田三成大垣城に移る

はんと、無窮の辯舌を以て說きけるにぞ、分別未練の彥兵衞、福原が巧言に欺かれ、上意といふに行當り、尤なりと納得して、今村といふ邑に搔上の要害を構へつゝ、惡罵惡罵と城を明渡してぞ出退きける。跡には福原右馬助直高本丸に移り、平塚因幡二の丸に入りて、佐和山石田が許に、由を斯くと申し遣しければ、高橋右近・秋月長門に七千餘騎を相副へて、城を堅めさせける其形勢は、實の時は倡知らず、先づ嚴しくぞ見えにける。其より石田三成、さらば大垣に出張せんと、相伴ふ人々には、備前中納言秀家・薩摩侍從義弘・島津中務少輔昌久・同又七郎忠恒・小西攝津守行長・熊谷內藏允直陳・相良宮內少輔賴定・秋月三郎種宗・垣見和泉守家純・高橋主膳長昌・木村宗左衞門・同息傳藏、都合五萬三千六百餘騎。軍令を相定め、大垣の城へぞ移りける。近邊の在々處々透間もなく、小西行長・島津義弘・宇喜多秀家數萬の軍兵、大垣の城押包んで、陣をぞ打つたりける。樂田村は島津持口にて、木曾海道より南は、大垣まで堅めけり。海道より十五町北に當りて、曾根の城あり。東軍方西尾豐後守忠政が居城なり。

尾州犬山城從西軍籠置兵卒事附郡上城攻の事

尾州犬山は、石川備前守城主として之を守りける。加勢の大將には、濃州岩手の城主竹中丹後守重門・同國郡上城主稻葉右京進貞通・同息彥六一通・加藤左衞門・關長門守等、都合其勢一萬餘騎にて楯籠り、二の丸をぞ堅めける。遠藤但馬守・西尾豐後守忠政は、東軍一味たるに依つて、八月廿日稻葉右京が郡上の城を攻むる所に、金森法印・同息出雲守、關東より馳來りて、又此陣に加はりけり。稻葉は犬山の城二の丸を堅めて居たりしが、之を聞き、卽時に來り後詰して、早合戰を始めて、鬨の音鐵炮の響、雷の激する如く聞えける最中に、稻葉も豫てより東軍に內通あるに依りて、早速に和睦して、互に陣をぞ引いたりける。關長門守・加藤左衞門、此等も倶に內通して、內府君に降參をぞしたりける。然る所に不慮の事こそ出來にける。此郡上と申すは、稻葉右京進城主たりといへども、遠藤左馬助數代の本領にして、近き頃まで居たる事なれば、案內は能く知つたり。城替の恨もありて思ふ樣は、稻葉右京は犬山に

あるなれば、郡上の城には、定めて捗々しき留守居もあるまじければ、密に飛驒國より押寄せて、手痛く攻むる程ならば、如何に勇功の譽ある稻葉なりとも、途方に暮れて降參せんは必定なり。此術は、敵の猛氣を奪ふ所の計略なりといひて、遠藤と金森と牒し合せ、遠藤は濃州升田口より、金森は飛驒より長瀧口へ押出づる。道筋の在々へ相觸れて、夜は松明篝を燒き、嶮岨なる細路共を打通り、漸く國境にぞ駈出でたりける。斯る所に堀尾・福島も、日頃稻葉と懇志なる故、種々に意見を加へつゝ、稻葉御方に參る上は、郡上の城を攻めらるゝ事、更々無用の由、井伊・本多方よりも、遠藤・金森へ急ぎ飛脚を以て言遣すといへ共、金森聞きて、路次の嶮岨を歷て、國境まで駈出でながら、空しく引取るといふも、思へば餘り無念なり。後の難は兎も角もあれ、是非に城を乘取らで舍くべきかと、遠藤へ内通すれば、遠藤も閉くや否やに、早用意して打立ちける。金森は、家來に吉田孫三郎とて、本郡上の者なれば、則ち是を案内にて、尼崎山より郡上の古城山へ打登り、城を目の下に見降して、九月朔日の早天に、長瀧口より攻掛る。城中には、稻葉が末子修理亮・稻葉土佐入道計り留守居

金森法印郡上城を攻む

せしが、不意の鯢波に驚き、周章ふためき、誰よ渠よと呼ばはれども、物に馴れたる宗徒の者共は、皆犬山に籠り居ければ、唯十方を失ひ、惘然として居たりけるが、修理亮申しけるは、究竟の截所を持ちながら、一支も支へずして、敵を城へ入れん事、世上の嘲といひ、生涯の恨何か是に過ぎ候はんとありければ、入道聞きて、能くも申したり。我も年は寄りたれども、實盛には劣るまじと、孫が意を勇めらるれば、修理も楠正行が思をなし、今日を命の限りぞと、緋緘の鎧に、五枚甲の緒を縮めて、踊り擧つて上帶し、遣ひ馴れたる十文字の鎗提げて、城の門を押開き、突いて出づれば、適れ若武者かなといふ儘に、柴崎甚左衞門・那波土左衞門・中村太郎右衞門只三人、城山の谷間の截所を賴みに防ぎけり。抑此口は、屏風を立てたる如くなる岩石の岨路一筋を通したれば、寄手の軍兵、攻上らんと勇めども、二人と並ぶ事指はざれば、魁首二三人の外は、皆々見物してぞ鬩へける。中村が槍先、只古の栗生・篠塚よりも手痛く衝出せば、寄手も辟易して見えける所に、那波も續いて音を掛くるにぞ、眞先なる兵卒餘されて、逆樣に落ちにけり。後に續いて上りし者共、將棊倒しに落重な

り、歴々の飛驒武者共、身方の槍・長刀に貫かれ、手負死人、さすがの谷も埋もれけり。中村も此勢に破つて入り、一騎當千と戰へば、遂に討死をぞ仕たりける。寄手も是に肝を消し、是は楠正成が再來して、千劔を持つが如きかと、續いて乘入る人もあらざれば、柴崎・那波諸共に、城中へぞ引取りける。此時寄手の軍兵共、城には人もなきぞとて、古城に寄せけるが、本城の後に大きなる堀ありて、柵の構稠しければ、輙く攻入るべき樣もなく並居ける處を、城中より見澄して、弓鐵炮を打掛くれば、窓雀を射る如く、つるべ打に打ちけるが、空矢は一つもなかりけり。金森が家人牛丸次郎右衞門・今井平助・阿砂賀作十郎も打殺され、手負死人は數知らず、平砂忽ち變じて、紅を曝すが如し。城頭鐵皷聲猶震、匣裏金刀血未乾と、李白がいひしも此時なり。金森は覺えず尼崎山へ引取りけり。爰に飯沼源左衞門城乘を心掛け、最前よりも堀を越え塀下に着くと雖、同じく續く者もなく、味方旣に引取りければ、印を取つて引かんと思ひ、暫く猶豫する所に、城中の體、旗差物を塀際に結付けて置きたる計にて、人音もせざりければ、堀を越えて壘に上つて、旗一本差物共に拔取つて、味方の

稻葉貞通郡上城援軍

陣に歸りしを、城より是を見て、打てや者共と、弓鐵炮を射掛くれども、恙なく引取りしは、實に剛の者とぞ聞えける。遠藤左馬助は、和良口より追手へ押寄せけれども、搦手の勝負を聞きて、卒爾に城へ手差せず、櫻町といふ所に、暫く陣を取りて、兩將より嗳を入れたれば、修理も土佐守も、先づ急いで右京進に告知らせ、援兵を得て戰はんと相談して、兩將へ返答しけるは嗳の儀、如何にも仰に隨ひ、是より委細申入るべしと言遣しけるは、謀深くぞ覺えける。三軍に勝つことは一人の勝と、司馬がいひしも、斯樣の事にやあらん。偖犬山へ其趣を知らせたく思へども、敵の圍嚴くして、使を外へ出すべき樣もなく、案じ煩ひ居る處に、小室傳三郞といひし者進み出で、某不肖には候へ共、何とぞ才覺して、隨分參り見申さん。若し此事を仕損じて、死なんずる命も、戰場にて討死仕るも、忠義に二つはあるまじければ、御暇申す旁とて、何とか謀りけん、大敵の圍を、事なく忍び出でければ、先づ大息を突流し、嬉しやといふ儘に、犬山へ一驂に駈着き、右京に由を斯くと告げければ、右京元來短慮なる上、勇氣盛なる男なれば、得と巨細も聞屆けず、我領內へ踏込まれ、生きても何の甲斐あ

らん。彼奴原、一人も生けては返すまじものを。續けや續けと馬牽寄せ打乘り、一騎駈に駈行きけるは、昔新田義貞、藤島の城へ向はれける風情も、誠に斯くやと思はれて、早速過ぎてぞ見えにける。總て大將の心緒は、小敵を欺かず、大敵を懼れず、三軍を調へて進む則ば、勝たずといふことなし。故に將たる者、勇を本として輕々しく走るを、覇卒といふとかや。呉子曰く、勇の將に於ける、乃ち數分にして、之一つならんのみ。夫勇者は必ず輕々しく合ふ。輕々しく合うて、利を知らざるは、未だ可ならざるなりと、尤智謀の薄きといふべきか。右京は城本より二里計此方なる借安村に馳着きて、續く勢を待揃へ、九月三日の曉天に、郡上の城へ乘込らんと、齒咬してぞ待明しける。遠藤左馬助は、是をば夢にも知らずして、無異の啜をや調へて、和睦あらんと油斷しける處に、右京が軍勢鬨を吐と揚げ、太鼓を撃ち鐘を鳴らし螺を吹き、鶴の翼を攤げたる如くになつて攻包むに、遠藤思ひ寄らざる事なれば、何の用意もなく、馬に騎れども、絆いであれば打ちても出でず。弓を手には取りたれども、鎧を着る間のあらざれば、中帶計にて走り出で、鐵炮を持ちても火繩なければ、

杵を持ちたる如くにて、算を亂して踏合ひ摑逢うて、我も人も、破れ具足に取付き、曳や〳〵と拽合ひて、十方を失せ騷動するを、無事なる時に之を視ば、笑に耐へぬはなかるべし。斯りし中より緋縅鎧に鍬形打つたる冑を着、二尺八寸の太刀を眞向に差翳し、粥川小次郎と名乘りて、右京が先陣を目がけ、眞一文字に駈向ひし形勢は、適れ周勃にも劣らぬ程の勇士とぞ見えにける。電光稻妻の如くに飛廻り、馬人の選みなく、波羅里々々々と薙倒し、死狂ひに狂ひける所に、稻葉忠次郎が兵卒に、日比野吉左衞門と名乘り掛け、十文字を以て突蒐れば、小次郎意得たりと打合ひたり。日比野引退き、以て開いて鎧の綿嚙を衝透し、鎌でもぎ倒せば、稻葉忠次走り寄りて、首をば取つたりけり。其より敵味方入亂れ、火花を散らしてぞ鬪ひける。太刀の鐔音・鐵炮の響は、地涌千界の菩薩の出現たりし時も、斯くやあらんと、心も言も及ばれず、夥しくぞ聞えける。遠藤方の粥川五郎・鷲見忠左衞門・近藤作助等、思の儘に働きて、敵身方の目を醒し、三人一度に討死をぞ仕たりける。暫時の間に、手負死人は山をぞなしにける。生死は猶臂の屈伸の如しと、東坡がいひしも哀なり。是に因

つて遠藤・金森、櫻町の陣を引取れば、稻葉は其儘城にぞ乘込まれける。斯くて兩方睚眦み合ひし所に、愈媾の沙汰になりて、人質を出せば、遠藤・金森も和睦して、郡上を引拂ひけり。稻葉は元來會津出勢の人數なりしかども、秀信の幕下に居れば、心に任せざる事なりと、諸人に其理をいはんもなり難く、世の人口も面目なく思ひて、剃髮染衣の姿となりて、赤坂に來りしを、福島種々に取繕ひしかば、内府君の寛德に浴せられ、兎角の異議に及ばず、御赦免ありければ、同九月十四日に、公へ出仕を勤めけり。其前犬山の加勢として、稻葉父子・生熊玄蕃・關長門を、秀信より籠置かれしも、郡上の城攻以後は、稻葉・生熊・關三人は和睦して、公へ志ある由を傳へ聞き、略推量して稻葉を討たんと、内議評定區々なる折節に、稻葉は三州表に、次男修理を以て申上げけるは、御出馬の筋待請け奉らん爲に、大豆戸の渡には、柏原平助、大軍にて出張致させ候。小牧表には、島左近二萬餘騎にて磐へ候間、淸洲へ御懸らせ給ひて、御進發に於ては、宜しく候はんか。さあらんには御迎に馳出で申さんと、委細に注進し奉るにぞ、内府君も、其議に應じ給ひしとなん聞えけり。

美濃高洲城主高木十郎左衛門退散の事

福島左衛門太夫正則は、濃州西方を打廻り、敵方の要害方術(てだて)を見分せんと、僅二百餘騎にて、尾州清洲より打つて出で、風水の氣象を伺ひ、天下の盛衰をぞ考へける。夫より市橋下總守在所、西美濃今尾の城に馳行きて、美濃路へ出張したる西軍の强弱を問合せ、韓信が計を定め、三秦を取りし評定をぞ議しける。先づ高木が居城高洲城をば、計策を廻らし乘取るべし。小事とは云乍ら、一戰して敵の氣を奪はん略なればとて、德永法印に、斯様々々と低語しければ、德永則ち領掌して、家臣布家(よか)市右衛門幷に寳壽坊とて、加納村の一向坊主を、竊に高木が方へ遣し申しけるは、冑を脫ぎ降參し、城を明渡され候へと、委細懇に言送りけるを、高木聞きて思案しけるが、小身故、當城抱へ難く、聞逃したる抔といはれんも口惜し。其上原隱岐守、太田の中島郷に在陣せり。渠に堅く申合せし事なれば、輙く御請を致すべき様なしと返事して、兩使をぞ還しける。德永は仔細を聞きて、寢食を忘れ、色々に思案を廻らし、又布家

と實壽坊に、重々申含めて遣しけり。　布家は實體なる風俗(とりなり)、司馬欣が景迹(ありさま)に似て、實壽坊は又法談口の上手、有る事無き事取集めて、微妙の說客、蘇秦・張儀にも劣らぬ辯舌なれば、此兩人亦復高木に對面し、越去(こした)行末の、其種品(しなぐ)共を、注脚を下して淵底を盡し、色を變へ樣を替へ、眞實貌に述べけるにぞ、高木も思の儘に語られて、麾下に屬する志とぞなりにける。　高木申しけるは、さあらば追手馬の目口より押寄せて、雙方の鐵炮玉なしに打出し、暫く相戰ふ由をして、颯と引取り、其後福島よりの加勢を相具し、猛勢追手へ攻寄せられれば、其時搦手西の城戶口より、明退き申さんと、密に合圖をぞ定めける。　是に依つて八月十九日に、德永父子・市橋下總守・横井伊織・同孫左衞門・同作左衞門、幷に福島の加勢、彼是都合其勢五百餘騎にて、馬の目口へ押寄せけるが、德永巧みけるは、高木は豫て密契の如くに、西の城戶口へ明退くべし。さあらんに於ては、福岡繩手の難所に蒐らんずる時、透間なく追攻めて、一人も殘らず討取らんと、心の中に思ひ澄して、加勢の援兵にも、家中の諸士にも、此計をば曾て知らせずして、唯我麾次第に戰へと法令を觸流し、武田村より搦手へ押廻り、關を

咄と擧げたれば逸り絕つたる若武者共、人より先に懸入らんと、橫井作左衞門並に德永が兵・河村忠右衞門眞先に進んで入る所に、城兵も何かは油斷すべき。高木が宗臣河瀨平左衞門、紺糸縅の鎧に、天衝の冑を着て、鎗提げて名乘掛け、川村忠右衞門と渡し合ひ、請けつ捉んづ、少時突結びしが、何とか仕たりけん、河瀨踣倒れしを、河村胴と銜伏せて、首をば取つたりけり。其次に德永左衞門と名乘りて、大荒目の鎧に、三本菖蒲の甲を着、連錢葦毛の馬に騎り、九尺柄の大身鎗を振廻し、眞一文字に驅入れば、寺倉孫左衞門、二間柄の鎗を持ちて、參り候といふ儘に、塵埃を衝立て、天も黑闇になれとぞ勞合ひける。互に名譽の手爪利、祕術を盡し牙を嚙みし形勢は、魏豹・周勃にも劣らぬ程に見冷しゝと、敵も味方も鳴を止め、堅唾を嚥んで居たりけり。此攻口は、弓杖にたらぬ程の隘路、兩旁高藪の截崖なれば、後へ廻らん樣もなく、先へ進まんも叶はねば、さても〳〵と計りにて、後陣になすべき手術もなし。左衞門は、大身の鎗にや徠けん、深手を負ひければ、無念ながらも引退きけり。斯くて高木は、大の眼に稜を立て、德永といふ入道目に出拔かれ、後悔すれども益もなし。如

何に旁、彼奴原に謀られ、生捕にせられん事、心憂しとは思はずや。敵を間近く引寄せて、餘さず漏らさず討取れと、大音揚げて下知すれば、場中の軍兵ども、承つて候と、今日を最期の戰ぞと、互に眼をいからかし、飛違ひ翔違ひ、鋒長刀も摧けよ折れよと、衝廻し薙倒し、命を露とも思はゞこそ、當る所を幸に、右往左往に薙ぎたりけり。本より矢頃は程近し。城より放つ弓鐵炮、時雨の如くに射懸くれば、徒箭の一つもあらばこそ。福島が加勢の兵卒共、小石を並ぶる如くにて、死人の山をぞ築きにける。斯る處に寄手河村所右衞門、二の丸へ攻入るを押取籠め、鐵炮にて打强直め、其儘首をぞ取つたりける。續いて德永掃部、河村が討たれしをも目に掛けず、無二無三に飛入る所を、城より見澄し、鐵炮にて打倒しけるが、様の具足や着たりけん、其身は恙なく、起揚りて退きにけり。其外深手を負ひて、生死の堺を知らざる者、其數若干にぞ見えにける。福島正則は此荒猿を聞付けて、詮なき戰ひ、大事の前の小事に、多くの人を討たする事、偏に法印目が所爲なりと怒り罵りて、早々に其陣引取れと、敷波の使をぞ立てたりける。是に依つて高洲の城の圍を解き、寄手の

兵、早速に引きたれば、高木は味方の兵卒を呼集め、面々如何思ふぞや。此城郭に大敵を引請けて、後詰の賴もなき所に、討死せんも本意ならず。幸に寄手も引きたる事なれば、一先づ當城を明退き、後日の合戰に、恥辱をば雪がんといひけるにぞ、諸人一同に尤と應ずれば、軈て福岡繩手に差懸り、駒の渡船に棹して、山の手の方へぞ退きにける。高木は何とか思ひけん、其近邊の川船共を、悉切流してぞ捨てたりける。

同州福東城主丸毛三郎兵衞落去の事

今度内府君、奥州御進發に付きて、美濃國中の大名小名、皆悉く其催促に隨ひて、大井・中津川の邊迄打出づるもあり、或は今日よ明日よと閱き合へる衆も多かりき。丸毛三郎兵衞も、疾く打立つべかりしに、吉日良辰を選ぶなんどいひて、延引しける所に、石田治部少輔より使節として、河瀨左馬助を福東へ遣して申しけるは、此度三成事、秀賴卿の御代官として旌を揚げ、西國・四國の大名を引率し、美濃國へ出張し、所所に城を構へ根を深くし、本を堅くする謀を廻らし、西國往還の軍使を打止め、奥州

出勢の士卒の心を惱ましなば、東將は戰はずして、咸く軍門に降すべき事、掌を指すが如くならん。呉子が曰、兵を用ふるの害は、猶豫最大なり。三軍の災は、狐疑に生ずと誡めたれば、其方事猶豫の心を止められ、今度奥州發赴の志を翻して、偏に西軍に一味し、戰功を勵まされ候へかし。さあるに於ては、恩賞は宜く望に應ずべしと、委細に示しければ、丸毛も欲心や起りけん、少しも辭退せず、金鐵の好をなしけるこそ惷なれ。實に佛經の中に、諸苦の所因は、貪欲を本とすといふ。諸煩惱の障は、必ず癡に由ると説き給ひて、貪欲愚癡よりして、一人三公も其身を喪し、僧俗も是に依つて命を失へり。六韜に曰く、魚は其餌を食つて、乃し緡に牽かれ、人は祿を食んで、乃し君に服す。故に餌を以て魚を取らば、魚殺しつべし。祿を以て人を取らば、人竭しつべしと、太公望がいひしも理なり。今の人、金銀の賄を見ては、非も理に取成し、帛色の重きには、親子よりも大切に思ひて、義を忘れ忠を顧みず、上卿老臣は、君の前を欺き、善者なりといふ。中臣諸奉行は、其欺に諂つて、無窮の利口私の威を振ひ、下の役人は、其心に應甘はんと欲して、晝夜に憐愍を知らず、恥辱を思

はず。御爲なりといひて諸士を譏し、町人百姓等の物を掠め取りて、己れ大福人となつて、公儀を募つて、金銀を遊女に抛ち、財寶を酒宴に盡す。是に依つて猶嚴しく聚斂して、貧民の衣裳を剝取り、鍋釜を賣拂つて、其闕けたるを償ふ。百姓年々に飢渴して、妻子共に路頭に立佇ひ、片端より腫れ死するこそ不便なれ。刹利・婆羅門・毘舍・首陀の四姓、暫く差別すれども、皆天下の民なり。鳥獸・草木・山川・土地に至るまで、天下の有に非ずといふことなし。天下は是が爲め父母なれば、何の不足あつて、一國の主として大人を愛し、小人を卑むるや。富めるを貴み、貧を賤むるは、天下の意に非ず。霸者の情にして、誰か溥天の父母といはんや。富貴を取りて萬民を捨てば、天下の主に非ず。强勢疆暴を以て、天下の主なりといはゞ、豈桀紂に異ならんや。明君にはあらず。天下の君の心、正に是にあるべきことなり。只萬民豐樂なれば、天下は自ら太平ならんかし。丸毛奥州へ赴く志を引替へて、石田が勸に從ひ、大垣の兵糧運送の便を諾し、又後詰の兵卒を引具して、己が在城福束にぞ楯籠りける。浩る所に尾州赤目・横井伊織、多年の知音なれば、此事快からず思ひて、三郎兵衞が宗

臣丸毛六兵衞を招き寄せ、今度不慮に凶徒等と黨類せらるゝの由、定めて眞實の儀にてはあらじ。然る上は内府君も、遺恨深重には思召さるまじきなれば、早く惡心を止めて、數百の士卒をも助命し、祖父の跡をも失はぬ樣に計らひて、東軍に忠節を盡されば、立身に於ては疑ふ所あるまじき旨、委細に申含めける。六兵衞尤なりと領掌して歸り、丸毛に始終一事をも遺さず、有の儘に申しければ、暫くあつて三郎兵衞、心憂き事を聞くものかな。士たる者一度申合せて、再び違變なるものかといひて、不通切なる返答ありしかば、六兵衞押返し諫言しけるは、横井の申さるゝ所、兼日の昵近を思ひ、御爲を存じての事なれば、是非に奥州發足の儀に、一決遊ばし候へかしと、重々申しければ、丸毛眼に楞(かど)を立てゝいひけるは、先君秀吉公の御厚恩を蒙りし事、誠に以て莫大なり。今度秀頼公御名代として、石田三成旗を揚げ、逆徒を平げんと欲し、某不肖の身なりといへども、先君の好に依つて、石田兎角の軍議を相略らるゝ事なれば、三成に與し、亡君の恩を報ぜんと思ふなれば、今更約を違ひつゝ、一旦の榮華に誇ればとて、何迄(いつまで)の身をか保つべき。武運忽ち盡き果て、浮世の秋の

霜の下には名を朽し、傍の人には指をさゝれんこそ口惜しけれ。意見も評議も事に依ると、したゝかに惡口して、肩を張り拳を握り、六兵衞が面を擊損ずべき氣色なれば、重ねていふべき術もなく、横井が方へ、由を斯くと申切つてぞ遣しける。是に依つて八月十六日に、市橋下總守・德永法印・横井伊織・同孫左衞門・同作左衞門、福束の東加納村船渡の處へ馳向ふ。丸毛も豫て牒し合せし事なれば、早狼煙を揚げたりけり。是を見て大垣の城主伊藤彥兵衞・長松の城主武光式部少輔、幷に石田が加勢前野兵庫・高野越中・齋藤左京・雜賀内膳等、時を移さず馳着き、彼是其勢三千餘にて、大藪村と大𣗄村の間へ騎出し、大河を阻てゝ對陣し、鐵炮・矢軍群雀の飛ぶが如く、互に挑み向うて射放ちけり。され共三町餘の大河を阻てゝの事なれば、何の勝負かあるべき。其日も暮になりぬれば、互に睨み合うてぞ陣取りける。然る所に市橋下總守が精兵に、金森平左衞門・竹田四郎左衞門兩人を近付けて申しけるは、其方等は素より地侍の事なれば、案内を能く知りたるべし。敵勢の後へ廻り、上下より在家に火を耀ち、鯨波を揚ぐべし。其時に此方より飛込んで馳合せん。川向の敵勢の姓名

を聞くに、捗々しき兵は一人もなし。皆公事武者の駈士（かりざむらひ）なれば、下知をも聞入れず騒ぎ立ちて、我れ先と逃げてや行かん、折敷きてや戰はんと、度を失はんは必定なり。其時に咄と川を乗越え、楯衝く敵をば討つて落し、逃ぐる者をば駈散らし、福東の城へは入れも立てず、乗取るべきことは案の内なり。但し兩人が謀に依るべきぞといへば、一言の違變に及ばず領掌し、水練の上手を選み精（すぐ）つて、十餘人引率し、十六日の夜半の頃、川上へ押廻り、漲り流るゝ大河を、事ともせず泳ぎ越し、敵の後なる自蓮坊村・楡役村へ忍び入りければ、家々の門戸を押立てたる計にて、百姓等一人も殘らず北げ行きて、鷄犬より外に譴むる者あらざれば、此彼（こゝかしこ）に走り廻り、思の儘に火を付けて燒立て、鬨を咄と揚げたるにぞ、下總守豫て思案せし如く、大榑村へ張出したる敵兵、鯨波と放火とに周章騷ぎて、散々に裏崩れし、四方八面に北げ走る有樣、時ならぬ深山颪に誘はれて、木の葉を落すに異ならず。石田が加勢の兵卒、並に伊藤彦兵衞・武光式部以下、旗差物馬物具を打捨てゝ、北を指して逃走り、大垣の城へ引取りけり。　丸毛は田中の細繩手を傳ひ、倒れ翊（ふため）いて福東の城へ引退く。川向の敵勢

の色めく樣子を見澄して、市橋下總守・德永父子、加知村の川を乘越えて、德永は北の手へ逃ぐる敵を追違へて、追詰め逐廻し、大音暢げて伐つて懸る。北ぐる者の母衣付け、止まる者は眞甲瓜刻・車切、面もふらず薙ぎたりけり。未だ時も移さぬ間に、十六騎討捕り、其外遺さず追散らし、德永は踏止まつて、暫く息を休めけり。市橋は、丸毛が蹤に引付きて、附入せんと思ひ掛け、透間もなく追蒐け、福東畷の間にて、首卅六討捕り、城戸口まで追詰めたり。爰に丸毛が軍兵兩脇幸左衞門父子、駒の手綱を磬へて、澁谷太郎兵衞にいひけるは、こは口惜き事にあらずや。敵に逢うて太刀をも拔かず、箭一つ放つ事もなく、聞懼して引きぬる事、土骨までの恨なり。是又天未萌の凶を示し給ふと覺えて、只事にあらず。行末とても賴み少し。いざや返し合せて討死せば、其隙に丸毛殿一手の兵卒を、心易く城内へ引かせんと思ふは如何に澁谷殿と、斷離れてぞ申しける。太郎是を聞き、左右にや及ぶ幸左とて、三人の兵共、其儘取つて返し、槍の柄を押取り舒べ、夜叉神の如くに突いて掛り、柄も折れよ刀も碎けよと齒を咬み、勇み進んで寄せ來る勢を、少時支へて戰ひしが、味方は唯三人、

寄手は多勢の事なれば、心の花を太刀先に開かせ、落華微塵になるまでと、思ふ程に合戰し、三人一所に枕を並べて、討死をぞ仕たりける。見る人聞く人、是ぞ勇とも忠ともいふべき。武夫の志、郎從の頂たるべしとぞ感じける。丸毛は此間に、諸卒共に過半城中に引入れけり、誠に彼三人の者共、防ぎ戰つて討死を遂げずんば、附入りて城を乘取られんは必定なり。其時は後代までの汚名、何の世にか雪がるべきに、三人の輩多年の恩を報じ、忠死せしこそ由々しけれ。其餘の丸毛方の兵卒共、己が拵へ構へたる城戸・逆茂木に行當り、鎗を衝掛け鎧を引貫き、險しく寄せ來る敵に度を失ひて、入るべき隙もあらばこそ、右往左往に逃散らし、城中も早小勢になりしかば、丸毛も流石の勇士にて、心は猛く進めども、支ふべき方術のあらざれば、大手の門を差堅め、公家門より忍び出で、河西へ打越えて、大垣の城へ引入れば、城は其儘下總守乘取りにけり。

市橋長勝福束城を乘取る

石田軍記卷之六終

石田軍記卷之七

林半助乘取曾根城謀相違の事

木曾海道より十五町北に當つて、曾根の城あり。此所には關東より、西尾豐後守忠政在城す。江州より海道北の地は、東國勢陣を張りて、大垣を壓へけり。偖曾根の城は、東海道の旁にして、大事の手當なれば、松下右兵衞を加勢とす。然れども軍用の程、毎度不足なる由を、井伊・本多聞傳へて、松下を陣替させ、水野六左衞門・同舍弟惣十郎を豐後守に加へて、木曾海道を阻て、對陣す。松下丹波守・津輕右京は、江尻の郷に屯して、笠縫繩手の通路をば、最嚴しく差塞ぎけり。浩る所に石田三成、年來の家の子林半助を召寄せ、邊の者を退け私語きごとしけるは、其方年來忠節推量つて委細知りぬれば、和理なく所望することあり。叶はんや否やといふ。半助首を地

に付けて申す樣、事新しき御諚にて候。某身に叶はん御用をこそ、日頃年頃偏に願ひ罷有候へば、莬る不肖の某に相應ならん御用をば、爭か否み奉らん。仰の程こそ恨しく候へと、眞實の志、顏色に見えしかば、石田も一入悅喜して、別なる儀にて非ず。其方が一命を、吾にくれよといふ事なり。元來曾根は汝が生國なれば、何とぞ思案を廻らして、百姓浪人等を相語らひ、曾根の城の搦手へ、夜紛れに忍び入り、火を羅けさする術をせよ。然らば水野・西尾が軍兵共、火本へ馳集り駈廻りて、騷ぎ立たんは必定なり。其時火の手を相圖にて、軍勢を引率し、早速に押掛けて、曾根の城を乘取るべし。偏に賴むといひしかば、半助聞きて領掌し、御心安く思召候へ。隨分方便を巡らして、本意を達せしめ申さん。幸此に馬淵兵左衞門とて、物馴れたる細作の者候。本は氏家志摩守家來たりしが、さる仔細ありて浪人し、呂久村に居候。某無二の知音にて候へば、渠と深く相計らば、必ず仕課せ申さんと、范增をも、もどく計に述散らし、我陣所にぞ歸りける。偖兵左衞門を招き寄せ、件の有增を相談し申す樣、三成の仰にも、此事首尾遂げられなば、秀賴公へ言上し、御馬廻りに召出して、過

分の俸祿與へ給ふべしと、堅約の事なれば、隨分働き給へといふをば、馬淵委細を聞屆け、三成殿の御心底、近頃喜悅至極せり。去乍ら此企、卒爾にしては就り難し。敵味方の對陣間近く、程なき事なれば、遠見夜巡り隙もなく、緊しく番をするなれば、仕濟す事は誠に優曇華なり。然れども味方の多くの人を差措かれ、我等風情に、隔心なく大事を仰せある上は、敵方に生捕られ、醢になるとても、惜むべき身に非ず。爰に高田何某・横山太兵衛といふ者候。某若年よりの友にて、殊更斯樣の事に心掛鍛錬の者にて候へば、彼等二人を伴ひ、忍び入り見申さんと、功者にぞ聞えける。半助具に聞屆け、三成に對面して、右の趣、一々に首尾を合せ取なしければ、賴母しくぞ覺えける。三成聞きて、打垂頷き申しけるは、隨分身命を抛つて、善く能く事を遂げ申されよ。我れ斯くて在らん限は、縱使某身は果つるとも、子孫の末迄も見放たず、取立て得させせんなり。是は當座の褒美とて、黃金三枚取出し、半助に渡しけり。其より晝夜會合して、評議をぞ仕たりける。馬淵が料簡には、夜中は別して、番等も緊しからんと存ずれば、何とぞ略を以て、晝の間に紛れ入り、能時分を待ち申さんは如

何にといひければ、此儀尤然るべしと、方々窺ひ居る所に、其頃赤坂表の陣取、並に曾根の城兵も、兵糧次第に盡きければ、在々へ入渡つて、田を刈る最中なり。此人夫に打紛れ、忍び入らんと議定して、九月十日の申刻計に、瀬古村の北の邊にて、田を刈る人夫に紛れ、彼方此方と窺ふ所に、折節刈田の奉行人、目の利きたる士にて、彼者共の形迹は、人夫體の者ならず、鎌の持様稻さばき、曾て手馴れぬ業に見ゆ。其上眼ざし只者ならずと見尤めて、敵方の奴原が、紛れて入りたりと覺えたり。其手其組の人數を點檢せよといふを聞きて、三人の者共、頓て其場を駈出し、一人は東へ逃げて行き、今一人は西の方、曾根を指して逃げけるを、やれ討取れ〳〵と、音々に呼ばはりて、兩方へ追懸くる。近郷の者迄遁さじと、出合ひて追ひしかば、一人は水練の上手にて、水を游つて逃延びぬ。今一人は追詰めて、截らば斬るべき程なりし所に、蹤より、討つな手捕にせよ。繩を掛けよと呼ばはる間に、瀬古村の名主宇野右近衞門といふ者が、家敷の中へ飛入りけり。此處には豐後守の姉娘綾野殿といふ方を、名主が屋敷を圍ひつゝ居かれけり。其處へ彼賊徒駈入りて、綾野殿を引寄せ、胸に白

乃を差當て、人質に取りければ、追手の者押込んで、搦捕るべき樣もなし。西尾・水野が兩軍勢、雲霞の如く馳來つて、名主が家を取卷きても、危き仕業なれば爲方なく、何れも胸を冷してぞ居たりけるが、名主賢き者にて、我女房に言含めしは、其方は何國の人、如何なる品に依つてか、斯る仕方をなし給ふや。若誤のなき身ならば、其樣子をいひて歸されよ。我は此家の女房なり。亭主は慈悲を第一の人なれば、假令科ある人なりとも、能き樣に取持ちて、其罪を宥め申さるべし。ましてや誤のなき人をや。唯有體に亭主に賴み給ふべし。努々相違あるまじと、神を掛け佛に誓ひて、實しやかに愍顔に申しければ、彼者實にもと思ひて、さらば某は、馬淵兵左衛門とて、呂久村に居住の者にて候が、豐後殿の御家中に、私同名の權右衛門と申者、親類にて候故、對談の爲め參控せしむる所に、理不盡に追かけられ、途方にくれて是非もなく、斯くの仕合に候。兎も角も宜しく賴み存ずるとて、騷がぬ氣色にていひければ、則ち權右衛門を召出し、彼者を見せければ、如何にも已前より存知の者にて候へば、某預かり申さんに、何の祟のあるべきや、心安かれ兵左衛門。若し御尤あるに於ては、一所

に科を受くべしとて、先づ太刀を納めさせ、人質を放させて、豐後守に由を斯くと申しければ、急ぎ城へ召寄せて、仔細を問へども、曾て亦別條なしと陳じけり。豐後守是を聞きて、仔細もなき其身として、人が追ふとて、何故周章騷ぎて逃げけるぞ。其上人質を取るからは、別條なしとはいはれまじ。兎角をいふ迄いはせよと、拷問既に度重なれば、是非もなき次第とて、石田が謀、半助が賴みの品、始より終まで、一事も殘さず白狀せしかば、見懲の爲にせよとて、木曾海道の堺目に、梟首にこそはしたりける。

西美濃北山高橋修理亮方遣二三成使者一の事

爰に秀賴公の御馬廻に、濃州の住人廣瀨兵庫といふ者を、三成招き寄せて申しけるは、其方の生國北山廣瀨の谷高橋修理亮は、彼處の地侍にて、數代北山に居住す。太閤御存生の內にも、御懇意に思召されし人なれば、定めて秀賴卿の御爲を、聊惡くは思はるまじければ、彼を相語らひ、廣瀨・溜川兩谷の野伏狩人を相催し、鐵炮千挺持

出し、赤坂の虛空藏山へ取上り、目の下に見卸し、修理と御邊と大將にて、靑野合戰の手合に、池田の山路を押出し、山上より鐵炮を打出されよ。兩谷に鐵炮不足に於ては、江州縫野・金生原の谷々の者を差加へらるべし。今度の合戰勝利の上、美濃半國宛行はるべし。是は當座の扶持なりとて、黃金百枚取出し、修理が方へと渡しけり。兵庫は金子を請取りて、江州金生原の山路を越えて、美濃國廣瀨の谷口坂の鄕へ往き着きて、修理亮に對面し、世上變易の物語しての後申しけるは、貴邊定めて聞及び給ふべし。今度靑野が原に於て一戰を遂げ、東國勢を悉く打果さるべきの最中に候。是に依つて石田治部少輔、其外の諸大名の方よりも、一方の攻口を、大將に賴入るの趣にて、某使に參りたり。秀賴公の御爲なれば、軍忠を勵まし、戰功を盡され候事、此節なりとぞ申しける。修理熟是を聞きていひけるは、貴所の淵底存知の如く、尊氏將軍の御時より以來、此山中に居住し、子孫永く絕えずして、今不肖の我等までも相續せり。秀吉卿も罷り出で、御奉公をも相勤め候樣に、數度丁寧に宣ひしかども、先祖の遺制に相任せ、其台命にも隨はずして、麁茶淡飯を喫し、溪水を汲み山

月に心を澄して、朝には麋鹿に伴ひて山中に遊び、暮には飛鳥に隨ひて栖家に歸る。巢父・許由も尊からず、崔士・陶朱も珍しからず。今迄是を樂とすれば、外に曾て少の望みもなし。然るに唯今半國を賜はり、黃金をも拜領せん事は、生涯の面目には候へ共、我等が家に於て、富貴の例もなし。且又先祖の家法を背いて、是を善しと思はんも、全く冥加恐ろし。彼是以て承引なり難き事に候へば、疾々歸らせ給ふべし。常の見舞とあるならば、薄酒にても進めんこそ本意なれ共、今度は麁菜の饗應をも致さぬとて、愛相なげに申しければ、兵庫重ねていふ樣は、仰至極に候。然し乍ら左樣の返事を申すに於ては、必定關東方の一揆なるらんとて、軍散じたらん其後に、御邊はいふに及ばず、谷中の者共まで、一人も殘さず罪科に處せらるべき事は、鑑に懸けて見え候へば、斯樣の事共を、能々遠慮を廻らされ思案し給へと、繰返してぞ申しける。修理聞きて、其は無理の沙汰なり。さはあるまじき事ぞかし。大坂へ弓をも引くにこそ、敵對をもなさばこそ、何にても候へ、天下の武將たらん御方へ訴へて、安堵すべき事なれば、別に仔細も候はず、早々歸り給へとて、首を振り眉を顰めて、彌

承引せざれば、兵庫は手持惡しく退場を失ひて、げに〳〵尤といひてぞ立歸りける。

岐阜城河端合戰の事

さる程に北の方の先鋒は、池田三左衞門輝政・淺野左京大夫幸長・堀尾信濃守忠氏・山内對馬守一豐・有馬玄蕃頭豐氏・一柳監物有樂齋・松下右衞門吉綱等と相定め、八月廿二日に、東國勢雲霞の如く、河岸にぞ押寄せける。爰に西軍の秀信は、早朝より手勢千七百餘騎引率して、河手村の焰魔堂に屯し、斥候を出して下知をぞせられける。同國上有知の城主佐藤才次郎・百々越前・木造左衞門・飯沼十左衞門・同勘平・前田半右衞門・齋藤齋・三成が加勢の河瀨左馬助等は、新加納村と大野の間に控へて待掛けたり。時に越前下知しけるは、東國の武士共は、元來馬上に達者なれば、河岸より三町控へて行馬を結ひ、出入口を付けて、千人の足輕を四百人勝つて、行馬の前に備へ置き、内に大筒を仕掛け、六百人は河端に進んで繰替に立ちて、敵河へ乘入らば、半分渡ると見し時に、込替へ〳〵打立てよ。吳子が曰、敵若絕〻水半渡而薄〻之といへり。

敵陸に乘上らば、行馬の際へ引取つて、噇と驅りて河へ追込み討取るべしと、五十騎の二備を、河の上下兩方の村の小陰に伏置きて、差狹んで駈出すべし。敵散ずとも、其儘に旗本へ集まるべしといふ所に、東國の軍勢半河を渡るを見て、俄時雨の降る如く、打つ鐵炮に中てられ、彌が上に重なりて、手負死人の流るゝ血は、紅葉散浮龍田河、腸斷秦川流濁涇」といふに異ならず。然れども東國武士の習、死を厭はぬ素生にて、流るゝ骸を足だまりに、我も〳〵と進みけり。其中に監物は、近邊の黑田に在つて、常々河の淺深を、能々知りたる驗にや、木曾川の逆浪を、些とも恐れぬ氣色にて、渡れや者共渡れとて、其儘馬を乘入れしは、四郎高綱・謙信輝虎にも劣らぬ風情なり。是より池田・淺野・堀尾等、續いて馬を馳込めば、敵兵是を防がんと、擊違ぬる鐵炮を、物の數とも思はゞこそ、一度に噇と向の岸に騎上れば、岐阜勢如何なる術にや、一町程退いて、火花を散らし戰ひけり。時に堀尾信濃守が兵卒に、堤五郎兵衞・一柳が家臣大塚權太夫眞先に進んで、一番に槍をぞ合せける。堤は、岐阜方の前田半右衞門と暫し戰ひしが、終に前田に討たれけり。大塚は武市善兵衞に渡り合ひ、火出る程

戰ひしが、武市終に突臥せられ、已に危く見ゆる所に、武市忠左衞門駈付けて、救はんとせしかども、善兵衞が運命や窮まりけん。大塚に首をば取られけり。偖岐阜方の侍大將飯沼勘平は、緋威の鎧に赤母衣を掛け、白葦毛の五寸餘りの馬に騎り、四角八方睨廻りて、適れ敵もがなと窺ふ處に、大塚權太夫、善兵衞が首を捕つて去る處を、其首返せといふ儘に、馬を彼に乘放し、槍おつ取つて追かけしは、飛行夜叉神の荒渡るも斯くやらんと、血氣の勇者にぞ見えにける。一柳是を見て、あれ討たすなと下知すれば、五騎押並んで衝り來る。岐阜方よりも續けやとて、前田半右衞門・藤田權右衞門駈塞り相戰ひ、頓て大塚を突臥すれば、勘平押掛つて首をば取つたりけり。秀信の旗本へ持參せよとて、坪井七兵衞に渡しつゝ、馬に乘らんとせしかども、つけずまひして乘得ざりし處に、邊を見れば、小高き岡に能き武者あり。馬物具の美々しさ、武者振のけだかさ、大將と見えければ、一鑓といふ儘に、飯沼と名乘り掛つて進みしかば、東軍の池田備中守なり。少も臆せず、馬を歩ませ進む所に、輝政の兵に伊藤與兵衞といふ者駈入つて押隔つるを、備中守是を見て、そこを引けとぞ怒りけ

る。與兵衞は是非なく立除けば、早槍を合せ、龍卷けば虎嘯くの勢を作し、風雲一百八盤縈るの分野にて、兩方盛の若武者共、聞ゆる名譽の手利、暫く勝負はなかりしが、何とかしたりけん、勘平突かれて倒るゝ處を、備中馬より飛んで下り、首を取らんとせしが、勘平河波と起上り、無手と組み、嚙をして金剛力を出せ共、手負武者の悲さは、備中守に組伏せられ、遂に首をぞ取られける。刀は伊藤與兵衞に、己れ取れとて取らせらる。次いで堀尾が郞等畑田民部・澤田四郞左衞門等も、思ふ程戰ひて、終に討死をぞ仕たりける。又岐阜方にも、名を得たる前田・藤田諸共に、轡を並べて切廻り、此を支へ彼を防ぎ働きしが、皆枕を並べ討死す。爰に於て百々越前は、木造を招き寄せて、某が手勢廿餘人の其內に、手負一人生殘つて、皆々討死したる體なり。御邊は未だ深手も負はず、手勢も過半殘つて見ゆ。味方迚も負軍なれば、敗軍せぬ其先に、急ぎ岐阜へ立歸り、町口を堅め給へ。此表の合戰は、命限りに戰うて、叶はずんば、跡よりして引取るべし。急ぎ候へとありければ、木造聞きて、其方の差圖に任せて、唯今の難儀を見捨てゝ引返さば、虎口を逃したる抔と、今の嘲後の恥、思ひ

寄らずと言放つを、百々重ねていふ様は、迚も遁れぬ虎口なり。明日の合戰に、其理は立つべきぞなれば、是非に引取られ候へ。且は忠ともなるべきぞ。早疾々と諫むれば、木造實にもと得心して、手勢を集め引取るを、味方の軍兵是を知らず、敗軍と思ひ、駒の足もしどろになつて、騒ぎ色めきける氣色を見て、東國武者に武藤掃部・津田新十郎・澤井左衛門・平井彌次右衛門・同兵右衛門・武藤清兵衛・吾孫子善十郎・生駒隼人・安井將監・堀田將監・吉田平內・八島吉十郎・稻熊市左衛門・森勘解由・林藤十郎・小坂助六・堀田小三郎等、皆粉骨の働して、名を萬天に擧げて、譽を千世にぞ遺しける。

諸將河を渡し相戰ふ事

於此に池田輝政は、河上を乘渡し、岐阜方の旗の手の捽ぐを見て備を崩し、横合に截つてぞ掛りける。一柳・淺野・有馬・山內、麾を取つて突かゝれば、岐阜方の軍兵、爰を先途と防ぎしが、終には一度に敗軍す。其中に佐藤才次郎と聞えしは、信部の庄司が末葉にて、名に逢ふ勇士と時めきしも、一番に敗走せり。流石に百々・飯沼・津田

は、少しも騒がず、殿して引退くこそ勇々しけれ。時に佐々彌三郎、加納表より河手村へ駈戻り、秀信に申す樣、急ぎ御引取宜しかるべく候とて、御馬の口を引返せば、寄手の敵勢彌勝に乘つて追懸けゝり。津田藤右衞門只一騎、些とも騒がず踏止る。同藤三郎・堀場茂兵衞返合せて、競うて追ひ來る敵兵を、突捨て〳〵引退く。道の左右深田にて、心は箭長に進めども、寄手も更に進み得ず、すべき樣あらざりける處に。堀尾が軍兵に、野々口彥助十六歲、堀場に礑と渡合ひ、鑓を捨てゝ戰ひしが、堀場が馬の手頸に、野々口が太刀の切先當りつゝ、馬頰に刎ねければ、堀場耐らず逆樣に、深田の中へ落ちけるを、野々口續いて刺透し、頓て首をば取りにけり。味方の軍兵是を見て、野々口を討たすなと、音々に呼ばはれば、相續く勢に靜々と引く所に、上加納村の前にて、瀧川平六・中島傳左衞門、其外岐阜方の者取て返し、足輕を立直し、入替へ〳〵打たすれば、寄手もさのみ進み得ず、瀧川高名を致すといへども、殘黨全からざれば、大勢に攻立てられ、四方八面に落行きける。日も漸く傾けば、寄手も新田の橋より引返して、芋島・新加納邊に陣取つて、夜討の用心稠しく、永の夜を明し

けり。偖中納言秀信は、今日河越の合戰に、討負けたりしを無念に思ひ、夜に入つて組頭を召集め、餘りといへば今日の合戰、無下に敗軍せし事、無念類はなけれども、時の不幸是非もなし。明日の合戰は、一際賴み入る間、各城戸を枕として討死をすべき由、組々の兵卒へ、𠿷と相觸れられ候へとありければ、木造聞き、畏り入候。今朝新加納へ向ひ候兵共、過半は討死仕り、又新參の輩は、直に落失せ候も數多にて、十騎組は三四騎になり申し、危き籠城にて御座候。去乍ら此城、東と南は谷深く、其狹間は深田にて、馬の蹄も立て難し。左右の峯は峨々と聳え、松柏生ひて陰闇し。北の方は長良川截岸最絕壁なれば、此三方は常だにも、人馬の通路もなり難し。殊に六具を堅めし身は、天狗ならばいざ知らず、攻入るべき地に非ず。西の方は七曲・追手・搦手三筋の路嶮岨なり。其上詰り〳〵の難所にて、身命惜まず防ぎなば、如何なる韓信・樊噲も、輙く攻入り難き要害の籠城に候へば、皆々必死の働仕り、三日持固むる程ならば、御利運は掌の中に候と、手に握る樣に述べてぞ退きける。斯くて東軍の寄手、其日膽の渡は、福島正則・田中兵部大輔長正・同民部長顯・加藤左馬助嘉

明・京極修理亮高知・藤堂佐渡守高虎・生駒讃岐守正俊・寺澤志摩守廣高・蜂須賀長門守至鎮・黒田甲斐守長政・井伊兵部少輔直政・本多中務大輔忠勝・同美濃守忠政等、荻原を渡り西美濃に至り、所々より船筏を集めて、惣軍勢之に乘り、膸の渡り近邊の在家在家を放火して在陣す。然る所に北の方には、合戰最中との注進ありけるを聞き、當手の諸將、甚怒つて、齒噛をすれども益ぞなき。各福島の陣所に集まり、數評議を費すといへども、實にもと思ふ沙汰もなし。時に加藤嘉明、膝立直し申さるゝは、各の御評議は、偏に岐阜を乘取らんと、一途に泥み給ふ故、衆議更に決し難し。先づ子丑より出張して、尤岐阜を窺ふべし。若北方の軍士共先んずるに於ては、岐阜を其儘打捨てゝ、大垣の城を攻めらるべきは、如何あらんとあれば、諸將實にもと一同せられたり。

老翁茶話の事

岐阜の合戰に驚いて、近鄉彌肝を銷し魂を失ひて、或は深山邊の杣人、又は荒磯際の

海士などを繰々に尋ね寄り、妻子を預け資財を運びて警破めけり。折柄八旬計に見えし老翁、或農家に立寄りて、煙草の火を乞求ひけるに、主の野夫驚いて目をそばめ、是を見れば其容突兀として怪偉く、其顔憔悴として陋しからず。藤にて捲堅めたる大小を挟めり。愈覺束なく思ひ問ひけるは、老人は何方の人なれば、斯る世上物騒の時節に、不知案内の家といひ、誰彼時に來れるは不審なりと、事々しく傍若無人にぞ咒めける。彼老人聞きて云く、御恠尤なり。去ながら見申さるゝ通りに、人生七十古來稀なりと申す齡の身なれば、盜賊などを業とする者にしも非ず。亦百姓を詐して、物を乞ふ身にも非ず。今日河邊の軍とやらん聞及びし故、老後の心慰に、獨歩獨步吟ひ來りしが、老足の疲を休めん其爲に、卒爾ながら斯仕合、御免あられ候へと、最まめやかに理りければ、野夫も其言に伏して、尤さこそ座すらん。去ながら其に付きて、尙不審存ずるは、數珠などをこそ爪繰りて、寺道場の參詣ならば、實にもと思ふべきに、其齡して軍の見物抔と申されしは、何とも心得難しといふを、老人聞きて莞爾み、御不審最至極せり。踊忘れぬ雀ぞと、我からさへも可笑しく存ずるなれば、

左こそ候らん。其に就きていはれざる永物語に候へども、一樹一河の縁やらん、立寄ることに候へば、我生涯を聞け申さん。吾若年の古は、缺けたる鞍に腰を据ゑ、金精たる鎗をも嗜みしが、さる事ありて浪牢の身となり、美濃・尾張・越前・信濃・伊勢・近江、此彼經歴して、惜からぬ命の露、消え果てもせで徒に、斯る風情の淺ましき世を送りし事、天をも恨みず人をも尤めず、今日は今日とて暮らす身にてこそ候へ。過分千萬と禮謝して、立歸らんとせられしを、主袂を取りて、先々夫は餘に無骨なる仰なり。御物語り候へ。扨此度の軍の首尾、勝負如何と思召さるゝぞ。茶物語にし給へかし。婆が祕藏の煎茶を、振舞はんとて引止むれば、老人聞きて、首を掉り眉を顰めて、中々短慮未練の我體が、兎角評判はなり難し。され共昔鎌倉の御代の時分に、義經の仰せけるを、吾等御側にて承りしは、兵を用ふる大事は、機を相て動き、時に隨つて變ず。故に預め言を以て論ずべからず。川の流れて形を制するが如し。戰に因つて勝つことを知る。鬼神も其妙を測るべからず。父子も其旨傳ふべからず。事に臨んで妙計あり。然りといへども御茶を給る慰に、管見に及びたる古傳の旨を、

今取合せて片端語り申さん、が先づ合戰の勝利と謂ば、一つには天の時、二つには地の利、三つには人の和にありと、軍議に宣ひし。然れども人の和は、其中の根元なりと承るなり。古往今來考ふるに、割符を合する如くなり。是を以て案ずるに、今度の軍、大坂方に二の利ありて、東國の方に一つあり。然れども落着は、東方の勝軍にして、鏡に寫せる如くならん。所以如何となれば、大坂は西方に當つて、時今西方の金氣殺介の氣候なれば、尤征伐に利あり。剩へ東方は木にて、西方は金なれば、金剋木の强あり。城郭堅固にして、武具兵糧山の如し。此亦地の利に相叶ふ。此の如く二の利、目前に顯然たり。されども第一に肝要たる人の和に於ては、露程もなきなれば、不祥千萬といふべし。又東軍の人の和は、易牙が調ぜる羹の、純熟せるより甚し。西國方の不利なる事は、砂を蒸して飯となすが如き所爲なれば、旁も知り給はん。先づ西國の諸大名、殘らず出張するに付きて、其爲體を閲すれば、我々がちに威を爭ひ、諸事を氣儘に振廻へる人々と覺えたり。只一向に輕々しく、寄合勢の如くにして、何れの下知に、唯一人隨ふべしとも思はれず。面々各の軍立にてあるべ

ければ、一戰に及ぶ時、利を失はんは必定なり。亦東方の諸軍士は、其心一和して、大將の下知に從ふ事、其身の指を使ふが如し。其上に大將は、智仁勇の三德を兼備し給ひ、其德澤廣博にして、無雙の良將に在せば、終に天下を掌握し給はん事は、漆中に蟹を入るゝが如くにして、必ず內府公ならん。此老翁が下黑一分も違はあるまじとて、范亞父の辯を以て說きけるにぞ、野夫も老婆も頤を垂れて、聽聞してこそ居たりけるが、野夫、扨も老翁は、殊の外なる分別者、學問者と相見え、何よりも面白き物語、是非に今夜は一宿あられよと、婆は茶を進むれば、尉は又、粟飯を振舞ひ申さんと止めけるに、翁もさらば一宿申さんといひし處に、野夫いひけるは、先程鎌倉の御代、義經公の御側にて聞き申さるゝとの事、最早四百年前の昔なり。其は如何なる時に候といへば、老人駭きたる景迹にて、長物語に勢盡きたり。休みてこそ申さんと、用の體にもてなして、鳩の杖に把りつゝ、打嘯いて歸りけるこそ不思議なれ。

石田軍記卷之七終

石田軍記卷之八

竹鼻城落去の事

同廿二日卯刻、先陣は福島、次に長岡・京極・黑田・加藤・藤堂・田中・井伊・本多、次第々々に押出し、河上の相圖の煙を見れば、狼煙は空高く晴れ揚るに、早遙に聞えて鐵炮の音夥しければ、正則此軍に駈付けざるを無念に思ひ、氣色を變じて河岸に臨む所に、竹鼻の城主杉浦五郎左衞門、幷に毛利掃部、又岐阜よりの加勢梶川三十郎・花村半右衞門等、賺の河向に、芝居を築き柵を振り、弓鐵炮を仕掛けて、雨の降る如くに打起てたり。折しも此所は、俄に砂入して築上げたる堤なれは、馬の足途凶く、進み難き故、東軍河下へ降下つて、加々野江村の邊より、一々に乘越しけるに、杉浦・毛利・梶川・花村も、身命を拋つて戰ふといへども、防ぐ術や盡きにけん、竹鼻へ引取つて、本

丸には杉浦、二の丸には毛利・梶川・花村楯籠る。少勢の事なれば、攻干すとても易かるべけれども、福島は毛利と親きに依り、降參あつて然るべし。御前の儀は、聊氣遣あるべからず。能きに取成し申さんに、本領異儀あるまじきの旨、委細に云入るに依つて、無事を相調へて、二の丸を明渡しけり。本丸も和睦あつて、明渡され然るべしと、色々に勸むといへども、杉浦曾て承引せず。一度不義の名を汚して、百千年を經るとても、終には死ぬべき此身なり。人死して再び生きず。水流れて亦歸らず。身は泉下に朽つるとも、名を雲上に揚ぐるをこそ、武士とも人ともいふなれとて、思ひ切りし有様、中々潔くも聞えけり。寄手も是非に及ばずとて、取卷いて攻むれども、元來要害よき城地といひ、杉浦義心金鐵の如くにして、命を捨てゝ防ぎしかば、輙く落ちぬべきとも見えざるに、辰の刻の始より、申の時の終まで、大勢入替へ攻戰ふにぞ、卅六騎殘りしも、弓鐵炮に中てられて、或は手負討死して、抱へ難くなりしかば、早速城に火をかけ、杉浦已に自害せしかば、殘る軍兵悉く、殉死し申すと呼ばはつて、主人の死骸を取圍み、七人自害を遂げにけり。主從の最後の體、見聞の人々

安託て、感歎せぬはなかりけり。

瑞龍寺山砦城攻破る事

岐阜の城より十八町南に當つて、嶮岨なる山あり。此所に新城を取立て、壘を掘り櫓を揚げ、外構に柵を振り、逆茂木を引かけ、三成が家臣柏原彦右衛門・同息内膳・河瀬左馬助・松田十太夫、都合一千餘騎楯籠る。瑞龍山三箇所の砦の其一なり。同八月廿三日卯の刻より、瑞龍山の西の麓に、東國勢陣を屯して、人數の手賦りをぞ定めける。爰に淺野左京大夫幸長は、究竟の軍兵を引率し、手に〱持楯を提げ、同じ西の山の手兩方より攻上る。城中の者共、豫て期したる事なれば、詰々の截所木隱に、弓鐵炮を伏置いて、此を詮とぞ防ぎける。寄手の弓鐵炮に對揚せば、十分が一にも非ざれ共、元來山の案内能く覺えたる事なれば、片岨を小楯にとり、稻麻の如く群集せる寄手を目的に射放つに、更に空矢のなかりければ、手負死人は數知らず。寄手も是に辟易し、少し猶豫する體を見て、幸長麾を振上げ、敵は小勢ぞ唯進め、息なつ

がせそ者共と、勇みかけつて下知をなし、四方よりして攻上れば、敵に跡をや取切られんと、城戸口迄颯と引く。柏原・松田下知していはく、後詰をせん味方もなく、退(のき)路(みち)の便もなし。寄手は味方に百倍して、四方皆敵勢なり。落ちんとせば、徒に犬死せんは必定なり。上下心を一致にして、思ふ程防戰し、討死せよといひも敢ず、鑓衾をなして突いて出る。寄手の方には箕浦新左衛門・原傳三郎、眞先に進みけり。箕浦は隱もなき大力の士なりければ、三尺餘の大太刀打振り〳〵、大勢に渡り合ひ、數刻を移し戰ひしが、能き敵の首を取り、立歸らんとせし所に、城中より黑革威の鎧に、星冑に鹿の角打ち、七つ道具を輕々と背負うて、大長刀を横へ、箕浦を目がけ踊り出でたる其骨組(こつがら)、傳へ聞きし齋藤の武藏坊が、再來かとぞ見えにける。餘りに強く追懸けて、名乘も敢ず切結ぶ。箕浦些とも驚かず、大長刀を受流し、左に撥ひ右に逼り、前に當り後に廻り、少しも亂るゝ兵法なく、張良と樊噲が出逢し昔も斯くやらん。今日の軍の花なるはと、數萬の軍兵、固唾を呑んで見物す。互に勝負も見えざりしが、難なく城兵を切倒し、首かき切つて靜々と、本陣指してぞ引きにける。適れ手柄

とぞ見えにける。原傳三郎は聞ゆる精兵の手利、實に梢の猿をも泣かしむといふ程の名人にて、向ふ敵を五六人、時の間に射臥せたり。城兵少し白む所を、淺野喜七郎・伊藤八左衞門、引く敵に追續き、城戸口に駈付きけり。然れども敵兵城戸を早く閉ぢしにより、塀を乘らんと一番に喜七郎、續いで伊藤八左衞門・同又兵衞三人、乘越し戰ひしが、思ふ程働いて、一所に討死をぞ仕たりける。爰に三州の住人林水右衞門、乍ち城戸を打破り、味方の軍兵を押入れて、乘取るべしと切破るを、城兵爰を破られじと、穗先を揃へて突かゝり、入れじとす入らんとす。揉みに揉んで躍纙しが、水右衞門手を負ひば、齒嚙して引退く。友松彌五左衞門、能き敵を突臥せて、首を取らんとせし所に、城兵、味方を討たせじと、透間もなく、友松を礑と斬つて打倒す。されども甲を徹さねば、友松頓て起上り、難なく敵の首をとる。危ふかりける勝負なり。斯くて數刻の戰に、城兵次第に討死し、或は手負ひて働き得ず。浩る所に佐佐忠右衞門が家の子に、杉浦源之丞といひし者、能き敵もがな引組んで、功名せんと心懸け、八方に目を賦り、暫く徘徊する所に、敵の大將彥右衞門、運命こゝにや縮ま

りけん、杉浦に渡り合ひ、大將とは見知つたり、遁さじものをと切結び、柏原終に討負けて、杉浦首をぞ取りにける。城に殘る軍兵も、或は討たれ落失せて、巳の刻に落城せり。

郷戶合戰の事

黑田長政藤堂高虎等石田三成島津忠恒等と郷戶に戰ふ

斯くて岐阜の城後詰の壓として、黑田甲斐守・藤堂佐渡守・田中兵部大夫・戶川肥前守等、威儀堂々として、川より東に陣を張る。時に石田・島津・備前黃門、岐阜の後詰として數萬騎を引率し、郷戶の宿まで押來つて、河を隔て、西岸に控へたり。東軍の生駒正俊・寺澤廣高・桑山相模守・村越兵庫等も、此由を聞きて馳來る。然れども郷戶の河水漲りて、歩行渡なり難くして、途を失ふ處に、田中熟思案して、家人野村を近付け、潛に私語く樣、何國如何なる大河にても、淺瀨は必ずあるものなり、此邊の郷人に、金子を取らせ語らひて、淺瀨の案内させよとありければ、野村聞きて、御了簡至極せり。藤戶といひし海だにも、淺瀨はありしと承る。追付け尋ね參らんとて、

加賀島といふ鄕へ行き、此彼尋ぬれども、家は多くありながら、人曾て見えざれば、兎や角やと駈廻り、梅が寺といふ禪院に立入り、住僧をこしらへ濟して、淺瀨の通りを見屆け、郎等一人走らして本陣へ內通す。同中大に悅喜して、陣所を引取り駈出し、加賀島の方へ押廻し、廿餘町河上の淺瀨に至つて人馬を越し、向の岸に駈上る。黑田此由を聞付け、人に先を越されし事、安からぬ次第かな。同じ瀨越さんも無念とて、十町ばかり河下に至つて、息卷く馬を馳込めば、思はず淵に乘掛り、已に危く見えしかども、長政些も騷がずして、引立て〳〵游すれば、殘る軍勢是を見て、飛込み飛込み渡しけり。藤堂も追續いてぞ渡しける。此河の先陣ぞと、大音揚げて名乘りかけ、鄕戶村の西の方へ押廻り、三成が胴勢に橫合に駈入りければ、藤堂・田中も續きたり。西國勢是を見て、馬の足を立兼ね、色めく氣色に見えける處を、小西・島津等麾を取つて下知をなせども、石田が軍勢、後陣よりひた引きにぞ崩れける。東國勢一同に鬨を作り掛け、餘さじと追つて行く。三成が小軍將松江といふ剛の者、殿して道筋を引退く所に、田中が兵辻勘兵衞と名乘りて、松江と暫し戰ひしが、終に辻

が爲に突臥せられしを、松原善左衛門、走り翔つて頸を取る。黒田は自身追かけて、三成が勇士渡邊新之助を討取りけり。大將の、我れと手を碎きて、强敵を討ちしこと、莫大の功名なり。又木村九兵衛は、堤を漸く經廻りて、大垣へ退きけるを、三成・黄門麾を振つて、敵は小勢ぞ。返せ〳〵と下知すれども、耳にも更に聞入れず、大垣指して敗北す。其勢に乘じて、追懸け〳〵討捨てけり。鄕戸川より呂久の川の畔まで、切捨てたる死骸は、幾干といふ數知らず、人塚をぞ築きにける。東國の軍兵は、大河を越して攻掛るを、西國方の將卒等、一支も支へ得ず、皆追討にせらるゝ事、薄運のなす所とはいひながら、淺ましかりける事共なり。藤堂が追行く先、呂久川の東に、宮田鄕とて、太神宮の境内と號して、里人搔上を構へ居る其所へ、落武者二三人駈込みしを、藤堂見付けて出せといふ。左樣の者は來ずとて、内より鐵炮を打出す。扨は三成に組したる奴原なりとて、逆茂木を引破り駈入りて、老若男女一々に、殘らず斬つてぞ捨てたりける。

岐阜落城の事

岐阜城を攻む

爰に八月廿三日、河瀨左馬助は、秀信に隨ひて、砦より引取りて、本丸に楯籠る。木造左衞門・津田藤右衞門・同息藤三郎・百々越前父子は、追手の七曲口に於て、身命を捨てゝ防戰すといへども、寄手緊しく攻上るに依つて、引かんとするも自由ならず、返し合せ、今日を限りと勵み戰ひけり。其外岐阜方に名を得たる大岡角助・同角内・伊藤長八・和田孫太夫・木田彌左衞門・大野善八・飯沼十左衞門等、勇を振つて防戰す。福島・長岡・加藤一所に馳寄り、ともぐ\諸軍勢に下知をして、坂口より、武藤が砦の間へ咄と寄せて、駈入れば押出し、押出せば駈込み、死して骨は曝すとも、引きて名をば汚すなと、我人互に恥しめて、微塵になれと攻め戰ふ。福島の先手同姓伯耆、眞先に進んで高名す。城兵津田藤三郎、血氣盛の若武者、殊更家名を下さじと、諸人に拔んで踏止り、粉骨を竭して相戰ふ。長岡が軍兵幸田次郎助、能き敵ぞと目に懸けて、互に名乘りて挑みしが、幸田遂に討死をぞ仕たりける。同郎等柳田牛助、適れ敵

もがなと窺ふ所に、生駒平三郎と名乘りて、是も敵を待つ體なり。柳田透さず駒駈寄せ、平三郎と渡合ひ、暫が程戰ひしが、互に鑓をからりと捨て、捜組んで上になり下になり、半時ばかり揉合ひしは、二つともなき見物なり。何とか仕たりけん、兩方組手を放たずして、遙の谷へ轉び落つ。敵も味方も身を悶え、あれは〳〵と喚べども、何とすべき術もなし。岩の稜古木の杭に打付けられ、餘多の疵を得て、精力や竭きにけん、兩人ながら谷底に、如狐々〳〵と立並び、溜息ついて居たりしが、柳田力や勝りけん、亦運命やよかりけん。終に生駒が首を取り、本陣指して歸りしは、危ふかりける勝負なり。又長岡が勇士澤村才次郎とて、鎗取つての名人あり。敵の中島傳右衞門は、大勇力の大男、又澤村は色白く、細たれたる小男なれば、切結ぶ其形勢、鷙に雀鷯を合せなば、斯くやあらんと見えにけり。澤村が味方共、此有樣を危みて、心を傷め息をつめ、身を揉んで礬へけり。長岡遙に此を見て、拳を握り齒嚼して、如何あらんと思ふ處に、澤村鎗を取延べて、敵の胸板をしたゝかに撥と突く。されども敵の大男、札よき鎧を、二領重ねて着たる事なれば、大石抔を突く如く、槍の穗先五

六寸、無手と折れてぞ飛んだりける。澤村槍を投捨て、走り入りて引組みけるが、中島は聞えし大力、事ともせず、矢場に取つて引伏せしを、澤村早態手利にて、倒れ樣に中島が脇壺を刺徹し、刎返して其儘に、起しも敢ず首をとる。珍らしき勝負なり。福島が勇士大橋茂右衞門は、多勢の中に破つて入り、腕も折れよ刀も碎けよと薙廻り、功名をぞ盡しける。又福島が扈從に、星野亦八郎といひし者、能き敵と引組んで、首を取つて持ちけるが、肘の力や疲れけん、谷底へ取落す。味方の者共是を見て、惜しやといへる人もあり、又傍には馬鹿などと、嘲笑ふ族もあり。敵方の輩は、苦笑するも多かりけり。亦八郎是を聞き、首が乏しきものかとて、敵陣に駈入りしが、先に勝れる頸取りて、本陣に歸りしは、類稀なる功名とて、初め笑ひし輩も、稱歎せぬはなかりけり。此時に至つて、流石武藤も爲方なく、本丸に取上る。秀信の旗本にて、名高き津田藤三郎も、輝政の手へ生捕られ、又福島が兵卒に梶田新助とて、器量も人に勝れ心も剛にて、力は國に比なき大勇猛の溢者、敵五人に渡り合ひ、二人は乍ち首を取り、一人に手を負はせ、今二人の奴原を、手取にせんと勇みけるが、其勢に辟易

して、息をもつきあへず逐電す。浩る所に木造が手勢百人計、七曲より突いて出で、追手の山口にて防ぎ戰ひけり。其中に奥山といふ者、保元の爲朝、建武の本間にも、劣らぬ程の精兵なり。重藤の弓四人張に、十四束の大矢を、小山の如く積重ね、群る寄手を的にして、はらり〳〵と射放す音、時雨につるゝ玉霰、板屋を打つに猶過ぎたり。此箭に當る寄手の勢、或は疵を蒙り、又は當座に死するもありて、暫く進み得ざりけり。七曲は福島と長岡、水の手は池田兄弟・一柳監物、此手は本丸に近き故、井川通を攻上る。偖四方より一同に、凱歌を作り、金鼓螺貝を吹鳴らし、喚き叫ぶ其音は、山河に答へて震動す。福島が郎等、勇力人に勝れしが、城中に駈入らんと進む所を、入立てじと突出す鑓を、被上げ〳〵、拔け泳つて組討す。吉村又右衞門は、出丸の新櫓へ打入りて內を見れば、敵數十人、矢種をば射盡して、打物拔いて控へたり。吉村と名乘りかけて、梯を堅め居る所に、松原自閑といふ法師武者走り寄つて、吉村に辭をかけたれば、吉村彌勇をなし、差物を拔持ちて、櫓の狹間より振出し、大音揚げてぞ名乘りける。長尾隼人逸早く堀に着きて、已に塀に乘らんとするを、郎等に內

野平左衞門とて、早業に名を得し者、早速塀に乘りしかば、己が手を差下して、主人長尾を引上げんとす。隼人怒つて色を損じ、汝を賴み城を乘取らんかとて、則ち塀に飛揚りたり。其後二の丸の門前には、諸手の軍勢數千人、我も〳〵と馳集りて、本城へ押詰めんとぞ勇みける。又京極修理亮高知は、荒神の洞より攻上る。輝政は、正則が攻口に押寄せんと、町口まで至るに、其折節正則は、總構の土居に上りて、輝政が押來る手前の民屋に火を罹けたり。之に依つて輝政が軍勢、煙に咽んで進み得ざる故、桑木原に行廻り、長原川の邊に出で、水の手より攻上る。諸手の軍勢、既に本丸にぞ乘入りける。然る所に澤井左衞門・森勘解由、木造と舊友たるに依つて、方便を廻らし參會を遂げ、種々に諫めて和を調ふ。其節に秀信は、既に自害に及ばんと覺悟ありし所に、正則制止して申されけるは、古より以來、三國の軍を考ふるに、或は數日數年挑み戰ふといへども、既に難儀に及ぶ時、大將敵に降せし其例、勝げて計ふべからず。是全く命を惜みて然するに非ず。何とぞ命を存へて、家系を續がんと思ふにあり。向後志を翻し、無二の忠懃を懐かるゝに於ては、君も聊御疎意ある

織田秀信和を乞ふ

まじきなれば、本領安堵あらんに於て、何の仔細か候べき。能々取繕ひ申すべきの條、御意易かるべしと、辭を盡して諫め申されしかば、則ち自害を止めらるゝに依つて、多くの人を差副へて、淸洲にぞ送りける。光氏は昔の筋目を忘れず、扈從十四人、降人の法として、帷子一重にて御供す。新加納村の一向宗の道場へ入らしめて、三重に柵を振り、多くの武士共圍繞して、警固緊しく勤めけり。されば往古呉王、會稽山に勾踐を捕へて、呉國の獄屋に籠居せしめし景迹にも勝れりとて、本家老ども、周叔・酈生に習つて諫めし言の葉を、懐しく思ひ出し、涙の隙ぞなかりける。然りといへども武士の心緒、今度の籠城に、高名したる侍共を召出し、各感狀を與へらる。浩る折に臨んで、忘却なきを以て推量るに、富貴不レ淫、貧賤不レ移、威武不レ屈といへるに近き所あり。其人數は侍卅六人、並に三成が加勢河瀨左馬助・大西善右衞門、彼是卅八人なり。武藤助十郎・足立中書・齋藤等は、合戰半の程に、多人數にて長良河を打越え、北の山の手へ退行きて、落着も知る人なし。今度敵味方の討死、或は河に溺れて命を失ふ者、幾千萬といふ數を知らず。今日如何なる日ぞや、慶長五年庚子八月廿

三日、午の刻に落城せしこそ哀なれ。

赤坂定御陣所事

六韜に曰く、夫將の言はざる所にして、而も守ることある者は神なり。見ざる所にして、而も視ることある者は明なり。故に神明の道を知る者は、野に衝敵なく、對するに立國なし。八月廿三日、東國の軍勢整々として、赤坂迄勇み進んで押詰めたり。爰に藤堂玄蕃、赤坂の町へ一番に乘入れ觸れけるは、農人女童に至る迄、少しも〳〵騷ぐべからす。此所異儀なく抱へらるべきと下知し、安堵せしめ、放火の印として、古家二三軒壞ちて、町の東に於て燒立てたり。百姓等此觸に安堵して、親に逢ふの思ひをなしたり。昔漢の高祖の函關に入り、咸陽に至つて民を撫育せしに、萬人魚の水を得たる思ひして、沛公を拜したるとかや。偖八月廿四日より、諸將段々に、赤坂に至つて陣所を定めらる。赤坂の町の南に、三町四面の小山あり。御本陣を岡山に定め、要害を構へ、中山道の北の山の手は、藤堂佐渡守高虎・黑田甲斐守長政・加藤左

馬助嘉明・金森法印・同出雲守・筒井伊賀守、飯村口は長岡越中守忠興、大塚山は福島左衞門太夫正則、勝山の北は、井伊兵部少輔・本多中務大輔・京極修理亮、西牧野は、堀尾信濃守・山内對馬守・淺野左京大夫、荒尾村は、池田三左衞門・同舍弟備中守、長松村は一柳監物、東牧野は、有馬玄蕃頭・中村彥左衞門、磯部森は田中兵部大輔、勝山の丑寅の方は、松平下野守忠吉卿の御陣所なり。其外諸軍所々に陣を張る。凡廿餘町とかや。大垣の城並に南宮山に向うて、八月廿四日より九月十四日までの對陣なり。右の外野上邊には、九鬼長門守・本多出雲守・津田長門守・同河內守・織田有樂父子・寺澤志摩守、何れも堂々たる屯の裝、敵の構緊しくして、假令金城湯地なりとも、攻干しつべき分野なりとぞ見えにける。此事內府君聞召し、御悅喜淺からず。則ち羽檄を以て、諸將を謝し給ひける。其文に曰、

急度申入候。去廿二日萩原之渡同小越被乘越之由、殊翌日岐阜可見相働之旨、井伊兵部少輔・本多中務大輔申越、尤存候。其元何樣各御相談無越度樣御肝要候。出馬之儀聊無油斷候間、可御心安候。猶追々御吉左右待入候。　恐惶謹言。

八月廿五日　御判

清洲侍從殿
吉田侍從殿
淺野左京大夫殿
黑田甲斐守殿
加藤左馬介殿
丹後宰相殿

相次で加藤源太郎を御使として、駿府より御書到來の事、其文に曰、

態以加藤源太郎申候。今月朔日至神奈川出馬申候中納言使者歸候趣、具承候。樽井御陣取尤候。今迄之御手柄共難申盡存候。此上我等父子御待付候而御働尤候。委細口上申候條不具。恐惶謹言。

九月朔日　御判

清洲侍從殿

吉田侍従殿

石田軍記卷之八終

石田軍記卷之九

江戸黄門君從ニ武州一御進發の事
附內府君御書賜ニ淺野長政一事

秀忠江戸進發

去程に上方の吉左右を、追々上聞に達しければ、黄門君彌御機嫌宜しく、巍々たる御旅裝にて、三萬餘騎を引具し、山陽道を發軫し給ひけり。相從ふ人々には、榊原式部大輔康政・本多佐渡守正信・大久保相模守忠隣・酒井左衞門尉忠次・眞田伊豆守信幸・仙石越前守忠俊・石河玄蕃頭康長・日根野筑後守吉重・森右近大夫忠政・牧野右馬允貞成等、此外御旗本大小となく供奉せられけり。爰に淺野彈正少弼長政は、誤なくして甲州に蟄居し、伐木丁々として山更に幽なりといひし、崔士が昔に準へて、干あへぬ袖の涙に月を浮べ、飛華入レ戸笑ニ牀空一と作りし李白が獨寢し夜の床に、華を怨む

る折柄、慮らざるに、內府君より羽書を下さるれば、夢の覺めたる心地して、便ち拜見し奉る。其文に曰、

書狀令披見候。仍濃州表去廿二日越川及一戰刻、討取數千人、翌日廿三日乘破岐阜、不淺一人討捕之由注進候條、來朔日可令出馬候。中納言中山道相働候條、御同道候而、御異見賴入候。今度左京大夫殿、瑞龍寺砦卽時被乘崩、無比類御手柄候。可爲御滿足致推量候。猶期後音之時候。恐々謹言。

八月廿八日　　御判

淺野彈正少弼殿

此に依つて長政は、黃門君の中山道御發駕をぞ待ち居たりけるに、黃門君は路次の軍兵、星月の爛々たる如くにて、今度召出され、最御懇の上意なりしかば、一眼の龜の浮槎に逢ひたる思ひをなして、拜謁をぞ遂げ奉りける。

濃州赤坂御着陣の事

慶長五年九月朔日辛丑、內府君其勢都合三萬二千餘騎にて、武城を御出馬あらせ給ひ、同十日に尾州熱田に御着陣なり。十一日には、淸洲にて御逗留なされ、上方出張の儀、前後の縮を仰付けられ、石川長門守を、淸洲の城には殘し置かる。是は前後の軍中に、事を通ぜんが爲なり。十三日岐阜に着御、十四日木田の舟渡、莚田郡の道筋を經給ふ所に、安八郡八條村の瑞雲寺とて、禪院の住僧柹一篭、路次に迎へて獻上せられけるに、公は則ち大垣こそ一番に手に入れとの仰ありて、御機嫌淺からず、御近習の御小性に奪取らさせ、呵々と大笑ぞ遊しける。彼等には褒美として、田地を寄附あらせ給ふ。今濃州の柹寺とかや聞えし。同日午の刻計に、赤坂の岡山にぞ御着陣なる。又其時分、岡山を勝山と改め給ふ事は、昔淸見原の天皇、大伴皇子に襲はれさせ給ひし時、此所に合戰ありて、終に天皇勝利を得給ひ、御卽位の後に、此岡山を勝山にせよとの勅詔をぞ下されけるとかや。彼秦の始皇、秦山より下り給ひける時に、風雨を樹の下にて休め給ひし其賞に、樹を封じて五大夫となせしとなん。山樹相比して、今思ひ合せけり。然るに後の世に至つて、其敕詔を呼ぶ者なし。今般

彼來歷を思召出さるゝに依つて、勝山と改められしこそ、故實の簡篇まで、御志の深からせ給ふと、僧俗諸將に至り、何れも感涙をぞ流しける。

笠木村合戰の事 又福田繩手迫合ともいふ

赤坂御着陣に依つて、樣子を窺はんとて、石田三成・黄門秀家、九月十四日未の刻に、大垣より出でにけり。其刻敵出でて杭瀬川を越し、刈田する所を、中村彥左衞門一榮が備より、竹田三郎兵衞駈出し、刈田の者二人、鑓にて突伏せ駈廻る處に、鐵炮に中つて、竹田則ち死しにけり。是を見て若き者共、思慮もなく柵を破りて馳出づるを、野一色賴母・藪内匠兩人駈出し、川を越すべからずと下知すれども聞入れず、早川をぞ越したりける。其時敵兵駈出で、頓て合戰こそ始まりけれ。有馬玄蕃頭の郎等稻次右近、鳥毛の上に半月付きたる差物にて河を乘越し、石田が家人横山監物と、馬上にて槍を合せ、暫が間迫遇ひしが、互に勝負なかりしかば、兩方下立ちて無手と組む。何れも劣らぬ大力、齒を切つて力を出せば、鬼神の如くにぞ見えけるが、如何

とかしたりけん、右近下になる所を、若黨すかさず駈寄りて、監物が綿嚙取つて引返せば、右近上になる處を、監物が若黨又駈來りて、主をば助けんとせしにより、雙方の若黨礑と拔合せ、火花を散らし相戰ふ。其所へ堀尾信濃守が緥の者、忽然と駈寄せて、味方の右近が若黨を、一打に斬伏せて、頸を取持ち來り、御帳にぞ付けにける。右近は遂に監物が首を取つて手に提げ、同じく若黨が頭をば取付に付けつゝ、味方の陣の前をば、馬上にて打通りしは、器量しかりける働なり。偖首二つ持參して、御帳に付く刻に、右近申しけるは、我等より先立つて、頸一つ持參の者候ひつるかと尋ぬれば、堀尾が緥の者、頸一つ持參といふ。右近聞きて、其首は某が若黨の頸にて、味方討に候へば、御帳消させ給はれといふ。其旨言上ありければ、則ち上聞あつて、消さずとも置くべし。敵味方見分難き砌には、假令味方計なりとも、高名たるべしと仰下さる。堀尾が母衣の者共此由を聞傳へ、敵味方見分けざる卒爾至極の輩を、我々組には入れまじく候。若し其儘に差置かれ候はゞ、殘る九人の者共は、緥差上げ申す由理を立つるに依つて、堀尾尤と得心して、彼者に於ては、緥さゝせじとの落

着にて、首尾能く事を相濟し、扨彼者には加增して、足輕をぞ預けゝる。又有馬家には、右近を家老とし、俸祿重く與へつゝ、壹岐守とぞ改めける。其已後島原一揆の時、討死をせしとかや。天下分目の軍中にて、功名比類なかりしが、纔の一揆に身を亡す事、運に乘じて仇を碎くに、勇者に非ずといふ事なしと、吉田の隱士が書置きしも、實にもとぞ覺えける。偖又成田平左衞門敵中に駈込み、數多の敵を討取りしが、大勢に取籠められ、快く討死せしを、三成が郎等猪尾甚太夫頸を取る。爰に野一色賴母は、三成が軍勢彌重み來つて、味方崩るゝを見て、飾繩目の筒丸五枚冑に鹿の角を打ち、五寸許の馬に騎り、金の三幣の差物に、鳥毛二團子の馬印を、河より東に押立てゝ、藪內匠に聲を掛け、味方餘りに見苦しゝ。何として返さぬぞと、荒々しくいひけるを、藪聞きて、深手を負ひぬれば、其義叶ひ難し。貴邊返されよといふ處に、渡邊小膳・高屋九兵衞、此等は振能く駈廻り、手柄を顯はすといへども、惣崩にて引退く。其中に矢野助之進、林文太夫二人、赤母衣掛け取つて返す時に、梅田大藏深手負うて退き兼ねしを、文太夫助けんとす。助之進是を見て、梅田をば助けんよりは、此

大勢を防げといふにぞ、文太夫尤とて、敵の中へ破つて入り、火花を散らし戰ひけり。佐藤與三・同六藏兄弟の若黨共、引添うて働き、大勢を追拂ふを、公御覽あつて、大事の前の小敵、早く引取れとの仰にて、御使番馳來り下知ある時、助之進・文太夫、此所を兩人に御任せ下され候へと申して引取りけり。野一色は祕術を盡し戰ひて、大勢に渡合ひ、數多の敵を討取りて、少時息を休ぎ、駈合さんとする所に、馬を沼田へ乘込み、進退途を失うて辟易する折柄、宇喜多秀家の軍兵に、淺賀三左衞門馳來り、馬上にて打合ひしが、終に賴母を討つて、首をぞ取つたりける。其外兵卒共、馬を深田に乘込んで、馳引自由ならずして、討死せし者數知らず。公聞召されて、何とて斯樣の小節に泥んで、勇士を失ふ事やあると、勝山より軍使を以て制し給ふにより、味方皆引退けば、敵も繰引にぞ引取りける處に、石田が軍士林半助、宇喜多が家の子稻葉助之丞兩人は、殿して甚だ勇を振ひし形勢を、公遙に御覽じて、褒めさせ給ふと聞えけり。今度笠木の合戰は、大垣勢の勝利なりと評判ある故、討取る處の首卅二級、舍那院の前に梟首せり。其節世人沙汰せしは、三成假令勝利ありとも、終には運を開

くべからず。其故如何となれば、今度の首ども實檢に付きて、不思議の妖蘖ありけるとぞ聞えし。天眼・肉眼・佛眼の三種は定まる事なれば、聊以て異論なし。然るに笠木の合戰にて討取りし首共を、秀家・三成實檢の時、睛を轉ずる首もあり、或は笑ひつ、又は睨みつ、種々樣々の惡相あり。三成揆と驚いて、傍の者共に、あれ見よと示せども、他の者の眼には、替る顔相一つもなく、只三成が目にのみ見えしとかや。三成大に不快して、家中を殘らず呼集め、今度の大事、一向に面々賴入るの條に、心なく忠を勵まし、高名を遂げられよ。恩賞厚く施すべし。則ち約の爲にとて、盃を座中に置く。其時老臣勇士等、左右に辭讓する所に、生國濃州安八郡青野村の住人林半助といひし者、進出でて申す樣、末座の推參、其恐甚だ多しといへども、武門に於て其例なし。合戰の期に至つては、一番に此半助、鑓を合せ申さんと廣言して、三成が盃を眞先に頂戴す。餘に傍若無人とて、傍の人々目を見合せ、尤是を憎みしが、果して過分の働して、敵味方に譽められ、而も生國の境にして、其名を稱揚せらるゝ事、武士の本意といひつべし。

信州上田合戰附伊豆守簾中家中の人質取る事

秀忠、眞田昌幸幸村を攻む

眞田安房守・同息伊豆守・次男左衛門父子三人は、野州小山迄は公の御供申せしが、上方の蜂起を聞きしより、安房守・左衛門佐二人は、俄に思案を廻らし、居城信州に立歸り、上田の城に楯籠り、敵の色をぞ立てにけり。黄門君聞召され、さあらば今度上方進發の序に、安房守を退治して、軍神を祭らんとて、數多の勢を引率し、信州上田に赴き給ひ、城邊を放火し、田を刈らせらる。城中より兵を出して、追はんとせし所を、牧野右馬允成定が兵向うて相戰ひ、城中へ追入るれば、城兵又突いて出で相戰ひ、互に勇を爭ひけり。一二の門の間にて、依田兵部・山本清兵衛・齋藤佐太郎追出し追入れ、身命を抛つて相戰ふ。又黄門公の御近習中山助六郎・太田善太夫・御子上典膳・朝倉藤十郎・辻太郎作・戸田半平・齋藤久右衛門等、各鑓を合せて功名す。鎮目市左衛門之に並んで力戰す。大久保・牧野が軍兵ども、殊に勝れて相戰ふ所に、兩將時分は能きぞとて、軍勢を引入れければ、其より後は、遠巻にして之を守りけり。爰に信州

沼田の城主眞田伊豆守信幸は、本多中務の壻にして、東軍無二の忠臣たり。さるに依つて親子兄弟、骨肉の思ひを離れ、黄門公に奉仕して、上田の寄手に向ひけり。然る所に伊豆守の籠中、沼田の城に居て思はれけるは、親安房守の居城を、子として攻むる事なれば、家來の者の其中に、若や心變りする輩もあらんと了簡し、信幸出張あつて後、宿老共の妻子の方へ、使を以て申さるゝは、何れも殿の御留守にて、嘸徒然に在すらん。此方とても然なれば、登城あつて諸共に慰まれ候へと、慇懃の音信ありしかば、忝しと了掌し、各頓て參りしを、種々樣々に饗應し、局を以て申さるゝ樣は、迚も自への奉公なれば、殿の歸らせ給ふまで、是にて遊び給はれとて、一人も歸さずして、人質に留め置く。此由上田へ注進ある。伊豆守之を聞き、大悅あるこそ斷なれ。實にも勇者の娘かなと、皆人感を催しける。されば大明の萬曆の頃かとよ。列國の諸侯互に國を爭ひ、地を屠らんとして、合戰更に止む日もなし、之に依つて武に達し、文に明なる士を覓むる事專なり。其頃吳郡の旁に、韓忠・韓丁とて、父子の者ありしが、一鄕の主たり。父は劒術を好んで武名あり。子は文學を嗜むのみなら

す、勇功も世に隱れなし。妻は林氏にて、容顏美質の貞女なり。或時並の敵國より、爵祿を重くして、父の韓忠を招きしかば、國恩を忘却して、忽ち自君の讐敵となりし、心の中こそ薄情けれ。然れども韓了は、彌節義正くして、國主にこそは仕へけれ。斯くて韓了は、征役に隨つて遠境に立越え、月日を送りけり。其跡に殘せし宗臣に、呂伯高といふ腐儒ありしが、蘇秦・張儀が流を汲み、權謀を嗜む癖者なり。韓忠竊に此者を誘引して、韓了が跡に殘せし臣僕を、呼取らんとぞ謀りける。伯高則ち賄賂に耽つて、傍輩を勸むるよしを、韓了が妻聞及び、さらぬ體にて伯高を近付け、微淫に私語ごとして方便る樣、其方も存知の通り、我夫韓了は、永々遠境に役せられ、疲勞尤甚しく、殊に頃日に至つては、味方の軍利なきに依つて、晝夜心志を傷ましめ給ふ故、餘命の程もあるまじと、人傳に聞きつれども、其程まではよもあらじと、思ひ流して暮せしが、此程君の消息にも、二度此世に逢見ん事、萬が一つもあらじとて、世歎かしき文の中、見るに心も露の身も、消ゆる計に思へども、あの嬰子を育みて、世にあらせんとのあらましに、難面斯くて侍るなり。恥しながら夫に付き、思ひ籠め

たる密事あり。必ず他人に泄らされなよ。右の次第にあるなれば、追付け君は死去あるべし。今一應其左右の、あらん時に至りなば、我身貴邊の妻となりて、此所を相替らず持堅めんと思ふなり。同心に於ては、急度盟を立てられよ。我又共に誓はんと、涙ながらにいひければ、伯高心の內に笑を含みて、悅ぶ事限なし。之に依つて伯高、只今までの逆心を翻し、諸臣に一々諫言して、城郭を守衞しつゝ、死去の左右を、今日やある、明日やあらんと待ちける處に、韓了如何にも恙なく、肥膚圓滿にして歸りしかば、妻件の趣を、委細に語り聞かせけり。韓了大きに怒つて、則ち伯高を磔にし、三族を刑しけり。是れ林氏が智略にて、叛逆すべき兵卒共に、却て忠を盡さしむ。適れ希なる賢女やと、萬人稱譽せしとかや。今の眞田の簾中も、爭か是に劣るべき。

斯くて黃門公の御前に、本多佐渡守・大久保相模守召されて、御密談の上、上田の壓として、信州河中島の城主森右近大夫忠政を殘し置かれ、公は夜を日に繼いで、木曾路をぞ御進發あられける。

會津合戰の事

さる程に會津の宰相景勝は、奥州と下野の堺なる、白坂より白河の城まで、革籠が原を合戰場に拵へ、行程二里が間、竹木を伐拂ひ、要害堅固にして待懸けたり。亦信夫郡福島の城には、栗田・青柳此外會津牢人三百餘騎に、岡左内・富田將監を組頭として、宿城を預け置く。仙臺口柳川の城には、須田大炊助に、加勢車野丹波百騎にて楯籠る。白石の城には、甘糟備後を籠置かる。其中に此城は、正宗手先の城なれば、正宗より間者を入れ、無窮の智謀を巧にして、甘糟をぞ謀りける。備後が舍弟の式部、途に其謀に落ちたりけり。備後は是を夢にも知らずして、會津へ行きし隙を窺ひ、正宗透さず軍兵を出して、火水になれとぞ攻めたりける。式部何かは耐るべき。匃匐を出で引退けば、片倉小十郎請取つて、彼城に入替る。其競に乘じ、國見峠を打越えて、信夫郡に駈出し、柳川の城を壓へさせ、正宗は二萬餘騎にて、福島表へ出張して、軍をぞ備へける。正宗の伯父伊達安藝守重實只一騎、物見に出でて、城中抱の

伊達正宗白石城を陷る

兵士の假名實名能く聞きて、早速に引取り、翌日正宗の旗先を驅通りて進みけり。會津浪人岡左內・青柳新兵衞・才野伊豆入道・永井道存・渡邊右衞門・北川傳兵衞・同土佐・鈴木彥九郞以下五十騎計、福島の城より一里程取出でけるが、正宗の軍勢五千は、柳川の城を歷へ、一萬五千の軍兵は、福島へ出づると聞きて、取る物も取敢ず、福島へ引取りけり。其中に右八人の浪人は、敵大軍なればとて、旗の紋も、鎧の色も見分けぬ風情にて、引くべきかと、殿にぞ殘りける。引く敵を遁さじと、正宗自身働き出づるを、岡左內急度見て、適れ敵やといふ儘に、電光の激する如く飛掛つて、撥止と打てば、正宗少しも騷がず、受けつ流しつ勵みしは、項羽と魏豹が馬上の迫合も、斯くあらんとぞ見えにける。されども互に薄手も負はず、雙方へ引きたりけり。才野伊豆入道は、馬より切つて落されしを、青柳新兵衞、邊近く見ながらも、何とか思ひけん、助太刀打つべき氣色もなし。入道運や强かりけん、朱になつてぞ引きにける。されば雙方の諸軍勢、討死は一人も之なくして、正宗早く引取る故、會津方にも、爰をば引きて退きたりけり。福島の城內狹ければ、宿城の外に柵を振り、竹束を數多

付け、陣屋を掛け並居たりしに、岡左内が働を、景勝頻に褒美して、岡越後と名を改め、錦の羽織に、團扇添へてぞ給はりける。又柳川の城主須田大炊は、正宗、福島へ働く其留守に、押の爲とて差置きたる、五千の人數を拂はんと、城より俄に突いて出で、思ふ儘に追散らし、本陣にある所の旗幕を奪ひ取り、凱歌(ときのこゑ)を唖と揚げ、柳川指して引返す。其時西村千右衞門は、內幕をぞ取つたりける。正宗此事を聞付けて、福島表を早々引取り、刹那に馳來るといへども、須田城中へ引入れば、正宗も國見峠へ引退きぬ。其節正宗の後陣には、車野丹波足輕を掛けて、兵少々討取りけり。時に正宗の舅、三春の城主田村淸秋、伯父の伊達安藝守重實申されけるは、兩度の合戰、敵の利に似たり。此方へ白石の城を取るといへども、廻忠の者あれば、さまで武勇の威光にはなり難からんか。各の所存、如何に〳〵とありけれども、滿座の人々、兎角の儀もなき所に、侍大將木幡四郎右衞門進み出で申しけるは、御諚の趣尤に候。明日は某一分の勢を以て福島へ働き、敵を謀つて見申すべし。御許あれといふ。各尤然るべしと同じければ、翌日の早旦に、木幡百騎の手勢を隨へ、雜兵をば一人も連れず、

馬足輕の心掛と打見えて、福島の城邊まで、一向に働き寄る。岡越後是を見て、今日の大物見は物見ながら、心に武略を持ちたるぞ。此方の城中より楚忽に出づべからず。其仔細如何となれば、馬數も百餘騎なるに、僅に廿騎計にて、城近く物見し、殘る馬乘は二手になつて、三町北方に控へ、亦五十騎計は、五町程引下つて一手を殘す。是併し乍ら敵を誘引する方便なり。外張の木戸口を制して、他の組の者を一人も出すべからずと、鈴木彥九郞といふ若侍に云示す。彥九郞申す樣、さも候はんと存ずるなり。其上今日の物見の中には、是非に正宗・淸秋・重實三人の內の大將、一人あるべしと覺ゆれば、足輕を追拂うて、喰留め申さんといふ儘に、井樓を下りければ、越後も續いて下りにけり。廿騎の物見の武者共是を見て、二の手へ一つにならんと、身繕する所を、頻に鐵炮打かくれば、過半は足をぞ亂しける。彥九郞以下の駈武者、逸足出して追蒐くれば、木幡取つて返しつゝ、越後と槍を合せしが、暫勝負もなき所に、彥九郞馳寄り、脇鐙にて突倒し、則ち頭を取りにけり。大將已に討たるれば、殘兵早々引擧げて、乍に退散す。其時の褒美に、彥九郞を同苗にして、岡伊右衛門とぞ

名乘らせける。偖又直江山城守、會津若松の城に於て、景勝に申しけるは、今度内府公、下野國宇都宮の城に陣を移さるゝと申せども、白河表へ勢遣も之なし。上方の樣子をも、聞合し給ふと覺えたり。哀れ此隙に御免を蒙り候はゞ、出羽の山形へ押寄せ、出羽守を味方になし、根を堅くする謀を致さんと望みければ、景勝聞きて、勝利の上にこそ、根を堅くする謀にもなるべし。去ながら白河のみにあらず、越後の堀久太郎を先として、前田肥前守が、津川口より攻入るともいふなれば、會津の城下の合戰心元なし。如何思慮あるべしとありければ、直江重ねて申しけるは、白河表の事に於ては、御心易かるべし。内府公も、さまでの敵とは思召すまじ。唯假初に、勢遣もなさるゝかとこそ覺え候。第一追手なれば、白河の城をば、如何にも堅固に拵へて、一番の合戰は安田上總介、二番合戰は、島津下々齋と定め置かれし事なれば、是を以て御心易し。又津川口の事は、細道にして、重々嶮岨の惡所なれば、敵の武者遣、快くなり難き所なり。侍大將一兩人に仰付けられ、足輕の大組小組十組計り遣さるゝに於ては、何の仔細か御座あるべし。若し津川口の軍、難儀に見え候はゞ、山

形の城を仕寄に致し、早々引擧げ候べし。又は附城を構へて、手間取らざる様に引取り申すべしと、理を盡して申しければ、さのみ同心なきながら、宇野民部を呼びて、曜宿の日取を考へ、五日の中の吉日を選ぶべしと申付け、又杉原常陸を召寄せて、今度最上表への武者奉行たるべしと、三つの手組をぞ定められける。

石田軍記卷之九終

石田軍記巻之十

景勝攻二出羽山形・最上一の事

上杉景勝山形最上城を攻む

さる程に直江山城が勸に依つて、最上表を伐取らんと、先づ一番に春日右衞門、二番に芋川修理、三番上泉主水、其人數一萬二千、直江が旗本の後詰八千、都合其勢二萬と定められ、既に出羽國最上・山形の城へぞ押出しける。初は山の口より働き入るべし。道も廣く何の障もなくして、能き武者路なれば、然るべしとぞ定めけるが、中途より山へ掛りけり。其仔細を能く聞くに、山の手に付きて、幡屋・初瀬堂・やぢ境とて、山中に山形の枝城四箇所あり。初瀬堂の城主と、直江山城が魁首春日右衞門と知音なれば、城主より使者を以て、今度山形への働、御大儀に存じ候。然れば我等預り申す初瀬堂の城の事、御旗先を見申し候はゞ、早速相渡し申すべく候。山城守殿

へ、某儀も相違なく召出され候樣に、貴殿御取成し賴み奉ると申送る。春日此旨聞屆け、斜ならず悅びて、本陣に馳せ來り、件の樣子、詳に物語したりけり。直江聞いて祝着し、慇懃の返事をして、使者には過分の引出物を與へ、委細に書簡を認めて、彼使者に、此方よりも使者を添へてぞ遣しける。杉原常陸、此事を聞きて立腹し、直江が本陣へ時も移さず行向ひ、山城に申す樣、承り候へば、敵より內通候て、味方の御吉兆の樣に、下々取沙汰致し候が、實正にて候か、承り度候と、苦み切つてぞ申しける。山城聞きて、如何にも〳〵其通、此度發向、道途宜しく存ずれば、明日の勢遣、先づ山の上を差置きて、初瀨堂の方へ先手を差越され、尤に候とぞ申しける。常陸聞きて惣軍を率ゐて、初瀨堂へ廻らん事、然るべしとも存ぜず。春日右衞門一人、城を請取に遣され候へ。殘る人數は、片時も早く山縣へ押寄せ、根城をさへ攻落し候はゞ、枝城に於ては、假令如何程候とも、皆々自然に渡すべし。又爾道を考ふるに、上の山口より行くと、初瀨堂へ廻るとは、行程三日路遠く候へば、味方を謀に落して難所へ引入れ、手間を取らせて、其間に山形籠城の支度を、堅固に構へんとの事なるべし。是

れ赤松入道圓心が、播州白旗の城にして、新田義貞を謀りし其術に、行事は替るに似たりといへども、理は全く是れ同じ。是非總軍は、山形へ遣され候べし。山城聞きて、御武者奉行に候へば、唯今の思慮、尤には候へども、某も無理にといふにも候はず。枝城といひながら、敵の爲には不祥にして、味方の爲には吉兆とこそ存候へ。一城にても失うては、先づ後援の賴少く、勇氣も自然に緩む事も候へば、總軍を遣すべしとありしかば、其後兎角の異論に及ばず、軍勢一同に初瀨堂へ押詰め、春日組の四千を以て、ひた〳〵と取卷き、鬨を揚げければ、城中よりも只一聲鯢波を合して、鐵炮を打出す。內通ありし上なれば、互に鐵炮玉なし故、手負死人も曾てなし。其後城より降を乞うて無事を調へ、人質を取交し、難なく城をぞ請取りける。山城守此勢に乘じて、幡屋の城へ押寄せ、谷を隔てゝ根小屋をとり、幡屋の邊を巡見するに、城の廻りに、廣さ五町或は三町計りの湖水湛へて取卷きたり。山城守思ふ樣、此城豫て聞くにも似ず、適れ能き要害なり。去ながら此水は、山間を切塞ぎ、山川を堰止めたるかと覺ゆるぞ。若き者共行きて見よ。水の色、岸の體、巖の景を考へて、新古の

水を見辨けよとて、十人計り指南して、湖水の邊へ遣しけり。城中より是を見て、揚簀戸を押開き、數十人の兵水中に下漬り、互に仕掛合ひつゝ、既に鑓をぞ始めける。山城守之を見て、擧使を遣すといへども、事急に見えければ、使の武者も歸り得ず、敵味方下重なつて、大勢になりしかば、中々擧ぐべき樣もなし。浩る處へ上泉主水、見廻として直江が本陣に來りければ、直江申す樣、能き所へ來り給ふ。若者共を湖水の瀨踏に遣しければ、城中より出向ひ、喰留めたりと見え候。大儀乍ら參られて、武者を擧げて給はり候へと申しける。主水聞きて、異儀に及ばず領掌し、持鑓計りの形勢にて、早速に駈出し、馬より下りると、無二無三に槍を入れて突立てければ、敵味方諸共に、居着きたる者ども、一度に潑と立上る。主水早く人數を擧げて、既に引くよと見えし所に、又城中より二三百、加勢の人數を出しつゝ、擧げ行く武者を慕ひしかば、主水二三度小返して、追拂はんとせしかども、叶はずして、終に討死してんげり。敵兵是に利を得れば、勝に乘り、追討に多くの軍兵討たれけり。直江散々に仕付けられ、軍は明日と定めつゝ、念なくも引取りけり。杉原此由を聞きて嘲る樣、

一手の頭をも致さるゝ主水殿には、似合はざる事共かな。大將の下知にもせよ、輕輕しく只一人行きて、武者を擧げらるゝは、不覺の至りといひつべし。軍勢を引率し、一戰を初めて後、時分を見て追込みなば、幡屋は今日落居すべきに、返々も本意なさよ。誠に暴虎馮河して、死すとも悔なからん者には與せじと宣ひし、聖人の敎戒、彌肝に銘しけり。惣じて頭もする者は、如何にも萬端大事にかけ、諸式を物濃くしてこそは、味方に勝つもあるべきに、今日の軍の爲體、敵方の誤を、味方のかぶる者なりとて、頻に腹を居ゑ兼ねしが、其後湖水の邊に行き、彼方此方見廻りしに、新規に築きたる堤あり。偖こそといふ儘に、足輕を掛けて掘切れば、其夜に過半水落ちたり。拂曉に至つて武者を出し、手繁く城を攻めけるに、城中の軍兵等、昨日の合戰に數多手負ひ死しければ、殘兵は猶も疲れ果て、墓々しく防ぐ事もあらざれば、急急に攻入つて、其儘火の手を擧げにけり。所々の敵方是を見て、すは合圖の狼煙よと、谷の城境の城より、加勢を出して後詰をす。其時當手の者共は、丸居をも未だせず、徘徊する最中へ、突掛りたる敵勢ども、一羽も合せず敗軍して、我先にと落行く

程に、山城守旗本も、弱兵共に押立てられ、足もたまらざりしかども、前田監次郎・水野藤兵衛・韮塚理右衛門・藤田専右衛門等殿に殘つて、返し合うて戰ひし故、さまでの事もなく、淫くもつけず、一里計り退いて、直江武者を立てければ、惣軍も一同に、急度備を立て堅む。其より早々山形へ押すべかりしが、陣中に於て、種々の雜説ありし故、其儘會津へぞ引入れける。偖厥後に景勝は、結城宰相秀康卿・羽柴藤三郎、其外那須の輩と、數度の合戰ありしかども、何れ雌雄もなかりしが、終には和睦調へて、上洛せしとぞ聞えける。

內府公御軍評定の事

同日に內府君、諸臣を集め給ひ、軍の御評定ありて仰出させ給ひけるは、敵は大軍といひ、而も要害堅固の、大垣の城に籠る事なれば、凌雲の勢をなして、項羽が滎陽を襲ふの思あり。味方は小勢にして、而も假の陣館なれば、驍騎の憤を懷き、衛靑が隴西に屯するの時なり。若敵方より、今宵夜討を仕懸くる事もあるべし。是に駭いて、

此方より少しも手出しすべからず。今日繩手の迫合を見分して、急速に引かせし事、思ふ底心ありてなり。若面々存じ寄あらば、淵底を遺さず申さるべし。必々憚る處あるべからずとありける時に、井伊・本多進み出でて言上仕るは、上意の如く、敵は要害の城に居て、緊しく固むといへども、後は味方の地續に候なれば、關原の少し此方に、竹中丹後守が居城菩提が城と申して、小城にては候へども、足掛りも能く候へば、此所へ御遷座あつて、御本陣と定められ、御方の大軍を皆々山取りさせ、柵・竹手把を付けて要害を構へ、暫く上方手遣の術をも、御覽なされ候はんやと申上ぐれば、公委曲を聞召され、此儀尤然るべき方便なり。然れども今此陣を引取り、菩提の城へ人馬を入るゝ事なり難し。其故は、先づ大垣の城へ程近ければ、敵より人數を出して、此方の殿に喰付かんは必定なり。誠に李廣が匈奴の爲に、虜となりし折なれば、此事何より以て難儀なりとぞ仰せける。其時井伊直政申上げけるは、御諚尤に候へども、某が愚意には、大軍の御先鋒を、菩提の城近邊まで押詰めさせ、偖御旗本の御備を、此山の上に押上げて、山中を引取り、敵の氣を奪ひ候はんは如何。幸此山の上

より善提の城まで、徑路三筋あつて、道幅も廣く候へば、何ぞ一途に敵の略に當らんやと、明細に言上仕れば、君大きに御感あつて仰せけるは、東國の山ならば、鹿狩なんどの便にも、見置く事もあるべきに、上方筋の案内迄、委しく考へ置く事、實に弓矢の智識なり。諺に歌人は、居ながら名所を知るとやらんも、今其方が事なるべしと、深く褒感ましましくて、さらば昨日の如く一番鷄の時分に、關原まで推行くべし。此旨諸軍に急度觸れよとぞ仰せける。

三成從二大垣一出二張于關原一の事

斯くて石田三成思慮せしは、何とぞ智略を廻らして、東軍の思ひ寄らざる所を以て、攻め伐つに於ては、勝利を得ん事必定なるべしとて、栗原山の人數、並に關原表の軍勢に牒じ合せ、青野原へ打つて出で、一戰を遂げんとぞ計りける。是は古、吳・魏・蜀の三國、互に國を合せんとて、合戰止む日もなかりしに、或時魏の曹操、大軍を率して屯せし所に、蜀の諸葛孔明、不意を討たん其爲に、忍んで勢を押さんとて、士卒に

枚を含ませ、竊に多勢を引率し、敵陣を襲ひ、勝つことを得たりし其幄策を思ひ合せて、三成・行長・秀秋等、九月十三日の酉の刻より、各忍んで打出でけり。折節今宵は名にしあふ、月の名殘も打曇り、行先貞ならざれば、松明幽に燃しつゝ、栗原山の篝火を、通夜候にして、諸士には枚を含ませ、馬の舌を紙にて卷き、繩轡を嚙ませ、野口村の海道筋を直に經て、栗原山へ、亥の刻計りに、諸勢殘らず着陣す。三成先立つて、秀秋に面謁し申しけるは、內府既に赤坂へ參陣の間、靑野原へ打出で、一戰を遂ぐべきなり。先手に進發然るべきなりと示し合せけり。されば秀秋は、兼日より御味方に參るべき旨、內々公へ內通せし故に、晥と納得せし返答もあらざれば、三成重ねて申す樣、先手は某向ふべし。跡を賴み入るの由云捨てゝ、其より牧田の道筋を、關原へと急ぎしが、大谷に對面して、さりとは是非なき世の習、秀秋こそ叛逆の心ありと覺ゆるなり。貴邊何とぞ分別して、實否を試み給へと、拳を握つて申しけり。刑部大きに驚いて、秀秋を招き寄せ、丁寧に會釋ひ、其後大谷いひけるは、不思議の說を承り候故、定めて虛說とは存じながら、聊隔心なき處を顯さんが其爲に、斯樣に申し

候なり。抑唯今の時節に、左樣の事、如何なる事に候や。御一門の御中には、御器用の仁とこそ、太閤御所も仰せられし事ならずや。秀賴卿の御爲には、無二の粉骨を盡され、御忠節あらんこそ、天道の冥助にも叶はせ給ひて、世人の取沙汰も然るべく候はんに、如何なる天魔の所爲にてかと、辭を盡し淚を浮めて口說きける。秀秋具に之を聞き、否とよ、其は世の中の事を好む讒者共が、此秀秋に宿意あつて、左樣の風說するならん。吾身に於て露程も、思ひ寄らざる事ぞかし。少しも疑あるべからず。古孔子の門弟三千人の其中にて、十哲と名を稱せられし子路をさへ、季孫に讒せられたる例あり。況や濁れる末世といひ、其器は萬が一だにも、由に如かざる吾なれば、理と覺ゆるなどと、色々樣々陳じらる。大谷重ねて申す樣、尤さこそ候らん。去ながら諸人共の疑を、散ずべき爲なれば、誓紙をなされ候へとて、懷中より熊野の牛王を取出し、秀秋にぞ渡しける。秀秋心に思慮せられしは、神は非禮を受けずといへり。今三成が叛逆、是に過ぎたる非禮やある。我れ義旗に與する志、天道神明も爭か惡ませ給ふべき。忠義に身を全うせんには、千萬の誓紙にても書くべきもの

をと了解して、頻て認め見せられければ、大谷狐疑の心、氷の如く打融けて、軍の評定祕計迄、淵底をぞ盡しける。薄運の程こそ淺猿しけれ。大谷軈て立歸り、三成に對面して、斯樣々々の次第とて、誓紙を出し渡しければ、斜ならず悅びて、三成は曉方に、小關村へ參陣す。備前中納言は多勢故、行程少し遲々に依つて、夜明に及び、關原への着陣なり。

濃州關原合戰の事附東西諸軍備を定むるの事

關ヶ原兩軍對陣

赤坂の御留守には、堀尾信濃守を殘し置き給ひて、公は九月十五日の辰の上刻に、野上村の西、海道の南、桃配(もゝくばり)といふ山の原に、御本陣を据ゑさせ給ひて、御旗本は魚鱗に續き、鶴翼に備へられ、關原の町口まで、十二町先へぞ押出させ給ひける。扨其より九町程先へ、酒井左衛門の旗を打立てゝ、控へたり。先づ一番の備には、福島正則・京極侍從・藤堂佐渡守・有馬玄蕃頭・山内對馬守・田中兵部大輔、二番には黑田甲斐守・竹中丹後守・加藤左馬助・金森法印・長岡越中守・織田有樂齋・松倉豐後守、三番は下野

守忠吉卿・井伊兵部少輔・本多中務なり。御後備は、大須賀出羽守・本多丹下、馬物具太刀刀に至るまで、誠に美々しく出立ちたる其形勢、何れ愚はなかりけり。木俣右京はしとやかに、御旗本の道筋をば、井伊が胴勢引連れて、北國海道を、乾に向つて備を立てたり。松平下野守は、福島が備に引下つて、上海道を絶斷り給ふ。藤堂佐渡守高虎は、下野守殿備より、左の方に當つて、牧田海道に陣を張る。右の手先は金森法印・同息出雲守・田中兵部少輔、膽山の麓に立並ぶ。中筋は黑田甲斐守・加藤左馬助・羽柴越中守、何れも爪牙の臣たれば、皆家々の旗を立て、獅子の猛威を逞うし、名を雲天に上げんとぞ擬せられける。多藝口へは德永法印・市橋下總守・横井伊織・同孫右衞門・同作左衞門、金屋河原に、竹葦の如く蔓れり。池田三左衞門輝政・淺野左京大夫幸長兩手をば、南宮山に陣取せし西國勢の壓として、垂井近邊に殘し給ふ。又押勢と御旗本との其間、膽吹河原に殘し給ふは、本多中務が胴勢とかや。諒に明君の智勇に習染して、進退自由の軍兵等、星の如くに列張せり。其勢都合七萬五千三百餘騎、漢の蕭何・周勃・張良・樊噲・韓信等が、沛公を守衞し、勇智を勵んで烏江に臨みし

も、斯くやとこそは見えにけれ。西國方の軍勢は、皆山取を仕たりしが、島左近を先手として、小池の宿の外邊に、柵を付けて備を固めけり。小西攝津守を右に備へさせ、島津は北國海道を引下つて立切りしは、後備とぞ見えにける。南西の川端には小川左馬助、其より北へ續いて脇坂中務、其北には大谷父子、栗原山・岡が鼻には、安藝中納言輝元の人數毛利秀元・吉川元安を始め、此外長曾我部土佐守盛親・安國寺吉川藏人・長束大藏等三萬餘騎、弓鐵炮を前に立て、南の手は南宮山、北は膽吹の麓まで、十八段にぞ備へたり。關原の軍始まらば、橫合に咄と寄せ、不意を討つべき術とかや。山を隔てゝ陣せしは、戸田武藏守が從軍なり。偖惣軍勢は、悉く小西が左の先手より峠の下まで、稻麻の如くに備へたり。偖北東へ打續いて、夥しく見えけるは、中納言秀秋・島津兄弟・石田等、都合其勢十二萬八千七百餘騎、南の果は南宮山、北は膽吹の麓まで、尺地も餘さず充滿てり。家々の旌旗は、秋風に隨つて反飜し、萬百の甲冑は、天を衝いて燦爛たり。吳・越・漢・楚・吳・魏・蜀の諍も、是には爭で勝らんと、天地も動いて夥し。

井伊・本多先陣諍の事

爰に福島正則は、不破の關の明神の森を後に當て、山中宿の海道筋をぞ立切りける。此手の御横目は、井伊兵部少輔直政なり。福島が陣へ行くとて、關長門に行逢うたり。長門申しけるは、私の人數を、何方へか押し申さんや。御下知に隨ふべしといへば、我々人數と一所に押され候へ。貴邊は我等同道申すべし。御前の事は、御任せあるべしとあれば、長門忝しとて、二騎打連れ行く所に、本多中務横合に馳來つて、兵部殿何方への御越と問ふ。先手へ參るとありしかば、我こそ先手へ參り候なれば、貴殿は先へ叶ふまじと、鑓を横へてぞ申しける。兵部少とも騷がず、扨貴殿への御先手は、昨晩仰付けられしにあらずや。中務其通なりと答ふ。さればこそ某には、今朝仰付けらるゝなれば、貴殿の先手は思ひも寄らざる事、中々叶ふまじきぞと、氣色替つて見えければ、中務彌怒をなし、軍門に向つて君命なし。よしや兎もあれ角もあれ、先へは一歩もやらじぞとて、旣に事出來なんと見えければ、長門守、兩馬

が間に乘入りて、是は如何なる所行ぞや。天下分目の合戰に、未だ勝負も決せずして、御兩所斯る振廻は、聊以て似合はぬ御事、憚ながら君の御爲め旁は、兩輪雙翼の如くに思召さるゝ身にはあらずや。是非に靜まり給ふべし。其上今日の合戰には、先手數多候へば、御志次第に、何れの御先になりとも、向はるべき事にあらずやと、道理を盡して申す故、兩人も納得して、本多は右の手先へと、早速に乘行きぬ。兵部は福島の陣所へと、駒を早めて打入りけり。長門其節居ざりせば、危ふかりける次第なり。

東西兩軍大關村合戰の事附東西斥候行合ふの事

夫れ大將たる人には、五才十過ありとかや。其五才とは、所謂智仁勇信忠なり。智は亂るべからず、仁は能く人を愛し、勇は犯すべがらず、信は期を失せず、忠は貳心あらず。此五才あるをこそ、明大將とは稱すべけれ。又十過とは、勇ありて死を輕んずる者、勇ありて心速なる者、貪つて利を好む者、仁ありて殺すに忍びざる者、智

ありて怯れざる者、信ありて妄に人を信ずる者、廉潔にして人を愛せざる者、計ありて心緩き者、剛毅にして自ら用ふる者、酒色に耽り懶惰にして、人に任する者。斯の十過ある時は、大將とするに足らずといへり。然るに今西國方の諸大將に、十過は餘りありと見ゆれども、五才に於ては、苟もありといふ事を聞かざれば、今度の合戰如何あらんと、危む族多かりけり。偖九月十四日に、黑田甲斐守、智辯を以て筑前中納言を御味方に引入れ、張房・項梁の中となつて、無二の忠節をすべきと、內通あるに依つて、君の御陣中、此由を相心得て、聊油斷せざれとぞ仰せける。偖大垣壓の爲に、水野六郎左衞門・津輕右京・榊原式部・西尾豐後守を差置かる。十五日には小雨降り霧深うして、朝の間は、物の色目も見分かず。行旅は道を失つて、十方に迷ふ體なりしが、漸く巳の刻限に至つて、青天になりし時、東國方の斥候澤井左衞門・祖父江法齋・森勘解由、此三人出でけるに、折節西國方の物見には、津田小三郞・乾次郞兵衞二人。拍子と行合うたり。早何の會釋もなく、互に名乘掛けて相戰ひけり。敵味方の大勢、鳴を靜めて怪めども、誰れ計らふべくもあらぬ折節、祖父江法齋、物馴

關ヶ原合戰

れたる者なれば、雙方の眞中へ馬を乘入れて、如何に面々、勝負を決するは、場所にこそ依ることなれ。是は大事の物見にあらずや。若き勇士の事なれば、憤は至極せり。偏に靜まり給へと制すれば、其より互に式代してぞ引返しける。斯くて三成・島津の人々は、東軍の旗を見て、藤川を打越し、大關村の辰巳に向つて、人數を頓て備へけり。備前中納言・大谷刑部少輔・平塚因幡守・戸田武藏守・同內記等、山中峠にありしが引下し、谷川を打越して、關が原への人數を出し、西の山を後に當て、足輕をぞ出しける。東軍の先將福島父子は、海道筋を南向に取掛る。藤堂・京極兩人は、海堂の南へ押出して、鐵炮矢軍を始めたり。黑田が北の山の手は、織田有樂齋・同河內守・古田織部・同息內匠・舟越五郎左衞門・佐久間久右衞門・同弟源六一同に、石田三成・島津兵庫・大谷刑部・備前中納言・平塚因幡守・戸田武藏守・同長門守が備の方へ、西に向つて攻掛り、馬を乘込んで、爰を專途と切結ぶ。雙方名高き大將、碎身粉骨の軍にて、いつ果つべしとも見えざりけり。偖又東軍の先陣福島父子の軍勢は、海道より北へ押出し、八百餘挺の鐵炮を、霰の如くに放し掛け、矢軍を始めしが、敵近くなり

ければ、長柄を伏せて、小西・宇喜多・島津兄弟の人々と、相掛に馳寄つて、福島槍を始めし時、宇喜多方の模様能く、勝軍の體なりしを、福島は是を見て、何の爲の命ぞや。敵方へは進むとも、一歩も後へ引くべからずと、麾を取つて下知すれば、福島が兵卒に、團九兵衞といひしは、類希なる大力、勇あつて軍慮賢き武士なり。緋縅の鎧に、星兜を猪頸に着、四寸に餘れる荒馬に、貝鞍置いて乘散らし、三尺二寸の大長刀を振廻して、向ふ敵を幸に、破羅離々々々と薙臥すれば、面を合する者もなし。其外の軍兵も、命を惜まず戰へば、小西・宇喜多敗軍して、頸三百餘級、福島が手へ討取りけり。田中兵部は、山の手より馳寄せて、足輕を掛けゝるに、島左近が陣色めき立つを、三成急度見て、時分は能きぞ早かゝれと、使を以て下知しけるに、合戰危く見えければ、使萩野鹿之助、左近に何ともいはずして、駈込み〳〵戰ひけり。左近も是に勇をなし、追崩さんとせし所に、加藤左馬が備替つて、坤軸も摧けよと鬪へば、忽に勝を取つて、三成が天魔山への備をば、役神拂ひに追崩し、凱歌をぞ揚げにける。

筑前中納言裏切の事附島左近逃足の事

此時に當つて、小西攝津守が陣より人數を下す時、合戰の最中に、黒皮縅の鎧を着たる武者一人、君の御前に祗候して、筑前中納言の旗色は、敵とも又は味方とも見分け難く、いかゞ仕らんと言上す。君此由を聞召し、さあらば福島が先驅の足輕五十人、白き笠驗付けたるを遣し、松尾山に差向けて、鐵炮を玉なしに、二返し打たせよとの御下知なり。是に因つて、卽時に玉なしをぞ打出しける。秀秋は豫てより、三成に與せし事、骨髓に徹して臍を噬む所に、幸法印の誘に依つて、前邊御味方に參るべきとの内通ありし故、譜代の兵卒も悉く其心を得て、彼鐵炮には少しも構はず、時分は能きぞといふ儘に、家老の稻葉内匠幷松野主馬助、眞先に進みけり。其勢都合二萬餘騎、松尾山より下し驅け、大關村の北の野に陣取せし西軍の後より、鐵炮を打掛け打掛け裏切して、大谷刑部・平塚が備を、卽時に切崩せば、小西行長が陣中へ、我先にとぞなだれ込む。偖秀秋に相續いて、脇坂中務・朽木河内・小河土佐・同左馬・赤座久兵

衞等の五人も、同じく一度に突いて出でたりけり。左の方は道より南、藤堂・京極・蜂須賀長門守・生駒讃岐守等なり。此表へは、大谷・平塚・戸田武藏・津田長門守、馳せ向うたり。此軍の先手にて、石河伊豆守は、西兵と渡合ひ、冑頸を討取りて、早公の實檢に備へ奉る。關が原の一番頸は是なりとぞ申しける。此時節に織田河内と戸田武藏と、龍虎の勢をなして組みたりしが、終に武藏は討たれたり。武藏守が股肱の臣鶴見金左衞門是を見て、眼前に主を討たせて、何國へか去るべきと、四角八面切廻り、比類希なる働して、武藏守に後れじと、同じ枕に討死す、忠義の程ぞ神妙なれ。味方には伊丹兵庫・村越兵庫・河村助右衞門・奥平藤右衞門一同に乘込み、敵兵數多討取りて、思ふ儘に働きしが、大勢に渡合ひ、四人共に、枕を並べて討死す。小坂助六・吾孫子善十郎・稻熊市左衞門・兼松又四郎・坪内喜太郎父子、轡を並べて切つて入る。何れも數度に場を踏みし、剛强の不敵者、命を惜まぬ輩にて、多勢を恐れず戰ひ、拔群の功名をぞなしたりける。其中にも稻熊は、十文字に駈廻り、八方に追散らし、前にあるかと見る中に、忽然として後に立ち、ある所を定めず飛びかければ、稻熊とはい

はずして、皆稲妻とぞ呼ばはりける。斯くて敵味方入亂れ、今日を限りと戰ひしかば、手負死人は數知らず、陸に山を築き、汗血は嶺に河を流す。目もあてられぬ分野なり。爰に於て藤堂が家臣玄蕃允と、三成が寵臣島左近が一子新吉と、暫が程祕術を盡し挑戰す。されども雌雄更に付かざれば、玄蕃鎌を彼に投捨て、新吉と無手と組み、金剛力を出して迫合ひしが、玄蕃終に討たれたり。玄蕃が小性丹羽平三郎生年十八歳、今日初軍と聞えしが、新吉が引く所を逃さじと追馳せて、返せ者共といふ儘に、難なく主人の當の敵を、眼前に討取りし若年の働を、押並べて、感歎せぬ者ぞなかりける。去程に島左近は、正々と愛子の討たるゝを、援けんと思ふ心もなく、空知らずして落行きしは、日頃勇者と呼りしも、胡水練の辭かなと、人々嘲り笑ひけり。或人の申す樣、一時の不幸と覺えたり。如何にといふに其昔、源氏平家の軍の時、日頃武剛の知盛さへ、生田の森の落足に、最鍾愛の知章が討たるゝを見繼がずして、諸將と共に船に乘り、落ちられしも時運なれば、今の左近もさこそといふ。滿座の輩是を聞き、さればこそ知盛は、大將の萃逸にて、思ひ籠めたる故あつて、天下の爲に

子を捨てき。全く命の爲ならず。今の左近は、臆病と命の惜しき癖者が爲所に非ずやと、笑ふ族も多かりけり。

東軍一同に勝鬨して攻討つ事

偖又北の山の手には、黑田甲斐守・羽柴越中・加藤左馬・田中兵部・筒井伊賀、究竟の兵を選み勝つて馳せ向へば、石田三成と秀雄兩將駈合せ、猛將勇士金鐵を碎き攻め戰ふに、東軍の諸大將三成と見て、軍勢に下知しけるは、そも此亂逆の張本は、あの三成が所爲ならずや。餘の敵千騎萬騎より、彼一人討取りて、公の御感に預かれと、獅子奮迅の威を震ひ、諸士を勵まし、驀地暗に攻入れば、三成も今日此軍仕損ずるものならば、何の日にか勝利を得ん。恩賞欲しくば繼けやと、諸勢を勇め進めども、素よりの興行、天理に背ける意旨なれば、或は手負討死して、殘兵纔になりにけり。中筋は金森法印父子と宇喜多秀家と、面を合せ名乘掛けて、暫く防ぎ戰ひしが、雌雄未だ決せざる所に。福島正則、軍の體を急度見て、大音揚げて呼ばはる樣、味方上槍にな

りたり、合戰は勝ちたるぞ。今一揉と下知すれば、福島丹波・尾關石見・長尾隼人・可兒才藏、小性には吉村又助・大橋茂助・高月文藏などいふ若武者共、其外手垂の勇者等、聲を揚げて相戰ふ。西國方の軍兵、亂足(みだれあし)になりけるを、公御覽あつて、勝鬨を揚げよと上意ある。味方の諸軍勢一同に、鯢波を嚾と擧げたれば、敵軍彌色めき途を失ふ。重ねての御下知には、總人數一同に、馬を駈入れて攻討てよ。我旗本の者共も、三分一は早蒐れと、御麾を振り給へば、いとゞ勇める諸軍勢、御下知の下よりも、咄と喚いて突懸る。其勢は、天行夜叉の如くにて、御大將の目の邊に、諸士の剛膽武勇の程、御覽なさるゝ戰場なれば、我劣らじと勵み合ひ、粉骨碎身して鬪へば、西軍方の大將兵卒、右往左往に敗北す。大勢の軍兵逃足になりぬれば、卻て道の妨と思ふ計に、辟易するぞ哀なる。封狐河中に進退究まると、古にいへるも、今日の西軍の形勢(ありさま)に、實に思ひ合せられたり。

大坂勢潰敗

可兒才藏賜(ハル)笹名字(ノチ)の事

可兒才藏の武勇

福島正則の家臣、何れも手柄を顯はすといへども、就中可兒才藏が由緒を傳へ聞くに、最も希有の働なり。元來加州の大守に仕へて、忠節懈らず。殊に末森の合戰にも、粉骨を盡せしに依つて、大守の恩顧厚かりしかども、自餘の妨是あつて、思はず浪人の身となり、武者修行を志し、回國する折節、福島に抱へられ、今度關が原へ向ひしとかや。偖九月朔日の頃よりして、對陣の中には、小攻合のみにして、目に立つ程の軍もなし。拔懸堅く御法度とありて。敵味方隱便なり。味方には大切の戰故、君を待ち奉る心入なれば、只會釋(あへしら)ひたる軍にて、事急に戰はず、大方晝過ぎ夕方には、鳴を靜め、軍の評議計りなり。爰に石田が侍、責馬をぞ仕たりける。何者と尋ぬれば、湯原源五郎といふ癖者、勇力あつて、馬はしかも名人なり。其身武勇に高慢し、分捕高名の譽を望み、敵の陣屋の前をも恐れずして、暮毎に此の如く仕る由申しけり。或夕暮の事なるに、正則の陣屋の前、一町計りに近付き、責馬乘懸け來りけり。才藏今は堪へ難く、彼癖者と同毛色なる鎧を着、横相より乘つて出で、互に馬を責めたりしが、馬場中にて推參者、空しく行違ふなといひかけ、思ふさまに馬を當て、引

達へ組付けて、暫く上へ下へと組合ひしが、可兒が武運や强かりけん、敵味方の眞中にて、彼湯原を組伏せ、押へて首を搔墮し、敵の馬に打乘り、敵陣の前に乘行き、心靜に四五邊計り輪乘をすれば、敵見損じて、悦の吐氣をぞ擧げにける。夫よりして最前首捕りたる所へ乘歸り、我が馬に乘替へて、敵の馬をばしたゝかに打叩き、敵陣へ追込み、可兒は味方の陣へ乘り歸れば、諸軍一度に聲を上げ、嗚呼仕たりや〱と譽めたりけり。然る所に正則は、音に聞えたる荒大將なれば、陣屋の幕をはね上げて、御軍政を背いて駈出で、下知を承らず、我儘なる働したるは何者にてかあるやと、大音にて喚かれける程に、彼辯者の首を差上げ、冑を脫ぎひれふし引退きければ、兎角の事なく、御軍法に背きたる輩は、討捨てと仰付けられたれども、先づ押込み、追つて曲事に申付くべしとあれば、夫より陣屋に逼塞して、小攻合にも出でず、鎗を銳ぎ、或は刀脇指に脛釵を付けて、其翌日より、忍々に戰塲へ出でけるが、首を捕つても、實檢に入れべき樣なければ、討捕りし首の鼻の穴と耳の底へ、笹の葉を押込み、首を捨てゝは忍び歸り、引籠り居たりけり。九月十四日迄、此の如く遠慮なる體に

てありし所に、同十五日、内府君赤坂を立たせ給ひ、野上と關原の間に、御旗本の御人數を備へ、御馬廻り魚鱗鶴翼の御陣取仰付けられ、其晨霧深く雨微降り、物の色めも貞ならず。漸く巳の刻計りに、空晴氣に見えしかば、内府公を初め奉り、各軍神を祭り、諸大名御目通まで召出されたり。就中正則を召寄せられ、其方が一手に討捕り置きたる首共を、實檢に備へ候へ。御慰に遊ばされ、日直を御待ちなさるべきとの上意に付、正則俄に首實檢と申觸れられ、既に惣實檢の終に。彼湯原が首出づる。則ち責馬の次第、御軍法に背きたる高名故押込め置き、追つて誅罰仕るべきと申渡したる由、上聞に達しければ、聊其儀に非ず。其者早々召出せとの上意にて、御目通まで罷出候時、正則申されしは、汝無用の働をば仕り、軍首一つも捕得ざると叱り申さる。其時才藏、左右に向つて申上げける樣、此間逼塞致候中も、迚も遁れざる露の命、討死仕度存じ奉り、惣軍出拂ひ候て後、毎日忍び出で、又人先に罷り歸り、引籠り居候間、毎日甲首討捕り候へども、逼塞の分際故、鼻の穴耳の底へ笹の葉を押込み、首を彼へ投捨て、實檢に入れず候へば、若武者共手眞に拾ひ來りて、日々御實檢に入れ

申すかと覺え候由申上げければ、正則彌怒をなし、さらば其實檢首の中を、一々穿鑿して、笹の印之なきに於ては、急度曲事に申付くべしとて、首共殘らず、耳鼻の中穿鑿申付けられける。九月朔日より十四日迄の間に、首數十七、笹の葉の印顯はれたるに付、忝くも公御感の餘り、今よりは笹才藏と名乘り申すべき段、正則へ仰下されけり。されば右逼塞の間は、生竹を差物にして働きたる故により、あるに任せて笹の葉を、首印には入れたるとかや。偏に有難き次第と、涙を袖に浮めてぞ申上げける。

石田軍記卷之十終

石田軍記卷之十一

井伊・本多功名の事附大谷刑部自害の事

去程に下野守忠吉卿は、群を離れて駈出し、數多の敵に渡り合ひ、數箇所の創を受けながら、組討の功名、若年の御身として、比類なき御働、適れ如何なる名將にやならせ給はんと、目を驚かさぬはなかりけり。爰に井伊兵部少輔直政は、忠吉卿を伴ひて、福島が脇備に出でんと進みける所に、正則が軍士可兒才藏を初として、眞先に駈塞つて、魁の軍兵を嘗て通すべき氣色なし。井伊は此由を急度見て、尤なりと理に伏し、何とぞ方便を以て、本望を達せんと計るに、是は斥候に通るなりと、自身に斷を言聞かせ、忠吉卿を相伴ひ、敵陣に駈入れば、張良が韓信を計りて、榮陽の軍に勝つことを得たりしに思合されたり。巴の字に敵を追回り、十文字に駈散らし、偖其よ

井伊直政の驍勇

り力戰する所に、島津敗北して、退口に鐵炮に當てられて、二箇所に疵を蒙れども、物の數ともせばこそあれ、猶猪の如くにぞ見えにける。誠に音に聞えし軍將達、何れ愚はなけれども、殊に若年の頃よりして、數度功名ありしは、井伊直政とぞ聞えける。先づ其家系を尋ぬるに、源三位賴政の家臣、鵺を刺して名を揚げし、井伊隼人の苗裔にして、遠江國井伊八郎が子孫、井伊肥後守が子なり。遠州井谷より出でしとかや。井伊萬千代とて、年始めて三五の間、容顏他に超えて艶美に、起居の風情、柳の月を拂ふが如くにして、又も世に類あらしの風にも當てじと、其親の意、姹しくも聞えしかば、内府君召出し給ひ、御寵愛他に異なりてぞ、見えさせ給ひける。直政心緒人に勝え、猛き志、鐵を貫く思ありて、仁義の勇に彷彿して、鳳雛龍豹の勢、宛も公孫敖に似て、後來には公の御爲、河水肱股の臣として、一方の軍將ともなりぬべき器量なりと思召し、則ち一手の大將となし給ひて、木俣淸左衞門・西鄕藤左衞門・椋原次右衞門・岡本半助宣就、其外古信玄の大將たりし一條右衞門太夫・山縣三郎兵衞・土屋右衞門丞・原隼人・馬場美濃とて、此五大將の與力に從ひ、武功ありし侍三百五十騎、

中にも軍功多きもの、曲淵宗立齋・菅沼雲仙齋・辻彌左衞門・孕石備前・廣瀨左馬、其外甲陽の信玄より、勝賴まで殘りたる者の子孫、武功多き者共を選び出し、萬千代に附け置かれ、大將となし給ひける。偖甲州若神子表にて、北條氏政・氏直と對陣の時、萬千代十六歳にて、比類なき働し、好首二つ討捕りけり。是初陣にて功名し、太閤の上聞に達し、其驗として、金錢を給はりけるとかや。又小田原陣に夜討して鑓を合せ、篠曲輪を乘取り、槍を合せしも、此井伊萬千代なり。北條氏房の家臣廣澤尾張守重信・蒲生飛騨守氏郷・土方河内守との相備の所へ、尾張守重信夜討して、蒲生氏郷と鑓を合せし時も、此井伊萬千代と二大將をのみ、敵味方、比類なき勇士とぞ、皆稱譽せり。其後信州高遠口にての働き、江州姉川合戰のまくり立、尾州長久手、同蟹江、瀧川の陣、相州小田原の城攻、奥州九戶櫛引の陣、信濃にて前の眞田が陣、其外關東七度の鑓、韓信といふとも豈畏れんや。此直政一生の中、敵に後を見せたる事なく、向ふ敵を討敗らずといふ事なし。斯く軍功多きに依つて、終に井伊萬千代に、高崎城をぞ守らせ給ひける。是を後に、兵部少輔直政とは名づけたり。又本多中務は、

毛利が請手なるを見て、横合に駈入り中筋へ拔け出で、武勇を振ひ、大敵を追崩して戰ひける。同息の內記は、世に類なき猛健にて、甲冑に至るまで、鐵を以て拵へしかば、精兵の放つ箭も、裏をかゝする事はなく、懼るべき太刀・刀・鎗・長刀もあらざれば、雲霞の敵に駈入りて、多くの首を討取りけるは、世にすさまじき景迹、輕飛將の勢も、是には勝らじとぞ見えにける。且西國の諸大將、味方の謀叛に途を失ひて、主にそむき親を捨て、行方知らず落つるもあり、跡へ返して、命を捨てゝ戰ふ族も、邂逅にありといへども、自ら堪るべき様あらざれば、平塚因幡覺悟して、大谷刑部に低談きけるは、中納言逆心の上は、各我等が運命此時に谷まれり。是非に及ばぬ次第なりといふを、刑部聞きて、某も左こそ存候へども、盲目の身の哀しさは、能き敵にも逢はずして、雜兵原の手に掛り、空しくならんも口惜しければ、只今自害を遂ぐべき條、面を隱し給ふべしと、既に刀に手を懸けしを、今少し待ち給へ。中納言の手へ向ひ、實否を見屆け知らせんと、馳せ向ふ所に、中納言の大勢、早谷川を打越して、大關村の北の野へ、蓊地暗になりて突かゝる。此難を見ながら、無作々々と歸らんは、味方

の見る目も最恥かし。　大谷が恨みんは、好し兎もあれと思ひ切り、大勢に紛れ入り、天晴秀秋に行向ひ、遁さじものをと思案して、笠驗をかなぐり捨て、亂髮を顏にかけ、秀秋の旗を目に懸けて、認ひ寄るといへども、東國の軍勢、重々の備稠しければ、思ふ樣に叶はずして、欝憤を散じ得ず。　若しやと徘徊せし所に、山内對馬守が家臣に、樫井太兵衛と名乘りて、間近く馬を馳せ寄せける。　平塚是を急度見て、推參なりといふまゝに、大長刀を取直せば、樫井は十文字の鎗を以て會釋ひ、雙方名譽の手利にて、暫く雌雄をも決せず、互にいらつて戰ひしが、平塚の運の悲しさは、長刀二つに折れにける。　樫井透さず突臥せて、終に頸をば取つたりけり。　刑部は夢にも知らずして、因幡遲しと待つ所に、斯の次第と告げ來れば、大谷刑部も速に、自害せばやと思ひしが、手の軍兵を呼集め、合戰も是までぞ。　去乍ら豫てより、秀秋の逆心を推量り知る故に、彼勢に旁を、當置きし事なれば、今一度秀秋の陣頭に馳せ向つて、快く討死せよ。　死出の山の道すがら、物語りして慰まん、早疾く急げと下知すれば、軍勢殘らず領掌して、彼陣に馳せ向ひ、今日を限りと戰へば、秀秋の先陣、乍ちに敗北

大谷吉隆自殺

して、田中助左衞門・布目新平討死せしかば、大谷が軍兵共、競ひ進む所に、關が原の道筋より藤堂・京極馳せ着けて、大谷が軍兵を、餘さじと攻め戰ふ。新手の勢に採立てられ、大谷が手に於て、下河原惣兵衞・湯淺五助を先として、歷々の軍兵卅餘騎討死し、殘る勢は、悉く行方知らず落行きにけり。刑部も今は是までとて、馬上にて腹十文字に搔切つて死したりしは、類なき自害、尤無雙の大將やと、感ずる族も多かりけり。人生の浮榮は刹那にありと、佛敎に說ける目前なれども、太平の時は、名將勇士も酒色に耽つて、愚蠢百年の計を思へば、臂を撞げて笑ふに足らず。其强臆に至らば、心を悟れる佛家の小僧には劣れり。杜氏尙言はずや。壯夫は敢決ならんことを思ひ、哀詔精靈を惜むと、其後首を求むれども、終に尋ね得ざりしは、大谷が近習の三浦喜太夫といひし者あつて、其儘人知れず、深く泥土に埋みし故、後まで終に知るものなしとかや。

西兵敗北の事附島津退口の事

扨北の方の野原、小關村の中よりは、石田と島津、輕卒を出して戰はしめける。此手先は、東軍より田中兵部・金森父子駈合す。織田有樂齋・同息河内守・古田織部・猪子内匠・舟越五郎左衞門・佐久間久右衞門・同源六以上七八一度に乘込み、思ひ〳〵の軍の體、目ざましくぞ見えにける。有樂は、石田が軍將の横山喜内を討取りて、殘る奴原を追散らす。此時に至つて、西兵悉く敗北して、玉村・藤川・伊吹山、四角八方へぞ逃散りける。東兵其時一同に、勝鬨を揚げて勇をなし、追駈け〳〵突崩し、討取る處の首級、幾千萬とも知り難し。三成・小西は、味方の勢、敗北の體を見て居たる所を立上り、今ぞ限りといふ儘に、福島刑部が備の方、關が原の町を西南へ、一文字に駈來り、命を捨てゝ戰へども、西兵敗亂せし所に、梶田五左衞門といふもの、刑部が馬の口を引返し、又上月平三郎、馬の先にて大音揚げ、諸勢を勵まし下知すれば、皆踏留めて備をぞ堅めける。刑部時に十六歲とかや。若將なれども、兩人が鎧の毛色をよく見知りて、誠に太平の時節に、褒美せしこそ優々しけれと口吟せしは、其志、武勇にぞ聞えける。偖薩兵は、味方の敗軍にも構はず、見ぬ由にて、大良山の方へと引

徳川勢大に勝つ

返しける。されば島津兄弟は、如何なる故かありつらん、敗北の已前に、互に馬を近く寄せ、少時密談事畢つて、其手勢三千餘騎、眞黑になつて、數萬騎の敵の眞中切拔けつゝ、南を指して引退く所に、秀秋に礑と渡合ひたり。秀秋の軍兵に、平岡石見・松野主馬・稻葉內匠、島津と見て、能き敵ぞといふ儘に、餘さじと挑戰すれば、中書は兄を討たせじと取て返し、一向に討死と志し、面も振らず戰ひける。流石の島津が身を捨てゝ、今を最期と戰へば、秀秋の大勢、しどろになりて漂ふ所に、忠吉卿と直政と、島津を包んで相戰ふ。忠吉卿も疵を負ひ、落馬し給ふと見えしかば、直政馬を乘廻し、落行く敵を遁さじと相戰ふ所に、三成・島津が橫目の爲、豫てより副置きける、攝津國の住人入江左近が甥、入江權右衞門といひし者、熟と思ふ樣、斯く亂軍になる上は、迚も捨てん命なり。大將井伊に近付きて、勝負をせんと志し、馬を彼に乘放ち、差物鎧を脫捨てつゝ、井伊が驗を目に掛けて、馳廻る所に、幸ひ兵部に行向ひ、太刀を以て切付くれば、井伊が左の高股を大半切つて、太刀先は、馬に當つてぞ見えにける。是に驚いて、馬は虛空に駈出せば、入江は本意を遂げずして、嚙をなし

駈廻りける。爰に島津兵庫が次男又八郎、死生の境貞(さだか)ならず、尋ぬれども見えざれば、後見に附置きし川口雲右衞門を呼びて、如何にと問へば、川口が申す樣、關原の敗軍迄は、隨逐申候ひしが、退口の折柄大勢に隔てられ、見合ひ奉らず候といふ。傍なる者がいへるは、筑前中納言の手先にて、討死や候らん。慥八郎殿の召されたる御馬の、放れてあるを見候ひしが、鞍壺に血の付きて見え候と申しける。兵庫頭は、鬼神をも欺く程の勇者、膚撓まず目瞤(まじろ)かぬ猛將たりといへども、恩愛の悲さは、兩眼に涙を浮べて、如何に雲右衞門、汝を後見に附置きしは、斯樣の先途を見せんが爲なりきと、一言いへる計りにて、兎角の事もなかりしは、哀にぞ聞えける。是を古にも、干戈猶未定、子弟各何之、拭涙霑巾血、梳頭滿面絲、地卑荒野大、天遠暮江遲、と作りたるも、此日ならんかし。島津歸國の時分、泉州境まで供をして、其より直に高野山へ上りつゝ、剃髮染衣の身となりて、彼菩提を弔ひける。偖も今度の合戰は、天下分目の事なれば、日域の軍勢入亂れ、今日を限りと戰ひしに依つて、靑野が原は藪に、骸の山を築き、藤河の流は變じて、紅を漲し岸を浸す。萬里秋風吹錦水、誰家血淚

濕羅衣一なる、李廣將軍が匈奴と戰ひしも、是には勝らじと魂も消えて、夥しくぞ聞えける。かゝる騷動の中にも、何者かしたりけん、落書をば、關が原の道の頭に立置きける。

徳川の烈しき浪の打越せば石田宇喜多は跡形もなし
秋風に青野が原は名のみして皆紅のにしきをぞしく

今日合戰の半より、大雨車軸を流しければ、切捨てたりし無數の死骸共流れ懸つて、不破の川面人筏を下し、洪水は偏に濃き紅に異ならず。諸軍勢の糧等を、此河水にて炊ぐに、宛も蘇木の汁にて、染めたるよりも赤ければ、如何程飢ゑたる下々も、食すべき樣もなし。諸卒難儀に及ぶ由を君聞召されて、生米を食すべからず。必脾胃を損ずと傳へ聞く、水に浸して、戌の刻に食すべしと、御上意の旨觸れさせ給へば、さりとは廣大の御慈心かな。微細の雜事に至るまで、御意をつけさせ給ふよとて、諸人感悅限なくぞ思ひ奉る。偖頸ども御實檢ありて、敗軍以前の首、追討の僉議相究り、三成が陣場小關村の柵より内にての首共は、追討たるべしと定めらる。十五

日の夜に至つては、大谷が陣屋に、御本陣を据ゑさせ給ひけるに、大雨頻りに降りしに依り、又南宮山の敵共も、皆敗亂せしむるに依つて、御味方の諸軍勢、汗馬の息をぞ休めける。同十六日、德永法印・市橋下總守・橫井伊織・同孫右衞門・同佐左衞門は、多藝口の壓として、江ヶ島といふ所に、陣取りして居たりしが、三成敗軍の注進を聞きて、上方筋へ打出づる處に、栗原山の方よりして、安國寺・長曾我部敗軍の士卒等、土岐・多良山へ退くを見て、一人も遁さじと逸足出して追駈け、東兵德永法印が手に於て、首八十一討捕りて、磨針峠の邊にて、台覽に備へけり。又橫井作左衞門、自身無二の働に依つて、兜の眞甲割られながら、公に拜謁致せしかば、今に始めざる功名無雙の由、尤感歎斜ならず。同日に佐和山より半里餘南、野並の里東の山に野陣を居ゑらる。之に於つて今度關原表へ出張せし、西國方諸大將の在所を搜し出し、召捕るべき由仰付けらる。就中田中兵部少輔・石川左衞門兩人、佐和山の先手を承つて、井伊直政は檢使とぞ聞えける。

大谷刑部が屋敷怪異の事

其頃大谷刑部少輔出陣の最中に、跡なる屋敷の內、不思議の怪ありしとかや。九月十三日のまだ宵の績なるべし。妖は德に勝たずなどと、祝言して居る所に、又最前の庭中に、大勢の聲として、どつと笑ふ音しければ、女房達は申すに及ばず、警護の武士に至るまで、是は〳〵と肝を消し、皆々呆れし折柄に、最あやしげなる小音にて、少しも驚き申さるゝな。追付御不審晴れ申さんと、高らかに叫はつて、搔消す如く失せにけり。其より內議評定して、これは其まゝ捨置かれじ、軍の樣子を聞かんため、又此次第を知らしめんと、委細の事を書認め、早々飛檄を遣しける。其使未だ行き着かぬ間に、關が原敗軍して、刑部少輔乍に、自害せしとありければ、皆腰脫け、力を失ひてぞ呆れける。

佐和山城落居の事

江州佐和山の城には、三成關が原出張の跡に、父の石田隱岐守・兄石田木工助・同息右近並舅宇多下野守楯籠りしが、關が原歿落の由を聞きて、若し三成歸城あるべきかと、城戸口に待窺へども、其沙汰もなく、只不吉の說のみなれば、新參はいふに及ばず、年頃日頃の郎從までも、賴み寡く思ひけるにや、次第々々に落失するによりて、番を居ゑて制止しけれども、後には番衆も打連れて落行きければ、今は面々が譜代の侍計り、僅に卅四騎殘りける。浩る所に秀秋の先陣押寄せて、手々に攻具を提げ、山上の塀下まで攻詰むる。時に城中の兵共、豫て期したる事なれば、稠しく鐵炮を打出して、爰を先途と防ぎしかば、秀秋の先手の士卒、打立てられて崩れ退き、新手を入替へ攻めければども、中々案に相違して、易く落つべきとも見えざりけり。されども寄手は、數知れぬ大勢の事なれば、終には落ちんと思へるにや、三成が侍に、長谷川右衛門といひし者、秀秋の手先へ內通をぞ仕たりける。深く隱せども、城內に是を知つて、彼を討たんと議する故、早々城を逃げ出でて、秀秋に屬きしかば、案內は能く知りつ、彌攻むる便となりにける。然るに井伊直政城外を巡見して、攻むべき術

佐和山城陷る

を丁簡し、細作(しのび)の者を入置きつゝ、水の手より攻上るに、相圖の斥候心得て、此彼に火をかくれば、城内の軍兵ども、防ぐべき樣なくして、各妻子を刺殺し、殘らず廣間に居並びて、一度に腹を切りにける。木工助が近習土田東雲といひし者、かひぐしく介錯して、其後城に火を放ち、其身も切腹せしとかや。彼三成は、太閤の無二の寵臣たりしかば、日本の諸侍、彼が機嫌を窺ひて、年々の進物、時々の賄賂絶ゆる間もなき故に、金銀・珠玉・武具・衣裳、異國本朝目馴れぬ調度など、山の如く積み貯へしも、片時の煙と消え失せて、餘所の淚となりにける。儲君よりの御下知には、秀秋城番勤めらるべしと、黑田長政を以て仰付けられ、其上長政の家臣後藤又兵衞を相副へられて、勤番嚴しくぞ聞えける。

大垣城攻落居の事

大垣の城には、本丸に福原右馬助、二の丸には、秋月長門守・相良宮内少輔・高橋右近、中の丸に、熊谷內藏允・垣見和泉守・木村宗左衞門・同息傳藏、都合七千餘人楯籠り、皆

討死と覺悟して、或は故郷に殘し置く、妻子の方へ形見を送り、或は知音朋友へ、遺狀を傳へなど、取々なりし事の體、後の思案はいざ知らず、先づ冷じくぞ見えにける。かゝる所に上意として、西尾豐後守光敎・松平丹波守・津輕右京・水野六左衞門・榊原式部大輔等、討手の大將承りて、傳馬町口へ押寄せける。然る所に安八郡の地侍久瀨助兵衞、西尾に對つて申しけるは、三成以下の輩、關が原へ出で候故、此城の軍勢は、僅ならでは候はず。某案内仕らんと、西尾が手先に進みつゝ、手痛く城を攻めんとす。鬨矢喚の音、鼓貝の聲に、山川も崩れやすると夥し。城兵も破られじと、弓鐵炮を射放ちて、此を專途と防戰す。西尾が家臣小寺半兵衞、一番に駈入りて大勢に渡り合ひ、粉骨を盡し戰つて、終に討死をぞしたりける。身は濃州の土となり、名をば後世に留めたり。相續いて同輩の村田長兵衞・西尾掃部・丹波彌左衞門三人、一度に討入り、功名究めて引退く。次に西尾惣兵衞・同掃部・佐治久左衞門・松岡兵右衞門等、城中へ討入らんと勇み進む所に、混冑の鎧武者共、手に槍を提げて、城戸の内に數十人並居び、入れじとす、一向に入らんとして、柄を碎き鍔を破り、切先より火を

出して、今を限りと戰ひける。其中に惣兵衞は、勇猛の强力、三尺餘りの大太刀にて、敵三人討取りて、已に引かんとする處に、鐵炮に中てられ、城戸を枕に討死せり。寄手彌重りて、稠しく攻めて入らんとす。敵兵防ぐに術盡きて、やがて城戸を閉堅め、城中に引退く。此時水野が手先にて、卅三人討取りける。されども要害堅固にして、寄手の勢も攻あぐみ、猶豫すと見えしかど、運に乘せし猛勢なれば、十六日の辰の刻に、町口を乘取りて、暫く息を休めんと、陣所々々へ引退き、猶々軍の評議を遂ぐ。籠城の樣子を君聞召し、落城手間も取るべからず、彌情に入れよと、一々裁判仰置かれ、御上洛を急がれ、十七日には御陣を居ゑ給ひ、十八日守山に御參着、桑名の城主氏家內膳・同志摩守、守山まで供奉せらるといへども、御氣色宜しからずして、內膳を池田輝政に、志摩守は福島正則に御預けなされ、十九日守山に御泊り、廿日大津に入御の所に、忝くも勅使を成下されけり。偖大垣には關原表の軍、西國方討負けたる由、町人沙汰にて、二の丸へは假初に聞えしかども、城中へは、關原より注進もなし。福原方より、三成への使も今に歸らず、籠城後詰の賴みもなし。之に依つ

て秋月・相良・高橋三人、竊に評定すらく、假令堅く籠城したりとて、運を開くべき便もなし。よし其とても此軍、道義に叶ふ事ならば、身を醢になすとても、心を變ずべきにあらねども、我々遠慮足らずして、三成が不義に與せし事、臍を噬むに益なし。然れども過則改勿憚となれば、福原を討ちて降參し、士卒の命を助けんは、如何あらんと談ずれば、尤も難に臨む時、心を變ずる振廻は、好ましからぬ事なりと、嘲る族もありぬべし。愚將痴男の褒貶を、兎や角思ふも時による。見義不為無勇なれば、福原を早く討つて降參すべしと、密談を一決して、中の丸の衆にも得心させんとて、垣見和泉・木村父子・熊谷四人を、二の丸へ呼寄せて之を談ず。中々案に相違して、垣見・熊谷同音に、降參して死を遁れたりとも、百年の齢を持つ身にあらず。無寧生而無義不如死といへり。更に思ひも寄らずとて、顔色を變じて、荒らかに座を立たんとするを、色々諫むれども承引せず。以の外に見えければ、秋月家卒に目くばせして、四人ながら討取りけり。彼者の兵卒ども騒動し、二の丸に於て又同士軍し、討死手負數知らず。さて二の丸の三將は、一つ所に集まり居て、此事を仕課せなば、

我君に對して莫大の忠節なり。さらば本丸の福原を、方便り寄せて討つべしとて、中の丸の三人、謀叛の事ありと聞く。其に就いて密談申さん。來り給へといひ送る。福原聞きて取敢ず、二の丸へ行かんとする所に、何かは知らず騒動す。心得難しと思慮して、先づ此術に乘らずして押留り、其儀實正たるに於ては、各本丸へ來られよと返答して、門を必止と差固め用心すれば、秋月等が密計も相違しぬ。天にも着かず地にも着かず、如何せんと思ふ所に、秋月急度了簡して、四人の頭を提げ、中の丸の門を開き、西尾豐後殿に用事あり。秋月が方角へ出向はれ候へと、高聲に呼ばはりける。豐後が家人出向ひ、何事ぞと問ひ窺ふ。其時內より申す樣、內々仰越さるゝ趣に就いて、二の丸三人の者共、御味方に心を寄する故、熊谷・垣見・木村父子四人の者を、二の丸にて討取り候ひぬ。然る上は時日を移さずして、本丸を攻むべきの條、檢使を給はり候へ。其爲四人の頸共を持參したりとて、渡しける。寄手の方の諸大將、此趣を聞くや否や、軍法をも用ひず、手々に小楯を引被き、我先にと駈けて入る。本丸と二の丸とは、僅か五六間ある所を、塀一重隔て、二の丸より本丸へ、

大筒を打ちけれども、福原怯まず驅廻り、鐵炮を打たせて下知しける。寄手の多勢、二の丸の勢に加はつて、十八日の早天より、廿二日の晩景まで、晝夜ともに攻むれども、本丸屈する體もなし。術を替へて攻寄すれば、思案を廻らして防ぎける。豐後守熟分別して、諸將に對ひて談ずる樣、城兵如何に働くとも、終には落城すべきは疑なし。然れども日數重なるに隨ひて、味方の疲も彌增すならん。兎角智略を廻らして、降參させんと存ずるなり。古より良將は、戰はずして勝つといへり。いざや矢文を射入れさせ、敵の心を見んとあれば、諸將尤然るべしとて、貴邊には未だ知り給はずや。關原の戰場にして、西國方討負け、三成・小西を始として、一味の輩生捕られ、或は討たれ候ひぬ。然る上は堅く守りて、何まで籠城あるとても、一圓其甲斐あるべからず。急ぎ降參せらるべし。身命に於ては、全く恙あるまじ。又御望みあるに於ては、君の御前は、如何樣とも能きに取成し申すべし。且疑を散ぜん其爲に候とて、神文を添へて射入れける。福原右馬助是を見て、我籠城の始より、軍若し利なくんば、必討死せんものをと、兼々に思ひ儲けたる事なれば、今更降すべきにあらね

大垣城陷る

ども、苦身勞力せし士卒どもに、恩賞をこそ與へずとも、命を助けん爲なれば、無念ながら降參すべし。さりとて我身は、三成に親しき縁者の事なれば、遁るべしとの義にあらず。彼等を助けん爲のみなり。さらば城を渡すべし。人質を給ふべしと、矢文を書きて射返しける。寄手の諸將披見し、雙方ともに矢止して、豐後守の方よりして、其名を人に知られたる、谷淸兵衞といふ者を、人質に遣せば、福原則ち落髮して、道薀と改名し、九月廿三日に、城を明けて出でければ、勢州朝熊まで送り屆け、福原に暇を乞ひて歸らんとするに、福原は慇懃に禮謝して、今度道すがらの馳走といひ苦勞といひ、芳志の至り忘れ難し。某出家入道の身となれば、是れ體の道具貯へ置き候ても、今に於て聊其詮なく候。させる作にはあらねども、能よければ贈るなり。是を形見に差し給へとて、關兼重の脇差を淸兵衞に與へける、其さまこそは傷ましけれ。此福原が古は、太閤の嬖臣にて、朝鮮陣の時節には、橫目の隨一なれば、諸將も心を置かれしに、今は恐懼の身となりて、倍臣にまで氣を惱ます。用ふる則は鼠も虎となり、用ひざる時は、則ち虎も鼠となる風情、哀れは不定の世の中なり。

偖清兵衞暇乞し、是まで命延びたる事、偏に西尾殿の御芳志なり。此上猶も賴入るの旨、懇にいひ傳へ、又自筆にて書札あり。

昨日廿七日、朝熊致₂參着₁、則今日清兵衞幷送之衆返進候條令₂啓上₁候。被₂入₁御念₁由、路次中泊々至₂傳馬以下₁迄、無₂殘所₁馳走候。彼是御芳志難₂報候。度々如₂申上₁、內府公御前之儀、愈奉₂賴計候。猶以拙者所存之通爲₂可₁申上₁、使者相添進入候間、彼₂屆₁聞召₁、以₂御分別₁如何樣共丁簡所₂希候。頓而御吉左右奉₂賴候。恐惶謹言。

九月廿八日

福原右馬助入道

道 蘊

西尾豐後守殿

斯くて淸兵衞暇乞して朝熊を出で、宮川の渡船を乘越し、小俣の宿に休らひ居る所に、早馬を打ちて通る者あり。何事ぞと問ひければ、福原右馬助に、自害をさせよとの使なりといふ。果敢なかりける次第なり。福原使に對面し、少しも駭く氣色もなく、尤も斯くあるべしと、豫て思ひし所なり。三成と遁れざる某がことなれば、公の御遠慮至極せり。たゞ何事も夢ぞかし。世をも人をも恨みずとて、爽に腹をぞ切つ

たりける。

石田軍記卷之十一終

石田軍記卷之十二

小西攝津守被生捕事

夫莫遠慮則有近憂とかや。小西攝津守行長は、朝鮮征伐の時は、日本第一の軍將にて、大明までも、突厥が再來かと、目を驚かさぬはなかりしに、歸朝の後も、肥後半國を領知して、八代の城主たりしが、關ヶ原より歿落して、膽吹山の續き、糟河といふ深山に隱れ居し心の中、推量られて無慙なれ。惣じて今度西軍過半は、濃州糟谷へ落ち來る由、專ら風聞あるに依つて、近邊の野伏も亂妨の爲、弓・鐵炮・槍・長刀を携へて、谷々へ分入り、殘る隈なく搜しけり。爰に關が原の住人相州の林藏主とて、禪宗墮落の法師あり。今度の兵亂に付きて在所を立退き、彼谷に忍んで居たりしが、鄕人と相雜り、落人を求めけるに、小西行長をぞ見出しける。行長此林藏主を招き寄

小西行長虜せらる

せ、其方の人體、並々の野伏郷人原とも見屆けず。如何樣所以ある人と覺えたり。是を以て名乘るぞや。今度一方の大將をも勤めたりし、小西攝津守行長といふ者なり。戰場にて討死もせず、斯く落人となりし事、臆したりと思はるべし。我が貴敬する宗は、自餘の門派に違ひて、自害をせぬ掟なれば、力なく斯の次第なりとて、則ち頸に掛けたるこんだつといふ者を、取出し見せにけり。早々我を引連れ、京都へ渡すべし。さあらんに於ては、過分の褒美に預かるべし。又此刀をば、其方に與ふるとて、光忠の刀を、林藏主にぞ渡しける。其外來れる郷人共には、金銀を取らせんと、則ち是まで附隨ひし侍六人が、肌に付けたる金銀を、配分せよとて渡しけり。然る所に竹中丹後守重門が軍士伊藤治左衞門・後藤市左衞門、岩手の城の留守番を勤め居けるが、此由を告ぐるに依つて、兩人早々馳着け、小西を搦捕り、十六日の夜は、岩手の城へ入置き、數十人夜と共に、稠しく守りて番を致し、十七日は晩に及んで、彥根に着く。彥根の城は、黑田甲斐守の家臣後藤又兵衞、城番勤めて居たる所へ、小西を生捕りて、此迄來る由を案内す。又兵衞是を請取りて、彼は大事の四人なりと

て、足輕卅人に急度番を申付け、通夜寢ず守らしめ、其夜又兵衞方より、八幡の御本陣へ注進す。翌十八日、伊藤治左衞門・後藤市左衞門・林藏主三人の者共、小西引連れ草津の宿へ參着し、村越茂助を以て上聞に達す。其時公上意ありしは、黑田が軍士後藤又兵衞が方よりして、小西を捕り得たる由告げ越しぬ。不審に思召さるゝの間、穿鑿せよとの上意なるに因つて、彼三人を呼出し、上意の旨を申聞かせ、委細に僉議ありしかば、三人の者、具に前後を言上す。公聞召し、猶覺束なきの條、只小西に問ひ、白狀の上にて、落着極むべしと仰せらる。村越上意を承つて、小西に近付き、今度山中に忍んで在りしより、草津へ來る迄の次第を、具に談られよといひしかば、小西がいふ樣は、別なる事も候はず。伊吹山の何方なる山中へ落行く時、是なる法師に捕はれたると申すに付、村越其旨上聞に達しければ、甚だ御感あつて、則ち御褒美として黃金百兩、林藏主に下され、小西所持する光忠の刀に、御感の御書を添へられ、竹中丹後にぞ下されける。其よりして大津に御着座の所に、京都の吳服所龜屋永仁・茶屋新四郎、扇子並に新淀の錦綃等を奉獻し、御目見え申上げ、頃日に至つて、

京洛殊の外騷動の由申上ぐれば、さこそあらめとて、御法度を定められ、制札を仰付けられ、廿日の午の刻、一條の辻に立てさせ、則ち奥平美作守を諸司代に定め置かれしに依つて、洛中も靜謐せしめ、四民擧つて東君の御政道を悦び、御代萬歳と祝する聲、洋々として耳に滿てり。爰に京極若狹守高次は、公大津に御滯留と聞きて、高野の麓より立歸り、御目見え致されけり。其時上意には、今度の働神妙なり。さり乍ら殘念さは、今二三日抱へられ、我れ爰に至るまで籠城に於ては、江州の大守たるべきをとて、御一笑ありしを、實に本意なき仕合とて、御前に在合ふ人々も、共に心を惱しけり。

石田治部少輔被生捕事

人の死する時に言ふこと善く、鳥の死する時に鳴くこと哀し。一朝榮華に夸つて、羅綾を徇重しとする日は、萬人其機嫌を伺ひ、諂はずいふことなく、一夕威權を失つて、縕袍も亦能はざる時は、百姓すら用ふることとなし。榮枯事過ぐれば、都て夢とな

ると、古人歎きし所なり。偖も石田三成は、關が原の軍に討漏らされ、暫時の命を續がんとて、始は江州淺井郡井口といふ處に、深く忍んで居たりしが、田中兵部大夫、上意承りて捜す由を聞付け、其より江州草野の谷といふ所へ、涙と共に落行き、七曲より、同谷の高野村へたどり出で、柱法師といふ山の峠へ漸う落着きて、須臾心を休めけり。此所に至るまでは、家の子三人附添へしを、三成近く呼寄せて、各志、千金萬珠も報ずるに足らず。然れども此砌、思ふに叶はぬ事共なり。此所にて速に、自害をもせばやなんど思へども、死を一時に究むるは易くして、功を萬代に立つるは難しといへること、古より良將の專ら嗜む所なれば、我も又此節に遁れつべくんば、身を窶し、農工商の業をもして命を存へ、今一度此鬱憤を散せんと庶幾する故、斯く難面も徘徊す。人多くては叶ふまじ。名殘は山々惜しけれども、此より一先づ落行きて、如何なる方にも身を隱し、我れ世に出でたると聞くならば、山川萬里を隔つとも、必ず尋ね來るべし。早疾々と勸むれば、三人の侍共、こは仰とも覺えず候。遙々是まで附添へしは、如何にともならせ給はん迄、附纒ひ奉りて、御行末を見ん爲にて

こそ候なれとて、中々落つべき氣色もなし。三成重ねて申樣、此節に至つて、我獨だに忍ばん事、優曇華よりも猶難し。其に大勢供せん事、却て不忠の至り、全く無益なりと制する故、三人一度に申す樣、偖は我々三人を、二心ある者と思召さるゝ故、落ちよとの仰なるべし。さあらば生きても生甲斐なし。別心のなき處を、先づ見せ奉らん、尤とて、三人共に刺違へんと、已に刀に手をかくれば、三成周章てゝ押隔て、愚なる汝等かな。先より我等が密計を、淵底殘らず知らせしに、其を用ひず刺違はゞ、七生迄の勘氣ぞと、顔色替へて見えしかば、三人の侍共、飽かぬは君の仰かな。さらば古賴朝は、石橋山にて討洩らされ、朽木の洞に隱れても、終に天下を掌握し給ふ。君も命を全うして、二度御世に出で給へ。其時又々奉仕せんとて、涙ながらぞ落行きける。此者共が心緒、優しかりける次第なり。是より三成は、三人の後影を見送り、心細くも唯一人、山中に停立みて、中有に迷ふ形迹、行先もなく、又歸るべき家もなし。肇めて三世因果の道理を、目前に知られけり。世に在りしには替り果て、鳥の聲風の音までも心に當り、腸を斷つが如くにぞ覺えける。小緣にも、音信るゝもの

なければ、落涙百千行、時々仰二彼蒼一と、管君の昔を思ひ、夜坐二寒山一連二曉月一、行々涙盡二楚關西一と、李白がいひしも是ぞかしと、今一入に噎びける。扨如何がはせんと思ひしが、急度案じ出す樣、我れ幼少の折柄、手習せし其寺あり。彼師の坊を賴まんに、よもや否にはあるまじとて、牛福寺といふ眞言寺へたどり着き、十五日の夜に入りて、竊に案內言入れて、舜動院を懇に、賴み入ると詫びしかども、住持は少しも許容せず。三成重ねて申す樣、其は出家に似合はぬ事、假令惡人たりとても、助くるは僧の掟に候はずや。是非とも賴み存ずといふ。住持聞きて嘲笑ひ、助くといふも事により、又は人にも因るぞかし。其方如きの惡人をば、科に行ひ懲らしめて、諸人の心を正すこそ、佛の掟といふものなれ。我が僻案とな思はれそ。經論に瞭然たり。調達が眼前に、無間獄に墮するをも、佛目是を救はせ給はず。彌陀の利劔多門の弓、皆懲惡勸善の方便にてあらずや。其上古此寺にて、手習の好ありとは、皆人知れる事なれば、隱すとも祕されじ。只何方へも行かれよとて、門戶を閉ぢて音もせず。三成すべき樣もなく、天に跼し地に蹐して、井の口村へ行着く頃、東雲も明渡れば、三界

廣しといひながら、一身の置き所、如何がはせんと案じつゝ、其ほとりを見廻せば、茂りたる茶園あり。其下に身を屈め、葎を取つて引被ぎ、鶉の如く隱れ居る。浩る所に彼寺にて、手習せし時々に、能く見馴れたる里人に、野々といへる耕作人、足下に來りて是を見付け、怪みて躊躇ふ。三成撿と驚きしが、心を靜めて野々を招き、具に次第を言聞かせ、昨日より食事もなく、飢に臨みて難儀せり。何にても給へといへば、野人といへども、見るに忍びぬ哀さに、是體にても參らんかと、禾黍雜りの農飯を、懷中より取出して、三成に與へつゝ、立歸らんとせし所を、三成野々が手を取りて、暫く我を隱されよ。追付世にも出るならば、厚く恩を報ずべし。偏に賴むと詫びければ、見るに哀を催され、さあらば爰にて暮されよ。夜中に迎入れんといへば、其日の暮るゝを待兼ねける、心の中こそ不便なれ。十六日小夜更けて、野々が家に立忍び、少し心を休めけり。蒐る所に田中兵部、草野の谷を探せしが、又在々所所に殘なく、嚴密の札を立てにけり。落人の在家を告げ知らする輩には、莫大の褒美を、其日に與へ給ふべし。若隱し置くに於ては、假令後日に知るゝとも、急度嚴科

に所すべしと、書錄口上にても觸れさせけり。野々が妻是を聞き、密に野々に叩く樣、緣なき者を隱し置き、憂目を見せん見んよりも、急ぎ此由告げられよと、事々しき形勢なり。野々情ある男にて、一樹の陰に立寄り、一河の流を汲む事も、多生の緣といふ事あり。假令五日が三日が中、密に隱し置くとても、知る者はよもあらじ。物の命を助くるは、偏に菩薩の行ぞかし。先づ沙汰なしにせよといへば、女房聞きて、以の外に腹を立て、よし其方は落人と一味せば、我は殿に告げんとて、生得山家は、殊更氣立頑なれば、夜叉の荒れたる貌付して、踊出でんと閲くを、野々は是非に及ばずして、女が袖を引止め、如何樣汝がいふ如く、由もなき慈悲立して、惜しき命を失はんは、無分別の至なり。さらば某訴人して、只今御褒美貰ひ來ると、ありし所を立行きしを、嬉氣に悅ぶ女の爲體、見る人聞く人押並べて、惡まぬ者ぞなかりける。斯くて野々は、其中にも能く思へば、野々が爲には氏神の、變化と褒むる人もあり。兵部の家臣澤田庄左衞門に近付きて、今朝落人かと見えし者、我家に立寄り、病人の由を申候ひしを、若し御尋の者かと存じ、取留めて置き候。人を遣され候て、御覽候

石田三成虜せらる

へといへば、田中聞きて時を移さず、大勢農家に込入りて、其體を窺ふに、樵夫の體に姿を替へ、破れたる綴を身に引懸け、小田原笠を顔に當て、打臥して居たりしを、庄左衞門取て押へ、何國如何なる人ぞと問ふ。三成少しも驚かず、小聲になりて、某は旅行の者にて候が、俄に病氣に侵されて、此所を須臾賴み休ふと答ひしを、笠取除けて能く見れば、疑もなき三成なり。頓て稠しく繩を掛け、引連れて田中に見せけるは、忽に娑婆變じて泥黎となる。田中則ち焔王の如くにて、諸膝折りて俯きしは、哀にも又傷しけれ。其時迄も懷中に、脇差を嗜みしが、自害の隙やなかりけん。此脇指は太閤よりの拜領にて、一尺三寸切刃の作、粂眞と聞えけり。偖十九日の早朝に、三成を搦めながら、竹の筒を頸にさしければ、其時三成目を瞋らし、汝等曾て侍の法を知らずと、殊の外に惡口す。其より傳馬に縛付け、大津へ連れて參着し、委細の趣言上して、彼脇指をも差上げける。君次第を聞召して、三成に小袖を下され、衣裝を改めさせ給ふこそ、寬仁の御惠なれ。太閤御治世の時は、三成權威に誇り、諸大名を蔑に思ひ、賢人を嫌ひ佞人を愛し、人の善を見ては嫉み、他の惡を聞けば非を揚

げ、外直くして内曲れるは、趙高にも猶十倍せり。去るに依つて關白秀次をも讒害し、亦高麗陣の節は、彼が讒言に依つて、迷惑に及ぶ將士數を知らず。然れ共太閤の寵臣たれば、枉げて蟄居させ置かれたり。又太閤薨逝の後、三成に遺恨の者十餘人、加藤左馬助・同肥後守・長岡越中守・淺野左京大夫・福島左衞門太夫・池田三左衞門・黑田甲斐守・堀尾帶刀等、數箇條の過失を書記し、數(しば〳〵)是を訴ふるに因つて、身命既に危ふかりしを、内府君の御慈悲を以ての故に、危き命を助け置き給ひ、剩へ宰相秀康公を、路次の用心として相副へ、佐和山へ送り入れ給ひし、其厚恩を忘却し、由なき野心を挿み、今度謀叛を企つる事、磔罪とぞ覺えける。其後御前へ引出され、御對面なされけり。諸大名並に近臣、雙方に並居ける中、一間隔てゝ三成を御覽あつて、侍はある習、三成不運とぞ仰せられける。三成臆したる氣色もなく、抑仰向き申す樣、是全く天命なり。唯疾く死を給はれと申しけり。君聞召して、良將なり良將なり。惜いかな此人と上意あれば、諸士一同に袖を濕しけり。諺に、虵の道は龍が知るとかや。惜い哉良將の御一言は、塵點却御仁心、磷かざるの雷聲なり。偖御前を引出し、酒井

左衞門預りにて、大手の門の傍に、一間なる所を飾ひ、蜘手稠しく結廻してぞ置かれける。偖勤番の侍共、三成にいひけるは、貴殿程の名將が、十死一生の身となれば、岩屋の中に在りし時、如何ともならずして、浩る恥辱に遇へる事白しといへば、三成聞きて嘲笑ひ、汝等如きの平侍は、敗軍の期に臨みて、人手にかゝらぬ樣に啫むは、定まれる格式なり。大將たる身は、如何にもして命を全うし、時節を待ち、欝憤を散ぜんと、身を曲げて存ふるが良將の道なり。汝等如きが了簡とは、雲泥萬里違ふべし。燕雀何知鴻鵠志と、口賢氣に申せしを、聞く人猶も嘲りて、耗らず口とぞ笑ひける。古周の文主は、羑里に囚はれさせ給ひしかども、御命を恙なく渡らせ給ふに依つて、終に天下の主となり給ふなれば、今に至つて、是聖人なりといひて、嘲る事を聞かず。又越王句踐は、呉王夫差に降りて、土の獄に押籠められ、石癰を嘗めてだに存命せしにより、呉王夫差を亡して、再び國主となりけるを、萬人恥なりといふ者なし。我朝に於ては、後醍醐天皇は、已に笠置の山にして、平民の虜となり給ひしも、終に北條を亡して、再び天位に登り給ひ、又源賴朝は、石橋山の軍に負け、伏木の洞

に隱れても、驕る平家を討ち平らげ、天下の權を執り給ふ。是皆命を惜みて、死すべき時に死せざるに似たれども、全く以てさには非ず。思ひ籠めたる所あつて、命を無差と捨て給はず。是を以て思ふ時は、三成が存念、鷦鷯の志にあらず、尤至極せりと、申す族もありしとかや。

石田軍記卷之十二終

石田軍記 巻之十三

安國寺被二生捕一事

安國寺惠瓊は、元來藝州沼田郡金山の城主武田刑部少輔信重が末子なり。幼少の名は竹若丸、出家の後頓藏主といひて、東福寺の住侶、紫衣の僧たりしが、十二萬石の知行に替へて還俗し、今度の謀叛の張本なり。元來毛利家の一族にて、南宮山に陣取りせしが、敗軍して、毛利秀元・吉川侍從・宍戸備前の備に交り、江州那須野まで來りしに、如何思ひけん取つて返し、朽木谷へ落行き、桂川にかゝり、小原に出で、鞍馬寺へ落行き、月性院に蟄居したりしを、毛利家より横目に附置きける淡屋平右衞門、蹤を慕ひ追付きし故、亦鞍馬を濳に出で、七條の道場に深く忍び居たりけり。然るに江州先方の侍に、樂鎭といふ浪人、安國寺が在所を聞出し、時の所司代奥平美作守

安國寺惡瓊虜せらる

へ告げしかば、則ち捕りに遣しけり。其時迄は、平井藤九郎・長坂長七といふ侍二人附いて居たりしが、何とやらん世上の體、物騷にありしかば、安國寺を輿に乘せ、二人の者介錯して、東寺の方へ出でけるを、彼樂鎭跡に附きて、奉行所の侍に、斯くの次第と告げしかば、輿昇ける二人の侍、今は遁れぬ所ぞとて、乘物越に安國寺を切りにける。其刀、左の頬先に當つて疵付けり。彼兩人が働にて、手負死人ありけるが、其場にて討たれけり。扨樂鎭には褒美として、黃金五百兩下されける。此者は北村五郎左衞門とて、其古江州の義鄕に仕へし、記錄所の奉行にてありしが、太閤の御時、三成・安國寺等が讒言にて、義鄕を改易ありしに依つて、國中の侍浪人す。其遺恨に訴人して、年頃の欝憤を、今度晴らし悅ぶ事、偏に御代の御恩なりとて、樂鎭故鄕に立歸り、御拜領の黃金を靑銅に賣替へて、貧者に配分せしとかや。斯くて十月朔日に、三成・小西・安國寺、此三人を車に載せ、室町一條の辻より、六條川原まで引渡す。一番の車は三成、二番には安國寺、三番は小西なり。此事四方に隱れなく、見物の貴賤群集して、此人々の形勢(ありさま)を、哀といへる者もあり、又日頃の邪曲の事を能く知れる輩

石田・小西・安國寺刎頸

は、尤斯くこそあるべけれ抔と、色々樣々評論せり。太閤御治世の折柄、此三人の嚴威には、人倫はいふに及ばず、空を翔ける翼も聲を呑み、地を走る獸も尾を隱す風情にて、居所は樓臺を堆くし、衣裝は綾羅を重ね、食は山海の珍奇を盡して、何に不足もなかりしに、由なき謀叛を企て、今日は路頭に顏を曝す事、盛者必衰の浮世とはいひながら、無慙なりける次第なり。借町條を引渡し、河原に於て頸を刎ね、三條の南に行き、馬を結ひて梟首せり。何者かしたりけん、一首の落書を立て添へたり。

治部殿の知行所は石田にて早になればば三成もなし

備前中納言秀家關原退口の事

備前中納言秀家は、宇喜多和泉守直家の息にて、備前・美作を伐ち從へ、五十萬石管領せり。直家死去の時分には、八郎秀家幼稚たりといへども、秀吉公の吹擧を以て、信長卿より跡職を給はり、中納言に經上り、何の思ふ由もなく、月花を弄びて明し暮してありけるに、今度三成に與黨して、家系を斷絶せられけるは、先祖に對して不孝の

終といひつべし。關原へは騎馬の兵千五百、雜兵一萬五千人にて向はれしに、九月十五日敗軍して、膽吹より山傳ひに、濃州糟川の谷へ落つる時は、供する者只二人、秀家の手を引きて、山中郷といふ山里へ、九月十六日の暮方に、漸々たどり着かれけり。哀といふも餘りあり。爰に濃州池田郡白樫村の住人矢野五右衛門といひし者、落人ありやと、此彼捜し行く所に、秀家を見付けしかば、槍取側め向ひける。三人の落人、偖は遁れぬ所ぞと、身構して待ちにける。五右衛門近く立寄り、秀家を倩見て、如何樣是は只人ならずと、傷しく思ひければ、何方へ御越の人にて候ぞ。不知案内に於ては道しるべ申さんと、最眞に見えしかば、二人の侍悦びて、御覽の通り落人の事に候へば、何國といふしるべもなく、只山深く分入るを、便るのみにて侍ると、七細氣にいひけるに、五右衛門哀を催し、其儀にて候はゞ、某が住家は、白樫村と申して、行程三里に餘れり。埴生小家の中々に、見苦しく候へども、山深き所にて、さのみ人目も繁からねば、暫く腰をも懸けられて、御休なさるべし。道しるべ申さんと、先に立ちて進みけり。其所嶮岨にて、牛馬も通る道ならねば、五右衛門が召連れし九藏

宇喜多秀家逃れて大坂に入る

といひける小者、秀家を負ひ參らせ、三里餘の山路を、片時の中に行着けば、日も西山に傾きぬ。暗紛れに五右衞門が帳内に入れ申し、食事を營み進めつゝ、五右衞門夫婦他念なく、好きに傷はり賞にけり。則ち三人の姓名、今は包むに及ばずとて、委しく語られければ、五右衞門夫婦の者、段々樣子を聞きしより、猶大切に思入り、晝夜心を惱ましけり。幸と我家の山陰に、峒穴のありけるを樣々に飾り、秀家をば是へ移し、朝夕の飮食を、忍々に持運べば、知る人更になかりけり。或夕暮の徒然に、四方の雜談せし折柄、大坂の屋形に、秀家の御臺御座す由、愛褻げに聞えしかば、五右衞門哀に思ひ籠み、何とぞ忍びて大坂へ送らばやと思案して、兄の何某中風故、有馬へ湯治に連行く由、鄕中へも披露して、秀家を猿輿に乘せ、綴夜衣を身に纏ひ、古綿帽子を引被らせ、懼々ながらも舁せ行く、五右衞門が賴もしさ、譬へていはんやうもなし。泊々の宿にても、中風病の事なれば、五體不如意に候とて、飮食並に大小用まで、猿輿の內にて賄ふは、笑止といへるものはあれど、見咎る人もなく、漸く大坂にたどり着き、鰐の口を遁れたる心地も、斯くやと悅びけり。秀家年頃存知の僧、天

王寺にありければ、是にたより案内させ、夜半の紛れに屋形に入り、御臺所に逢へ給へば、是は夢かや現かや。唐土の王質が、仙宮より立歸り、我朝の浦島が、蓬萊より來れるより、猶稀かなる見參やと、悅び給ふぞ理なる。御臺始末を聞き給ひて、其五右衛門といふ人は、秀家卿の御爲には、誠に命の親なりとて、頓て對面を遂げられ、種々懇に饗應して、樣々留められけれども、又こそ參り候はめと、頻に暇を乞ひけるにぞ、其時秀家對面ありて、此度の恩賞、報じても報じ難し。生々世々忘るべき事に非ず。若し天道の惠もあつて赦免を蒙り、本領安堵するに於ては、必ず來り候へ。其時の驗ぞとて、秀家自筆に證文を書きて、五右衛門に與へ、涙をぞ流されける。御臺所より引出物として黃金卅枚、又女房の方へとて、吳服一重給はり、御暇申して歸りけり。情は人の爲ならずと、西行法師がいはれしも、斯樣の事をや申すらん。

島津兵庫頭義弘退口の事

爰に島津兵庫頭義弘は、九月十五日、關原の合戰敗北して、諸勢は皆膽吹山の方へ退

きけるに、義弘は引返し、死殘りたる手勢三千餘騎を引具して、勝誇りたる東軍數萬の中を截拔けんと、無二無三に駈けたりけり。其時東軍の先手、何となく色めきけり。其中に福島太夫正則唯一騎、島津に討つてかゝらんと、頻に馬をぞ進ませけるに、前後の隨兵鞍馬に取付き、物に狂はせ給ふかと、一向に止むれども、正則中々聞入れず、汝等共に臆せしか、侍の墓所は、戰場にあるなりとて、尙勇んで駈出でられしを、我々爭で臆し仕らん、駈くべき處を駈け、引くべき處を引き、進退變に應ずるを、良將と承る。是程勝ちたる合戰に、死武者に渡り合ひ、命を捨てゝ何の益か候と、大勢馬に取付きて、無體に跡へ引返せば、正則是非に及ばず、齒嚙をなして引かれしが、敵に後をば見せじとて、馬上にて捻直り、後向にぞ騎られける。されども味方は多勢にて、踏止り〳〵、命を惜まず戰ひしかば、薩州の軍勢、五十騎計りに伐ちなされ、伊勢地に懸り、江州甲賀に至りけり。其日の軍虐くして、兵糧遣はん隙もなく、其上路すがら所々の合戰に、軍士疲るゝのみならず、飢渴に及ぶ事甚し。義弘申しけるは、近鄕へ立入りて、食事になるべき物あらば、何にても取り來れ。承り候とて、方々

へ走り廻り、何角の選なく搜せ共、此度の騷動に、皆山林へ逃隱れ、男女共に一人もあらざれば、增して五穀の類とては、一粒もなかりけり。爲方なくて立歸り、其由を委細に述べければ、義弘聞きて、牛馬はなきかとありければ、卓散に繫ぎ置きて見え候。其こそ宜き食物なれ。早々牽いて來れとて、一々に刺殺し、存分に賞味せしは、時に當つての働、武勇の程、類稀にぞ聞えける。其より又山中に分入りしが、始めての路なれば、十方に暮れて躊躇ひしに、功臣の計らひにて、所の老人を召捕り繩を掛け、伊賀越の案內せよと、先に立てゝ行く所に、伊賀の上野に到りけり。此處は東軍方筒井伊賀守の領地なる由聞きて、使を以ていひ送らるゝは、島津兵庫頭、只今御城下を罷通り候と案內をいはせて、一里計過ぐる所に、鄉人共四五百人弓鐵炮を携へて、落人を止めんと、嶮難の地に待懸くる。兵庫頭此を見て、鄉人原ぞ討取れとて、五十餘人切つて蒐り、右往左往に追立て、生捕二人首五つ伐取つて、又上野へ立歸り、城の大手に首を梟け、生捕二人は柵の柱に縛付け、矢立の筆を取出し、各札を書付けて、のさ〳〵と打通り、十七日の早朝に南都に至り、彼老人には、挿せる所の笄を取らせ、

島津義弘薩摩に遁る

是を持ちて近々に、必ず薩摩へ下れとて、色代して返されけり。則ち其日の夜に入りて、泉州堺の町に至り、入江孫右衛門といふ者の家に落着き、須臾が間休息して、其夜に頓て出船をぞせられける。又大坂の町人に、田邊屋道與といふ者、兵庫頭の内室を、屋敷より隱し出し、是も同十七日の夜、大坂を出船しけるに、住吉の沖にて打合ひたり。されば彼元祖忠久、此社内にて誕生ありしより、子葉孫枝次第に繁榮す。是よ今又此沖にての對面は、偏に神助にてやあるらんと、不思議なりし事共なり。り鎭西にこそ赴きけれ。其頃黑田如水は、豐後國安喜の城を攻圍みたる時なれば、敵の援兵を恠み、森江の湊に番船を置きて守らしむ。浩る所に薩兵の兵船三艘、將の船には走り後れ、揉みに揉んで漕ぎたりしが、番船の篝を見付け、大將の本船ならんと心懸け、此湊に繫がんとす。番船是を尤めしかば、島津の軍兵驚き周章、湊の外に漕出しけるを、番船共追かけ、旣に乘取らんとせし所に、夜も早明に及びしかば、類船餘多返合せて戰ひけり。事終りて九月廿三日の夜、日向の沖に至る時、小雨降り霧深くして、更に湊を辨へず、如何がはせんと漂ひて、向を見れば海上に、火の數多

く見えけるを、是も敵の篝火か、釣する海士の漁火かと、皆人恠しみ思ふ處に、兵庫頭是を見て、あの火をしるべに柁を取れと、頻に下知をせられければ、水主柁取心得て、彼火を候に寄せければ、程なく湊に付きたりけるが、偖何の火ならんと見るに、彼火は跡形もなし。兵庫頭語られけるは、昔景行天皇の、筑紫方へ行幸ありし其時も、斯る事の祥瑞に依つて、不知火の筑紫とは名付け給ふとかや。是は只事ならず。氏神住吉大明神の加護ならんと、皆人尊敬する處に、本國薩摩より、數萬艘の船を飾り立て、迎の爲に來りしかば、悦び勇みさゞめいて、同月廿五日には、加護島に着船す。偖大坂の田邊屋・堺の入江兩人には、今に恩惠厚く蒙り、彼甲賀の老人も、其後國に下りて、金銀呉服を拜領せしと傳へ聞き、稱感せぬはなかりけり。

石田軍記卷之十三終

石田軍記卷之十四

立花左近將監退口の事

筑後國柳川の城主立花左近將監は、九月十六日の夜、佐和山の煙を見て、翌日早天に、手勢二千八百餘騎を引率して京都に上り、三條御幸町に人數を備へ、政所の御所にありし木下肥後守へ使者を立て、今關原に於て、御子息秀秋は東國方となり給ひ、御手前御滿足たるべし。然れども亦大坂の城測り難し。御籠城に於ては、某も一所と存ずるなり。貴殿にも定めて同意たるべきの條、唯今御同道申すべく候と言遣しけり。肥後守は、太閤政所の舍兄たるに依つて、北の政所と一所に、大炊御門の下屋敷に居住せしが、立花の使者到來を聞き給ひて、北の政所・上﨟・女房達は、歩行の體にて、禁中へぞ逃入らせ給ひける。是に依つて洛中又大に騷動して、上を下へと翻し

胡亂堪へぬ。偖肥後守の返事には、大津より御歸陣の次として、是迄御使者、其上御籠城あるべきの儀、尤至極に存候。某も後日に罷下るべしと返事して、其儘城戸を堅めらる。宗茂は是を聞きて、嘲笑つて大坂に下り、天滿橋に人數を立て、輝元と增田が方へ使者を以て、唯今是迄歸陣致候。御籠城に於ては、何れにても持口一所預けられ候へとぞ言遣しける。其返事に、評議を相定め、此方より返答申すべしとありければ、宗茂聞きて、腰の拔けたる輩かな。嗚呼孺子共に謀るに足らずとかや。急ぎ國に歸つて、安否を定むべきものをとて、九月十七日に大坂を出船して、同廿一日に、筑前の岩松といふ所に着き、其より陸を下つて、道々に在る所の敵の城々へ案內を遂げ、廿三日に筑後國柳川に着きて楯籠るは、いかめしかりける事共なり。されば肥前國鍋島加賀守の一子同信濃守は、隣國の事なれば、柳川の城をば攻取るべき由上意を蒙り、其勢都合三萬八千七百餘騎、筑前と筑後の堺なる、田代より取かけけり。是より先、宗茂大坂出船の砌、島津陸奥守義久が妻子、大坂にありけるを盜出し、同所川口にて、島津義弘に渡しけるとかや。柳川には是を聞き、小野和泉を大將

にて、其軍兵選勝つて四千三百八十餘騎、筑後國榎木原に於て合戰す。兩方の軍勢、追つつ追はれつ、討ちつ討たれつ、互に手負討死は、幾といふ數知らず。爰に立花三太夫は、思ふ仔細あるにより、群に勝れて出立ちけり。卯花威の鎧に、鹿の角打つたる兜を着、生裝の横刀を帶き、國光が鍛つたる幅三寸に身五尺ある大長刀を振廻し、四寸に餘れる駮の馬に、貝鞍置いて輕氣に乘り、後に殘る意もなく、前に懼るゝ敵もなき形勢にて、味方をも顧みず、大勢に駈入り、思ふ程戰つて、爽に討死せり。鍋島勢にて、新手を入替へ戰へば、和泉は城中へぞ引入りける。彼三太夫と申せしは、血氣壯の若武者にて、覺ある勇士なるが、常々人も申せしは、自然の事のあるならば、人には先を越えられじと、過言せし驗もなく、今度伏見・大津の攻口にて、差る働もなかりし故、常の口とは吻合せで、無事に歸陣したるよなど、諸人嘲る由を聞き及び、口惜く思ひて、寢食をも安んぜざる所に、此合戰ある事、我身獨りと悅びつゝ、宗茂に對面し、某平生存念に、自然の事もあらんには、御馬の先にて速に命を捨て、多年

の御恩を報ずべしと、心にかけてありし所に、武運の盡にて候や。伏見・大津の城攻に、何の働をも仕らず候を、皆人嘲り申す由、尤恥辱に存じ奉る折柄、明日の一戰に、選出され下さるゝ事、誠に冥加に相叶ひ、大慶之に過ぎず候。今生の御暇乞申上候とて退出せしは、潔くも又哀なり。實に武士の志は、斯くぞあるべき事共にや。其翌日の曉天より、戰場に馳向ひ、鍋島の軍勢、十二段に備へて待かけし所に、柳川勢押寄せ、馬よりひた〳〵と下り立ちて、鎗襖をなして睨合ふ。時に彼三太夫只一人、今日の一番槍と名乘つて、十二段に備へたる堅陣に馳入れば、溢者とや思ひけん、又勢の烈しさに、辟易やしたりけん、先手と二段の備、二つに分れてぞ通しける。三段目の備へにて、多くの敵に渡り合ひ、聲花(はなやか)なる働きして、人の目を驚かし、終に討死遂げしとかや。斯くて小野和泉、城中に引入れば、鍋島も軍を引きたりける所に、黒田如水、所々の凶徒を退治して、又柳川に出張す。加藤清正、肥後國より出向ひ、如水・清正相談して、宗茂に意見せられけるは、貴所の憤も是までの事、今度關原敗軍より以來、武の一通に於て、誰か愊(さみ)する者候はん。且又石田が濫觴は、秀頼公に託(ことよ)せ

て、終に天下を奪はんとの謀なれば、假令軍の最中に、東君の御味方に參られ候ても、聊武義に背けるに非ず。殊更三成も、天罰にて滅亡せし此上は、城を渡され候て、本領安堵ある樣の御思案宜しかるべきと、種々に敎訓ありしかば、宗茂實にもと領掌し、頓て城をぞ明渡されける。則ち淸正の支配として、加藤美作を城代に入れ置かる。府君斯くの次第を聞召され、立花左近を上方へ召されて、當分奧州棚倉にて、知行一萬石下されけり。又久留米の侍從包長も、大坂より下着して、是も城を明渡さるれば、和田備中を淸正より、久留米の城代にぞ差置かる。斯くて立花宗茂をば、肥後守領分南關(みなみのせき)といふ所に置かれ、同家來に至つては、殘らず是を召抱へ、本領相違なく、柳川組と名づけて召遣はれけり。偖宗茂は法體して、道伯とぞ號しける。又同國山下の城主筑紫上野介廣門も、同時に城を渡されければ、淸正より城代をぞ入置かる。上野介も落髮して、夢庵と改名し、八代にて、三百人の扶持を合力せられ、家賴の者も本知にて半分は召抱へ、與力附にしてぞ仕はれける。淸正逝去の後、子息筑紫主水をば、江戸黄門君へ、召出されけるとなん。關原陣の後四年に、立花左近宗

立花宗茂降る

茂・丹羽五郎左衞門長重兩人を召出され、宗茂には本知柳川を下され、長重には本知の替りに、奥州白河にて、本領程下され、家系長久に傳はりけるこそ目出度けれ。

石河備前守關原退口の事

尾州犬山の城主石河備前守は、三成に與して、則ち犬山の城に栖籠る。西國方よりの加勢には、濃州黑野の城主加藤左衞門、同國岩手の城主竹中丹後守、同國郡上の城主稻葉右京・同彥六、勢州關長門守、其外大坂の弓鐵炮の組、共に都合七千七百餘騎籠城せし所に、福島正則噯を以て城を明渡し、伊勢の淺間へ立退きしが、道より取つて歸し、手勢千五百ににて關原へ出向ひ、又三成と一所になり、十五日の合戰に、公の御旗本の本多三彌と渡り合ひ、三彌は素槍、備前は長刀にて相戰ふ。白相識りたる中の事ながら、敵味方と別るれば、組みて勝負を決せんと、堅津を呑み拳を握り、已に馬を乘違ふる所に、惣人數崩れかゝりて、備前守も心ならず敗軍し、越前の方へ落行きて、朽木越に都へ上り、日頃目を懸けし町人に、虎屋といひし者の所へ、十月

十六日の夜半の頃に落着きしを、虎屋甲斐々々しく饗應し、暫く疲勞を休めけるが、爰にも忍び難くして、虎屋には黃金を與へ、同十九日の夜に入つて、龍安寺へ立越え、一日一夜隱れしが、是れ又心易からねば、妙心寺の塔中に、養德院とて、先祖の寺のありけるに、廿日の晚方にぞ音信れらる。和尙頓て出向ひ、能くこそ來らせ給ひけれ。安否如何と思ひしに、恙なく在して大悅致候、いつ迄も快く忍ばせ申し候はんと、最懇にありけるを、何とか思はれけん、廿一日の夜に入りて、大坂指して下られしが、其より直に播磨へ越し、落髮の體となつて、輝政へ走り込み、如何樣とも御計ひに預り度旨、先非を悔え賴みければ、輝政哀を催され、御心易かれと、種々丁寧に饗應して、其より君へ申上、能々取成し申されしに依つて、死罪流刑を御赦免あり、後には京都に居をしめて、石河入道宗林とて、市中の隱者の風情して、聊世務の煩なく、安樂にぞ暮されける。其後公用に從つて、本多三彌在京の時、宗林に參會し、關が原にて力戰せし昔を一々談話して、一笑を催してぞ、興ぜられけるとかや。

增田右衞門登高野山事

斯くて九月廿三日、大坂へ差向けらるゝ人々には、池田輝政・福島正則・淺野幸長・有馬玄蕃・藤堂高虎なり。非伊・本多兩人は、佐太の宮の邊に陣を取つて、大坂へ向はれし人々の、一左右をぞ待たれける。正則・輝政・幸長會合して申さるゝは、輝元は元來大軍にてあるべければ、如何あらんと評議ある。正則申さるゝは、愚案如何に候へども、某に御任せ候へかし。何とぞ無事に扱ひ見申さんとあれば、諸將最も宜しかるべしとて、正則一人登城し、御旗本の人數にて、本丸を堅めさせ、輝元へ使を以て申さるゝは、御手前の御人數等、早々當所を御退き、尤然るべく候。毛頭疎略に存せず候條、御爲めの惡き樣には仕らじ。さり乍ら御承引なきに於ては、京都へ注進申すべし。若し御難儀に及んでは、後悔なされ候とも、更に其益なかるべしと、辭を盡し理を正し、委細に演説ありしかば、輝元早速領掌あるに依つて、秀賴公の人質をも取放し、本丸を堅めしかば、萬事は左衞門殿次第とあつて、何の障もなく、九月廿

四日に、木津の下屋敷へぞ移しける。偖翌廿五日に、大坂より、大野修理亮・柘植大炊助兩人、伏見へ參りて申上ぐる樣、秀頼の御事幼少に候へば、當分何の差別も御座なく候。今度の結構、單に三成が所爲なりとの御理たる旨を、慇懃に申し謝しければ、公、諸大名を召集められ、面々の所存如何と上意ある。滿座の人々一同に、先づ此度は御宥免なされ、重ねて御成人の已後、若し無道に御座さば、其時如何樣とも御計ひなさるべきかと申上げければ、さあらば兎も角もと上意あり、御和睦になりしかば、兩使甚喜悅して、大坂に歸りけり。偖夫よりして、京都の探題奧平美作守をば、伏見の城に召置かれ、諸事を執行ふべきの旨仰付けられ、阿部八右衞門は、京都の龜屋圓仁が宿所に居て、洛中今度の預り物を、穿鑿すべきとぞ仰付けられける。廿七日には、公、大坂の西の丸へ御遷座あり、諸方の賀儀終つて後、增田右衞門長盛を、高野山へ遣さるべきかとの議諚なり。尤三成同罪たるべしといへども、長盛其身は大坂に居て、家老の高田小左衞門に、人數計りを差副へて、戰場へ遣はせし故に、其重罪を御赦免ありしとかや。抑長盛は大和國郡山にて、廿萬石の城主たりしかば、何の不足

東西兩軍和睦

増田長盛高野山に逐はる

もあるまじき身の、由なき事に與しける、智慮の程こそ淺猿しけれ。 儲公よりの仰には、領知大和へ歸城仕れとありければ、誠ぞと心得て、忝しと悅びつゝ、大坂を出でたりしが、城の追手の門先より、木津の邊に至るまで、東國方の武士數萬騎、雙方に立並び、其中をぞ通しける。 今宮村まで行く所に、思ひも寄らぬ御上使あつて、是より直に高野山へ越すべきとの事なれば、長盛夢の心地して、前後不覺に仰天す。 是まで供したる數萬の郎卒も、一同に騷動し、是はく\と計りにて、己がさまぐ\落行きしは、哀なりける次第なり。

石田軍記卷之十四終

石田軍記 卷之十五

爲御上使徳永法印往六角右兵衞督義鄕之宅事

九月廿八日、前管領六角右兵衞督義鄕へ、徳永式部卿法印を御上使に遣はされ、召出されける。其意趣は、去る七月下旬の頃、石田が謀ひに、秀賴卿の下知として、義鄕を北國表の大將に賴み給ふといへども、承引せられざる由を君聞召し、其志を御感在すに依つてなり。徳永則ち義鄕の許に行き向ひ、上意の趣を演說ありければ、義鄕、法印を請じ奉り、只今の御上使、家に取つての面目、勝げて申盡し難く候。然し乍ら此度召に應じて罷出で、御禮申上ぐる者ならば、今零落の身たるに依つて、世を諂らひ人に媚び、所領の一所も給はらん爲と、人の嘲り遁れ難し。是一。又當秋、秀賴卿の仰に任せ、北國表の大將をも致すに於ては、本國の大守たるべしと、頻に賴み仰

せらるゝ其節は、承引仕らず。今內府公の御代となり、天下穩に治まりて罷出づるは、事なきを計りてなど人の思はん。其二。扨又公へ對して、何の働ありて、只今御前へ罷出で、御詞にも預るやと、世上の批判あらん。旁以て罷出づべき謂れ御座なく候へば、憚乍ら此旨宜しき樣に、仰上げられ給はり候へとて、終に上意に隨はず。抑此義公此由を聞召上げられ、當代の君子驎角なるかなとて、深く感じ給ひける。抑此義鄕をば、關白秀次公の一味なりと、秀吉公へ三成が讒し申せし其故は、義鄕の家人に江州設樂の住人多羅尾彥七入道道賀といふ者あり。彼が娘は御萬御前とて、本義鄕の妾なり。此女房、世に類なき容顏美麗なるに依つて、三成心を懸け、己が物にせんと思ひける處に、秀次公、此女の好色聞召され、則ち聚樂へ召されけり。是卅六人の斬罪の中なり。此儀によつて讒せしとかや。然りといへども義鄕の父義秀に、信長公仰せられ、秀の字を望み乞ひて、秀吉と名乘り給へば、父子の義を思召して、義鄕の一命は、御宥免ありとぞ聞えける。

於二御前一諸大名之家臣被二召出一の事

同日今度の合戰に、苦身勞力せし諸大名の家臣共を召出され、御盃を下され、幷に御褒美を賜はりける。其中に、福島の家老三人、福島丹波は足不具なり。尾關石見は片眼、長尾隼人は耳聾にして缺唇なり。御前の少年衆之を見て、先は片輪を揃へられしと笑ひける由、家臣共御前を罷立つて、後聞召上げられ、御氣色以の外にて、上意には、五體は如何にもあれ、心の片輪になきを仁といふぞ。彼三人の者は、世に譽ある勇士共なり。汝等も、彼等が十が三なりとも嗜めと仰せられしは、有難き名將の御一言、金鐵にも徹する程の御敎誡と、感涙をぞ流し奉りける。されば山本勘助は、背小く、取形惡うして、足不具に片目なり。然れ共信玄擧げ用ひて、生きたる摩利支天と呼ばれしとかや。誠に以て先聖後聖、人を用ふること、其揆一なる者なり。右三人の內長尾隼人は、元來勢州士にて、方々に宦へ、卅餘人の主に涉り逢ひたり。前の名は山路久之丞とかや。天正十八年の夏、小田原陣の時、三度城へ乘込みしに、三

度ながら城中より突落され、三度目には口中へ鎗を突込まれし故、缺口になりける
とぞ聞えし。山崎左馬允は、田邊の城を攻めて後、大坂にありけるが、關原歿落の後、
本知の上に、一萬石の加增を賜はりける。是は池田三左衞門輝政の內室幷子息二
人、嫡子左衞門督忠繼・二男宮內少輔忠雄、右母子三人大坂に居られしを、今度一亂
の初の頃、人質として大坂の本丸へ引入れんとする企を、左馬允聞付け、何とぞ知計
を廻らして、母子三人を居城へ除けんと思へども、所々の番堅固にして、叶ひ難く見
えし所に、急度思案を廻らし、左馬允が內室病氣甚しきに依つて、療養の爲め、攝州三
田へ移すと披露して、忠繼・忠雄兩人を、女輿に乘せて、居城の三田へ除けにける。其
上輝政の奧方を、城中へ取入るものならば、其を限りと分別して、斯樣には計りしか
ども、細川越中守忠興の內室自害ありしに因つて、大坂の城へ、人質を取入る事を停
止せり。輝政の息兄弟を三田へ退け、且又奧方を城中へは入れまじきと策(はか)る所を、
御感悅ありて、加恩なされしとぞ聞えけり。又此時加藤主計頭淸正の內室も、大坂
に居給ひける。是は水野和泉守忠重の娘を、君の御養君として、主計頭を壻にし給

ふ故、何とぞして此内室をば、大坂を出し參らせんと、主計頭の家臣大本土佐、又船奉行の梶川才兵衞兩人密談して、女を改むる番所を通さんと巧みける。梶川が居所は、傳法口にてありければ、常々大坂の屋敷へ、毎日二度づつ通ひける。是を幸に思案して、梶川數日飲食を減じ、夜緩に臥さゞりしかば、如何にも顏色憔悴して、紛ふべくもなき病人と見ゆる時分、大夜着に纏はれ、大綿帽子を引被き、乘物の戶を開き、番所の前を往還す。始の程は度每に、乘物の內を改めしが、每日の事なれば、後には番所に能く見なれ、理を聞くのみにて、改めずして通しける。偖番人の油斷の程を窺と見負せしかば、清正の內室を乘物に乘せ參らせ、大夜着の下に押隱し、才兵衞もたれ懸つて、土佐をば步行にて供に連れ、若し穿鑿せられ露れなば、內室を刺殺し、腹を切らんと覺悟して、優に構へ通りしに、例の病者と心得て、何事もなく通しける。扨肥後へ下し申すに就いても、一方使なくては叶ふまじとて、船の中に大なる水溜桶を三つ据ゑ、其中一つをば、二重底に拵へて、薄濁の水を入れ、二重の間に內室を入れて、已に船を押出す。番船の者共乘移り、懇に改めしかば、若しや搜し出されんと、

何れも冷汗をかきしかども、別條なしとて通しゝかば、鰐の口を遁れ、虎の膀を出でたる心地して、順風に帆を揚げ、千里を一時と急ぎ、頓て肥後に着岸して、悦ぶ事斜ならず。清正前後の次第を聞き、才兵衞が智謀を感じて、一廉褒美をぞせられける。

小野木縫殿助并石河掃部落着の事

爰に小野木縫殿助は、丹波福知山の城主たり。三成が下知に從つて、丹後の國田邊の城を攻めけるが、自餘の先手に超えて、仕寄をも稠しく付け、殊更大筒を打かけ、一身にかけて攻めにける。尤武士の道とはいひながら、越中守と內々不和の遺憾あるに依つてなり。關原靜まつて後、縫殿助前非を悔え、色々と思案して、井伊直政に便り、何とぞ御前を取繕ひ、一命を助け給はれと、一向に賴みける。斯る所に越中守、如何にもして小野木が有所を聞出し、彼が首を見んと、骨髓に徹して思はれし所に、井伊兵部を賴んで隱れ居る由を聞出し、手延にしては叶はじとて、井伊には斯くともいはずして、公へ言上ありしかば、段々具に台聽ありて、越中守に下されける。直

政不便に存じられ、種々に取持ち宥むといへども、忠興憤怒强くして、曾て承引なかりしかば、終に小野木に腹切らせ、十月六日に、三成が首の東にぞ梟首せり。其に就いて世の中の、物の哀れと聞えしは、小野木が妻にて止めたり。小野木流浪の以來は、福知山の近鄕に、深く忍んで居られしが、京都の樣子を傳へ聞き、是は夢かや夢ならば、覺むる現もあるべきに、恨めしの世の中やと、悶え焦れて哀みつゝ、餘り慨に堪へ兼ねてや、其儘其に倒れ臥し、絕え入ると見えしかば、乳人女房驚きて、藥を與へ水を灌げば、人心ぞ付きにける。落淚の隙よりも、くどかれけるぞ哀れなる。三五の歲の頃よりも、目見え初めにし以來は、比翼連理と契りしに、かゝらん後は一日も、存へてあられんものとは思はれず。速に自害して、追付かばやと思ふとて、守刀を取出し、旣に自害と見えければ、乳人あわてゝ縋り付き、是は愚の御事かな。隔生卽妄とかや申して、未來生に至りては、夫婦兄弟君臣父子、皆それ〲の業因にて、一所には生を受けず。縱令同所に在りとても、見知る事これなしと、佛の說かせ給はずや。只今思に堪へ兼ねて、御自害候とも、更に其の甲斐あるべからず。只墨染に御身を

替へ、後生菩提を訪ひ給はゞ、必ず同じ蓮にこそ、生れさせ給ふべしと、涙乍らに止むれば、さればこそ、能くも教化せられたり。餘りの慨に堪へ兼ねて、自害をせばやといひしかども、誠に思へば益もなし。明日にも早々様を替へ、なき人の後の世を、一筋に弔ふべし。去來やすらはんと宣ひつゝ、夜の物引寄せて、打臥し給ふと見えしかば、乳人其外の女房も、心を許しまどろみける。然れども內室は、少しも寢ぬる事もなく、隙あらばと思ふ間に、鷄鳴く頃にはやなりて、邊に臥したる女房も、他念なく寢入りしかば、時こそ能しと悅びて、小袖のつまに斯くばかり、

　　雖なきて今ぞ赴く死出の山關ありとても我な尤めそ

と書止め、忍びやかに念佛して、終に自害を遂げらるゝ。折節乳人は目を寤し、此形迹を見參らせ、覺えず死骸に懷き付き、こは情なき御事かな。是非思召し立ち給はば、御心には背かじを。怨めしくも難面も、出拔き給ふ悲しさよ。責めての事に今一度、詞を交してたび給へと、生きたる人にいふ如く、泣悲しめども甲斐ぞなき。哀なりける次第なり。又石川掃部は、大津の城を攻めし人數にて、須臾其功もあるが

如くなれば、如何樣秀頼卿より、御加恩抔もありなんと、獨笑して待たれしに、思の外に、關原の軍歿落せしかば、昔の功、今の仇となりて、山野海岸に身を隱すといへども、遁れ難く覺えければ、脇坂中書に便り、井伊直政に內談す。直政申されける樣は、尤不便の事に存ずれば、何とぞ命計は、助かられ候樣に致度候へども、公の御惡み以の外に候へば、如何程取繕ひ申すとも、中々御許容はあるまじきもの故、彼是と遲滯に於ては、世上へも隱して聞え候はん歟。只速に自害あらんこそ、然るべく思はるゝ由申されければ、仰尤至極せり。力及ばぬ次第とて、頓て切腹致させ、十一月十一日に、小野木縫殿助が東の方に、首をぞ梟けられける。

長曾我部落着の事

爰に足利吉元は、大坂の城西の丸に居られしが、關原敗軍に及んで、則ち木津の下屋敷へ立退き、罪を謝し申されしかば、和議よく調へて、長男一之を表に立て、吉元隱居たるべしと上意ある。吉元の舍弟小佐川久景は、文武の道に志深く、才知の譽あ

長曾我部盛親敗れて土佐に歸る

る人なりしが、此久景死去の砌、舍兄吉元へ數ヶ條の心操を書付けて、諫言を遺されける。其一に、末代に至りて、足利家より天下に志あらんに於ては、必ず家衰ふべしと、書かれしといひ傳へしが、誠に以て格言なりと、皆人これを感稱せり。去程に長曾我部宮内少輔盛親が父元親は、去年土佐にて病死しぬ。母は齋藤内藏助妹なり。盛親、今度三成叛逆の時分は、土佐に在國して居たりしを、增田長盛方より、急ぎ大坂へ上られよと言遣しける。此長盛は、盛親が烏帽子親にて、常々昵近せしに依つて、早々大坂へ上りけり。然るに三成が催促に從つて、勢州表へ働き出づると雖、させる軍謀もなく、又關原挑戰の時、濃州南宮山に出張せしかども、一戰にも及ばず敗北して、伊勢路にかゝり、伊賀越して、泉州石津にて、小出播磨守軍勢と不圖出合ひ戰うて、其方より大坂下屋敷に參着し、井伊兵部方へ申譯の口上を、家臣立石助兵衞・横山新兵衞に委細申渡し、盛親は土佐へ下向したりける。其跡にて立石・横山兩人、兵部少輔方へ口上の旨を申し達せしかば、土佐へ上使を遣さるべきの條、同道仕れとて、則ち御上使として、梶原源右衞門・河手内記兩人を、立石・横山同道して、土佐國

へ下りける。扨又御上使歸らるゝに、豐永惣右衞門・立石助兵衞を相副へて、大坂へ上し、其跡にて、盛親家中の者を召集め、此度大坂へ上るべき旨を申來るべきか、但又籠城せしむべきかと、色々評定すといへども、一決せず。盛親數思案して、所詮井伊殿の御内意に任せ、上るべしとて、則ち出船を急ぐ所に、久武内藏助申すは、津野孫次郎殿は、藤堂佐渡守と熟懇なれば、此費に乘じて、半國は津野殿へ參るべし。能々御思案あれと勸めける。されば此儀卒爾に計り難きことなれば、重々工夫をなすべきを、盛親武運や盡きたりけん、兎角前後の覺悟もなく、内藏助が勸に任せ、津野に腹を切らせける。無慙といふも餘りあり。偖盛親は、十一月十二日に、大坂に着岸し、天滿の學校に宿して、兵部の方へ案内申しければ、少も苦しからず、伏見の屋敷に入り給へとあるに依つて、盛親悅喜斜ならず、やがて伏見の亭に入る。兵部少輔取繕ひ、公へ言上ある所に、盛親が兄に、津野といふ者ありつるがと、御尋なされける、盛親が不運さよ。藤堂佐渡守と盛親と、もとより不和の中にてありけるが、其折しも、佐渡守は御前近く居合せて、取敢ず申上げけるやう、津野が事は、今度の一亂に

付、御味方に志これあるとて、盛親が計らひにて、切腹致させ候由承り及び候と言上す。公聞召されて、元親が世悴に、左様なる無分別者ありつるかと、彌御惡みあるに依つて、兵部少輔も詮方なく、盛親に申さるゝは、能き時分を見計らひ、御前を申し調ふべし。其間は、某に國を御預けあれと申さるれば、此上は兎も角も、宜しく賴み存ずといふ。之に依つて直政の家老鈴木平兵衞に、三百餘騎を相副へ、土佐國へ差向けらる。則ち盛親、國の城を明渡すべき由を、立石助兵衞に云含め、又家老中へも其趣を書付け、判形してぞ渡しける。鈴木は士卒諸共に、立石を案內者にて、土佐船十餘艘に取乘り、十一月十七日に、土佐國浦戶港に着きにける。國人ども是を見て、盛親の下向ぞと心得て、われもく〳〵と出向ふ。立石船より上りつゝ、家老中に對顏して、件の趣云屆け、彼判形を渡しける。然る所に一兩具足の輩、諸事上方の首尾をも知らず、又盛親判形の趣をも見聞かず、何れも寄合ひ邪推には、殿をば家老等談合にて、大坂に於て弑しつゝ、敵を國へ引入るぞと、一同につぶやき出で、鈴木が船を目にかけ、鐵炮を打かけて、浦戶城に楯籠る。さるに依つて平兵衞を船より上げて、

暫く雪溪寺に入置き、事を靜めんとせし所に、一兩具足の者ども、此寺に柵を振り、晝夜六七百人番を付け、さて一兩具足の者都合五千七百餘人、神水を飮み誓をなし、竹内又左衞門・福浦助兵衞といふ者兩人を大將にて、家老共乍ち敵味方となり、十二月二日に、家老どもを討果すべきと、既に評定一決す。家老方の者ども此事を聞付け、十一月晦日の夜、賢く方便を廻らして、一兩具足等を能くたばかり、浦戶の城を取りにける。之に依つて一兩具足ども、豫ての評議相違せり。然りといへども差置くべきに非ずとて、翌正月朔日、已に合戰に及びける。志は切なれども、家老方は多勢といひ、且事馴れし功の武士、此を專とぞ戰へば、一兩具足敗軍して、竹內・福浦切腹す。則ち時日を移さず國中に觸れけるは、今度の發頭人共を討つて出すに於ては、假令同類たりといへども、曾て別條あるべからず。若し隱し置く輩に於ては、後日に至りて知るゝとも、討果すべき由觸れ廻りしかば、其晩に近邊より、首數百四五十追々に持來る。之に依つて相違なく、鈴木に城を明渡し、家中の諸士は殘りなく、己がさま〴〵に退散して、國も漸く靜まりける。彼一兩具足どもが、國を渡すまじき

長曾我部盛親遁世

中川秀重太田政信合戰

と企ては、盛親存生を知らずして、思立ちし事なれば、神妙の志なりと、諸人これを感歎せり。偖盛親は、如何にも切腹究まりしかども、直政の取成にて、一命を助けられ、其身を京都に置かせ給ひ、國を召上げられし事共は、三成と一身せし其尤、是一。又は津野に腹切らせし、御惡み故とかや。利レ人者天福レ之、損レ人者天災レ之と、聖人の宣ふも、實にもと思ひ知られけり。其後盛親法體して、名をば松夢と改めつゝ、夫婦家來四五人にて、京都に住居したりけり。

臼杵合戰の事

豐後國杵築城主太田飛騨守政信は、佐賀の關を持續け、海陸を堅めける。同國岡城主中川修理大夫秀重在國にて、公の味方たるに依つて、杵築に發向す。家臣中川平右衞門・古田喜太郎・榧野五右衞門以下千餘人、大坂より佐賀の關に至り、海陸を經て臼杵表を通らんとせし所に、太田が兵小栢源内・橋本傳十郎等、佐賀關・津久見・佐志生の人質を取りて、相待ち居ける。中川勢押來れば、心得たりと地下人ども、鐵炮を

打かけ、鍋倉山の谷々に引入れ、左義長の鼻・田中より、稠しく鐵炮を打ちしかば、中川勢も、其儘に鍋倉山に上りて、互に鐵炮を放ち迫合ひて、雙方共に、手負死人數知らず。翌十月十四日寅卯の刻に、中川の軍勢、打通らんとせし所を、地下人ども、佐志生の降口の林中に、伏兵を數多置き、中川の軍勢山より下る所を、神主作之丞を先として、矢石をひたと打掛くれば、中川勢も進み兼ね、本路へ引返しける。地下人共、本來案内は能く知りつ、此彼より廻り合ひ、矢石を透間なく放ちければ、中川が兵牧野勘右衞門、爰を專途と防ぎしが、雜兵共に卅餘人、枕を並べて討死をぞ仕たりけり。中川また臼杵へ加勢の爲、戸田太郎右衞門大將にて三百餘人、引率して來りける。中川が兵船廿餘艘、下浦にて討取り、殘る勢は、佐賀の關へ引取り、下浦にて船に乘らんとする處を、敵方是を考へて、悉く舟をば燒捨てたりける。斯くて臼杵勢及地下人等は、淨土寺に引籠りて固めけるを、中川勢押寄せて、手痛く攻むるに依つて、太田が兵橋本傳十郎、爰を專とぞ防ぎける。爰に中川平右衞門、百餘兵を率して、臼杵勢五百餘人と入亂れ、三度に及び切崩すといへども、多勢に無勢の事なれば、中川終に

討死せしを、神主作之丞、其頸をぞ取つたりける。戸田太郎左衛門、小松原に於て、原田紹忍と戰ひしに、紹忍數ヶ所の手を負うて、佐志喜三郎に討たれける。中屋宗悅・柴屋了喜も討死し、赤星掃部も手負ひける。凡そ兩日の合戰に、雜兵二百餘人戰死すれば、杵築勢・地下人等も、手負死人は數知らず。是に依つて修理大夫、杵築表に發向すといへども、敵の要害稠しきに依つて、攻あぐみて、彼此と軍慮を費しける其中に、關ヶ原の歿落を聞きて、兎角の事をも取敢ず、太田の城をぞ開退きける。

三津浦合戰の事

伊豫國眞崎城主加藤嘉明は、東國に趣きける其跡にて、毛利の軍兵宍戸善左衛門・曾根兵庫・村上掃部・野島内匠等大勢を催し、藝州より頃居(ごこ)の島に至り、眞崎へ使を以て、速に城を開き渡さるべし。さなきに於ては軍兵を差向け、急度請取るべきとぞいひ送りける。城に留守せし嘉明の弟加藤内記、幷家臣佃次郎兵衛・中島庄左衛門・安達半右衛門等評議して返事しけるは、仰せ越さるゝ通り、當城異儀なく明渡すべ

し。然れども妻子等退去の間、暫く延引に及ばんか、其程待たれ候へと云遣すを、敵信ぞと心得、將卒共に緩怠して、三津浦に屯し酒宴しけるに、九月十八日小夜更けて、眞崎より忍び寄り、佃其夜の軍將として、三津浦の敵を襲ひける。敵兵騷動し周章て、繋げる馬に鞍を置き、弛せる弓に箭をはげて、上を下へと翻しける。流石宍戸は騷がず、早速に出合ひつゝ、粉骨碎身して攻め戰ひ、荒川甚右衞門を討ちければ、眞崎の方へも、野島内匠を討取りける。惣じて毛利家に名を得たる曾根・村上も討死すれば、佃彌勢に乘り、手を碎き戰うて、數多手を負ひしかば、眞崎に引退き、要害を守衞して居たりける。此節嘉明の内室大坂に在すに依つて、是を救はん其爲に、河村權七取敢ず大坂に赴きけるは、尤の忠勤なり。爰に當國の住人平岡善兵衞といひし浪人は、故鄕にありしが、河村渡海の旨趣を聞き、藝州に密通して、敵を國中へ引入れ、江原山の古城に取上る。加藤内記は是をば知らで、三津表に働くといへども、敵兵曾て出合はず。之に依つて内記は、近邊の紀の山に屯する所に、江原より輕卒を出して、田を刈らんとするを、眞崎勢追散らしける。其後凶徒三百餘人を率して、

九月十九日、久米の如來寺に取籠りしを、眞崎勢押寄せて攻めしかば、敵も稠しく防戰する所に、魁首黑田九兵衞表口を押破り、やがて込入り攻戰ひ、數多の敵に渡り合ひ、勇を勵み戰死す。佃は裏口より押入つて、身命を顧みず、左右を下知して働けば、飛松兵助・河合五郞兵衞等、思ふ程戰うて、終に討死したりける。其後三津を捨置いて、江原を攻めんとする所に、平岡が兄に、平岡孫右衞門といふ者、藝州に居たりしが、弟難儀に及ぶと聞いて、賊船に乘來り、三津より江原に入らんとす。眞崎勢此を遮り止めんとて、暫く對陣せし所に、平岡兄弟夜に入りて、江原の後の山路を經て、竊に三津に歸りしかば、遮り止めんと催せし眞崎の軍勢、手を失つて居たりけるが、藝兵如何思ひけん、三津を去りて、湊山に在陣して、軍議評定せし所に、關原の歿落を聞き、取る物をも取敢ず、纒を解いて早速に、國元指してぞ歸りける。

諸將賜ニ闕國一事

今度三成に與せし族、輕罪の者を宥め置かれ、重科の輩をば悉く誅伐あつて、天下太

平國土安全なりしかば、慶長五年庚子十一月十六日、江戸黄門君、大坂より伏見の城に入御なされ、同十八日に、目出度參內在しけり。其後闕國をば、諸將に頒ち給ひけり。安藝・備後二箇國は福島左衞門太夫正則、播磨國は池田三左衞門尉輝政、紀伊國は淺野左京大夫幸長、筑前國は黑田甲斐守長政、筑後國は田中兵部大輔吉政、備前・美作二箇國は金吾中納言秀秋、出雲・隱岐二箇國並越前府中をば堀尾帶刀吉晴、豐後國は細川越中守忠興、土佐國は山內對馬守、伯耆國は中村一學一忠、若狹國は京極宰相高次、丹後國は京極修理亮高知、（高政イ、）豫州松山は加藤左馬助嘉明、同國今治は藤堂佐渡守高虎、因州鳥取は池田備中守長吉、飛驒國は金森出雲守重賴、（法印長近イ、）丹波福知山は有馬玄蕃頭豐氏、濃洲高須は德永左馬助壽昌、（法印昌時イ、）伊勢神戸は一柳監物有末、（直盛ともいふ、）能登・加賀二箇國は前田肥前守利長、（利勝イ、）肥後國は加藤主計頭清正、越前國は秀康卿、尾張國は忠吉卿。右の外忠功の甲乙に順ひて、御恩賞を蒙りし大身小身の方は、禿筆に遑あらず。同六年辛丑二月、御譜代の諸將に所領を賜はりける面々は、江州佐和山は井伊兵部少輔直政、勢州桑名は本多中務大輔忠勝、濃州加納は奧平美

徳川家康征夷大將軍となる

作守信昌、同國大垣は石川長門守康通、三州岡崎は本多豐後守康重、三州西尾 吉良イは本多縫殿助康俊、同國吉田は松平玄蕃允家淸、遠州濱松は松平大膳正家廣、同國懸川は松平隱岐守定勝、同國横須賀は大須賀出羽守忠政、駿州田中は酒井備後守忠利、同國府中は内藤三左衛門信成、同國興國寺は天野三郎兵衛康景、同國沼津 三牧橋イ、は大久保治右衛門忠佐、上總大多喜は本多内記忠朝、出雲守イ、此等の城主を定められ、此外御恩賞を給はる輩多しと雖、城地替らざるは之に記せず。凡關東伺候の人々は、普く御恩澤を蒙りて、家門の繁榮、時至りぬとぞ見えにける。斯くて慶長八年三月廿三日、内府君御上洛あつて、同月廿五日御參内、征夷大將軍從一位右大臣に任ぜられ給ふ。此より彌仁慈を以て、政道を行ひ給ひしかば、上公卿大夫より、下民間の黎庶に至るまで、皆德澤に潤ひけるこそ難有けれ。智仁勇の三德を兼備在すに依つて、能く人を見知り給ふ事は、其肺肝を見るが如く、鏡影を看るが如く御座して、智略謀計は、子房・諸葛も數ならず。晨には四書六經の深理を察し、夕には六韜三略の奥義を極め給ふに依つて、聖賢の法に漏れさせ給ふ事もなく、政道に至つては、文王

を學びて、周公の仁惠を專にし、救貧には、須達が形迹を感じ給ひて、鰥寡孤獨の窮民を恤ませ給ふに依り、四海の風俗自ら淳素にして、驕を止め儉約を守りしかば、自然に家齊り國治まつて、五風十雨時を違へず、金華玉葉千秋萬歲、目出度しとぞ祝し奉りける。

石田軍記卷之十五大尾

仙道軍記巻之上

二階堂家の事

抑二階堂の御家を尋ぬるに、日本は神國なり。伊弉諾・伊弉冉の御子孫、國の政をたすけ給ふに、昔天照太神、邪神を惡み給ひ、天の岩戸に籠らせ給ひしかば、天下悉く暗にして、人民悲しみ歎き、御弟の天津兒屋根の尊、八萬四千の神達を相語らひ、岩戸の前にて、樣々の祈禱を申させ給ひければ、日神欣び、天下を照し、人民大に悦びけるに、天照太神、天津兒屋根尊に仰含め給ふは、我が子孫は此國の主として、萬人を憐み、汝が子孫は、臣下として、國の政を助けよと御約束あるに依りて、みもすそ川の御流、海內を治め御座す。春日大明神の御子孫、政をたすけ給へり。されば攝政關白の御末の外、たやすく官職を論ずべきにあらず。日本の攝政家、近衞殿・鷹司

二階家略系

殿・一條殿・二條殿・九條殿、是皆藤家の嫡流、春日大明神の苗裔、大職冠淡海公の子孫なり。是を執柄家といふ。日本にては、天子幼稚に御座ありける時、其時を攝政といふ。天子自ら政を行ふ時は、天下號令を通すを關白殿といふ。攝政とは、天子を助くべき、關白とは天子の號令をいふ義なり。攝政とは幼稚なる程に、天子に替りて、天下の政を行ひ給ふなり。然るに天津兒屋根尊卅七代の御末、大職冠十代維敏の一男爲綱卿、遠州を受領し、二階堂遠江守藤原朝臣爲綱と申し奉る。御子孫繁昌ありて、承久の亂に、鎌倉へ下向あり。弓箭のくびすを繼ぐ。然るに此の君あり。文あり武あり、政道鎌倉評定衆に列り給ふ。權門をも恐れず、理の當る所を宣ひければ、奉行頭人も皆閉口し、舌を振つて感じける。御心猛く、謀千里の外に廻らし給へば、眞に仁義の勇者とは、此君の事なるべし。然りと雖、姫君二人御座せども、若君御誕生ましまさず。御家を繼ぎ給ふべき御方なき故に、近衛殿の君達伏見院殿の孫式部卿殿と申すを、御聟に取り、二階堂の家を繼ぎ給ふ。此君達、御心飽まで不敵にして、御力尋常の人に勝れ、勇人に過ぎ、自ら猛獸を取挫がせ給ひ、詩歌管絃の道

に暗からず、天下第一の賢才、文武兼備の人なり。暫くも天子の御側を離れ給はざりけるが、叡慮の外に鎌倉へ下り給ひ、田舍の住に年月を送り給ふ。御門、式部卿を御懷しく思召し、敕書を鎌倉へ送り給ふ。其はし書に一首、

東路の遠き隔もなかりけり筆のしるべの通ふ心は

と撰し給ひけり。後醍醐天皇の敕筆御製なりとて、御家の御寶物の中に、是を第一の重寶とし給ふとかや。此君元弘・建武の戰に、攻むる時は取らずといふ事なく、戰ふ則ば勝たずといふ事なし。范增・張良が智謀にも過ぎ、樊噲が勇を顯し、世に佳名をあらはし給ふなり。

治部大輔下向附二階堂民部大輔逝去

さる程に御子孫相續ぎて、二階堂式部大輔殿と申しける。此君、弓矢斧鉞を給はりて、征を專にし、數度の戰、當る所は必ず破り、擊つ所は皆ぶんす。一度も敗れず。此武戰を恣にし給へり。持氏の代、畢竟天下を守護し、其頃四海無事にして、奥州の

二階堂、須賀河に城を構ふ

內、岩瀨郡を加增し給ふ。一門の治部大輔侍千騎差添へ、川中鄕須賀河の地に城郭を打入れ、領內安穩に年貢滯なく運上す。然る所に持氏將軍、永享十一年二月十日逝去の後、鎌倉兵亂起り、嘉吉元年六月十四日普光院殿滅し、其後國々もおだやかならず。重代相傳の所帶を、權威を以て奪ひ取り、父母に背き兄を失ひ弟を滅し、無道猛惡の世となり、人倫の孝行日を添へて衰へ、年に隨つて廢る。一人正しければ、萬人其に隨ふ事分明なり。古の武は、亂を治め德に歸す。今の武は亂を好み惡を起す。皆是武を暗ます武者なり。二階堂式部大輔殿、冬より重き病を受け、業病限ありければ、大法祕法を行ふとも其驗なく、良醫療治すれども、徒に其功なく、嘉吉三年二月逝去ありければ、若君一人あり、容儀才德備はり、御心猛く廉直にして、横逆を惡み嫌ひ、慈悲專にして、惡人の輕重を糺し罪を加へ給へば、奉行頭人、隱しても僻事をせず。若君宣ふは、主人情あれば臣下忠節を盡し、主人無道なれば、下人讐をなす。御一門の諸侍奴婢雜人に至る迄、情深く御座ありければ、家中上下欣び、互に和睦し、御代繁昌と見えたりける。十二の御年御元服あり。二階堂遠江守爲氏公と申しける。

未だ幼少に御座ありければ、須賀川治部大輔、武威を恣にせん爲に、町人或は領地の百姓、或は侍持筋の牢人に、所帶を宛行ひ恩を與へ、究竟の兵四五百騎、野伏數多引付け、恰も岩瀨の國大守法度顔の驕を究め、遊觀益甚しく、後日の禍を顧みず。鎌倉にて御一家四天王僉議ありて、式部大輔殿の御弟遠江守殿の御伯父、二階堂民部殿を岩瀨へ下し給ふ。程なく須賀川に下着し給ひ、治部大輔に對面ありて、一々宣ひけるは、鎌倉へ一言の披露なく、私に御所帶を町人百姓に宛行ひ、岩瀨一郡たゞし主とせし其罪一つ。籠城謀叛の旨を存ずる故、牢人數多抱集め、兵糧を貯へ置く其罪二つ。奢を究め人民を惱ます其罪三つ。年貢運上せず其罪四つ。物を背き、先例なき所の深役を掛け、民百姓を擅に貪る其罪五つ。此五逆は、諸人指す所、道路目を以て惡む者なりと、有の儘に宣ひければ、治部大輔暫く分別し答へていふ。我れ全く岩瀨の主たらん爲に賞を與へず。此等は義を重んじて、節に臨み命を思ふ事、塵芥よりも輕くせし者共、少分の恩を與へ、彼等が勇に依つて、今迄他の敵にも、あへしらひにもせられず。領內安穩なる事此故なり。爭か不忠ならん。我れ米穀を貯へ置

く事、隣國の大敵に行向ひ圍まれし時、籠城して敵を防がん爲なり。少しも謀叛を起さん爲にあらず。兵糧を惜み、城内に米穀なくば、兵飢ゑ疲れて防ぐ事を得ず。敵に領知を奪ひ取らるゝ事必定なるべし。是を以て逆心にあらず、御爲を存ずる故なり。我れ奢を好まず、百姓を貪り取らず。是世の知る所なり。兩年の年貢不運送の事、耕作違ひ、民飢饉の愁甚しく有之、約を變せず、善惡を糺し、善人を賞め惡人に罰を加ふ。是れ身の爲にあらず、領内堅固に守らせ、我に於ては少しも僻事をせず。理に背き賄賂に耽り、心に聊も私なし。權を以て政道を行はず。此を以て領内に至る迄、今迄靜謐なり。速に鎌倉へ參上し、自ら罪なき由を謝すべしと、一度は歎き、言を盡して陳ずれば、民部大輔申しけるは、貴客私なき心底承屆け、此儀相違なくば、我れ此旨を申寬ぐべしとて、座敷を立つ。治部大輔斜ならず悅び、近所へ新造の城郭を構へ、民部大輔殿を移し、もてなし給ふ事限なし。鎌倉にて濱尾といふ所に御座すに依つて、又此所を濱尾と號す。翌年の春、治部大輔殿の妹千歲御前といふ、容色世に勝れ、嬋娟たる兩鬢は、秋の蟬の翼、宛轉たる雙蛾は、遠山の色と見え給ふ。

秋の夜の月を待ち、僅に山を出づる清光を見るが如し。夏の日蓮を思ひ、初めて水を穿ち、紅艶を見るよりも潔し。詩歌に心をよせ、人に情を深くせり。手跡等御美しかりけり。或人媒して、民部大輔殿の北の方に定む。此姫君、たとへば古の西施も斯くやらん。東坡が若把二西湖一比二西子一、談狀濃抹兩相回と作りし西湖の景は、雨にも奇なり、晴にも好し。たとへば西子の談狀を薄化粧せし時も、濃抹と、懇に厚き裝せし時も、皆いつくしき様に、此西湖、雨にも晴にも皆面白なり。談狀を雨にとり、濃抹を晴に取るなり。此の如く姫君の御かたち、薄化粧の時も美色なる事、たとへん方なかりければ、民部大輔も、さすが岩木ならざれば、此姫君に思ひ染め、言葉毎に置く露の、あだなる物とは語らはず、階老同穴の契淺からずと聞えければ、治部大輔は彌奢りて、主君の所帶を押領し、財を貪り百姓を惱まし、權威を以て、惡を好む事頻りなり。

二階堂爲氏公下向の事

去程に治部大輔逆惡具に聞えければ、各僉議ありて、此事暫も延引しては、悔ゆ共叶ふべからず、急ぎ御馬を向けられ候へと、一同に爲氏へ諫めける程に、御供の衆には、御一門山城守・安藝守・宮内大輔・左近將監・彈正進・左京進・兵部少輔・内膳大夫・右衞門尉、四天王には箭部・須田・遠藤・守屋、其外土岐左衞門・佐々木右近大夫・一色圖書介・矢部伊勢守・同伊豫守・同紀伊守・内冬八郎兵衞・須田大膳・箭内尾州・岩崎大炊介・熊澤大學・朝日伊賀守・丑藤兵衞尉・白羽因幡守・鈴木一黨・小河監物・圓谷若狹守・臼木新右衞門・内田肥前守・委文(みとり)半内・宍草與次郎・今泉伊豆守・鹿島隼人・相生玄蕃・西牧甚之丞・伊王井藤内・石井大學・兩橋藏人・小野寺外記・淵田源兵衞・大越又衞門・樫村淸兵衞・曾禰三郎右衞門・小針主水・椎冬・黑月(まつみ)・服部・後藤・江藤・吉成・佐久間・味戸・猪越・塚原、都合其勢四百餘騎、文安元年三月七日に各鎌倉を立ちて、同十三日に、岩瀨の地に着き給ひて、須賀川の城へ打入らんとし給ひけれども、治部大輔所々に逆茂木を引き。門々を堅め、强弓矢繼早の猛勇家、交戰の武士二三百宛、鋒を支へ太刀を拔き、矢倉の上に塀をかけ兵袖を連ね、爰を破られじと並居たりしかば、大手の門を破らんと戰ひ

二階堂爲氏須賀川治部大輔を攻む

けれども、城兵强くて、左右なく責破る事叶はず。鎌倉の兵、徒に討死する者多かりけり。既に暮れければ、箭部下野守は、元來義を重んじ、節に臨みて、命を塵芥よりも輕んずる兵なれば、暫案じ進み出でて申す樣、軍の勝負は、必ずしも勢の多少によらず。且時の運に寄ると雖、それは平野の合戰の事なり。城中の兵は多く、味方は僅四百騎、小を以て大に敵すべからず。而も城結構に拵へ、智謀の勇者楯籠るなれば、容易く落つべからざるなり。速に此圍を解きて、月を隔て日を重ね、味方の兵を集め、重ねて多勢を催し、尺寸の謀を廻らさば、勝つ事一戰の前にあるべしと申しければ、諸人此議に同じ、卽ち圍を解きて、其の暮、和田村へ御陣を引き給ひ、要害を構へ、御用心隙もなし。

伊藤左近物語の事

已に日月過行きけれども、須賀川へ御馬を向けられず、又僉議もなく御座ある所に、治部大輔に附け置きたる伊藤左近といふ侍、爲氏の御內一色圖書介が許へ忍び來

りける。舊友なれば、來方行末の物語の次にいひけるは、治部大輔心底窺ひ見るに、全く叛逆の心あらず。然りと雖、今首を延べて降參したりとも、終には頸を刎ねられ、獄門の前に曝されん事疑なし。其期に至りて、悔ゆとも益なし。縱ひ夜に紛れて城を落ち、心も發らぬ出家の身となりても、運命極まりぬれば、死を逃れん事なし。其期に縱ひ死を遁るとも、爭か爲氏を敵に仕り奉らんや。屋形に向ひ奉り、矢ばし放つな。此圍を防ぎ戰はんとせば、若干の兵を殺すべし。迚も遁れぬもの故に、人を多く滅して、何の益かあらん。獨り自害して諸人を助け、爲氏の欝憤をも休め奉らんに、何の仔細あるべき。唯今我に附順ふ者共、命を捨てんずる心ばせ神妙なり。冥土黃泉迄も附くべからず。願はくは早く降參し、汝等が命を全うする所こそ、我が悅ぶ所なれ。忠功を存ぜば、我がいふ旨背くべからずと、頻に申されけれども、一人も落ちんと思ふ氣色なし。然れども治部大輔、今年十二歲になる最愛の姬君あり。形端正にして人間の類にあらず。楊貴妃・西施も裝を恥ぢん繪色、拗びし玉の如し。幼少なれども聖人の書を賞し、歌道を信仰し、其孝心を失はず、情あり愛敬廉

直なり。治部大輔も寵愛尋常ならず。是を爲氏公の御方へ媒して、御臺に冊き奉り、御聟舅の御中なれば、互に御和睦なされ、爲氏公須賀川の御城へ御移り、治部大輔殿は、御領の境目に要害を構へ移し、隱居ありて、弓矢の御指引なさるゝに於ては、御領中全かるべし。況んや御曹司御誕生あらば、猶以て御孫二階堂家の惣領を御繼ぎ、岩瀬の屋形となし給へば、御聟舅の中宜しからん。治部大輔岩瀬の義、疎意あるべからず。然らば御家中もしまり、御代繁昌危ふからず。今時は天下半亂れて、一日も安からず。田村殿は廣兵多くして、安積郡を大概手に入れ、旗下なり。定めて岩瀬郡を目に懸け、時を待ち給ふらん。鷸蚌相挿則烏乘弊と承る。能々御一家四天王の御宿老御思案あるべしと、理を盡し語りて、其夜左近は須賀川へ歸りける。

爲氏公・治部大輔息女御緣の事

去程に圖書介御一門幷家中へ、左近の申す旨具に語りければ、各僉議あり、尤然るべし。治部大輔方御一門なれば、此姬君を、爲氏公の御臺に備へ奉るとも、俗姓下る

べきにあらずといへ共、區々にして一定せず。須田進み出でていふは、殷の紂王、立妃に迷ひ世を亂し、周の幽王、褒姒を愛して國を傾け、揚貴妃は皇帝を惱し、西施は呉を亡す。皆以て容女の起り、國の傾敗遠きにあらず。速に御前を須賀川へ送り奉り、其上に兵を引率し駈向ひ一戰を遂げ、運を開き給ふべし。然らざれば當家の破滅此時なりと、憚る所もなく申しければ、皆一同し、爲氏を諫め申すに付、詮方なく御前を送るに究まりけり。暫時の間も、別れてはあるべきものかはと思召す御中を、理を盡し申せし故、暫も袂の乾く隙もなく、偏に黑闇になりて、目もあてられぬ計なり。斯くて御臺の御乗物出しければ、使者にて、御前樣連理の御契久しからず、御心深く思召す所に、御緣盡きて、是迄御供申候。御出合ひ御受取り、御供申させ給へと申しければ、委文半内・宍草與次郎兩人使を討殺し、大勢馳向ひ、送の者共一人も漏らさず皆討取らんと、事の體既に急なりければ、御輿を舁捨て逃れ去る。跡より大勢追懸くるを、和田村の内若宮坂迄引退き、萬死を敵の虎口に遁れける所に、和田村の勢河東野に馳合せ、敵の先を遮りて、多勢競ひ懸り、須賀川の方より包まれて、

洩れべき樣なかりければ、是非なく和田村の高所に集まりて、最後の軍評定とて、近付く敵を待ち居たり。此所難所にて、左右なく責むべき樣なし。又遁るべき方もなし。然る所に俄に雲出で、風吹き來りて雨頻なり。忽ち晴れて、雷、敵の陣中の兵の群集したる所へ落ちて、人馬數多燒殺さるゝかと肝を消し、親は子を呼び、子は親の手を引き逃れ去る。此雷を免れんとすれども、又何地へか落ちん所を知らず、又行くべき道も見えず。進退途を失ひける内に、和田村に籠り居たる須賀川の勢、落つるをも知らず、田畑の中を乾方と覺えて落ちて、程なく須賀川勢は、妙見山の麓に逃げ延びぬれば、もとの白日青天になり、恙なく須賀川の地へ引入る。誠に天道の助により、不慮の命を免かれたり。

御臺御自害

去程に御臺の御輿を、岩間暮谷澤涙橋の邊に舁き捨て置き、女房達を召して宣ひけるは、此からの鏡をば母御前に奉れ、金泥の阿彌陀經をば、治部大輔殿に奉れ、定家正

筆の古今・伊勢物語の雙紙の類、御伯母千歳御前に奉れ、永き世の形見と思召し、幼少より成人に至るまで、養育の御心、實に忘れ難し。三年の內、御見參に入り奉らず、無常の風一度に吹けば、露の命長く消え、御名殘惜しさ、濱の眞砂の數盡くべからず。老少不定の理、幾程なき命なれば力なし。若し娑婆の緣盡きずんば、本有清淨の身となりて、必對面あるべしと、細々と文に書き給ひ、送られけるこそ哀れなり。其後十二の手箱、御祕藏の御道具御小袖、悉く女房達に下され、三年の內附隨ひ奉りける譜代相傳の岩桐藤內左衞門といふ者を御前に召し、汝是迄供する事神妙なり。此刀は、粟田口吉光が、九月半にて打ちたる最上の劒なり。汝年來の忠に依つて、是を形見に與ふるなり。おろかにすべからず、汝命を全うし、自らに一炷の香をもつむべしとて、讓り給ふ。藤內左衞門申しけるは、多少の緣深きにより、君の御志厚く、頓て死して御供仕り、閻魔の前、淨土の御供仕らんと申しければ、御乳母、先づ我を害したび給へとて、藤內左衞門に縋りつく。御前宣ひ給ふは、其心ばせ誠に忘れ難し。獨來りて獨歸るなれば、我に伴ひ死するは益なし。汝等命全うし、須賀川へ行き形

見共を捧げ、有樣をも委しく申上げ、念佛の一反をも廻向し、後世を弔ふ事、第一の忠功なるべしと仰せられ、南無と唱へ給ふ御言葉計にて、御輿の內にて、自刃に連れ臥し給ふ。雪の御貌御目閉ぢ、御息絕えければ、御形も替り給ひぬ。供奉の男女御死骸に抱付き呼び喚び、東西闇になりて、月の光も見え分かず。御乘物の中に、二首の歌を殘し置き給ふ。

人とはゞ岩間の下の涙ばし流されて暇くれや澤とは

行きぬれば心の月の雲晴れて光とともにいる西の空

御乳母是を見奉り、いかで此世に、ながらへん。唯今追付き奉るとて、

古里へ歸らん君を伴ひて死出の山路の道しるべせん

御臺の自害し給ふ脇指の切先を含みて臥し、柄は口に止まりて、切先後へ見えけり。藤內左衞門是を見、女儀なれども、自害の體賴もしや。我れ男と生れ、爭でか女に劣るべき。縱ひ今度命いきて須賀川へ行き、御城に楯籠り、爲氏公の御勢に向ひ、比類なき働をするとも、何の面目ありて人にまみえんと、腹十文字に搔切り、臟を取りて

投捨て、刀を喉に突貫き、朝の露と消えにけり。上﨟達詮方なく須賀川へ落行き、形見共を捧げ、なく〳〵右の有様を具に申しければ、御母上女房達是を聞きて、天にあこがれ地に伏し歎き給ふ。母上思に堪へ兼ねて、其方の空を遙に詠め給へば、遲々たる暮山の雲、いとゞ涙の雨となり、空しき床にかゝり、寢て夢に逢ひ見んと思ひ給へども、甲斐もなくなげき給ふも理なり。御臺御最後まで、附隨ひ奉る上﨟衆五人、時宗寺にて髮を下し、柴の庵を引結び、五人前に籠り居て、明暮御後世を弔ひけるこそ殊勝なれ。扨又和田村にては、早速出馬ありて、當城へ詰寄すべきは必定たるべし。面々心を一にし、死を善道に守り、命を義路にして、尺寸の謀を以て、大切ならん事を心得よと、治部大輔種々智略を廻らし、先づ領内の勢を揃へんとて、國の暗君を捨て、治部大輔に組せんならば、十五以上七十以下、當城へ早々馳集り、同心する者には賞を與へ、隨はざる者は、老若男女悉く誅罰を加ふべしと、村々へ觸れられけり。

岩瀨郡御廻文の事

爲氏公、御臺の御事に思ひ沈ませ給ひ、晝夜御經怠り給はず、御歎の餘に、御氣色穩ならず、御出馬の思召もなく、明暮御前の御事のみ思召し、他事もなし。之に依つて四天の宿老伊豆・相模・信濃・駿河、其外方々御知音の方へ申遣すに依つて、方々の御加勢馳集り、程なく二千騎になりにける。矢部・須田・遠藤・守屋僉議し、在々所々へ觸狀にいはく、

一、治部大輔欲心深染、執レ權不レ憐レ民、貪レ財惱二人民一事越二尋常一。浸二旨酒一不レ知二民之飢一、長二時之奢一而不レ聞二入人之訴一事。

一、押二領主君之所帶一、爲二遠國之御代官一、且得二龍之水一擧二雲之上一不レ異レ翔事。

一、無二先例一掛二課役一浸二取地下故一、遠國他國へ賣二妻子眷屬一償レ役、或別二夫婦一或別二親子一無レ不レ愁事、民困而國弱事。

一、治部大輔梟惡盛而背レ理耽二賄賂一、愚而不レ知二世之費一事。

一、向二主君一企二謀叛一、集レ兵躁レ國事。

右之條々、此五逆多レ之犯二彌天一。誰か斯くて許二容之一哉。夫緇分有二貴賤一、而有二主君一、爲二民之主人一不レ能レ達二民之歎一哉。國の守護は世間の非を亂し、諸人を救ふ。是皆民を養ふ爲なり。然るに治部大輔が積惡爭でか捨て置かんや。卽時に責二治部大輔一、首曝二白中一。依レ之御領內之老若應レ召不レ殘可レ參。若不二參城一輩於レ有レ之は、可レ沈二界死之罪一者也。依而廻文如レ件。

文安二年乙丑三月廿日

在々所々百姓寺社此廻文を見て、其下に住みながら、主人に背く者誰かあらん。非を以て理をなす事、珍しからず。此度の儀、治部大輔に附隨つて其詮なし。大敵といひ、主人も敵に仕ふる天罰といひ、偏に禮部に附隨ふ御理運ならば、地下等迄御救あるべしとて、取る物も取敢ず馳參る程に、治部大輔方の者共六七百人、着到に付けゝる。領分の者共是を聞き、馳來る程に、味方の勢日々に增し、敵は日々に減じける。去程に須賀川には、樣々の謀を廻らし、和田勢をたばからん。先づ新町より責かけ、

暫し戰ふまねをせば、敵勝に乘り責入るべし。彌引入れて、町の木戸より町屋へ火をかけ、責入りたる敵を、皆燒殺すべしと方便りけり。放火を恐れて、家々へ入りて裏へ駈拔け、命を助かる者もあるべし。逃所なく燒殺さん爲に、兩町の表の戸垣を能く閉ぢ、堅く塀に乘るをば打破れと、家の上に登る事もならざる樣に拵へけり。

爲氏公須賀川へ寄する事

鎌倉の先陣、暮谷澤に着きければ、後陣は和田千本に控へて、跡を引きも切らず。爲氏公の兵新町上下も兩所に馳せ向ひ、一同に鬨を作りければ、天地に響き夥し。寄手の兵諍ひ進み、跡をも知らず、喚き叫んで攻めかゝる。城兵は豫ての方便なれば、矢軍些とする眞似して、暫くも支へず。鎗・長刀・鎧取捨て逃げ去る。此工を知らず、和田勢我先にと進み、巧み並べたる新町・南町の内へ入込み、濫妨せんと諍ひ奪取り、城中へ亂入り、治部少輔に腹切らせんとせし所に、須賀川にては豫て巧みし事なれば、兩町へ火を懸くる。火燃え出で烟充ち、炎四方に盛なり。塀を越え家の上に登

り、火を消さんとすれば、取付くべき樣もなし。煙に目くれ氣も迷ひて、いづくを其方とも知らず、人に馬重なりて揉み合ひ、跡より味方に揉立てられ、道に迷ひ、三の丸大手の方に、鎗を揃へて待ち居たる敵の中へ走り入り、徒に悉く敗軍し、若しも命助からんかと、水堀の中に飛入り、猛火の中へ走り入り、計策に軍を敗られ、鎌倉勢、死人上が上に重なり、兩町を燒拂ひ、二三の丸恙なく持堅め控へたり。寄手は父を失ひ子を殺され、親類知音の行方をも知らず、尋ぬべき方も覺えず、涙を流す者多し。寄手又押寄すべき心掛にて、各陣取靜なり。

翌日合戰の事

城中には、大手搦手の門々の向を深く掘切り、段々石垣に築き、石の走らぬ樣に留を打ち、寄手來るとも、此留木動かぬ樣に橫木蹈さげ、落ちざる樣に釣橋を渡し、綱をかけ薦を敷き、葦萱を以て高六七尺に駒寄をし、橋の下には、竹にて串を削り油を塗り、鎗長刀を、透間もなく立並べ、外より見えぬ樣に隱し置きけり。此の先に掻楯を

置き、其陰に藁人形に甲冑を着せ、弓鎗を持たせ、先に、能き兵を數千人相交ぜ置きたり。寄手此謀をば知らず、誠の人と心得、鬨を作り攻寄する。城兵是を遠矢に射、敵を防ぐ樣にして引退く。寄手是を討たんと、搔楯の際迄攻めたりけれども、誠の兵ならねば、攻入るとも防ぐ兵なし。寄手勝に乘り亂れ入れども支へず。城中に人はなきぞ。暫しも猶豫すべからず兵共とて、大音上げて懸りける。城中の兵、敵を皆思ふ樣に引入れ、先祖兒屋根尊より相傳し給ひし、實子一方の火矢の法を、二三百射掛けゝれば、立置きたる藁人形葦萱塀垣に燃付き、烟天地に滿ち、寄手の兵の指物小旗裝束に火燃付き、踊り廻り倒れ騷ぎ、此火を遁れんとすれば、向に敵、鑓を揃へて並居たり。人に人重なりて、洩るべき樣なし。迚も死すべき命なれば、猛火の苦を免れ、討死せんと思へば、跡より人數續きける。先手の兵、是を悟ると雖、大勢に揉まれ、自ら釣橋の上に上りて、渡らんと揉合ひける所へ、竹束松束數多拵へて、兩方へ火を付け、櫓の上より限なく投かけゝれば、兵の裝束、駒寄の橋桁に火燃え付き、橋の釣綱燃え切れ、堀の中へ橋は落ちたりける程に、人馬重なりて落ち、立並べたる

鎗刀に貫かれ死するもあり、大石大木へ打付け死するもあり。手足を打折るも多かりけり。其外の者共、石の留木に取付き、横木に登りて上らんとする所を、石垣へ一度に走り掛り、一人も殘らず打殺す。寄手兩日の謀を見て、此城責落す事叶ふまじく思ひ、氣を屈しける所に、須田信州進み出でていひけるは、城中の人數、三百人には過ぎずと覺ゆ。其も半は手負ひ、軍なり難かるべし。悉く矢種盡き鋒先折れ兵勞れ、敗北既に極まれり。城の四面を圍ひ鬨を作り、兵を一所に集め、左右より攻皷を打つて責めんに、敵爭でか悚ふべきといひて、鬨を上げ、大手の門近くなりしかば、大聲を上げ攻め向ふ。城中には豫てより、敵を塀際へ寄せんと謀りければ、靜まり返つて音もせず、矢の一つも射出さず待ち居たり。寄手是を見、城中には人なきぞ。此塀引倒し亂れ入り、一人も殘さず討取れとて、ない鎌・熊手・鋒・十文字取持つて塀を引散らす。寄手を思ふ樣におびき寄せ、大石大木を繫ぎ置きしを、上より切つて落しければ、塀際へ寄せし兵、一人も殘さず打殺しけり。此謀に恐れて、門を破らんといふ者一人もなく、城の方を守り控へたる所を、内より兵卅騎馳せ出で駈破り、巴

の字に追廻し、一所に合せ三所に分れ、四方を拂ひ變化し、最後の軍是なりと、百度戰ふと雖、敵大勢なれば、十騎討たれて、殘る廿騎は、敵の首取りて城內へ引く。

城中放火附治部大輔切腹の事

城中には、一騎當千の兵を十騎討たれぬ。寄手も廿騎の兵を城へ追込め、勝鬨を作り陣を引く。旣に日も暮れければ陣取りけり。遠藤いひけるは、城中の謀、擧げて算へ難し。尺寸の計を以て大功をなさんに、何の疑なし。只忍を入れて放火し、夜打にすべしとて相圖を定め、時を窺ひ居たる所に、城中より逆寄に、忍大勢にて來り、叶はず討たるゝ所に、味方馳せ來りて追散らす。此時別所に隱れ居たる究竟の忍の與黨、願ふ所の幸なり。時分は能しとて、城中へ夜打に入る。城兵あわて騷ぎ罵り合へり。され共精兵共なれば少しも驚かず、定めて敵亂れ入らん。早々防ぎ支度をせよ、門を閉ぢよ。明松を出して、忍の輩遁すなと下知しければ、明松に火を付け、數多差出す所に、其火兎角して御殿の家に火燃付き、城中猛火盛なり。城より夜討に

出し與力共、追かゝる敵を打つて、是迄なりと悦びける所に、又城中に火の手の上りたるを見て、無益の出様したるものかなとて、急ぎ城中へ歸り、夜討放火の敵兵、餘すな泄らすな討殺せといふ。治部大輔宣ふは、兩日の戰に、潔く防ぐといへども、敵亡びず。面々も覺悟し給へ。天我を亡す者なりとて、北の方上﨟女房御手にかけさせ給ひ、切腹ありければ、夜は天明と明けにけり。治部大輔の一子竹若といふ童、十八歲になりけるが、主の首を取りて落ちけるといふ。又先にて、人是を咎めければ、是は治部大輔殿の首なり。定めて見知りたる人もあるべし。爲氏の御見參に入れ奉らん爲に持行き候。誤り給ふなといひて、靜に歩み通りければ、其後は怪しむ者もなく落行き、他領の緣ある寺にて此首を灰にし、白骨を首にかけ、高野山に納め、出家學文し、終に知識となり、高位に上りしとかや。

須賀川治部大輔自殺

多川・梶原・兒玉最後

多川八郎・梶原左衞門・兒玉河內とて、三人の兵、度々高名しけれども、一所も疵を蒙

らず、討漏らされ、城中に居たりしが、三人劣らぬ大力なれば、打寄り、只切腹せんは本意なし。一合戰して、一人も能き武士を滅し、名を後代に殘すべしとて、八郎は鎖帷子着て、三尺餘りの大刀佩き、七尺餘の樫の棒の、八角に削りて、筋金渡したるを手本に打振り、六尺餘の大男、肱張り髮髭ちゞみ、眼尻反つて光りしが、進出でて名乘る樣、某は物の數ならねども、治部大輔御内に、多河八郎と申す者なり。遁るゝに便あれば、此城を落行き、命を全うせんは安けれども、一たび約をなして、賴まれぬる後は、二度二心を存せず、堅く命を輕んずるを以て、武士の本意とする所なれば、最後の軍今日なり。我と思はん人は寄合ひ、此棒を請けて見給へといふ。左衞門は、黑糸縅の鎧の草摺かなぐり捨て、亂髮になり、眼は鈴を付けたる如くなるが見廻し、大長刀を打振り名乘りけるは、鎌倉權五郎景正が末孫、梶原左衞門景光といふ者なり。不慮に禮部の恩賞を蒙る事、年來過ぎたり。凡勇士の本意は、不變を以て義とす。命を捨て、此厚恩を報じ、譽を後代に殘すべしと、雷の鳴る如くの聲にて呼びけり。河内も同じく名乘りしは、武藏國の住人兒玉の一黨の末葉、兒玉河内といふ者

なり。我れ兵法を好み、學び傳ふる祕術、一つを擧げて三つに碎き敵に向ふに、ゆふけんを提げ戰を致さば、三尺の劍光、爭か手の內になからんや。我れ盛なる時は、國靜なりし故、事に合はず。旣に今此圍に逢ひ、我れ又老衰して武功を立て難し。然るに只今最後なれば、祕する所の一の太刀奉らんと、高聲に名乘り、近付く敵を待ち居たり。寄手是を見、敵は只三人、何程の事かあらんと、河內に大勢討つて懸る。河內敵を睨み、汝等に討たれんと近付き寄せて、敵二三人切臥すを、大勢にて後よりひしと組む、組まれて叶ひ難くや思ひけん、我が太刀を取直し、我が胸に押立て、うつぶしに伏し、太刀に貫かれて、兒玉に組みし者二人ながら突貫き、同じ枕に死にゝけり。臼木新左衞門は大力なりしが、四枚胴の鎧に、三尺餘の大刀を拔き、馬をば乘放し、八郞に向つて、我は爲氏公の御內に、臼木新左衞門と申す者に候。弓馬の家に生れ、八郞殿の棒を恐れて爰を遁れば、武士の本意にあらず。蟷螂が斧とかや申しつれども、多川殿の豫て御嗜の棒を、某が眉間に加へ給ひて、死して閻魔の廳に訴へ申さんといふ。八郞聞きて、雜兵の手に懸らんより、彼が鋒先に當つて討死せんと思

ひ、臼木に打つて懸れば、卽ち請流し棒をはたと切る。臼木切つて懸れば、多川請けて大刀をちやうと打つ。臼木は兵法の達者、多川は棒の上手、誰か劣るべき。多川は棒を切折られ、臼木は太刀を鍔本より打折られ、互に柄計り殘りける。多川腰に指したる大斧を取つて立ち居たり。雑兵共見て、鎗長刀を打振り、多川を討たんと懸るを、臼木押止め、中に押挾まり、多川に向ひいひけるは、迚も遁れぬ事なれば、雑兵の手に懸り給はんより、自害ましませといひければ、八郎聞きて、客の御志忘れ難く候。さらば切腹仕らんとて大刀を拔き、弓手の脇より、妻手の脇へ突通し、南無といひて向へ押しければ、腹は上下に別れ、腹わた前に出でにけり。臼木立寄り首を取る。梶原一人になりて大勢と戰ひ、四角八方へ馳せ廻り、强を破り堅を碎く。鎗一二丁切落し、近付く敵三人薙ぎ伏せ、氣疲れ勢盡きて、梶原弓手の腕を切落されける。其敵を追詰め薙ぎ倒し首を取り、長刀の先に貫き、城中へ歸るを、跡より追懸け近付く所を、扉のあるを、片手にて投かけゝれば、押に打たれ地に伏して、皆起き上らず。其隙に燒殘りたる櫓へ登りいひけるは、我が先祖は天喜五年に、栗屋川の次郎・

安部貞任・鳥海彌三郎・同宗任兄弟謀叛の時、伊豫守頼義討手に下り給ひし時、栗屋川の合戰に、鳥海の三郎に弓手の眼を射られ、其矢を拔かずして、三日三夜持廻り、當の敵を射たる鎌倉權五郎景正が末葉なり。今某弓手の腕打落され、卽時に當の敵を打つ。是見給へ人々とて、櫓の上より首を投捨て、今は浮世に思ひ置く事なしと悦び、から〳〵と笑ひ、腹十文字に掻破り、己と首を掻落して死したりけり。去程に寄手城內へ亂入り、敵を討つて死するもあり、討たるゝ者もあり、引組み刺違へ死する者もあり、落行く者も多かりけり。中にも實取藤兵衞といふ者、敵の中を打破り、二の丸を出で、東を指して落行く。敵支へて、遁すな洩らすな、討取れといはれて、何方へか逃れん、何地へか隱れんと、彼方此方を見るに、行くべき道もなく、歸るべき跡もなし。詮方なき折節、一橋の觀音堂へ走り入り見るに、順禮の笈摺帷子簑笠あり。帷子と笈摺を上着にして、緣の下に沈み深く隱れ、菅笠のあるを取りて着、面を隱し、長念珠のあるを取りて爪繰り、內神に向ひ、願くは後世を助けてたび給へと、高らかに敬禮し居たりける。寄手の兵是を見、實の順禮參詣の人とや思ひけん、敢て咎む

る者もなし。藤兵衞、觀音へ詣でたる利生に依つて命助かり、後生の引導賴もしかりければ、剃髮入道し、偏に念佛隙もなし。扨治部大輔は、種々智略を廻らしけれども、天運圖に當りけるにや一時に亡び、軍勢皆死したる中に、親を殺され子を討たれ、死骸に取付く者もあり、又見付けざる者もあり、其形勢、目もあてられぬ計なり。其後所々の死骸共、遍く引退けさせ、四天王を差置かる。爲氏公は、和田村の御城へ御歸陣なり。須賀川御手に入りたるに付きても、御臺所の御事のみ、思召し出させ給ひ、御自害の所、御覽ぜばやと思召し、暮谷澤に着き給ひ、いづくの程ぞと問ひ給へば、御供の衆、此方の由申せば、道の邊に御馬を留められ、空しくならせ給ふ御跡迄も、猶御懷かしく、淚は更に堰きあへ給はず。御供の方々、急ぎ歸らせ給へと諫め申し、御馬を東頭に引向けゝり。爰をさへ別れぬる事よと思召し、泣々和田の御館へ着き給ふ。須賀川にては材木を集め、城內に御借屋を立て、屋形を移し奉りける。

民部大輔濱尾城明退く事

去程に民部大輔殿は、此度の合戰にも、爲氏公へ一味せず、寄手にも加はらず候へば、定めて當城へ討手向ふべきは必定たるべし。腹切らんと宣ひ門を堅め、今や〳〵と三日迄待ち給ふ。されども何の仔細もなし。終には討手向ふべし。さらば今迄我に附隨ひし者、一人も殘らず討たるべし。汝等を殺すは不便なり。殺すも助くるも我が一心にあり。詮なき命を捨て、速に此城を體に立て、某が心ばせを背くべからず。露も恨に思ふべからざる間、一時も早く退き候べし。敵來らざる先に、我一人、心靜に腹切らんといひければ、後藤・須藤兩人の郎等進み出でていひけるは、主人に背き弓を引く。死せん事は近くして易し。命を全うし後の樂を思ふは、遠くして難し。然りと雖侍の道、豈安きを取りて難きを捨てんや。

西伯囚羑里重耳走翟　皆以爲王霸莫死許敵

と書きたりける故に、越王句踐、終に呉王を討つて會稽の恥を雪ぐ。秦昭王の時、魏人范雎といふ者、魏の帝の思をなして、齊に仕へず。齊王、雎が利口に物をいふを愛していふ。魏は必ず齊に亡さるべしとて、齊よりかえて魏せいといふ者に雎を訴

ふ。魏せい怒りて、睢を策にて打ちたりける。其齒を打碎きぬ。睢僞つて死する者のまねをする。睢が屍を簀に裹み、厠の内に置きて、醉客をして替る〴〵、其簀の上にいばりをさする。是を強く飯むる義なり。又其後の人を懲らさん爲なり。或時睢、其屍を守る者に向ひ、竊にいふ樣は、我を出さば、必ず報答すべしといふ。守る者うけがうて、僞りて魏せいに申し、簀の中の死人を捨つべしと奏しければ、魏せい醉中なる程に、可なりといひければ、守る者終に睢を出す。卽ち其名を變へて張祿といふ。秦の使者稽といふ者魏に使す。魏の敵安平といふ者張祿を隱し置きて、王稽に夜まみえしむ。稽其睢なる事を知りて、秦へ歸る時、戸を差して范睢を乘歸せり、是を秦の昭襄王に奏す。王悦びて、睢を客卿とす。睢、秦王に敎ふるに、遠交近攻の策を以てす。遠國を攻隨へ、終に秦の宰相となりて、陽侯と稱す。爲氏公、何の御憤も御座しまさゞる故、當城へ御馬を向けられざるなるべし。此方にも御誤も候はぬに、御屋形を敵と思召し候は、御恨深きに似たり。却て御不忠に罷成るべく候。所詮御屋形への御手持に、此館を御明け、何方へも御退き、其後御心底を白地に顯し、

仰分けられ候に於ては、爭でか爲氏公御承引なからん。然らば御叔父壻の御事なれは、終に御中直らせ給ふべしと、理を盡して申しければ、兎角汝等に任すべしとて、其夜濱尾の城を退き、しほの松に、知ある所に落着き給ふ。一兩年御座ありけるが、岩瀨御一門の衆、四天の宿老、何れも登城ありて、事の序に山城守進み出で、民部大輔事歸參申す樣に訴へ申度、豫て存じ候へ共、各も某も、御同前に取紛れ延引に及び候。治部大輔と緣者になりけれども、軍の節かゝりもせず、今更悔ゆといへども、子供三人ありければ、別れ難かるべし。又爲氏の味方にならざるも尤なり。正八幡も照覽あれ。我一類なりとて、全く贔屓にあらず、召歸されて、一城の主にも仰付けられたらば、爭でか御用に進まざるや、如何箭部殿傍輩達といひければ、近年御家中の事、何となく野州の計らひとして、屋形の御心にも任せ給はざる事なれば、下野守此儀尤と申上ぐれば、僉議二つに分れても、是非非是といふ共、皆然るべしと同じて、屋形へ訴訟申しければ、御承引あり、其日評定極まりて、山城守翌日の未明に、しほの松へ行き、民部大輔殿へ對面ありて申さるゝは、御歸參の旨願申し、御迎に參る由申

しければ、民部大輔殿聞き給ひ、兎角宣ひて歸參の合點なし。山州强ひて催促に及び、爲氏公御心解け御歸參に極まる。殊に皆々此度情を入れ候に、其手持なくては如何と諫めて、同道して須賀川に着き、山州の本に一宿せられ、明くれば正月十一日の朝、民部大輔出仕せらる。屋形も御裝束を召し、廣間へ御出あり、同座に席を定め給ふ。先づ年頭の祝を祝し終りて、御盃の上にて、御中直りの印を、御裝束を脫ぎ給ひ、互に御取替へ着されけり。前に此の如きの例なかりしかども、御祝の餘とぞ見えし。後代まで濱尾殿年頭の御禮には、御素襖引と號して、毎年怠らず。去程に文安三年の春、白形の鄉明石田の西に廣野あり。此所須田備前守が知行所々入組み、岩瀨郡と安積との境目にて、岩瀨の爲に勝手なれば、重き人御座して然るべしとて、新造の館を構へ築地を高くし、三方に堀を掘り町を割り、新に用水を定めし新田を開き、新井田と號し、濱尾民部大輔殿を移し給ひければ、貴賤巷に充滿し、門前に市をなす。

御臺怨靈

同年八月中旬、初めての晴、隈なき月影明かなり。齢二七計の女房、雪の如く姿優にして、赤き袴に、同じ糸を以て縫ひたる直垂を着、唯一人たゝずみけり。人是を見て、城中に斯樣の女のあるべしとも覺えず、いづくよりか來らん、いづくへか行くらんと見居たれば、忽然として消え失せぬ。夫より夜な〳〵御殿に來りけるを、爲氏公御覽ずれども、千變百恠、何ぞ驚くに足らんとて、御心更に動かし給はず。何樣狐狸の化物ぞといひけり。其後は警固の者を大勢、遠侍に並み居させ、蟇目を射させ、又犬を方々に差置き、御札御符を押せども、來る事止まず。彼女房の狂ひていふを聞くに、御臺の御恨御自害の時、御館の知らぬ事迄、露も違はず搔口說き、一首、

過ぎし世のみとせなるみの虛貝身（うつせがひ）を捨つるこそ恨なりけれ

と詠じける。彼女房賤にのみ習ひ、歌のさま知るべからず。況や鳴海抔と讀む事、何として知らん、不思議なりと、皆人いひ合へり。其後爲氏公の御跡、御枕に來り

て、刧かす事夜な〳〵なり。修驗の行者、加持すれども立去らず。貴僧・高僧、大法を行ひけれども怠らず。剰へ爲氏公、此故か病を受け給ひ、醫師療治すれども癒えず、祕法を行へども驗なく、旣に危く見え給ふ。或人いひけるは、菅相公流罪の御恨深く、怨靈延喜の御門を惱し奉る時、山門の貴僧・高僧、大法祕法を行ひけれども治し給はず。北野に社を立て、天滿大自在天神と祀り奉り給ふより此方、御惱忽に怠り給ふ。急ぎ御社を立て給ひ、然るべき由申しければ、卽ち御宮を造し、神名姬宮と號しける。秀外法印・明觀法印兩僧達、諷經旣に終りければ、社人音取の笛を吹き出で、神樂男鼓を打ち、八人の八乙女拍子を揃へ鈴を振り、五度の袖を飜し、暫は鳴も靜まらず。

御臺御供養

御臺の御菩提を弔ひ給ふべしとて、暮谷澤の東妙見山に、高き卒都婆を立て、供養を遂げられける。旣に其日になりければ、七段に棚を飾り、御位牌を立て、佛供靈膳は

金の立紙にて、御盛物百味の供、六合の立花を飾り、金銀を鏤め、位牌の前左右に、古銅の花瓶に金花を立て、白臘の蠋臺に金燭を立て、赤銅のしよくせん、蒔繪の臺に、金銀の御茶湯、龍頭の香爐、金の香箱に名香を入れ、導師月窻和尙、香染の衣、錦の五條の袈裟、金襴の座具、純子の帽子、水精の念珠、唐錦の襪、草鞋踹いて朱杖を突き、長柄の朱唐笠さし、歩み出で給ふ。侍者、燭臺に香爐・香箱・箸をすゑ、又拂子を持ちたる侍者もあり。天ゑの尊宿黑衣の僧大勢御供し、導師燒香座具をのべ三拜し、大音に拈香を唱へ拶をなし、行道にて諷經し、供養を遂げられしに、觀音空に悠搖す。罪障の雲消ゆるかと難有し。此月窻和尙は、第一の善知識にて、長祿元年に、廣緇山長祿寺を開基あり。御城の西に、七堂伽藍を建立し、一流百廿餘ヶ寺の相祿、佛法繁昌の靈地なり。此月窻和尙の結緣に依りて、御臺の怨念三毒を免るゝ事を得給ふ。之に依つて怨靈見え給はざりければ、爲氏公、御病乍ちに平癒せり。其後たいあんせん和尙、月窻禪師の法を續ぎ給ひ、長祿寺へ入院ありて、月窻は越後國觀音寺を開基し給ひ、是へ御隱居ありて、此寺にて遷化せり。

濱尾尾州所帶の事

濱尾民部大輔子息志摩守は、惣領尾張守を始として、五人の子息あり。親志摩守死去の後、知行三ヶ二は尾張守、三ヶ一は匠作方へ讓り、新田の城を持つべしと、屋形より仰付けらる。尾州思ふ樣、親の跡受とて、二に分けては、名代を續ぐとも甲斐なし。親繁昌の內は一人の所帶を、親死して其子二人に宛行はれたりとて、每人申すまじきにもあらずや。某を夫程に、何の用にも立つまじと思召すに於ては、悉く所領を召上げられ、御役に立つべしと思召す者を、御目利あり、誰なりとも差置かれ、某をば無足になされ、御領內何方になりとも、差置かれ然るべく候。其後は分別仕るべしと返答に及びければ、爲氏公仰せけるは、卅人の與力の所帶を半分取上げ、其分を加增に當て、殘り十五人の與力にて、境目の要害を持ちぬれば、危ふからずと宣ひける。尾州聞きて悉く腹を立て、卅人の與力四十人になしてこそ、武士の手柄なれ。親の所領を取上げられ、與力の侍半分除けて、其所帶を加增し給ひては、爭でか承引

申すべき。此の如きの僻事の御沙汰にては、御合點仕るまじく候。然らば早速當城へ御馬を向けられんは必定なり。一家部類の助成を受けず、御馬を引請け切腹し、此館を枕とせんと申す。其後須賀川城より、御理もなく延引する所、尾州申さるゝは、大久保・横田・木崎・ほこづき・箭田野・保土原・泉田・高林・井伊・土井は御一家なり、我にも一族なれば、某が討手には向け給ふまじ。定めて須賀川御旗本・河東野鄕衆馳せ向ふべし。延引しては惡からん。此近邊の在所々々へ押寄せ、人質を取り、我に組する族を當城へ楯籠らせ、搦手々々の境を掘切り、逆茂木を引き搔楯をかき、智略を廻らし、最後の一合戰して、腹切らんと思ひ定めける。去程に一家の人々、新田の城へ集り給ひ、尾州へ意見申さるゝは、貴客の存念、僻事にはあらざれども、屋形の仰を背かば、御馬向けらるべし。合戰に及ぶ程ならば、家中二に割れ、屋形に附き奉る勢多かるべし。然らば終に打負け、身體を失ひ、切腹して後、五人の子まで、一人も安穩あるまじ。思慮なき故に子孫を絕ち、親類緣者の命迄徒に失ふと、世上の批判必定なり。昔獻公、驪姬が讒言を信じて、太子三人を殺さんとし給ふ。申生は縊

れて死し、重耳・いご二八の弟、蒲土國にて討たんとし給ふを、曾國へ逃げ死を遁る。此國食物なくして、介子推といふ者、己が股の肉を裂いて、重耳に奉りぬ。十九年を經て、獻公崩じて後、晋國に歸り給ひ、終に位に卽き給ふ。申生は御兄なれども、死し給ひければ、御弟、晋の國を知り給ふ。只命こそ大切なれ。思ひ止まり給へと、意見しければ、尾州理に伏し、城を明けて田村へ引退きける。田村殿宣ふは、此尾州末末まで、我領内に居る人にあらず。侍の義理を思ひ、此方へ牢人なるべし。我が領地を賴み參られたる人なれば、疎意にすべからず。昨日迄敵にても、今日は味方となる事、武士の上なり。惡むべきにあらず。恥かしき牢人なりとて、早速扶持方薪鹽噌の類を饋り給ふ。尾州刈田村の人數を催し、馬の轡を鳴らさず、大方步立にて、夜中に河東野鄕小倉小屋の要害へ忍び入り、鬨を作りければ、城内にて、如何してか知りたりけん、味方の内に、謀叛の手引者ありて、田村より大勢寄せてあらん。城中小勢なれば防ぎ難し。只落ちよとて、小山田沼の平を指して、取る物も取敢ず、皆落行きければ、敵は城内へ亂れ入り、捨置きたる諸道具共亂妨し、一字も殘らず燒拂ひ、

火の手を擧げければ、在々所々へ見えけれども、夜中俄の事なれば、田村勢を追懸けて、討取る事も叶はず、心の儘に田村へ引退かせけり。去程に須賀川にては、又寄合ひ申しけるは、是は尾州、意恨を以ての事なるべし。尾州贔屓あらば、田村より如何なる籌策も入るべきに、さはなくして、味方の御爲然るべからず。尾州が御恨淺からずして、手持能き樣に御和睦あり、召返され然るべしと、宿老各申上げければ、御承引ありて、松塚・大桑原・稻村・牛袋・新井田五ヶ所を給はり、稻村の館を、岩瀨郡の人足にて普請し、居城に給ふべき由申されけれども、尾州合點なかりければ、一門衆差添へて、重ねて意見申し、理に伏し、岩瀨へ歸り給ひ、稻村の普請し給ふ內、御比城へ移れり。然るに田村・安積・白川・石川に挾まれて、夜討晝威しの働に依つて、稻村の普請延引しける內に、尾州病の床に臥し給ふ。一門知音の衆を近付け、我業病限りなり。我死して後、幼少の子供、誰か養育仕らん。縱ひ跡を潰し給はずとも、五ヶ所迄は幼少なれは、名跡に給ふまじ。一人は少分の所領を給ふべけれども、殘りの子供は覺束なし。はや兄弟となれば、後には邪心出來、他人の如く成行けば、孤となら

ん不便さよ。今一城の主ならずとも、冥加もあらば、後には如何なるかきあげ城なりとも、一人は持たせべきに、せめて我存命の内、五ヶ所の所領を五人に讓り與へ置き、五人ながら所領の主に仕度とて、讓狀を認め、惣領の左近は十七歳なれども、病者なれば御用に立つまじけれども、左近一代は、少分の所帶を取るべしとて、五人の子に五ヶ所を配分し死去せり。卽ち彼が遺言に任せ、五人の子に所領を給はりて、喜七郎を名代に定められけり。斯くて遠藤爲作齋と申すは、武邊度々顯し、無類の侍なり。小倉小屋の要害へ遣され、子孫安穩にて死し、末角といふ所にて、いぬひに茶毘して、子息勘解由劣らぬ大剛の侍なれば差置かれ、四五年過ぎて、勘解由を新井田の城へ移し給ひ、從弟の遠藤内藏頭を、小倉の館へ移し給ふ。

曾禰孫四郞・荒川新三郞喧嘩の事

天文の頃、曾禰孫四郞・荒川新三郞とて、二人の不斷衆あり。此二人、廣間の相番に當りし時、雙六を打ちけるが、おりはになりて、曾禰が石一つ地に殘りて、筒を持ち

ければ、一二でつちさへ打てば、此筒にて勝つと思ひ、筒振切つて曾禰が打つ所を、此賽、かき目あまたありといふ。打つたる賽を取りて、きり〳〵と揉み、筒へ賽を入れて、一二重四一々と乞ひければ、荒川が乞ひたる一二の目を打ちたり。是を曾禰三一なりとて、二の石を拂ふ。荒川は一二といふ賽論になり、互の詞に突入りて、曾禰脇指に手を懸けて突かんとする所を、荒川新三郞、曾禰が兩手を無手と取る。曾禰は小兵なりければ、大力の荒川に取つて押へられ、動き働きもならず、荒川も、流石手を離すを待つて突かんとする其勢を見てければ、聊爾に放さずして押へ居たりけり。廣間の事なれば、折節近所に人も居合せず、召使はれける十二三の童共一兩人、見て居たりしが、喧嘩あり押へ給へと、ひごゑになりて呼ばはりけり。當番の衆四五人馳合せ、引放し押隔て、兩方共に引退け、互に過なき所に、曾禰廣庭へ飛んで下り、男道の心ばせは、大力によるべからず。太刀を合せ、勝負を決するこそ侍の本意なれ。是へ來り給へ。手並の程を見せんといひて立居たり。荒川も元來勝れたる曲者なれば、推參なる詞かなとて、腰の刀を拔きて馳出すを、二三人取付き留

めけるが、大力にて屑ともせず、庭へ飛び下り、散々に打合ふを、長柄共の掛りあるを、傍輩衆取りて數多出で、中を押分け押隔て、其場を引退け、家々に連立ち行き、曾禰も荒川も、薄手二三ヶ所宛負ひけるが、程なく癒えければ、兩人又遠庭にて散々切合ひける。物影なれば人々是を知らず、荒川は三尺餘の刀、曾禰は二尺六七寸の刀なれば、大力に切立てられ、ちと引受け切らんと思ふ所に、曾禰が立ちたる所は、片下りにて、辷り倒れけり。荒川見て、早速討たんは易けれども、轉びたる者を切るは、死人を討つが如し。心靜に起して勝負をさせんとて、遠く退き待ち居たり。曾禰は跳ね起き、荒川に切つて懸る。荒川はりよけて當らず、曾禰續けて打ちければ、太刀を留め、飛退かんとする時跪く。荒川倒れければ、曾禰飛去り、今ははや死したるに等し。氣遣なく心靜に起きて、心身疲れたらば休息して、勝負を遂げ給へ。以前我れ轉びし時の返報なり。草臥の直る迄は待たんといひければ、荒川聞きて、此詞骨髓に徹りて忍び難し。聽にも跪きありとて飛起き、切結ぶ所へ、人數多馳せ付け、押隔て引退けゝれば、雙方共に三ヶ所宛手負ひけるを、宿所へ連れ行き療治す。傍

輩衆寄合ひ、御用にも立つべき者共を、二人殺さんはあたら事なり。早々兎も角も敎訓し、中直さんと色々手段して扱へども、兩方共に聞入れず。詮方なく四天の宿老へ訴へければ、尤扱を承引せざる事不屆なれども、互に男道の意氣を立てゝの事なれば、餘の法度を背きたるとは替りて、成敗に及ぶ事もなり難し。命を惜む時こそ、人の意見も聞き、人に手持をも失はせじ。思ひ詰めたる事ならば、急には合點すまじ。又餘人をも引加へ、扱ひて見給へ。人の世に住む事は、道理を身の飾として、心廉直に善惡を辨ふを本とする事なれば、雙方ながら惡事を當座に思ふとも、人の身の好む事を度々いはんに、爭でか承引せざらんといはれければ、各座敷を立ちて、又人を數多誘引し、出合ひて中を直さんとする所に、彼是と延引に及ぶ内に、曾禰、荒川が許へ狀を遣し、我等手所平癒候。貴殿の手も定めて同然たるべし。若し手疵未だ癒えざれば、平復まで待ち奉る。早く閻魔の廳に至らんと書きたり。荒川、此狀を見て、自ら是を申入れんと欲する所、遮つて玉章、最早某は御指圖の通罷出候。必ず待入り候と返答しければ、曾禰も流石曲者なり。少しも留らず、太刀取りて脇

に挾み、逸足を出し走せ着き、荒川に馳せ向ひ、につこと笑ひ詞をかけ、命も惜まず切結ぶ所へ、朝草苅二三人行掛り是を見、汗水になりて走り歸り、曾禰殿荒川殿散々切合ひ給ふ。今は早討ちつ討たれつゝあらん。何れも疾く出でさへ給へと、呼ばはり告げ渡る所に、兩人知音の方、今朝の出樣、いかさま不審と思ひ、彼方此方を尋ねける折節是を聞き、急ぎ馳着き見れば、兩人ながら數ヶ所手を負ひ、茫然として臥し居たり。引起し氣付抔用ひ、漸く氣付きければ、あだに乘せて家々に歸り外療し、手疵も直り、氣分も危ふからず見えければ、御一門四天の宿老申さるゝは、雙方共に勝負なく高下もなし。然れば互に男道の首尾殘る處なし。他家迄も相知る。此上は何の恨殘らん。戰場にて御用に立つこそ、武士の心ばせなれ。傍輩の中にて、少の儀を以て二人死しては、味方討する逆心に同じ。御城にて聞召し、公儀をも恐れず、世上の褒貶をも憚からず、我儘の者共と思召し、御掟の爲に、如何やうなる御法度にも仰付けられん。然れば後代まで惡名を殘さん事、歎きても猶餘りあり。早速和睦すべしと申されけれども、一圓承引なし。宿老衆追つて申さるゝは、我々御後見として申

付く儀、御家中に誰か背かん。急度申付くべきなれども、先づ御耳に立てん。併奉行頭人の申すをも聞入れず、傍若無人、唯置き給ひては御法度亂れ、萬人是に隨ひ、無道猛惡の者出來、御家の政道を取失ふ事、曾禰・荒川二人が故と思召し、世上の取沙汰、他家の嘲と思召さば、死罪も其品多し。如何樣にかあらん。其内先づ一類に預け置き、晝夜嚴しく番を据ゑさせ、一類より御番附置かるゝ通、聊相違あるまじく候。御城よりの仰出られ、世上例なき死罪に及び申すとも、御恨に存ぜずとの證文を取りて、宿老衆披露を遂げ、又雙方へ申渡すは、御屋形御立腹遊ばされ、汝等後見をする程の者共、斯樣の理非を知らずして、公儀をないがしろにする者共は、必ず味方の勢を失ふ者なり。前代未聞の死罪に行ひ、世上の見せしめの爲に、死骸を道路に曝し、往還の人に見せ、頸を駒の蹄にせよと御諚なり。我々申す旨に任せば、一先づ申宥めて見奉らん。益なき命を捨て、恥を後代に殘すは殘多し。武士は大敵に向ひ、馳引の働き高名するをこそ本意なるに、何ぞ一人を相手とし、手柄にせんと思ふは、臆病の思案なり。我慢を捨て和睦すべしと、樣々いひければ、至極の理に伏し、戰場に

て働次第に究り、曾禰戰場へ出づる時は、荒川出でざる様に番替し、中を直し、其後曾禰七度迄高名し、卅歳にて討死。荒川は一年過ぎて、八度高名し、其時も討たれざりしが、古き手疵ほころび癒えずして、卅二にて死したり。

植宗、岩瀨白方鄕衆と牛庭合戰の事

天文十七年戊申の春、伊達植宗、安積郡成田の地へ御勢を出され、此彼に差置かれ、二三百騎にて、岩瀨館ヶ岡の城へ馳向ひ給ひければ、館ヶ岡城主須田備前守・今泉の城主箭部主稅介・新井田の城主濱尾豐前守、僅百餘騎にて馳向ひ、爰を先途と戰ひければ、伊達勢悉く敗北し、植宗の御備迄崩れ掛りければ、箭部主稅一騎走り入り、高聲に名乘り、植宗公の控へ給ひたる所へ、無二無三に切掛り、御冑の錣を三枚切落す。守護し居たる御旗本、鑓長刀を以て攻懸り、主稅を中に取籠め、鎗にて馬より突落す。然れ共箭部が物具能くして徹らず、忽ち起上り、馬に離れて味方の中へ走り入る。郎等共主を討たせじと馳せ集る所へ、濱尾豐前・須田備州、伊達勢を十文字に駈破り、

四角八方へ追散らして、岩瀬勢命を惜まず戰ひける。圭税が馬をも引き參りければ、卽飛乘り火水になりて戰ふ。岩瀬勢次第に馳せ加はり攻めける間、植宗、牛庭の原へ御引退あれば、伊達勢も支へ兼ねて、皆牛庭の原へ逃げ行くを、岩瀬・安積の境、四方段の坂迄、伊達勢を追ひ行き、四五百騎にて鎗を揃へ、散々に戰ひければ、植宗の兵矢場に打伏せられける。さしも廣き牛庭が原、敵味方の死骸、上が上に重なりけり。植宗陣を破り引き給ひ、重ねては御働なく、伊達へ御歸陣なり。

田村、岩瀬・澁川と合戰の事

永祿二年己未二月廿五日の早朝、田村殿、千餘騎の勢を催し、二手に分け、一手をば月齋に付け、安積郡富岡・澁川へ馳せ來り給ひければ、箭部圭税介・惣領因幡守・二男伊勢守・館岡・須田備前守・新井田・濱尾全齋・子息駿河守・明石田左馬介・越久豊前守・柱田・守屋・谷澤・畑田・袋田の者共、雜兵共に、千にも足らざる小勢にて馳向ふ。田村衆は、澁川を前に當て陣取りけり。月齋は、六七百騎を手に付けて、鍋山の地に隱れ居

て、兵一人も出でず、前後より立挾み、岩瀬勢を討取らんとす。岩瀬・田村の兩陣、旣に相挑みて、互に相懸りに懸り、揉みに揉んで身命を惜まず、追つつ捲つつ戰ひけるが、岩瀬の小勢に、田村の大勢戰ひ負けて逃げ行くを、彌に乘つて追行く。爰に彌惣といふ者、元來田村の者にて、惡黨なりければ、田村を追却せられ、當所を賴みて居たりしが、月齋の陣へ行きいひけるは、某は元來田村の者なるが牢人致し、五六年今泉に罷在候。御追放に逢ひ申すといへども、爭でか譜代相傳の御主の御爲を存ぜざらんや。此度今泉を忽御手に入れ申すに於ては、某を本の田村の在所へ召返され給はり候へと申す。月齋誠と知らず疑ひ、色々の事共問ひけるに、手筈合ひければ、月齋斜ならず悅び、今度恙なく利運になるに於ては、望を叶ひ得させんとありければ、彌惣悅び申しけるは、此近所の在々、今泉中の者は、皆戰の場へ出で、男の分は一人も罷在らず候。急ぎ御馬を出され、今泉の城を御乘取りあるべし。御案內仕るべしとて、彌惣先に立ちて、月齋六七百騎にて向ひければ、彌惣が申す如く、城に武者一人も居らずして、今泉の城へ難なく入りにけり。此城高くして、安積郡殘らず見

え、猶以て、鍋山の戰場へは近く、目の下なりければ、田村の兵大勢今泉へ馳せ向ふを見て、是を防がんとする者なく、只引退けよとて、城内の女房達、町人の妻子眷屬老若殘らず引連れて、谷澤・畑田方々へ退けにけり。其後箭部主稅介・子息周防守・弟伊勢守、濱尾城へ移り、主稅・周防薨去の後に、伊勢守名跡を繼ぎにけり。

田村の兵南横田松山に楯籠る事

永祿五年壬戌八月廿四日、田村勢千餘騎にて、月齋を大將として、南横田松山に籠る。此松山高く、横田の城南の方は、岩石嶮しく、平地に續きたる所なし。廣戶の鄕大山より目の下に見て、鐵炮を打ち弓を射るに好けれども、横田・木の崎の城へ遠くして、平地より此松山を責むれば、左右なく落つべき樣なかりければ、松山を守り圍み居たり。田村にても、大勢差置くにも及ばず、千人餘の人數差置き、其外は田村へも歸り、又今泉へも歸りけれ共、其後は松山に籠り居たる者共引かざりけり。然る所に岩瀨衆僉議ありけるは、定めて兵糧を入れ、兵の飢を助くる者なるべし。只兵糧を

入る者を討取らんと、曲者共を毎夜に油斷なく、廻番に草を伏せて是を待つ。案の如く白米を入る者を、所々にて打殺しければ、其後は米一俵も入る事叶はず、一日二日こそあれ、日數重なりければ、悉く食に飢ゑて居たりけるを、四方より圍みぬれば、落行く方もなし。月齋是を聞きて、六七百騎にて、松山の後詰に向ひ、兩陣互に相亂れ戰ひける。澤田源次郎十八歲なりしが、田村衆に、鉢付の板を、鐵炮にて打たれ死す。是を見て岩瀨衆、轡を揃へ一同に攻懸けゝれば、月齋も防ぎ兼ねて突崩され、兵數多討たれぬれば、松山に楯籠る兵を引纏ひ、陣を引かれけり。

岩城重隆公御娘

東奥の內岩城と號して、僅五郡の掟に備ふ。平の重隆は、桓武帝の末葉、代々弓箭の頂を繼ぐ。然るに一人の息女あり。旗下舟尾式部大輔、白川へ御緣の奏者をす。志賀方は、伊達へ奏者に依つて、各荷擔偏頗起りて、唯事ならず。貞女兩夫に見えずといふに、重隆彼の姦佞に犯され、一人の娘、兩夫に兼約相論、前代未聞なり。畢竟の

所は、白川へ落着しければ、此胸恨に依つて、志賀、伊達へ退散し、植宗を始として、若干の勢を率し、白河へ出張せんと八陣を學び、八方に陣取りて攻め落すべしとてあてがひ夥しく、遠境迄聞えければ、白河の騒動斜ならず。然るに二階堂照行公、是を聞き給ひ、植宗大軍を率し、我領地を通られば、一身の憤骨髓に徹し、忍び難かるべし。たとひ稻麻竹葦の如く押して通り、此時一家滅亡すとも、輙く通すべからずと宣ひける。白河よりは、唯今迄當所へ不義なる事なし。近隣なれば常に申通ぜし事、等閑に存ぜずと仰せければ、御一族諸侍申すは、當屋形御若輩ながら、弓馬の家に生れ給ふ。御志誠に下々に、其理當らずと皆申しけり。扨伊達勢通らん道筋、東は石川郡より、岩瀬・河東郷を取卷き、東は大山續き、北は埋峯・大山・田村境を隔て、山の尾堤の地まで續き、難所なり。川中鄕は、南より東北は、阿武隈、下宿の御所の要害の岩下へ流れ、西河・落合鄕持堤皆岩なりければ、下小山田・濱尾の方をも通るまじ。白方鄕は安積境・笹河・留岡迄、澤谷ありて、岩瀬の方は高く、馬の足及ぶべからず。若し通らん所は、牛庭原より新井田へ出づる所の道、小坂にて、少の間谷もなし。爰

を植宗知り給ふなれば、是より外に通り給ふ所あるまじ。所々に堀を掘りて、逆茂木を引き、所々に弓鐵炮を揃へ、是を防ぎ、身をずた〳〵に碎くとも、伊達衆一人も通すまじ。先年牛庭合戰を報ゆるは此時なりと、上下共にいひ合へり。植宗是を聞き給ひ、多日に及びての事なれば、我馳せ向ふ由、白河へ聞えぬらん。遲怠しては惡からん。岩瀨にて支へ待ちたらんとも、駈散らし通らんに、何の仔細あるべき。暫も止むべからずと仰せければ、老臣申しけるは、御憤を散じ奉らんとて、御向ひ給ふ白河の兵とは、御合戰差置かれ、思召もかけぬ岩瀨と御合戰候はゞ、縱ひ勝利を得給ふとも、馬なづみ兵疲れ、易々とは攻破り難かるべし。白河よりは、岩瀨は、弓箭に馴れたる所に候へば、大事とこそ存じ候へ。岩瀨の照行公、常々御意恨もなき事に候へば、唯世上の唱を思召し候て御事にての、是非通すまじとの儀にては有之まじく候。先づ岩瀨へ御使者を遣されて、下々心解けて、所存なく無爲ならん事を謀り給ひ、道筋恙なく御通り、白河へ御馬を出さるゝ樣に、御思案肝要の由申しければ、植宗御承引ありて、御使者を遣されければ、照行廣間へ御出ありて、使者に對面あり、

植宗の仰聞召し、照行の御心も解け給ひ、御返答ありければ、使者悦び歸りけり。往來の道開け、植宗大軍を起し、白河領新城の館を攻落し、警固の武士を差置かれ、御歸陣の時、新城・益見兩所を岩瀨へ進せられ、其上植宗の御妹を、照行の御臺に御緣あり。

岩瀨と白河無事の事

白河殿の益見・新城を、植宗早速攻取り、手に入れ給ひて、照行公へ進せられしより以來、白河と岩瀨不和になりて、地下百姓に至る迄、隣郷と中惡しく、或は境を論じ、度々喧嘩に及び、討ちつ討たれつしければ、既に軍にならんとする處に、白川にて僉議には、岩瀨勢は、千騎に足らずといへども、岩瀨・會津・伊達勢を加へては、四五千に及ぶべし。軍は必ずしも勢の多少によらず。唯時の運に寄るといへども、度々合戰に及ばゝ、終に負けぬべし。隣軍の者何とぞ扱ひ、先づ下々の中を直し、其後出家を扱に入れ、白河と岩瀨を無事にし、以來合戰なき樣にして然るべしと、和知・往目を

始としていひければ、此儀尤とて、關川寺・永藏寺より使僧を以て、長祿寺・千用寺・妙林寺の三ヶ寺へ内聞を入れければ、三ヶ寺より則ち披露あり。御一門家老衆聞きて、白河と一所ならば、たとひ合戰に及ぶとも、物の數ともせじ。四方より敵に狹まれて、眞中ならば、敵數多にては惡し。先づ無事の籌策に任せ、以來は左も右もとありて、無事の扱に究まり、日限になりければ、代官として互に中途へ出合ひ、白河よりは、御一門小峯崎出でられし由聞えければ、須賀川にて宣ふは、異國にも會盟とて、隣國の王境へ出合ひ、羊の血を啜り、天神地祇に誓して、法を述べ約を堅くし、交を結ぶ事あり。此時隣國に見落されば、當座にも後日にも、國を傾けられ位を奪はるゝ事ある間、互に賢才勇猛の士を具して、才を較べ武を諍ふ習なり。白河名代には、小峯崎出でたれば、當方よりは誰彼とありて、須田大膳こそ然るべしとて、大膳出でにけり。然るに小峯崎いふ樣は、白河の事は人數ならねども、白河の一門なり。須賀川よりも、御一門の内御出あるべしと存ずる所に、御家老は不都合なり。然るべくば急ぎ御一門の方御出會ありて、無事を究め給へといひければ、大膳聞きて、扨は俗姓

を以て、無事を究め給ふか。然らば貴邊の御出を、某は不足に存ずるなり。其故は、結城上野入道殿は、源氏尊氏の下知の侍なり。某は淸和天皇の末孫、近江源氏佐々木の嫡孫なれば、爭でか俗姓尊氏に劣るべき。忝も二階堂家は、伏見院近衞殿の末孫なれば、白河の御家に劣るまじ。須賀川の名代に、一門不出に依つて、今度の無事調はずば、某何の面目ありて、須賀川へ歸らん。若し又合戰に及び給ふか、御心底覺束なしといひければ、其折節蹈瀨輕井澤觀音別當、小峯崎が方に居たりしが、頻に意見申しければ承引し、此度の無事を破るべきにあらず。縱ひ貴殿、十善帝王の位にもあれ、物の對々なる事をこそ申せとありければ、大膳返答に、斯樣の出合は、互に領分の境、白川郡・岩瀨郡の間にてこそあるべけれ。何ぞ道の眞中なりとて、白河殿へ越す事不足と存候が、中途とあれば、堪忍仕るなりとて、無事を極め、小峯崎・須田、約を堅くして、互に兩酌の上にて落着し歸りけり。

疾來鳥の事附照行逝去

岩瀨の二階堂彈正大弼照行公の御代に、とつかうといふ鳥渡りて、四方に啼きけり。此鳥前代未聞の鳥にて、人々其名を知らねば、啼聲に付きてとつかう鳥と號せり。とつかう鳥をば諸人聞き、是れ時鳥かと思へば、其翼聲も格別なり。時鳥は一年に一度渡りて、初音床しく、詩歌に興を催すに、此とつかう鳥は、聞く人疎み、弓鎗鐵炮にて打殺し、黐にて取り、又は惡さの餘りに、嘴の脇へ灸をし殺しなどせり。然るに照行の御座敷へ、此とつかう鳥飛入り死したり。是れ照行の御爲に、恠異なるべしと人々いひける。昔夏郭公原中に滿ちて、頻に群がり啼きけるが、二羽の郭公空にて喰合ひ、殿上に飛落ちたり。野鳥空に入る。主人まさに去らんといふ本文あり。是れ恠異なりとて、二の郭公を獄舍に縛しむ。郭公を禁獄の先例なし。位を去らせ給ふ事、今に始まらざる事なれども、六月に御座すべらせ給ひ、七月に崩御なり。恠鳥殿に入る故にや、本文思ひ知られて哀れなり。爰に千用寺秀全法印臨終に及びて、庭の木の上にて、此鳥とつかうと頻に啼きければ、

とくかうと囀る鳥のはかなさよ呼ばねども行くもとの古鄕

と法印讀み給ひ、袈裟衣を着し、念珠爪繰り、八の卷讀誦し、光明眞言を唱へ合掌し、座して遷化あり。斯くてとつかう鳥の、御座敷へ飛入り死せし故にやありけん。照行公御歳五十にして、はかなくなり給ふ。諸人歎き悲しむ事限りなし。爰に笧部與惣右衞門といふ譜代の士、照行の後世御菩提を弔ひ奉るべしと思ひけるが、髻切りて出家し、玄丁と號し、樹下石上に飢寒を忍び、諸國を修行し、法華經六十六部を書き寫し、六十六ヶ國に納め、修行畢りて須賀川に歸り、小石に經を書きて、方八町の北なる高所に納めて、壇を築き供養を遂げ、往生の素懷を達せり。誠に廻國の難、煙霞萬里の道の末、思ひやるだに憂きものを。宿なき時は破れたる堂、空石の陰に寒氣を凌ぎ、深き山路に行暮れては、苔の莚に露を敷き、遠き野原を分行きては、草の枕に霜を結ぶ。山頭に道を失ひ、唯一人の旅こそ難けれと、各感じけり。

二階堂照行死去

仙道軍記卷之上終

仙道軍記巻之下

岩瀬御曹子會津へ遣さるゝ事

夫れ盛隆公の會津盛氏の御家を繼ぎ給ふ根元を、委しく尋ね奉るに、永祿三年庚申春、二階堂盛義公の御曹子七歳になり給ふを、會津へ遣され、大敵馳せ向ふ事あらば、御加勢を御助成ある樣にと仰せられければ、岩瀬の儀少しも疎意に存せず、其上御幼少の御曹子遣さるゝ上は、爭でか隔心あるべき。併一城を持つ人の餘り無勢なるも惡ければ、一年も二年も愚老預り置き、御行儀立居手習など敎へ申し、岩瀬へ歸し申すべし。其時御覽ありて御悅び候へと宣ひて、其後より此御曹子を、御子の盛興と御同前に、御寵愛なされけり。或時岩瀬御曹子遊び給ひて御座せし處へ、金銀を鏤め、裝束結構に拵へたる小太刀を、盛氏御自身持來り給ひ、岩瀬御曹子へ遣され、此

刀を進らするは、誰なりとも惡く思召す者を伐ち給へと仰せられける。御曹子宣ひけるは、憎く存ずる者は誰も御座なく候。去ながら盛氏公をば一太刀恨み、我が欝憤を散じ度由申されければ、盛氏聞召して、是程に御馳走申上ぐるは、定めて御悦たるべしとこそ存候に、何か御心に掛り、左樣に恨み思召すぞ。愚老が不義を、有樣に仰せられ候へとありければ、御曹子宣ふは、尤御子の盛興と御同前に思召す御志は、生々世々忘れ申すべきにあらず。併幼少の某を、會津の遠國に留置かれ、仙道へ歸されず、年月を送り候。古郷を思ひ、明暮懷しき事、愁へずといふ事なし。せめて一年に一度、二年に一度、岩瀬へ遣され、父母の對面時々仕る事ならば、爭でか恨み奉るべきと仰せければ、盛氏公聞召し、此君若年にて御座ありければ、斯樣に宣ふべしとは思召さゞるに、唯人にあらずと思召し、頓て須賀川へ遣し申さんと存じ、御馬諸道具結構に拵へ、御供の者申付け、差置と宣ひて、立ち給ひけり。

岩瀬御曹子會津御家繼ぐ事

盛氏公、岩瀬御曹子を色々見給ふに、利發御身に餘り、御心猛く御座しましければ、縱ひ會津の御名代になされても、危からず思召す處に、御子盛興御病者故、御年十七にて果敢なくなり給ひ、御歎き淺からず、御弔漸く日數過行きければ、岩瀬御曹子を御元服なされ、盛隆と號し、會津の盛氏の御名代に立ち給ふ。此君容顏美麗にして御心猛く、御器量人に勝れさせ給ひければ、盛氏公も、御行末大事とや思召しけん、天寧寺東堂と法問に、黄鸎巢中に杜鵑ありといへども、盛隆が代の末、大事と仰せられける。盛氏は其頃の十三大將の內にて御座しければ、御行末の事をも監み給ひ、假の法問にも、斯の如く宣ふは誠に名將なり。さる程に盛氏公、旣に逝去ありければ、盛隆公、會津の御家を繼ぎ給ふ。當御屋形を圍繞渴仰し奉る事、尋常ならず。或年の六月、盛隆公、供奉百餘人にて、向羽黑へ御參詣、御酒宴に及びける所に、松本・新國謀叛を起し、會津黑河の御城を乘取り、皆彼に與し一味同心なれば、急ぎ向羽黑へ人を遣し、御歸城叶ふべからず候。速に岩瀬へ落ちさせ給ひ、重ねて仙道・伊達・佐竹の勢を催し、御攻あるべしと告げ奉る。御供の上下騷動しけれども、盛隆公、少しも

驚き給ふ氣色なく嘲笑ひ給ひ、謀叛の奴原に與する同類共、一々首を刎ぬべしとて、羽黒山を出で給ふに、附隨ふ者僅百人には過ぎざりしが、押寄せ、大手の門より攻め給ふ。城内に籠り居たる兵、門を破られじと、弓鎗鐵炮を揃へて防ぎける。盛隆公鎗を御取りなされ、一陣に進み給ひ、攻めよや者共と詞を懸け給ひ、御働あれば、揉みに揉んで攻めける程に、門を攻破りて城内へ亂入り、謀叛の輩の負を見て、色を見て居たる會津古參衆、皆盛隆の方へ馳せ加はりける程に、暫時に城兵討取られ、御殿家々に火をかけ、腹を切り死したりければ、其外謀叛起しぬる族も、聞及び給ふをば、押寄せ〳〵討ち給ひけり。盛隆公の兵も、討たれける中にも、大波主膳・弟の彌太郎、比類なき働して討死したり。此兄弟二人は、須賀川より、盛隆公へ附遣されたる御譜代の侍なれば、屋形も一入不便に思召し、懇に御弔ありけり。爰に岩瀨郡の内長沼の城主新國上總介、今度の謀叛人松本と與したりとて、屋形宣ふは、親子割なき中なれば、和談して、上總介が一味せし事歴然なりとて、千餘騎の兵を率し給ひ、長沼へ押寄せ給ひ、二重三重取卷き、鬨を作りければ、上總介、會津・岩瀨の大勢を引請

けては叶ふべからず。一先づ私曲なき旨を申分けて見んと思ひ、屋形に向ひ奉りて、弓ばし引くな、鐵炮打つべからず。攻入らば防ぐべしと下知して、矢の一つも、鐵炮の一度も打たず、城に引籠り居て、今度の謀叛に於ては、全く組せず候。我が子は、綷ふまじき事を綷ひ、身命を失ひ候へば、御恨之なき由、數通の起請文を書きて、御陣中へ矢文を射入れければ、盛隆御心和ぎ、圍を解き給ひ、會津へ御歸陣あり。

盛隆公高倉城を攻むる事

盛隆公、安積・高倉へ御馬を向けらる。朱傘の指物、大小金の鞘張、熨付裝束の鐵炮衆千人、御長柄大鳥毛御前の鐵炮五十挺、金柄虎皮の投鞘、御弓五百張、御馬廻御徒の衆、火威の歩具足、袖なし羽織に金の丸の紋を付け、金の團扇の腰指して、二三百人前後左右に附き奉る。盛隆の御裝束は、紫裳濃黒絲威、摺縄目筋冑、金の鍬形龍頭を打ち、獅子に牡丹の佩楯、梨地金覆輪螺鈿鞍、虎の皮の障泥、厚總の鞦、綺羅天を曜し、陣頭に花を散らせり。御跡には十五箭と號し、三百人鍬鎌を取持ちて、敵地の耕

作を薙倒し掘捨て給ひ、安積・高倉へ御馬を出され、會津・岩瀨の勢を以て、三重四重に取卷き攻めらる。此城高くして攻登る事自由ならず。皆柴手を取りて大勢登りけるに、其柴を放しければ、河內大學といふ者の額に當りけると等しく、鐵炮城中よりどうと打つ。大學鐵炮にて打たれたると思ひ驚きて、少し平みのある所に倒れ伏し、色靑くなりければ、人々鐵炮に當りたると心得、引起し詞を懸くるに、無性になりて、暫く挨拶もなく、額に疵あり血流れければ、手所をも能く見ず、三尺手巾にて其儘卷き、漸く氣も付きければ、城の麓へ荷ひ下しけり。御本陣より御使にて、手負ありと見ゆ。如何とありて、氣付丹藥血留など下され、彌氣付危かりければ、簀輿に乘せ、須賀川へ連れ行き、をりを結び高枕して、外科など呼び看病しけるに、氣色能く食進みければ、鉢卷を解き、手所を見んといふ。大事の手負をば、聊爾に解かぬものなりとて解かず。十日餘り過ぎぬれば、最早解きても苦しかるまじ。取草を煎じ洗はんとて、解き見ければ、少し計り疵あり。鐵炮疵にはなかりければ、其の座に居たる者ども、皆輿を醒し歸りけり。夫よりして人々、打彈大學とあだ名を付けて呼

びけり。男たらん者は、常に一心の嗜肝要なり。斯くて岩瀬の兵朝夕の戰に、弓矢に馴れたる事なれば、強を破ること神變の如くにて、忽ち高倉城を攻落し、須賀川へ、盛隆公御歸陣なされけり。

人取橋合戰の事

伊達正宗二階堂盛隆合戰

盛隆は高倉の地に御陣を取られ、正宗の御座しける所へ、會津・岩瀬の勢を催して、正宗の御備へ、魚鱗に連なり懸りければ、鶴翼に開きて防ぎ戰ふ。盛隆新手を入替へ攻め給へば、終に伊達勢戰ひ負けて、西を指して引退き、人取橋を前に當て控へたる所へ、岩瀬・會津の若武者、是を事共せず攻懸けゝるに、さすが狹き橋なれば、進まんとするも叶はず、馬を乘捨て歩立になりて、川へ飛入り、河岸を這上る所を、伊達衆鍵鐵炮を揃へ、打伏せ突倒しけれども、物ともせず攻懸けゝれば、先陣に進みたる保土原山城守を伊達衆討つて、頸を取らんとするを、濱尾十郎、此時十八歳なりしが、首を取らせじと、互に引合ひ、終に十郎取勝ちて、山城守の頸を敵の手に渡さず、名

譽の働せり。此山城は、保土原江南の嫡子にて、十六にて高名して、大和守を受領し、十七歳の時、首を取りて、山城守になり、今年十八にて討死せり。容顏美麗に、花の如くなる子を殺し給ふ。江南の心底推量られて哀れなり。是より敵味方亂れ合ひ、追つつ捲くつ攻め戰ふ。此陣中へ、盛隆公駈入り給ひ、後れたる者を蹴立て下知し給へば、岩瀨・倉津の勢競ひ戰ひければ、伊達の兵手負討死數多く、悉く追散らし、勝鬨を作り陣を引き給ふ。

田村、白岩城攻め給ふ事

天正十年壬午、岩瀨より白岩城へ馳せ向ひ給ひ取巻き、鑐貫木もがりを、熊手薙鎌を懸けて引倒し、皆步立になりて鎗を取り、弓鐵炮にて攻めけるに、城中も鑓を揃へ防ぎける。濱尾近內と名乘り、御名を承りて勝負せんといひければ、城より向ひたる兵答ひけるは、人の數ならねば名字なしといふ。其名を名乘り給へやと、大音に論義を謠出して懸けゝれども、謠不案內にやありけん、謠はざりけり。岩瀨の寄手、向

へは進めども、跡へは一足も引かず攻めけれども、城兵究竟の兵にて防ぎければ、攻口計り漸く攻破りけれども、敵味方各戰ひ疲れて、今一揉揉むべき樣なく、暫く圍を解きて引きける。　爰に頭家彌五といふ者、關東の者なりしが、年來豫州に奉公し、今度白岩の陣場にて、鐵炮にて腰を打たれ倒れける。　人々寄りて引起し、手所は何所ぞ。　心は何とあると問ひけれども返事なく、暫ありて人心地付きて、腰を打たれ痛む事甚しとて、死ぬるは〳〵といひけり。　鐵炮にて打たれたる者數人見れども、斯樣に痛む者なし。　殊に血の出でざるこそ不審なりと思ひ、血少しも曳かず、何としたる事ぞと問ひければ彌五答ひて、道理かな、胴へ血曳く程に、外へは出でまじといふ。　人々さぞあらんとて、あだに乘せ、須賀川へ連れ歸り看病しけるに、氣分よく、食もしければ、胴へ血入りては、腹張り一粒も食する事ならず。　唯今迄は何としてか生きん。　帶を解きて手所を見んといふ。　大事の手負、疎忽に帶は解かぬものなりといひて、解かざりけるを、二三人寄りて、無理に解いて見たれば、一幅木綿の帶を三重にしたるが、二重打通し、一重は通らず、玉あれども身に疵なく、帶を解くと其

まゝ、玉は下へ落ちければ、彌五面目を失ひ大に恥ぢけり。豫州聞き給ひ立腹し、首を刎ねんと怒りけるを、様々詫言し宥めけり。同年田村と會津合戰に及び、負けゝる所へ、安積郡安子島の城主伊藤右衞門、田村へ籠城しけれども、會津の大敵、田村の加勢にても防ぎ難ければ、右衞門降參して、會津の下になりにけり。

田村郡守山、岩瀨旗本衆と合戰の事

七月中旬に、須賀川の人數三千人にて、秣薙に、田村郡へ出で給ふ。其頃四郎左衞門といふ野伏あり。其さま大に逞しく、鳥毛帽子にて、物の見事に出立ちけれども、終に箭鐵炮の屆く所迄行きたる事なく、大臆病なりければ、人々是を笑ひ、鳥毛四郎左衞門といひて、餘人にも出立見事にて、武道の惡しきをば、鳥毛四郎左衞門なりとて笑ひけり。今度に限らず、田村への働ある時に、江持早坂迄行きて、先へは一足も行かず、其より歸りて、裝束の儘にて、誰も言付けざるに、火の用心あるべし。堅く仰付けたるとて、須賀川中の家々を觸廻りける間、一度も手に逢ひたる事なし。斯く

て、御旗本衆、田村郡へ出で給ひ、耕作を薙ぎ捨て、田畑の中を通りけるに、田村衆弓鐵炮を打懸けて、田畑を薙がれじとす。　須賀川衆、御殿河原へ控へたる所へ、守山衆馳向ひしが、大勢に駈破られ、一支も支へず引きけるを追行く程に、守山の宿近くまで追捲り、七八人討取りけるに、守山衆宿尻に支へて一足も引かず。　弓鐵炮鑓先を揃へて、小膝を衝き平伏し並居て、爰を一寸も引かじと思ひ定め、相待ち居たる所へ、濱尾内藏介・同名近内・遠藤壹岐守、三騎眞先に進み、打破らんと駈入りて、守山、野伏道慶萬九郎といふ者に乘掛りけるを立上り、脇へ飛去り、内藏介が乘りたる馬の腹帶の結所を、矢聲にて突きければ、馬は倒れて伏しけり。　萬九郎鑓を引抜くとて、麻を干置きたる上なれば、濘りて轉びける所に、内藏介馬を乘捨て飛下り、歩立になりて、彼を討たんと進み掛るを見て、萬九郎目早者なりければ、鳥の飛ぶが如く飛退きて討たれざりけり。　須賀川勢押寄せ攻めけれども、守山衆宿尻を持堅め、一足も引かざりければ、町中へは追入れられず、方々より兵馳せ加はり、次第に大勢になり防ぎ戰ふ所へ、中村末三郎十八歳の時、鎗を取て攻め懸り、散々に突合ひ、高倉彦六郎

に討たれける所へ、橋本與八郎十六歲にて馳せ向ひ、彥六郎を討つて首を取る。遠藤壹岐守も高名し、歸陣ありけり。

滑川合戰の事

田村勢五六騎催し、滑川へ馳來る由聞えければ、俄事にて岩瀨勢僅百騎計にて馳向ひて、敵の陣を窺ひ見るに、雲霞の如くの大勢なりければ、千萬に一つも勝たん事難けれども、大勢を聞懍して引退きたると、後代迄嘲られんこと口惜しければ、滑川を前に當て、東の阿隈川を右に受け控へたらば、敵小勢なりと侵り、河を渡りて攻懸らん時、難所にて敵を討取るべしとて、滑川小坂の上に陣取り、志を一にして控へ居たる所へ、案の如く田村勢轡を揃へ攻懸りける。弓鑓鐵炮を揃へ防ぎ戰ふ。田村の兵共、兒塞の西より忍びて馳來り、岩瀨衆西北の敵に責められて、兩陣の敵を、岩瀨衆防ぎ兼ね駈破られ、柏木が外屋迄追はれける。岩瀨衆返し合せ〳〵防ぎ戰ひ、遠藤對馬守・同名壹岐守・濱尾參河守伯父甥殿して、味方を討たせじと繰引に引く處に、

田村衆對馬守を目掛け馳懸る處へ、橋本與八郎馳向ひ、對州太刀と續いて切伏せ、御分の高名は度々にて候。此首を某に賜はり候へと詞をかけゝり。對馬守思ふ樣、若輩乍ら、武道の心ばせ神妙かな。去年細田の城攻と守山の合戰と、兩所にて高名し、當年十七歲にて、今度を三度の高名は、珍らしき事なり。我れ此首を取らんより、若輩者の心懸けたる者に取らせんと思ひ、汝早く討取り高名せよ。縱ひ師友討たるるとも、與八郎をば討たすまじきとて馬を立て、主從共に攻懸り、敵を防ぎける其隙に、與八郎は頸を取りにけり。遠藤對馬守・同名壹岐守・濱尾參河守・子息內藏介・甥近內何れも手負ひ、近內は、僧都といふ十八歲になる譜代の者に討たれける。岩崎出雲・進藤十郎右衞門・有馬長意此三人、軍見物に出でけるが、何れも七十に餘る老人なれば、逃げ敢ずして討たれけり。下宿迄田村勢追ひ來るを、下宿の西にて、箭部主膳・田村の兵を討取りけり。夫より物別れして、田村の兵皆引きにけり。

田村、鹽松と合戰の事

六月十八日、田村勢十騎程にて鹽松へ馳向ひ、十岩畑にて、巳の刻より申の刻迄合戰に及び、終に田村方駈負け、首數七八十討捕りけり。其後青石の合戰にも、田村衆鹽松へ馳向ひ、神森にて合戰し、富澤式部大輔を鹽松へ生捕り、其上首卅程鹽松へ討捕り、稻澤內滑津へ、鹽松衆出向ふ所に、田村勢掛合ひ防ぎ戰ひけれども、悉く敗軍して、田村勢を成田小屋迄、七里追散らし、首數五六十、鹽松衆討捕り、四度の合戰に、鹽松打勝ちければ、田村淸秋自身に、千石森へ馬を出され、新城を構へ、鹽松の押に、人數を指置きたる處へ、備前守、町人百姓に心を合せ、彼千石森へ馳向ひ、耕作迄薙ぎ捨て、田村の人數を追崩し、淸秋の御弟田村善太郎を、町人喜萬新右衞門討捕り、其外雜兵共數多討たれければ、田村淸秋、幾度戰ふとも、勝利を得難しとや思召しけん、天正十三年乙酉九月廿四日、伊達正宗御父子と田村淸秋一味ありて、兩家一度に、鹽松へ馳向ひ給ひければ、大內備前も、大勢防ぎ難く思召し、城を明けて會津へ退き給ひける程に、照宗御心の儘に、鹽松城へ打入り給ひけり。

伊達照宗、二本松義次に虜せらるゝ事

照宗父子、鹽松へ御出馬ありて、早速御手に入りければ、又近日照宗公二本松へ御馬を向けられ、要害を攻むべき擬、已に急なりければ、義次、四天に向ひて宣ひけるは、我小勢を以て、大勢の敵と戰ふ事、勝負如何と問ひ給へば、答へて云く、誠に小を以て大に敵し難く候。今當家の力を以て、伊達・田村の大敵を支ふる事、頗以て難かるべしと申しければ、義次宣ふは、其儀ならば、我れ冑を脫いで降人になり、照宗へ出仕し、兄弟の交をなし、婚姻の義約し、先づ事の無爲ならんずる樣を謀り、我れ歸る時、照宗悅びて、必ず送の禮に立出らるべし。其時照宗の胸づくしを無手と取り、緣より引落し、九寸五分を照宗の胸に差當て引出さば、爭でか遮り留むべきとて、天正三年乙酉十月八日に、二本松義次、降人になりて出で給ふ。照宗斜ならず悅び給ひ、義次を饗應し給ふ事限なし。漸く事終りて、義次御暇乞し給ひ、御歸りありければ、案の如く、御門送りの禮に立ち給ひける所を、無手と取りて緣の下へ引落し、照宗の

御吭へ、義次の御脇指を突懸け引出しければ、鹿子和泉守を始として、一人當千の兵二三百人、照宗を中に取籠め奉行し給ひければ、伊達數千人の軍旅、其跡に充滿して、袖を連ぬといへども、救ふに力なく、手を空くして群りけり。照宗公は、逆心に犯させ給はん事をのみ、歎き悲み給ふやらん、照宗別に御詞なく、義次に手を指し申すなと計り仰せられければ、奪ひ取らんとすれば、照宗の御命なし。周章さわいで、進退途を失ふ所に、正宗は御鷹野に御他行ありければ、人を走らかし、急ぎ告げ知らせ奉りける。正宗取る物も取あへ給はず、御鷹野場より、直に追駈け給へば、早平石の内あわのす迄延びさせ給ふ所に、正宗追付き給ひける。義次河を渡し、過ぎさせ給はば、頓て二本松へ御着あらん。然らば正宗いかに御心猛くとも、照宗公檎になり給ひ、二本松にて栖の面に當るならは、伊達勢勝つ事あるべからず。正宗降參し給ひ、二本松の御旅本になり給ひ、御父の命を乞ひ給はゞ、御家も滅亡此時ならん。不孝に三つあり、跡なきを大なりといへば、父一人捨て、子々孫々迄伊達の御繁昌せん事、一家の忠節なりと思召し給ふやらん、乘掛け給ひて、親共に討捕れや者共と下知し

二本松義次、伊達照宗を殺す

給へば、伊達衆一同に競懸り、義次主從を眞中に取籠め、漏らすなと切懸るを見給ひ、義次照宗を御手に掛け刺殺し給ひ、主從一人も殘らず、一所にて討たれける。義次運命已に盡きて、此時の御迎の相圖相違し、二本松勢大勢にて、遙に隔てたる所へ馳參り、一人も手に合はざりけり。義次滅亡の後、正宗二本松へ馳向ひ攻め給へども、留守居新城彈正・同眞庵、城を堅固に抱へ落ちざりけり。又酉十一月十五日に正宗攻め給へども落城せざる故、正宗鹽松へ陣を御引き、翌年三月十一日、二本松方、箕輪玄蕃・源左衞門・本宮の遊佐丹波・伐江新兵衞四人、此外四五人逆心故、箕輪館迄片倉小十郎を引込みて、本町杉田町に火を懸け、燒拂ひ攻上りけるを、城兵出向ひて、箕輪館片倉小十郎も散々に切立てられ、十八計討捕り、明くる七月十五日迄籠城して、城を明けゝれば、正宗御伯父重實打入り給ふ。

御代田籠城の事

盛隆公、會津・岩瀨・佐竹・岩城・石川を引率して、田村御代田の城へ押寄せて、三重四重

に取卷き、一同に鬨を作りければ、天地に響いて夥しく、百千の雷の鳴り渡るが如し。然れ共城内に、究竟の兵共楯籠りたる事なれば、小勢なりといへども、左右なく落つべき樣なく、盛隆も悠然として、只圍みたる計にて御座しければ、寄手陣々の士卒遊山を旨とし、賣りに來れる酒肴菓子餅抔買調へて慰みけり。此城平地なれば、二箇所へ勢樓を上げけるを、城中より是を上げさせじとて、鐵炮にて打ちけれ共、夜に入り暗きに紛れ、大方組上げ、城內より鐵炮を打つ方をば見えざる樣に、筵を張りければ、晝も危からずなりにけり。此櫓より、城內を目の下に見下しければ、城中にも亦見えざる樣に筵を張りて、其陰を往行す。夜に入りて城內より、色々の口を叩きて、勢樓の內へ鐵炮を打つ者あり。諸人彼を憎みて、如何樣にもして是を殺さんとて、彼が聲の通りに、晝より目當をして、鐵炮を揃へて打ちけれども、終に當らざりけり。城中にては、此如く籠城あるべしとは知らずして、兵糧も貯へざりければ、水練の上手に白米を負はせ、河上より流泳にして、夜々忍びて城中へ兵糧を入れ、兵の飢を助けゝる。初の程こそあれ、度重なりければ、寄手是を知りて、阿武隈川の端に弓鐵炮

を揃へ、番衆を數多据ゑ、待ちにけり。水練共是を夢にも知らず、例の如く心得て、白米を持ち流泳に來る所を、川中にて弓鐵炮を放し打殺しければ、其後は白米一粒も入らざりけり。然るに城中にては、一日二日こそあれ、日數積りぬれば、兵疲れ果てけるが、又如何してか白米を入れけん、兵糧續きける。盛隆公此城を近日端的に攻落し、楯籠りし者、男女法印に寄らず、一人も漏らさず、皆撫截にすべしと宣ひければ、城中の女童驚怖して、歎き悲む事限なし。然れ共御代田殿降參し給ふ氣色なく、天我を亡せり。爭でか降人になりて恥を曝さんより、腹切つて本意を遂げんと宣ひければ、一人も落ちて、命を全うせんと思ふ者なし。三春にては、此事僉議すといへども、區々にして一決せず。清秋宣ふは、今度田村郡の大軍を以て、御代田を圍むなれば防ぎ難し。縱ひ伊達の加勢を乞ひて戰ふとも、勝利を得難し。計略を廻らすべき様もなければ、遂には攻落され、城兵一人も殘らず討たれん事不便なり。何とぞ扱を以て無事にし、城兵共の命を助けんと思ふは如何と宣へば、月齋申さるゝは、御代田の圍、三市四市の敵の中、忍びても落つべき様なし。近日落城せんは必定に候。

若し扱の方便は、愚老が今泉の居城を、御代田の代に岩瀨へ遣され、其にても承引なくば、餘の所を五ヶ所も六ヶ所も加へ、岩瀨へ渡さずば、盛隆合點申されまじく候、縱ひ御領分を渡し申すとも、當座の扱の首尾計にて、御譜代の者共なれば、後々には附隨へ申すべしと存候。斯樣に扱ひ申すより外には無之由申しげれば、此議に同じ給ひ、誰をか仲人として、盛隆の耳に達せんとある。月齋答へて、一城の代に、數ヶ所田村の分を渡し候へば、籌人なくとも異儀あるまじく候へども、御代田の菩提所高安寺は、須賀川普應寺の末寺に候へば、此高安寺を普應寺へ遣され、西堂より箭部・須田四天の宿老を以て、盛隆の御心底御窺ひ然るべしと申しければ、尤なりとて、高安寺を以て、普應寺を賴み、盛隆の御耳に、淸秋の御內聞を達しければ、盛隆漸く御承引ありて、月齋今泉の城を明け、夜中に引退き、其上安積・守屋・富岡・鍋山・八幡・川田・成田・田々野・大槻・田村の內谷田河・栃木、糠塚・御代田は申すに及ばず、一城の圍を以て十三ヶ所御手に入れ、御代田の城を明けて、城中の男女恙なく引退に落着しけり。城兵の落つるを見る事、希代の見物やとて、寄手は兵杖を差置き道を明け、雨

方に並居て見物する中を、先づ一番に座頭琵琶箱を負ひて、女房の梓弓持ちたるが、手を引き落行くを、數人の見物、箙を叩いて笑ひ、暫しは鳴も靜まらず。已に其夜明けゝれば、男女相交り落行くを、見物の內の從者、娘子供を亂妨し、狼藉に及びければ、深く是を制し給ふ。城中皆落行き、數ヶ所岩瀨の御手に入りければ、御代田をば須田備前守に仰付けられ、今泉をば濱尾駿河守に預けられ、新田へは遠藤對馬守、富岡へは須田三郎兵衞を遣され、田々野・大槻の證人を御取り籠舍に及ぶ。田村郡をば遠藤右近大夫・同名內藏頭兩人の下知に仰付けられ、岩城・佐竹の御馬引き、盛隆須賀川に兩日御逗留ありて、御馬を會津へ入れ給ひけり。

盛隆、正宗と郡山合戰の事

正宗若干の兵を引率し、仙道へ御馬を出され、郡山の東に御備を立て、日の丸の御小旗を靡し控へ給ふ所へ、盛隆御旗を進め、朱傘の指物の鐵炮千挺、須賀川下々の鐵炮を加へて、御弓千張餘・御鑓千本餘を揃へ、盛隆公一陣に、正宗の御備へ乘入れ給ひ、

御自身の御働なれば、岩瀬・會津の二千餘騎、勇み進みて魚鱗に連り、面も振らず攻懸けゝれば、伊達衆鶴翼に開き、防ぎ戰ふといへども、支へ兼ねたる體なりければ、岩瀬・會津の兵愈競ひ、正宗の御備を攻崩しければ、流石に猛き正宗も、北を指して引き給ふを、勝に乘りて窪田迄追行き、伊達の兵を悉く討取り、盛隆、須賀川へ御歸陣あり。

三左衞門、盛隆を討ち奉る事

盛隆公、大庭三左衞門に討たれ給ふ。其所以如何にとなれば、一年盛隆公八丁の目へ御馬を向けられ陣を張り、正宗と戰を決し給ひ、伊達勢を悉く破り、敵を追討ち、伊達勢の頸數多討取り、勝鬨をあげ御歸陣の時、二本松の宿を押通り給ひけるに、貴賤群集し見物せり。町屋の內に十四五歲の童、容儀勝れたるが、片手に色ある花を一枝持ち、前に書物を廣げ見居たるを、盛隆見給ひ、爰に暫く御馬を立てられ、御使を以て、此子供を御所望あり。父母辭するに詞なく、御意に任せければ、盛隆斜ならず

悦び給ひ、御物具給はり、御引替の馬に乗せ給ひ、會津へ御歸城あり。三左衞門を寵愛し給ふ事限なし。所謂愛樂の互に替らん事は、似㆓紅榮黄落樹㆒といふが如く、早晩君の寵衰へ、御志かれ〳〵になるまゝに、三左衞門御恨を含みける折節、譜代相傳の子供ども、三左衞門に權を奪はれ、安からず思ひ妬む故に、是を喜び、聞えざる所にては、三左衞門を雁汁と仇名を付け笑ひけり。冷むれば食はれぬといふ儀にて、付けたるとなり。後々は三左衞門も竊に聞き、胸塞り心迷ひ、大息ついで夜晝是を思ふに、骨髓に徹り忍び難き事限なし。然る所に或人三左衞門に向ひ、今朝の御食、雁汁の御料理にて、御參り候やといひて、につこと笑ひければ、三左衞門、毒の矢を胸に受けたるよりも甚しく、堪忍に堪へず、彼を一刀切つて憤を散じ、返す刀にて腹切らんと思切つたるが、大汗を流し堪忍し、是は誰もいはず、屋形の仰せられなれば、咎なき者を殺し、徒に命を捨てんより、屋形を一刀討ち、恨を泉下に報ぜんと思ひ定めて、明日盛隆公を討ち奉ると思ふ宵に、知音の傍輩呼集め、叮寧に振舞酒を勸め、客に向ひいひけるは、昨夜の夢に、我れ望の叶ふことを見たり。三日過ぎて各へ語

り申すべし。是を今朝祝ひ申度候へども、晝は互に公用繁く、長座もならず候へば、夜中に申入れ候。緩々御慰み給ふに於ては、忝き由いひて、種々樣々に饗應し、明朝は死なんと思ふ氣色も見えず。客の歸る時に、名殘惜しき詞こそ、後に思ひ知られたり。旣に其夜も明け、十月十日の早朝に、三左衞門沐浴焚香、出仕の衣裳美麗にかいつくろひ、袴着て御廣間へ來りける。折節盛隆公、御鷹居させ給ひ、只御一人御座し、緣を一禮して通りけるが、常には刀を拔きて通りしに、指したる儘にて通り立歸り、矢聲を出して、盛隆を一刀切り奉る。深手なりけれども、意得たりとて、御腰の刀を過半拔き給ふ處を、二の太刀にて切伏せ奉り、大手の方へ走り出でけるを、追懸け討留めんとする者なく、諸人驚き躁ぎ、周章て群集しける中に、侍一人追行く。是を見て跡より數多續き、二町餘にて追詰め、討殺し見けるに、下には白絹の衣裳を着し、六道錢と數珠を頸に懸けゝれば、逃げて命生きんとは思はざりけるにや。扨盛隆公、其後御子なく、會津の御家を繼ぎ給ふべき御方もなき故に、佐竹の御屋形の御子義宣の御弟義廣と申すを、御名代に立て御入部ありて、義廣の御代になりにけり。

二階堂盛隆討たる

猪苗代盛國、嫡子盛種の城を取返す事

天正十六年戊子、猪苗代城主盛國の惣領盛種に代を讓り、城を渡し、親父盛國は隱居せり。盛種思ひけるは、猪苗代小身なりといへども、盛隆繁昌の時は、他の大勢にも蔑にせられず、只今迄當城安穩なる事、盛義・盛隆の威光に依つてなり。然るに盛隆隱れ給ひければ、正宗必ず當城へ馬を出さるべし。大敵を防がん事、獨身にては叶ひ難し。義廣も緣者なれば、定めて疎意あるべからず。今より後は、義廣を賴み申さんとて、盛種、五月八日に會津へ出仕し給ふ其留主に、盛國利發なき故に、人數を發し、城を同十日に取返し、御親父の盛國再住し給へば、盛種安からぬ事に思ひ、欝憤を含み、同年七月十四日、城より五里隔てる金の曲といふ城に、盛國の內衆大堀土佐・秋屋平左衞門兩人居けるが、是非に及ばず、城を明け引退き、盛種居住ありける所に、矢田八郎左衞門・廣瀨藤內・遠藤太郎兵衞三人、野伏五六十人召連れ來り、金の曲より中途へ出向ひ働き、盛國の方を廿人計討捕り首を取り、金の曲の城へ引籠り

ける所に、扱になりて、盛種横澤へ引退きけり。

義廣會津落附摺上合戰の事

會津の屋形盛隆公、廿一の御歳、大庭三左衛門に弑せられ給ひ、御代を繼ぎ給ふべき御子あらざる故に、佐竹の屋形義重の二男義廣と申すを、會津の御代繼となし奉る。天正十六年、正宗廿二歳の御時、大軍を靡かし、猪苗代へ押寄せ給ふ由聞えければ、諸人躁動し新橋を引き、敵を難所に引受け防がんと、詮議すといへ共一定せず。猪苗代無勢なりければ、會津へ加勢を乞ひければ、義廣御馬を出され、伊達と會津戰ふといへども、五日の内の戰に、義廣摺上にて打負け給ひ、會津へ引退き給ふ。盛國父子も、猪苗代の城を明けて、會津へ落ちければ、猪苗代正宗の御手に入り、卽ち御城へ移り御座して、早速會津へ御馬を向け給ふ由、其隱なかりければ、會津にて之を聞き、伊達勢と戰はん事、叶ひ難しとや思ひけん、會津譜代の四天の宿老金上・佐瀬・飛田・富塚・常世・針生、此外先鋒衆悉く心變り、正宗へ降參しければ、佐竹より義廣に附

伊達正宗二階堂義廣合戰

き參りたる御譜代御手勢、僅十騎廿騎計にては、此大敵と戰はん事叶ふべからず。詮なき御合戰ありて、御命を棄て給はんは勿體なし。急ぎ佐竹へ落ちさせ給ふべしと諫めて、御馬に乘せ奉り、其夜會津の御城を出で給ひ、布引山を越え、倉川橋に懸り、湯本通をして、佐竹へ落着き給ひけり。之に依つて正宗、六月十一日に會津城へ打入り給ふ。

岩瀨西の方の衆正宗へ降參の事

正宗公、岩瀨へ御馬を向けられ、須賀川御攻あるべき覺悟にて、西方の城持衆連々、方便を以て逆心する樣に巧み給ひければ、西方衆思はるゝは、是れ皆謀叛せよとの、正宗の智略なり。盛義公、天正九年七月廿三日死去し給ひ、御名跡なき故に、佐竹より岩瀨の御家を繼ぎ給ふに窮り、義重・義宣御合點、堅く御約諾ありといへども、只今迄御名代遣されざる事なれば、佐竹御父子の心計り難し。盛義公御繁昌の時こそ、其羽に隱れて、破られずありつるが、今は浮世に御座しまさねば、御臺樣計り御

座すといへども、御女儀の、何と御心猛く渡らせ給ふとも賴なし。御臺樣は、正宗の御爲には、現在の御伯母にておはしませば、終には御中直らせ給ひぬる事必然なり。然れば正宗公に惡まれ奉りては詮なし。若し我等此度伊達へ隨ひ申さずば、必ず正宗御馬を向けられん事疑なし。其節脇より加勢もなく、面々に楯籠り大敵を防がん事、思ひ寄らざる事なり。迚も叶はざる物ならば、責められて隨はんより、進んで隨はんには、賞も蒙りなんとて、我劣らじと伊達へ思ひ寄る中に、箭田野安房守・新田城主遠藤對馬守・泉田將監三人は逆心なし、廿五日の朝、御臺樣より對馬が許へ御使にて、西方衆、草の風に靡く如く、正宗へ思寄り逆心する處に、御邊只今迄二心なし。武士の本意神妙なり。併正宗へ降參せずば、攻殺されん事必定なり。然れば汝を、正宗は殺さずして、自らが、忠ある者を殺すに同じくして、不義にあらずや。御邊一人心を變へずとて、須賀川の滅亡遁るゝにもあらず。汝命を全うするこそ、自らが爲には忠孝なり。汝が身命を助けて、忠恩に報ゆるなり。汝此志を背かば、鬼畜木石にも劣るなり。存ずる旨ある間、早く正宗へ降參すべき由、頻に宣ひければ、是非に及

ばず、箭田野房州は逆心なけれども、須賀川へ參らず、大里の城に引籠り居けり。河東の鄕箭部下野守は、正宗公五六歲の間、色々重寶なる物を饋り給ふ度每に、御館へ御內聞を窺ひ申さるゝといへ共、終には正宗の計略に落されて、逆心の故、狸森の城に引籠り、何方へも出でざれども、一人も參らず。其外東方にて二心なきは、鹽田左近大夫一類・小倉・遠藤內藏頭一黨・佐久間主殿介・同名彌右衞門、小山田にて內山右馬之丞・大原內匠介・飯村六郎左衞門・靑木次郎兵衞・須田內藏允・大槻與市郎・桐生玄蕃・同名若狹・黑月與右衞門・靑木源四郎・服部伊豆・吉成監物・同名玄蕃・同名若狹・目照田大學・田中兵庫・須田左近・江藤萬戶・前田信濃守・和田の城主須田美濃守・濱尾城主箭部主膳・遠藤左馬介・圓谷與三左衞門・同名右馬允・鹿島彥八郎・須田大藏・江持近江守・須田源藏・高久田四郎・箭部紀伊守・須田織部・同名彥三郎・飯土用半次郎・鏡沼大膳・濱尾藤一郎・箭部源五郎・小田原內膳・滑河藤十郎・山寺淡路守・鈴木帶刀・小河和泉、須賀川御旗本衆には、濱尾三河守・子息內藏介・同名筑後守・子息近內・同名志摩・子息內記允・弟彌兵衞・弟內匠介・遠藤雅樂頭・同名壹岐守・矢部伊豫守・同掃部介・子息織部・朝

日伊勢守・子息萬七郎・大波石見守・子息新四郎・薄井源左衞門・大寺雅樂允・飯土用七兵衞・泉田將監・弟左近・横澤内膳・熊澤四郎右衞門・同助左衞門・薄井源十郎・内田肥前・荒木田清右衞門・大寺宮内大輔・長沼彥左衞門・忍藤兵衞・弟羽右衞門・岩川藤十郎・伊土井藤内・白葉因幡・大賀大學・箭内助右衞門・鈴木太郎右衞門・子息彥八郎・同名六郎左衞門・同太郎左衞門・子息孫七郎・小川内藏允・子息彌三郎・今泉伊豆・石井大學・須田主膳・同右近・上寺德善院・濱尾光明院・小野寺外記・矢部右馬允・同藏人・須田掃部介・西牧甚四郎・玉石與次右衞門・宮崎新藏人・早原彥右衞門・根本左馬允・箭内雅樂介・佐藤主水・大田與三左衞門・同監物・塚原次郎右衞門・中村助七郎・味戸左衞門・橋本藤右衞門・志賀木工介・石井彥右衞門・吉田彥十郎・磯部孫右衞門・同與十郎・舟田次郎右衞門・車田平右衞門・三瓶太郎左衞門・小森彌八郎・安久津與八郎・下枝掃部・木田和新四郎・同又右衞門・大橋掃部・又市隼人・佐藤助七郎・同雅樂允・沙茂孫十郎・花河藤左衞門、右上下共に武道勝れ二心なく、今度の合戰に、伊達勢に懸合ひ防ぎ戰ひて、一命を捨てんと、須賀川へ、思寄りたる兵なり。

須賀川城御臺直言の事

天正七年十月廿一日、家中幷に上下町人御城へ召され、仰には、近日正宗當城を攻めらるゝ事歴然なり。心を變へずして戰ふとも、大勢なれば、終には打負け、士卒命を失ふ事、我と正宗兩人の故を以てなり。そゞろに家中を惱まさんより、我れ獨身にて、正宗と欝憤を散ぜん。各伊達へ降參し、身を立て妻子を養ひ然るべきなり。我に附隨ひたるより悦びたるべし。少しも恨に存ぜざる所なりと宣へば、笥部伊豫守進み出でて申さるゝは、斯樣に申すとて、命を惜み申すにあらず。すは八幡も照覽あれ、伊達勢に馳向ひて、尸を曝し申すべく候。併此度正宗、大軍を以て發向候へば、僅の小勢にては、いかに志を一にし、命を輕んじ戰ふとも、叶ひ難きは眼前にて候。此時に至りて、御當家一時に斷絶せんも勿體なく候へば、一先づ正宗公へ御降參然るべし。正宗は御甥と申し、御女儀にて御座候へば、御降參候へても、さのみ御家の瑕瑾にも罷成るまじく候。御家永く御繁昌なさる儀に候へば、御思案然るべき由申

しければ、御臺樣仰に、意見尤僻事にもあらざれども、正宗は古、敵の田村清秋に一味し、寡伯母を攻むる事其謂なし。其罪一。正宗猪苗代に發向し、自らが娘現在の從弟の居城を攻取る。其罪二。正宗曾津を取らん爲に、計略を廻らし、反逆籌策者を賞しければ、士卒附順ふ。天の時を與へたりとて、兵を引きて、會津義廣の居城黑川へ赴かんとする時、義廣の賴み給へる家人佐瀨・飛田・金上・富塚・常世を始として、皆義廣を背き正宗へ降參しければ、義廣力及ばずして、城を捨て佐竹へ落つ。正宗頓て會津城へ入り、幾久しき會津滅亡して、忽に伊達の領分となる。天運といひ乍ら、義廣は正宗の伯母の名跡なり。且又自らが子盛隆が名代といひ、佐竹義重の御子なれば、從弟なり。彼是爭でか疎なるべきに、久しき家を三家迄亡す事、其罪三。正宗己が欲に耽りて、自が兄己が父の照宗の首を截る。昔源義朝の如きは、朝敵にて敕命なれば、是非に及ばざるに、此の如きの惡行、其罪四。佐竹義重居城へ發向し、伯母幷子息義宣を亡さんと企つる事、其罪五。其上先年田村清秋の兵、小倉の內松が鳥屋(とや)の山上に、大勢楯籠りし時、此山高くして用水の便なければ、池を掘り、赤土を

以て池の内を塗りて、雨降に軒の滴を、桶を以て受入れければ、水清淨にして峯を浸し、涌出づる事泉の如し。陣中へ洒ぎ汲む共、盡くる事なし。此山を城郭とし楯籠り、夜討を討ち草を伏せ、河東の鄕を、一方より切取らんと巧みければ、岩瀨の人數を以て之を攻むといへども、山高く峙ち、東西南北共に切れ、東南は谷川流れ、四方皆深田にて、攻上らんとするに便なし。殊に大石大木繫ぎ置きて、登る者を打殺さんと巧みける。是を攻落さずして置かば、若干の人民難儀に及ぶに依つて、闔河内の池迄、自身出馬し、百餘日逗留し、松が鳥屋の强敵を却退し度候。御加勢給ひ候へと頻に申しければ、卽ち加勢ありて、岩瀨・佐竹の兩勢、松が鳥屋の南の山に陣取り控へ居たるを、楯籠りし田村の者共見て、叶はじとや思ひけん、夜に紛れ、五人三人宛忍びて落ちにけり。豫て巧みし事なれば、小倉の佐久間主殿介・同名彌右衞門・惣子內市右衞門三人、案內者なれば、楯籠りたる所へ忍び入り、樣子ども窺ひ、三人走り廻りて、家々に火を付け、相圖の鬨を作り、一方を明け攻上れば、楯籠りし田村勢騷動して、我れ先にと落ちければ、人に人重なり、或は傍輩の鑓刀に貫かれ死し、又は

高所より落ちて死するも多し。田村勢の落行く詰り〳〵に、待受け討亡しければ、清秋多日の紛骨忽に徒になり、今迄岩瀬を知る事、是れ佐竹の御厚恩、報じても報じ難きなり。我れ正宗へ降參せば、二本松・猪苗代・會津・岩瀬、正宗の手に入り、田村は舅なり、石河秋光は伯父にて、正宗へ贔屓なり。白河義親も、爭でか下知を背くべき。然れば會津仙道、皆伊達の手に入るなれば、是より直に佐竹へ、正宗發向すべきなり。若旗本衆正宗へ降參せずして、籠城に及びなば、小勢なりといふとも、易々とは攻落されまじ。多日に及ぶならば、正宗も氣を屈して、伊達へ歸陣あるべし。縱ひ速に當城を攻落しても、是より正宗歸陣せらるべし。恩を得て恩を知らざるは、禽獸に齊し。此度正宗に攻殺さるゝか、又自害するか、正宗當年佐竹への出馬延引ある處を、我が義宣への忠節にすべしとて、御降參あるべき氣色もなかりければ、重ねて御意見申す者なし。

須賀川上下神水の事

須賀川御旗本衆二心なく、上下志を一にして、殘らず登城し申しけるは、草の風に靡く如く、皆正宗へ志を通じ、互に人の心を知らず。此度一命を捨て、伊達勢に武勇の働せんと思ふ人々は、白地に誓文を以て、傍輩中互に疑心なく一味して、快く討死せんは如何にといひければ、此儀然るべしとて、千用寺秀藝法印・妙林寺明良法印兩寺登城し、明良法印誓文を調へ、熊野牛王を灰に燒き酒に入れ呑みける時、誰人も飮み始むる方なく、時刻少し滯りける處に、濱尾三河守いひけるは、只今爰元へ參られたる程の人、上下共に此酒呑まざるはあるまじく候。但早く呑みたる者罰を蒙りて、遲く呑みたる人は、神罰の當らざるにあらず。然れば前後の吟味入らず、又盃の禮も入らざるなり。天正九年七月廿三日、盛義公御逝去以來、當年迄九年に至り、弓箭の差引御仕置に、萬事濃州次第に候へば、貴殿御呑み初め、須賀川衆は、何れも次第不同に、呑まれて然るべしと存ずるなりといひければ、濃州聞きて、尤の儀に候。さあらば某呑みて、各へ進ぜんとて、下戸なりしが、たぶ〳〵と一つ受け呑みて、其より旗本衆進み出で呑みければ、町人下々迄勇み進みて、殘らず呑みにけり。守屋は其朝

西方に所用ありて參り候。頓て歸り申さんとて行きけるが、今に歸らず。神水に外れ、西方の謀叛の方へ行くは、如何樣二心と覺えたり。此時守屋を討たずば、先非を悔ゆとも叶ふまじ。歸らん所を待受け討取るべしとて進む所に、或人いひけるは、千人心替ありとも、守屋に於ては、謀叛に組する事あるまじ。一騎當千の兵を討つは、味方の弱りなり。先年須田大膳大夫を討ちて、今に後悔すれ共益なし。此程も宮內大輔殿を討ち、正宗へ二心もなきに、いと惜しき事なりといひければ、其儀ならば、能々樣子を窺ひ見て討てとて、討たざりけるこそ愚なれ、去程に伊達勢、大黑石口より攻め來らんとて、畔の岸を東より西河迄、兩方を深く堀に掘り、細菓乎〔一本ニ細かにトアリ〕して、南は八幡山、兩方共に岩にて、石町藥師の壇の南方八丁迄、作田續きし難所なり。西大黑石は、兩方共に高く、岩の間小池ありて、池の流細畔の根を深く掘り。其溝西河へ流れ落つ。其より北、雨よばはり小屋は岩石にして、南は皆深田なり。鈎淵・釋迦堂に、守屋館猶以て岩續き、高久田城より暮谷澤川東を流れ、西川へ落合ひ、須賀川の方は皆高ければ、是より寄する事は思も寄らず。會下町口は小坂ありて、平

に見えければ、攻め來ることは、大黑石口ならではなし。細畔に弓鐵炮を揃へ、向ふ者共を一騎二騎宛、召出しの如くに討たんには、何の仔細のあるべきと、皆一同に申しける。

竹貫・岩城・佐竹より加勢の事

天正十七年己丑十月廿四日、竹貫中務大輔、人數五六百人、手の者皆赤出立にて、强弓の精兵を勝つて、加勢に來る中にも、水野勘解由が鳫俣の間六寸餘あるを、大弓に取添へしかば、殊に勝れて見えにけり。岩城常隆公よりは、植田但馬守を大將にて、三百餘騎の加勢なり。佐竹義宣は、自身御馬を出され、須賀川に御籠り、正宗と御合戰あるべしとて、先手河井甲斐守・武茂左馬介二百餘騎にて來る。然れ共義宣御馬出さゞりければ、事の體已に急に候。早速御出馬なされ候へと告げければども、佐竹をば御出ありけるが、正宗との合戰危しとや思召しけん、至る所每にて、御鷹野あり、酒に淫し、路次に數日御滯留なされ、須賀川へ御馬を出されざりければ、須賀川の旗

本衆申すは、夫れ大將は、士卒の志を一にせん爲に、士未㆑食將不㆑食、宿㆑野不㆑張㆑蓋、得㆓一豆飯㆒與㆓士喫㆒、淋㆓一樽之酒㆒與㆓兵飲㆒とこそ聞きしに、明暮旨酒に淫りて、兵の飢を知らず、軍事を忘れて樂に誇る。斯る大事を閣き、御鷹狩は珍らしき大將なり。御臺樣は、一旦の義理を思召して、伊達も佐竹も同じ御甥なれども、佐竹の御爲を思召し、正宗を敵になされ引受け給ふに、正宗は伊達・信夫の大將、會津・安達御手に入れたりといふとも、譜代衆の樣にはなく、命を捨て攻め戰ふとは思ふまじ。佐竹は常陸十六郡の大將なれば、伊達は二千騎には過ぎず。佐竹は四五千騎もあらん、敵を難所へおびき入れ取籠め討つに、何の仔細かあるべきに、一度約をなして、變らざるこそ、武士の本意なるに、斯樣に色を見給ふ事、仁義にも血氣にも付かず。賴母しからぬ人よと皆いひけり。

須賀川落城

同十月廿六日の早旦に、正宗大軍を率し、山寺山王山に御陣を取られ、同辰上刻、信

夫郡の兵大黒石畔より、鬨を作り馳せ向ふ。城方は礫場の高所に白旗を立て、濱尾參河守・同筑後守・同志摩守・矢部伊豫守・遠藤雅樂頭・朝日伊勢守・大波越後守を先として、御旗本を守護す。寄手の向陣には、遠藤壹岐守・濱尾內藏介・同近內・長沼彥左衞門・大波石見守・子息新四郎・朝日萬七・岩崎藤十郎・熊澤四郎右衞門・同助左衞門・忍藤兵衞・荒木田淸右衞門・薄井源左衞門・內田肥前守・高林右衞門・上寺德善院・同光明院・須田主膳・同右近・箭部紀伊守・同馬之允・同源五郎・濱尾藤市・須田掃部介・同織部・大寺宮內・伊土井藤內・大賀大學・箭內介右衞門・白葉因幡守・濱尾內記・弟彌兵衞・弟內匠介・小川內藏允・子息彌三郎・飯土用七兵衞・鈴木太郎左衞門・子息孫七郎・同彥八郎・石井大學・今泉伊豆守・早原彥右衞門・西牧甚四郎・片寄新藏人・宮崎內記・中村助七郎・小野寺外記・矢部雅樂介・弟與次右衞門・根本左馬允・佐藤主水・太田與三右衞門・同監物・塚原二郎右衞門・味戶助兵衞・藍原太郎左衞門・橋本藤右衞門・佐久間重右衞門・志賀木工介・石井彥右衞門・舞木介左衞門・吉田彥十郎・磯部孫右衞門・同與十郎・舟田次郎左衞門・車田平右衞門・三瓶太郎左衞門・小林彌八郎・安久津與八郎・木田新四郎・同

文右衞門・大橋掃部・五市隼人・佐藤介七郎・同名雅樂允・梅宮源七郎・沙茂孫十郎・花川藤左衞門・影山與惣六・同長三・同文市、御旗本衆鐵炮の上手には、鈴木太郎左衞門・從弟六郎右衞門・泉田將監・弟左近・須田源藏を初として、卅餘人勝りて、一人に鐵炮三挺四挺宛、玉藥を次ぐ者を相添へけり。弓は忍羽右衞門・玉名與次右衞門抔といふ究竟の射手數人、弓の絃くひしめし、小引して待懸けたり。須田濃州は、四目結の旗差し安藤・服部・小板橋・篠山・山寺・長瀬・割鎻・鈍柄抔といふ武邊者共、前後左右に附隨はせ向ひけり。北には植田但馬守を大將として、岩瀬勢三百餘騎にて控へたり。南には河井甲斐守・茂武左馬介・竹貫中務大輔、三百餘騎待ち居たり。其外岩城・佐竹の勢をば、物陰に深く隱し置きにけり。須賀川衆、一二百騎の兵を出して馳せ向ふ。信夫の兵、牛袋に打臨みて、是を見思ふには、敵に似ず小勢なりと侮りて、五百餘騎の兵、同時に馬を西川へ打入れ、渡して進み懸けゝれ共、細繩手なれば、駒の頭を、二騎とも雙ぶ事も叶はざりけり。須賀川衆は、思ふ樣に敵引出し、態と防ぐまねして引退きければ、信夫勢勝に乘りて、逃ぐるを追ふ事一町餘、敵を思ふ圖におびき出し

ければ、弓鐵炮にて打立てける程に、一人も打殺さゞるはなし。敵怺へ兼ね、引かんとするに所なく、上には須田美濃守・遠藤壹岐守・同雅樂頭・濱尾内藏介・同近内・矢部伊豫守を始め、皆志を一にして防ぎ戰ひ、南よりは河井甲斐守・茂武左馬介・竹貫中務大輔、弓鐵炮を揃へ、攻め來る敵を打倒す。中にも竹貫衆水野勘解由强弓なりけり。北は植田但州、弓鐵炮鑓を以て防ぎければ、信夫の寄手三方より圍まれ、悉く討たれ敗軍し、引かんとすれば、細繩手なれば遁るに道塞り、進退爰に谷りて、殘少に討なされ、討漏らされたる兵、ほう〴〵本陣へ逃歸る。此戰の半に隙を伺ひて、伊達の宿老八代勘解由兵衞・長沼城主新國上總介兩手の兵、皆步立にて、大黑石の池より、岩の間作田を傳ひ、忍び來りける。此作田、南北共に高く、窪田なりければ、敵の來るも見えず、放火せんとて、會下町頭の南へ程近く來るを見付け、二陣に控へたる箭部主膳・圓谷與惣左衞門・同右馬允・遠藤左馬介・鹿島彥八郎・須田大藏・前田河信濃守・江持近江守、河東の鄕にては、遠藤右近大夫・同內藏頭・同彌右衞門・佐久間主殿介・同彌左衞門・飯村六郎左衞門・內山左馬允・靑木次郎兵衞・大原內匠・黑月與右衞門・大槻與

一郎・桐生玄蕃・同若狹・須田內藏允・同左近大夫・日照田大學・大寺雅樂允・服部伊豆・吉成玄蕃・同監物・江藤萬戸を先として、皆轡をならべ、伊達長沼の兩勢を中に取籠め、一人も漏らさず討捕らんと馳向ひければ、叶はじとや思ひけん、駿足を出し逃げけるを、追打つ事二百餘人なり。逃れんとするに、始め忍び來りし作田より外はなし。南八幡山の方へ逃れんとすれば、鑓にて突落されぬ。十方を失ふ所を、北の高より目の下に見下し、打殺しけり。此の如く信夫・伊達・長沼の兵を悉く討取り、須賀川衆悅び控へたり。正宗、保土原・江南を召して宣ふは、須賀川の兵武くして、左右なく本意を遂ぐる合戰叶ふまじ。先づ小勢を以て蒐けて、敵侮りて懸らん時、矢軍些しするまねして、河原表へ引退かば、須賀川勢、勝に乘りて追ひ來らん。此時人數を三四手に配り、大勢一同に攻懸らば、須賀川勢防ぎ兼ね、引退く所を附入にし、是より見ゆる町へ追入れ、宿に火をかけ燒散らし、是を御手持にて、御歸陣あるべきの由仰せられ、先づ小勢を以て寄せ給ふ。須賀川衆事ともせず、岩城・佐竹の衆をば、此彼に打散らし隱し置き、御旗本衆計、兵を進めて戰ふ程に、伊達の軍破れて數多討たれ、伊達

の軍將の首を、濱尾近內討捕り、大黑石坂の下迄追返し、細畔へは追行かざりけり。本の陣へ馳せ返り、馬を西頭に立て、暫く息を休めて控へたる所へ、伊達勢三手四手續き馳せ向ふを、鶴翼に開いて、弓鐵炮を揃へ待ち居たり。伊達勢敵を三方に受けて、遁るべき方なければ、死を輕んじ戰へども、細畔なれば、諸勢一度に懸る事を得ず、伊達の二陣馳加はりて、堅を破り戰ひけれども叶はず、人馬共に疲れ、北へ逃れんとすれば、植田但州岩城勢、三百餘騎にて控へたり。跡へ引かんとすれば、味方の勢、細畔なれば道なし。南へ上り落ちんとすれば、茂武左馬介・河井甲斐守・竹貫中務、敵を目の下に見て、弓鐵炮を揃へ待懸けたり。前には敵ありて、四方を圍まれぬれば、上へ下へとさわぎ揉み合ふを、上より大石を轉ばしかけ打倒す。一陣破れければ、二陣の伊達勢、西河へ飛入り〳〵引退くを、岩城勢南へ廻り、堀底の方より遮り討たんとす。須賀川・河東の鄕の二手を一手にして、中より一同に鬨を作り追詰め、東南北より攻めければ、悉く敗軍し、落行く伊達衆を、數多討取りて各悅び、正宗當城へ幾度向ひ給ふ共、勝利はなるまじと、廣言吐いて喜びけり。濱尾參州いひけるは、大

敵に向つて陣を張り、戰を決せんとする時、兵氣といふ事あり。高き所に打上り、雨方の陣を見るに、味方の陣に兵氣上らず。いか樣此度の戰、必ずしも勝利得難しといひけれども、敵の攻め來るに、縱ひ討滅さゞる迄も、捨て置かれじと申しけり。

守屋筑後守謀叛の事

斯くて守屋筑州を大將にして、鈴木帶刀・子息八郎・山寺淡路守・小川和泉守・子息彥太郎・牛袋將監・滑川藤十郎・守屋采女・坂地五郎右衞門を先として、盤の石雨呼口より、敵馳せ向ふまじきとて、僅百四五十騎にて、狗物馬場口を固め控へたり。此所難所なれば、敵一人も馳せ向はず。正宗の御陣場は、西川を隔て、雨呼の西に、日の丸の小旗を立靡し、其間二三町には過ぎず。然るに守屋筑後守川端に出で、指したる小旗を正宗の御陣所に向ひ、橫に二三度振りけるを、皆人見て、謀叛の相圖とは夢にも知らず、何事にて振るかと見居たれば、守屋が被官織部・近部といふ二人の兄弟、北町に火を掛けゝれば、煙天に滿ち炎盛なりしかば、守屋正宗の陣場へ馳入るを見て、

狗物馬場を堅め控へ居たる兵も、心ならず降人になりて、正宗の城へ駈入り、或は散散に落失せけり。守屋逆心せしは、須田一人の胸に落居し、四天の分別に任せず、濃州一人に權を取られ、安からざる事に思ひ、何事をいひても、能き樣にあるべしと計いひて、一言もいはざりければ、人々の沙汰に、守屋殿の意見にて、能からずる樣にと申しけるが、終に此恨にて謀叛せり。大黑石口にては、寄手を物共せず、防ぎ戰ひけるが、火の手四方に上りければ、會下町の軍破れ、二の丸指して引退くを、寄手追ひ戰ひければ、返し合せ戰ひけるが、敵は大敵なれば終に打負けて、河井甲斐守・茂武左馬介・竹貫中務・植田但馬・鈴木六郎右衞門・佐藤主水討たれにけり。殘兵二の丸へ逃入りし程に、人に人重なりて、倒れたる者は蹴殺されける。二の丸に籠りし者共、敵方に一門親類數多ありければ、是を助けん爲に、二の丸へ馳せ來り、喜び引退けて、普く命を助かりける。遠藤壹岐守は、岩瀨勢防ぐ事叶はず、落城するを見て、敵の中を乘割り、正宗の御前へ參り、只今迄當城に楯籠り、防ぎ戰ひ候へ共、不運にして落城仕候へば、力なく候。今敵を討つて、詮なき人を殺すも無益に候。又遁るゝに便あ

れば、落失せ命を全うせんは易く候へ共、只御前にて首を刎ねられ、運を極め申さんと、謹で申しければ、正宗聞き給ひ、只今迄心を變へず、一命を捨て是迄來る事、勇士の心ばせ神妙なり。今より後は我に隨ひ給へとて、命を助けられけり。去程に本丸には、御臺樣、守屋の內室を御前へ召され仰せけるは、縱ひ千人が心替りあり共、守屋に於ては二心あるまじきと賴みし一方の大將、忽に心を變じ放火せしめ、落城する事、異國本朝にも比類なき者かな。恨は只守屋に止めたりと仰せければ、內室申さるゝは、女は君夫に仕へて、順從の道を守るを婦人の道とし、士は心を變へざるを武の本意とす。然るに守屋、累代の主君に謀叛を致し、御當家滅亡する事、大逆無道、其罪蒼海よりも深し。唯自が骨を碎き肉を割き給ひ、御憤を休め給ふべしと畏れ給ふ所を、御臺餘りに怒に堪へ兼ね、內室の胸づくしを取りて引寄せ、小脇指にて突き給ふを、女心なれば、上﨟數多寄りて、御臺の御手に取付きければ、內室の喉の下へ少し當り、突殺し給はず。其脇指にて、御喉を突き給ふを、上﨟達取付き、御脇指を奪ひ奉る。御喉を除き、右の方に御脇指當り、御自害をも遂げ給はず。守屋は內室

須賀川城陷る

二階堂家斷絕

に、人を付けてや置きたりけん、究竟の者七八人來りて、守屋の內室を負ひて引退き、鳥の飛ぶが如く御堀を越え、西の方へ落行き命を助かりけり。此時男一人も居合はさず、留むる者もなかりけり。去程に敵、長祿寺に亂入りて放火しければ、七堂伽藍も忽に燃上る。折節西風烈しく吹きければ、御實城は唯堀一重隔てし所なれば、風呂屋と御廣間へ一同に火燃付き、城中煙滿ちにけり。正宗公より、人を二三十人御本丸へ遣され、御臺を負ひ奉り、女房達十四五人御供なり。御先の上﨟二人抱子二つ立持ちて、御城を出で給ふ。此日いかなる日ぞや。須賀川六代にして、二階堂家斷絕せり。本丸には、久しく召使はれける高橋菊阿彌父子・濱尾孫十郎、以上三人より外に居ず、皆落失せけり。此十郎は男道を嗜み、弓矢修行の譽を取り、去々年伊達へ行きて、正宗へ奉公し、此度須賀川への御供し、馳向ひたりしが、守屋謀叛に依つて、須賀川落城するを聞きて、親參河・兄內藏介の事心元なく思ひ、守屋が謀叛故、落城の由を告知らせ、母儀と兄の妻子を、恙なく落さんとて、急ぎ本丸へ入り、此彼を尋ねければ、女房達火を遁れんとて、築地の上に登り集りし中にて、母儀と兄の妻子を見

付け、喜び力を得、落さんと思ひ、向の堀端に、正宗の不斷衆數多並居たるを見て、築地より堀の際へ下りて、招きいひけるは、義を缺くまじきならば、妻子を其へ落さん。此度の儀、何れも賴み申すといひければ、正宗衆御旗を掛け、八幡大菩薩も照覽あれ、互に知音の中なれば、貴殿の爲に、何ぞ義を缺くべき。心安く落し給へといひければ、十郎悅び、築地の上へ立歸り見るに、はや何地へか、妻子共を連行きけん、行方知らざりければ、十郎大に腹を立て、鑓を取りて垣を越し、もがりを破り、攻入る敵を突倒し、高橋菊阿彌父子と、此濱尾十郎三人にて、田村勢を防ぎ戰ひける所へ、正宗不斷の知音なる衆二三十人亂れ入りしが、伊達・田村の兵、十郎を討たんと飛懸るを見て押隔て、是は我々が傍輩なるぞ。味方討するなと下知し、十郎を引退け、城を出しければ、恙なく江南の陣中へ行きて、其夜保土原へ引退く。其後は、伊達へは行かざりけり。菊阿彌父子は、大勢に取籠められ、終に討たれにけり。大手にては、遠藤雅樂が子息彥一・大賀大學・玉名與次右衞門・宮崎內記・大波越後守を始として、岩城・佐竹衆雜兵共に討死數多ありて、あげて數ふべからず。須田濃州は、敵の中を乘

脫け、猛火の中を駈通し、我在城へ退き、其夜和田を自燒して、退き給ひけり。

御臺新井田へ落ち給ふ事

斯くて正宗の御家人、御臺を負ひ奉り、正宗の陣場近くなりければ、御臺仰せらるゝは、遠藤對馬は、此度少も逆心の意なきを我れ感じ、種々に意見を加へ、正宗へ降參させしなれば、對馬に於ては、少も恨なし。之に依つて薪井田へ御越あるべしと宣ひける。則ち正宗へ御意を窺ひければ、兎も角も御心に任すべき由仰せければ、新井田へ饋り奉り、對馬守許に、十日餘り御逗留なされける內、對州色々に御馳走饗し奉りけれども、御膳を一度上られず、御菓子にも、御手をかけ給はず。上﨟衆小袋に白米を入れ持參して、御臺御一人に計り、御めしに炊きて進らせ、御供の女房達は、皆對州の賄を請けゝり。此白米、何方より持參申すとは見えざりけるに、定めて御城を出で給ふ時、有明おきくといふ女房衆、持參するならん。大家の御上にて、御館宮落には、此の如きのものか知らずといひあへり。去程に正宗より御輿を遣され、

十一月五日、御譜代の侍九人、御臺の御供し、福島へ御越御座せし内、御供の侍熊澤四郎右衛門・長沼彦右衛門・大波石見を始として、究竟の侍九人御供せしを、一人も殘らず御討ちなされ候。此石州と申すは、御臺須賀川へ御緣の時、親越後守を、植宗公より御臺へ、御附け遣されける侍なり。正宗思ひ給ふは、元來伊達譜代の者が、今度伊達へ思ひよらず。剩へ我に敵したるとて、御殺しありけり。之に依つて御臺樣、正宗を恨み給ひ、程なく福島を御立ち、岩城へ御越し、御聟常隆公の御扶持にて御座ありける所に、常隆御卒去ありし故、佐竹へ御越、八九年御座せし折節、家康公關ヶ原の御合戰に御切勝ち、天下の主となり給ひ、義宣も御意に背き給ひて、羽州秋田へ御國替の砌、御臺樣御病中にて御座せしが、須賀川へ御越、程なく長祿寺にて御逝去なされければ、岩瀨郡に殘り留まりたる御譜代衆、かたの如く葬禮を營み奉り、御忌日迄、年々弔ひ奉りけり。

遠藤雅樂頭内室阿隈河へ身を投ぐる事

斯くて城に楯籠りたる衆、妻子を濫妨せられ、命生きたる人は、方々を尋ね求め受返し、舅謀叛人なれば、正宗へ忠節に紛かし唯取にし、又方々尋ぬるに、行方もなく死骸も見えず。遠國まで尋ね求むる中に、遠藤雅樂頭が内室をば、問ふ者もなかりければ、内室思ひ給ふは、父子二人の內、一人討漏らされ給はゞ、爭でか我が行方を尋ね來らざらん。二人共に討たれ給ひたればこそ、日數を經ても、音信もなきぞと、悲み泣き給ふが、案の如く雅樂頭父子、共に討たれ給ふと聞き給ひ、涙の淵に沈み、瘦せ衰へ給ひける。濫妨し取りたりし男、此形勢を見て、御心を慰めんとや思ひけん、縱ひ御緣あらず、捨て置かれ給はゞ、我れ能く御緣を求めて、何れの北の方にも媒し具へ申さん。夫れ人間の生樂は、身安く樂に極まれり。節義を曲げて、我が申す旨を背き給ふべからず。何と歎き給ひても、今生の御對面はあるべからず。只歎き給はんより、念佛の一返も回向し給へといひければ、內室は物をも宣はず、自ら意に任する身にてあるならば、翠の髮を切落し、諸國修行の尼となり、明暮父子の御菩提を祈り、彌陀の來迎に預らんに、此の如く囚の身となり、願ふ心に任せず。今は殘る命こそ

あだなれ。須賀川落城の時、兎も角もなるならば、斯樣に物は思はじ。恨めしの我が命と、掻口說き歎き給ひしが、其後近所の寺へ忍び行き給ひ、自らは須賀川落城の節、濫妨に捕へられ參りたる女にて候。夫も討たれ、子も討死仕候へば、我を尋ね問ふ者もなく、孤獨の身となりぬ。明暮父子二人の面影身に添ひ、忘るゝ隙もなく歎き候を、宿の主哀れにや思ひ、心を慰むとや申しけん、尋ぬる緣なく候はゞ、能き緣に媒申さん抔申候。縱ひ夫生きて緣づき、離別の中なりとも、又改めて兩夫にまみゆる事あるまじ。況や厭かぬ別れの中の、爭でか左樣の事やあるべき。餘りに歎き悲みけるにや、痰滿ち胸塞がり、命も存へ難く覺え候。浮世は定なき習なれば、露の命消えなん時に、導師を賴み奉る迄はなくとも、御結緣に、小經の一卷も御回向に預り、佛果を得たしとて、泣々懷中より、蒔繪の箱に入れたる鏡を取出し、御布施を進せたく候へども、落人の身にて候へば、叶はずこそ候へ。此鏡は、重代相傳の物に候へば、此度も放さず持來り候が、是を進せんとて、住持の前へ出しけり。住持見て、女性の寶の內に、鏡を第一とすると承りしに、是を放し給ふこそ覺束なし。愚僧所

用ありて、近日岩瀨へ參り候へば、御殿父子の御假名憎に承りて、御親類知音の方を委しく尋ね、御有樣をも語り、御一門御傍輩の中を進め、岩瀨へ御歸り候樣に計らひ申すべし。歎き給ひても、亡き人の又歸る事もあらざれば、御心を慰め給ひ、愁を散じ給はゞ、御煩も本復ましく給はん。よりく念佛の一返も御回向あらば、歎き給ふには增したるべし。此鏡を所持し給ひては、御用心も危く候へば、岩瀨へ御歸あるまでは、愚僧憎に預かり置き申すとて、色々もてなし敎訓しけれども、雅樂頭の假名を語り給はず、宿へ歸り給ひしが、明くれば霜月廿六日の丑刻、沐浴して、夜を籠めて宿を立出で、卯刻計に、河原の石を懷に拾ひ入れ、深淵の上に望み、西に向ひ念佛十返計り唱へ、淵へ飛入り給ひける。折節其邊近く行當りたる人是を見、只今なまめいたる女房の、淵の上にて念佛を唱へ、身を投げたると呼びければ、所の者共、竿や熊手を持ちて水底を搜し、熊手に引掻け上げければども、程過ぎければ、息絕え目閉ぢ、空しくなり給ひぬ。人々いひけるは、昔より夫に離れし女も多きに、命を捨てたるは稀なりとて、哀を催しけり。住持も一入哀れに思ひ、其所にて火葬になし、白

骨を卵塔に納め、父子三人の卒都婆を建立し、懇に弔ひける。彼の鏡の箱の下に、

なき人のこゝに車のなきとてもめぐり逢はなん人は蓮葉

後の世もあふくま川に身を投げて浮ぶは深き縁なりけり

住持見て、優しき女性の辭世かなと、感涙を流し、

昨日まで逢ひ見し人はなけれども殘る言葉は大和言の葉

と讀みて追善になして、讀經供養しけり。

石川昭光入ニ須賀川ニ事附大里籠城

須賀川落城の後、岩瀨をば正宗より石川大和守昭光に遣され、家老屋吹薩摩守、掟に隨ひけるこそ、定めなき浮世なれ。須賀川城に楯籠りし者共、四方を圍まれ、討漏るべき樣なしといへども、敵の中に、親類緣者數多あるに依つて、皆討たれずありし侍は、昭光の抱分になり、皆知行を取りにけり。筒部野州は、正宗にも隨はず、須賀川へも加勢せず、狸森城に引籠りしが、正宗へ奉公しけり。鹽田右近大夫は、落城の後、

石河の町へ引退きける。正宗より昭光に命じ、石川の町にて、主從皆討たせ給ひぬ。小田原内膳は、郡山・日出山・大槻・富田、東は田村郡、東西南北より敵に挾まれ、永々居て遂に二心なく、今度も心替なし。箭田野房州は、大里城に引籠り、上寺にて、羽柴筑前守秀吉公御發向の由聞及び、弟善九郎・泉田將監を留主居に置き、上方へ登る所に、正宗より石河昭光・片倉小十郎兩人に命じ、大里城を二重三重に取卷き攻めけれ共、名城なれば落ちず。將監築地を廻り、鐵炮四五挺持たせ、玉藥を入替へ〳〵、油斷なく寄手を目の下に見下し打ちければ、一人も逃さず打殺し、千貫段に鐵炮を揃へ打倒し、城の根に寄せたる者をば、上より木石を投げて、殺す事夥し。之に依て圍をなし、陣を取り控へ居たりけるに、城より矢文を射入れけるを見れば、狂歌なり。

大里を小里と思ひ陣取りて手答へぬれば陣にあきみち

と讀みたり。又城中より、小十郎が陣へ射入れける。

片倉に乘りて落ちずと小十郎我が鐵炮で打ちて倒さん

と書き、片倉小十郎殿參る某とぞ書きたり。去程に寄手詮議しけるは、城内餘所に

用水の便なければ、城中へ汲む用水の手を取らんと、大勢彼所へ馳せ向ひ、城中よりも泉田將監・弟左近・明石田左馬介・大方庵・大河原伊豫・芳賀近内抔といふ一人當千の兵、水の手を取らんと防ぎ戰ひける程に、寄手悉く討たれけれども、事ともせず、新手を入替へ〳〵攻めければ、終に此水の手を取り、敵味方の死骸を入れて埋めければ、城中此外に用水なかりければ、唯天水を待つ計りなり。寄手より城中へ、矢文を射入れける。

泉田と賴む水の手取れぬればのどの乾きを何と將監

泉田將監殿參るとぞ書きにけり。城中には、水の手を埋められけれども、兩度雨降りければ、水不足なる事もなく、城内堅固に持固めける。箭田野房州は、上方へ登りし道にて此事を聞き、中途より引歸り、大里城へ打入らんとしけれども、三帀の圍なれば、爭でか入らるべき故に、佐竹へ行き給ひける所に、羽柴筑前守秀吉公、奥州へ御馬を出さるゝとて、上方の兵、日夜引きも切らず、大勢下りければ、大里の寄手、思の外に圍を解きにける。箭田野房州は、其儘上方へ登り給ひ、秀吉公へ御目見ある

ならば然るべきに、詮なく歸りし事と、皆人いひあへり。

會津仙道爲氏卿の知行の事

羽柴筑前守秀吉公は、五畿七道を殘らず打隨へ給ひ、太閤豐臣の朝臣秀吉と號し奉り、上古末代にも例少なき御威勢、天下を治め給ひける。江州日野住人俵藤太秀鄕の末孫、蒲生飛驒守氏鄕に、會津・仙道・伊達・信夫・白岩まで、百二十萬石を給はり、會津の城へ入部あり。正宗は仙臺へ入部あり。白河義親・石川昭光・田村淸秋も城を明け、仙臺へ引退きけり。義親は天津兒屋根命の後胤結城上野入道の末孫、石川昭光は源氏にて、賀茂次郎源太有光より御家を繼ぎ、田村淸秋は、田村丸の末葉、何れも高家にて、正宗の御家に劣り給はねども、世に隨ふ習とて、正宗を主君と賴み奉る御心の內、推量られて淺ましや。早速太閤へ出仕あるならば、何れも御家立つべきに、白河義親は、正宗と御同道にて御登り、結城上野入道より、重代相傳せし太刀を、進らせべき由宣ひければ、正宗聞き給ひ、長々の御旅御大儀に候。又上方の樣子、如何

樣に之あるも叶られず候。先づ我等罷登り、委しく樣子を窺ひて罷下りて後に、太閤へ御禮然るべく候。其太刀をば某持參し、是は白河義親進物の由申し、太閤へ捧げ、貴客の御事、宜しく取成披露申さん。御登些と遲くとも苦しからずと宣ひ、義親を留置き、太刀をば正宗請取りて上方へ登り、此太刀をば、正宗の手前の進物にせられける。此の如く重代の太刀を、益なき他門の寶とし、代々相傳の所領にも放れ給ふ事、上方へ御登なき故なり。太閤は、奧州へ御出馬ありて、會津へ出御ありけるが、何とか思召されけん、曲輪の內へ御入なくして、早速御歸陣あり、長沼新國上總介城へ入御あり、奧州悉く御手に入りければ、長沼より卽ち上方へ御登ありけり。秀吉公天下を治め給ひて、文祿二壬巳歲、日本の軍勢百八十萬騎を率し、高麗國を攻取り給ひ、後に豐國大明神と祝はれさせ給ひ、天下泰平國土安穩の御代となりにけり。

仙道軍記卷之下終

伊達正宗須賀川城を攻む

夫郡の兵大黒石畔より、鬨を作り馳せ向ふ。城方は礫場の高所に白旗を立て、濱尾參河守・同筑後守・同志摩守・矢部伊豫守・遠藤雅樂頭・朝日伊勢守・大波越後守を先として、御旗本を守護す。寄手の向陣には、遠藤壹岐守・濱尾內藏介・同近內・長沼彥左衞門・大波石見守・子息新四郎・朝日萬七・岩崎藤十郎・熊澤四郎右衞門・同助左衞門・忍藤兵衞・荒木田淸右衞門・薄井源左衞門・內田肥前守・高林右衞門・上寺德善院・同光明院・須田主膳・同右近・箭部紀伊守・同馬之允・同源五郎・濱尾藤市・須田掃部介・同織部・大寺宮內・伊土井藤內・大賀大學・箭內介右衞門・白葉因幡守・濱尾內記・弟彌兵衞・弟內匠介・小川內藏允・子息彌三郎・飯土用七兵衞・鈴木太郎左衞門・子息孫七郎・同彥八郎・石井大學・今泉伊豆守・早原彥右衞門・西牧甚四郎・片寄新藏人・宮崎內記・中村助七郎・小野寺外記・矢部雅樂介・弟與次右衞門・根本左馬允・佐藤主水・太田與三右衞門・同監物・塚原二郎右衞門・味戶助兵衞・藍原太郎左衞門・橋本藤右衞門・佐久間重右衞門・志賀木工介・石井彥右衞門・舞木介左衞門・吉田彥十郎・磯部孫右衞門・同與十郎・舟田次郎左衞門・車田平右衞門・三瓶太郎左衞門・小林彌八郎・安久津與八郎・木田新四郎・同

文右衞門・大橋掃部・五市隼人・佐藤介七郎・同名雅樂允・梅宮源七郎・沙茂孫十郎・花川藤左衞門・影山與惣六・同長三・同文市、御旗本衆鐵炮の上手には、鈴木太郎左衞門・從弟六郎右衞門・泉田將監・弟左近・須田源藏を初として、卅餘人勝りて、一人に鐵炮三挺四挺宛、玉藥を次ぐ者を相添へけり。弓は忍羽右衞門・玉名與次右衞門抔といふ究竟の射手數人、弓の絃くひしめし、小引して待懸けたり。須田濃州は、四目結の旗差し安藤・服部・小板橋・篠山・山寺・長瀬・割鎖・鈍柄抔といふ武邊者共、前後左右に附隨はせ向ひけり。北には植田但馬守を大將として、岩瀨勢三百餘騎にて控へたり。南には河井甲斐守・茂武左馬介・竹貫中務大輔、三百餘騎待ち居たり。其外岩城・佐竹の勢をば、物陰に深く隱し置きにけり。須賀川衆、一二百騎の兵を出して馳せ向ふ。信夫の兵、牛袋に打臨みて、是を見思ふには、敵に似ず小勢なりと侮りて、五百餘騎の兵、同時に馬を西川へ打入れ、渡して進み懸けゝれ共、細繩手なれば、駒の頭を、二騎とも雙ぶ事も叶はざりけり。須賀川衆は、思ふ樣に敵引出し、態と防ぐまねして引退きければ、信夫勢勝に乘りて、逃ぐるを追ふ事一町餘、敵を思ふ圖におびき出し

ければ、弓鐵炮にて打立てける程に、一人も打殺さゞるはなし。敵怺へ兼ね、引かんとするに所なく、上には須田美濃守・遠藤壹岐守・同雅樂頭・濱尾內藏介・同近內・矢部伊豫守を始め、皆志を一にして防ぎ戰ひ、南よりは河井甲斐守・茂武左馬介・竹貫中務大輔、弓鐵炮を揃へ、攻め來る敵を打倒す。中にも竹貫衆水野勘解由强弓なりけり。北は植田但州、弓鐵炮鑓を以て防ぎければ、信夫の寄手三方より圍まれ、悉く討たれ敗軍し、引かんとすれば、細繩手なれば遁るに道塞り、進退爰に谷りて、殘少に討なされ、討漏らされたる兵、ほうぐ本陣へ逃歸る。此戰の半に隙を伺ひて、伊達の宿老八代勘解由兵衞・長沼城主新國上總介兩手の兵、皆步立にて、大黑石の池より、岩の間作田を傳ひ、忍び來りける。此作田、南北共に高く、窪田なりければ、敵の來るも見えず、放火せんとて、會下町頭の南へ程近く來るを見付け、二陣に控へたる箭部主膳・圓谷與惣左衞門・同右馬允・遠藤左馬介・鹿島彥八郎・須田大藏・前田河信濃守・江持近江守、河東の鄕にては、遠藤右近大夫・同內藏頭・同彌右衞門・佐久間主殿介・同彌左衞門・飯村六郎左衞門・內山左馬允・靑木次郎兵衞・大原內匠・黑月與右衞門・大槻與

一郎・桐生玄蕃・同若狹・須田內藏允・同左近大夫・日照田大學・大寺雅樂允・服部伊豆・吉成玄蕃・同監物・江藤萬戶を先として、皆轡をならべ、伊達長沼の兩勢を中に取籠め、一人も漏らさず討捕らんと馳向ひければ、叶はじとや思ひけん、駿足を出し逃げけるを、追打つ事二百餘人なり。逃れんとするに、始め忍び來りし作田より外はなし。南八幡山の方へ逃れんとすれば、鑓にて突落されぬ。十方を失ふ所を、北の高より目の下に見下し、打殺しけり。此の如く信夫・伊達・長沼の兵を悉く討取り、須賀川衆悅び控へたり。正宗、保土原・江南を召して宣ふは、須賀川の兵武くして、左右なく本意を遂ぐる合戰叶ふまじ。先づ小勢を以て蒐けて、敵侮りて懸らん時、矢軍些しするまねして、河原表へ引退かば、須賀川勢、勝に乘りて追ひ來らん。此時人數を三四手に配り、大勢一同に攻懸らば、須賀川勢防ぎ兼ね、引退く所を附入にし、是より見ゆる町へ追入れ、宿に火をかけ燒散らし、是を御手持にて、御歸陣あるべきの由仰せられ、先づ小勢を以て寄せ給ふ。須賀川衆事ともせず、岩城・佐竹の衆をば、此彼に打散らし隱し置き、御旗本衆計、兵を進めて戰ふ程に、伊達の軍破れて數多討たれ、伊達

の軍將の首を、濱尾近内討捕り、大黑石坂の下迄追返し、細畔へは追行かざりけり。本の陣へ馳せ返り、馬を西頭に立て、暫く息を休めて控へたる所へ、伊達勢三手四手續き馳せ向ふを、鶴翼に開いて、弓鐵炮を揃へ待ち居たり。伊達勢敵を三方に受けて、遁るべき方なければ、死を輕んじ戰へども、細畔なれば、諸勢一度に懸る事を得ず、伊達の二陣馳加はりて、壁を破り戰ひけれども叶はず、人馬共に疲れ、北へ逃れんとすれば、植田但州岩城勢、三百餘騎にて控へたり。跡へ引かんとすれば、味方の勢、細畔なれば道なし。南へ上り落ちんとすれば、茂武左馬介・河井甲斐守・竹貫中務、敵を目の下に見て、弓鐵炮を揃へ待懸けたり。前には敵ありて、四方を圍まれぬれば、上へ下へとさわぎ揉み合ふを、上より大石を轉ばしかけ打倒す。一陣破れければ、二陣の伊達勢、西河へ飛入り〳〵引退くを、岩城勢南へ廻り、堀底の方より遮り討たんとす。須賀川・河東の鄉の二手を一手にして、中より一同に鬨を作り追詰め、東南北より攻めければ、悉く敗軍し、落行く伊達衆を、數多討取りて各悦び、正宗當城へ幾度向ひ給ふ共、勝利はなるまじと、廣言吐いて喜びけり。濱尾參州いひけるは、大

敵に向つて陣を張り、戰を決せんとする時、兵氣といふ事あり。高き所に打上り、雨方の陣を見るに、味方の陣に兵氣上らず。いか樣此度の戰、必ずしも勝利得難しといひけれども、敵の攻め來るに、縦ひ討滅さゞる迄も、捨て置かれじと申しけり。

守屋筑後守謀叛の事

斯くて守屋筑州を大將にして、鈴木帶刀・子息八郎・山寺淡路守・小川和泉守・子息彦太郎・牛袋將監・滑川藤十郎・守屋采女・坂地五郎右衞門を先として、盤の石雨呼口より、敵馳せ向ふまじきとて、僅百四五十騎にて、狗物馬場口を固め控へたり。此所難所なれば、敵一人も馳せ向はず。正宗の御陣場は、西川を隔て、雨呼の西に、日の丸の小旗を立靡し、其間二三町には過ぎず。然るに守屋筑後守川端に出で、指したる小旗を正宗の御陣所に向ひ、横に二三度振りけるを、皆人見て、謀叛の相圖とは夢にも知らず、何事にて振るかと見居たれば、守屋が被官織部・近部といふ二人の兄弟、北町に火を掛けゝれば、煙天に滿ち炎盛なりしかば、守屋正宗の陣場へ駈入るを見て、

狗物馬場を堅め控へ居たる兵も、心ならず降人になりて、正宗の城へ駈入り、或は散散に落失せけり。守屋逆心せしは、須田一人の胸に落居し、四天の分別に任せず、濃州一人に權を取られ、安からざる事に思ひ、何事をいひても、能き樣にあるべしと計いひて、一言もいはざりければ、人々の沙汰に、守屋殿の意見にて、能からずる樣にと申しけるが、終に此恨にて謀叛せり。大黑石口にては、寄手を物共せず、防ぎ戰ひけるが、火の手四方に上りければ、會下町の軍破れ、二の丸指して引退くを、寄手追ひ戰ひければ、返し合せ戰ひけるが、敵は大敵なれば終に打負けて、河井甲斐守・茂武左馬介・竹貫中務・植田但馬・鈴木六郎右衞門・佐藤主水討たれにけり。殘兵二の丸へ逃入りし程に、人に人重なりて、倒れたる者は蹴殺されける。二の丸に籠りし者共、敵方に一門親類數多ありければ、是を助けん爲に、二の丸へ馳せ來り、喜び引退けて、普く命を助かりける。遠藤壹岐守は、岩瀨勢防ぐ事叶はず、落城するを見て、敵の中を乘割り、正宗の御前へ參り、只今迄當城に楯籠り、防ぎ戰ひ候へ共、不運にして落城仕候へば、力なく候。今敵を討つて、詮なき人を殺すも無益に候。又遁るゝに便あ

れば、落失せ命を全うせんは易く候へ共、只御前にて首を刎ねられ、運を極め申さんと、謹で申しければ、正宗聞き給ひ、只今迄心を變へず、一命を捨て是迄來る事、勇士の心ばせ神妙なり。今より後は我に隨ひ給へとて、命を助けられけり。去程に本丸には、御臺樣、守屋の内室を御前へ召され仰せけるは、縱ひ千人が心替りあり共、守屋に於ては二心あるまじきと賴みし一方の大將、忽に心を變じ放火せしめ、落城する事、異國本朝にも比類なき者かな。恨は只守屋に止めたりと仰せければ、内室申さるゝは、女は君夫に仕へて、順從の道を守るを婦人の道とし、士は心を變へざるを武の本意とす。然るに守屋、累代の主君に謀叛を致し、御當家滅亡する事、大逆無道、其罪蒼海よりも深し。唯自が骨を碎き肉を割き給ひ、御憤を休め給ふべしと畏れ給ふ所を、御臺餘りに怒に堪へ兼ね、内室の胸づくしを取りて引寄せ、小脇指にて突き給ふを、女心なれば、上﨟數多寄りて、御臺の御手に取付きければ、内室の喉の下へ少し當り、突殺し給はず。其脇指にて、御喉を突き給ふを、上﨟達取付き、御脇指を奪ひ奉る。御喉を除き、右の方に御脇指當り、御自害をも遂げ給はず。守屋は内室

須賀川城陥る

二階堂家断絶

に、人を付けてや置きたりけん、究竟の者七八人來りて、守屋の內室を負ひて引退き、鳥の飛ぶが如く御堀を越え、西の方へ落行き命を助かりけり。此時男一人も居合はさず、留むる者もなかりけり。去程に敵、長祿寺に亂入りて放火しければ、七堂伽藍も忽に燃上る。折節西風烈しく吹きければ、御實城は唯堀一重隔てし所なれば、風呂屋と御廣間へ一同に火燃付き、城中煙滿ちにけり。正宗公より、人を二三十人御本丸へ遣され、御臺を負ひ奉り、女房達十四五人御供なり。御先の上﨟二人抱子二つ立持ちて、御城を出で給ふ。此日いかなる日ぞや。須賀川六代にして、二階堂家斷絶せり。本丸には、久しく召使はれける高橋菊阿彌父子・濱尾孫十郎、以上三人より外に居ず、皆落失せけり。此十郎は男道を嗜み、弓矢修行の譽を取り、去々年伊達へ行きて、正宗へ奉公し、此度須賀川への御供し、馳向ひたりしが、守屋謀叛に依つて、須賀川落城するを聞きて、親參河・兄內藏介の事心元なく思ひ、守屋が謀叛故、落城の由を告知らせ、母儀と兄の妻子を、恙なく落さんとて、急ぎ本丸へ入り、此彼を尋ねければ、女房達火を遁れんとて、築地の上に登り集りし中にて、母儀と兄の妻子を見

付け、喜び力を得、落さんと思ひ、向の堀端に、正宗の不斷衆數多並居たるを見て、築地より堀の際へ下りて、招きいひけるは、義を缺くまじきならば、妻子を其へ落さん。此度の儀、何れも賴み申すといひければ、正宗衆御旗を掛け、八幡大菩薩も照覽あれ、互に知音の中なれば、貴殿の爲に、何ぞ義を缺くべき。心安く落し給へといひければ、十郎悅び、築地の上へ立歸り見るに、はや何地へか、妻子共を連行きけん、行方知らざりければ、十郎大に腹を立て、鑓を取りて垣を越し、もがりを破り、攻入る敵を突倒し、高橋菊阿彌父子と、此濱尾十郎三人にて、田村勢を防ぎ戰ひける所へ、正宗不斷の知音なる衆二三十人亂れ入りしが、伊達・田村の兵、十郎を討たんと飛懸るを見て押隔て、是は我々が傍輩なるぞ。味方討するなと下知し、十郎を引退け、城を出しければ、恙なく江南の陣中へ行きて、其夜保土原へ引退く。其後は、伊達へは行かざりけり。菊阿彌父子は、大勢に取籠められ、終に討たれにけり。大手にては、遠藤雅樂が子息彥一・大賀大學・玉名與次右衞門・宮崎內記・大波越後守を始として、岩城・佐竹衆雜兵共に討死數多ありて、あげて數ふべからず。須田濃州は、敵の中を乘

脱け、猛火の中を駈通し、我在城へ退き、其夜和田を自燒して、退き給ひけり。

御臺新井田へ落ち給ふ事

斯くて正宗の御家人、御臺を負ひ奉り、正宗の陣場近くなりければ、御臺仰せらるゝは、遠藤對馬は、此度少も逆心の意なきを我れ感じ、種々に意見を加へ、正宗へ降參させしなれば、對馬に於ては、少も恨なし。之に依つて薪井田へ御越あるべしと宣ひける。則ち正宗へ御意を窺ひければ、兎も角も御心に任すべき由仰せければ、新井田へ饋り奉り、對馬守許に、十日餘り御逗留なされける內、對州色々に御馳走饗し奉りけれども、御膳を一度上られず、御菓子にも、御手をかけ給はず。上﨟衆小袋に白米を入れ持參して、御臺御一人に計り、御めしに炊きて進らせ、御供の女房達は、皆對州の賄を請けゝり。此白米、何方より持參申すとは見えざりけるに、定めて御城を出で給ふ時、有明おきくといふ女房衆、持參するならん。大家の御上にて、御館宮落には、此の如きのものか知らずといひあへり。去程に正宗より御輿を遣され、

十一月五日、御譜代の侍九人、御臺の御供し、福島へ御越御座せし內、御供の侍熊澤四郎右衛門・長沼彥右衛門・大波石見を始として、究竟の侍九人御供せしを、一人も殘らず御討ちなされ候。此石州と申すは、御臺須賀川へ御緣の時、親越後守を、植宗公より御臺へ、御附け遣されける侍なり。正宗思ひ給ふは、元來伊達譜代の者が、今度伊達へ思ひよらず。剰へ我に敵したるとて、御殺しありけり。之に依つて御臺樣、正宗を恨み給ひ、程なく福島を御立ち、岩城へ御越し、御聟常隆公の御扶持にて御座ありける所に、常隆御卒去ありし故、佐竹へ御越、八九年御座せし折節、家康公關ヶ原の御合戰に御切勝ち、天下の主となり給ひ、義宣も御意に背き給ひて、羽州秋田へ御國替の砌、御臺樣御病中にて御座せしが、須賀川へ御越、程なく長祿寺にて御逝去なされければ、岩瀨郡に殘り留まりたる御譜代衆、かたの如く葬禮を營み奉り、御忌日迄、年々弔ひ奉りけり。

遠藤雅樂頭內室阿隈河へ身を投ぐる事

斯くて城に楯籠りたる衆、妻子を濫妨せられ、命生きたる人は、方々を尋ね求め受返し、舅謀叛人なれば、正宗へ忠節に紛かし唯取にし、又方々尋ぬるに、行方もなく死骸も見えず。遠國まで尋ね求むる中に、遠藤雅樂頭が内室をば、問ふ者もなかりければ、内室思ひ給ふは、父子二人の内、一人討漏らされ給はゞ、爭でか我が行方を尋ね來らざらん。二人共に討たれ給ひたればこそ、日數を經ても、音信もなきぞと、悲み泣き給ふが、案の如く雅樂頭父子、共に討たれ給ふと聞き給ひ、淚の淵に沈み、瘦せ衰へ給ひける。濫妨し取りたりし男、此形勢を見て、御心を慰めんとや思ひけん、縱ひ御緣あらず、捨て置かれ給はゞ、我れ能く御緣を求めて、何れの北の方にも媒し具へ申さん。夫れ人間の生樂は、身安く樂に極まれり。節義を曲げて、我が申す旨を背き給ふべからず。何と歎き給ひても、今生の御對面はあるべからず。只歎き給はんより、念佛の一返も回向し給へといひければ、内室は物をも宣はず、自ら意に任する身にてあるならば、翠の髮を切落し、諸國修行の尼となり、明暮父子の御菩提を祈り、彌陀の來迎に預らんに、此の如く囚の身となり、願ふ心に任せず。今は殘る命こそ

あだなれ。須賀川落城の時、兎も角もなるならば、斯樣に物は思はじ。恨めしの我が命と、掻口說き歎き給ひしが、其後近所の寺へ忍び行き給ひ、自らは須賀川落城の節、濫妨に捕へられ參りたる女にて候。夫も討たれ、子も討死仕候へば、我を尋ね問ふ者もなく、孤獨の身となりぬ。明暮父子二人の面影身に添ひ、忘るゝ隙もなく歎き候を、宿の主哀れにや思ひ、心を慰むとや申しけん、尋ぬる緣なく候はゞ、能き緣に媒申さん抔申候。縱ひ夫生きて緣づき、離別の中なりとも、又改めて兩夫にまみゆる事あるまじ。況や厭かぬ別れの中の、爭でか左樣の事やあるべき。餘りに歎き悲みけるにや、痰滿ち胸塞がり、命も存へ難く覺え候。浮世は定なき習なれば、露の命消えなん時に、導師を賴み奉る迄はなくとも、御結緣に、小經の一卷も御回向に預り、佛果を得たしとて、泣々懷中より、蒔繪の箱に入れたる鏡を取出し、御布施を進せたく候へども、落人の身にて候へば、叶はずこそ候へ。此鏡は、重代相傳の物に候へば、此度も放さず持來り候が、是を進せんとて、住持の前へ出しけり。住持見て、女性の寶の內に、鏡を第一とすると承りしに、是を放し給ふこそ覺束なし。愚僧所

用ありて、近日岩瀨へ參り候へば、御殿父子の御假名憔に承りて、御親類知音の方を委しく尋ね、御有樣をも語り、御一門御傍輩の中を進め、岩瀨へ御歸り候樣に計らひ申すべし。歎き給ひても、亡き人の又歸る事もあらざれば、御心を慰め給ひ、愁を散じ給はゞ、御煩も本復ましく給はん。よりく念佛の一返も御回向あらば、歎き給ふには增したるべし。此鏡を所持し給ひては、御用心も危く候へば、岩瀨へ御歸あるまでは、愚僧憔に預かり置き申すとて、色々もてなし教訓しけれども、雅樂頭の假名を語り給はず、宿へ歸り給ひしが、明くれば霜月廿六日の丑刻、沐浴して、夜を籠めて宿を立出で、卯刻計に、河原の石を懷に拾ひ入れ、深淵の上に望み、西に向ひ念佛十返計り唱へ、淵へ飛入り給ひける。折節其邊近く行當りたる人是を見、只今なまめいたる女房の、淵の上にて念佛を唱へ、身を投げたると呼びければ、所の者共、竿や熊手を持ちて水底を搜し、熊手に引搔け上げければども、程過ぎければ、息絕え目閉ぢ、空しくなり給ひぬ。人々いひけるは、昔より夫に離れし女も多きに、命を捨てたるは稀なりとて、哀を催しけり。住持も一入哀れに思ひ、其所にて火葬になし、白

骨を卵塔に納め、父子三人の卒都婆を建立し、懇に弔ひける。彼の鏡の箱の下に、

なき人のこゝに車のなきとてもめぐり逢はなん人は蓮葉

後の世もあふくま川に身を投げて浮ぶは深き縁なりけり

住持見て、優しき女性の辭世かなと、感涙を流し、

昨日まで逢ひ見し人はなけれども殘る言葉は大和言の葉

と讀みて追善になして、讀經供養しけり。

石川昭光入須賀川事附大里籠城

須賀川落城の後、岩瀬をば正宗より石川大和守昭光に遣され、家老屋吹薩摩守、掟に隨ひけるこそ、定めなき浮世なれ。須賀川城に楯籠りし者共、四方を圍まれ、討漏るべき樣なしといへども、敵の中に、親類緣者數多あるに依つて、皆討たれずありし侍は、昭光の抱分になり、皆知行を取りにけり。箭部野州は、正宗にも隨はず、須賀川へも加勢せず、狸森城に引籠りしが、正宗へ奉公しけり。鹽田右近大夫は、落城の後、

石河の町へ引退きける。正宗より昭光に命じ、石川の町にて、主從皆討たせ給ひぬ。小田原内膳は、郡山・日出山・大槻・富田、東は田村郡、東西南北より敵に挾まれ、永々居て遂に二心なく、今度も心替なし。箭田野房州は、大里城に引籠り、上寺にて、羽柴筑前守秀吉公御發向の由聞及び、弟善九郎・泉田將監を留主居に置き、上方へ登る所に、正宗より石河昭光・片倉小十郎兩人に命じ、大里城を二重三重に取卷き攻めけれ共、名城なれば落ちず。將監築地を廻り、鐵炮四五挺持たせ、玉藥を入替へ〳〵、油斷なく寄手を目の下に見下し打ちければ、一人も逃さず打殺し、千貫段に鐵炮を揃へ打倒し、城の根に寄せたる者をば、上より木石を投げて、殺す事夥し。之に依て園をなし、陣を取り控へ居たりけるに、城より矢文を射入れけるを見れば、狂歌なり、

大里を小里と思ひ陣取りて手答へぬれば陣にあきみち

と讀みたり。又城中より、小十郎が陣へ射入れける。

片倉に乘りて落ちずと小十郎我が鐵炮で打ちて倒さん

と書き、片倉小十郎殿參る某とぞ書きたり。去程に寄手詮議しけるは、城内餘所に

用水の便なければ、城中へ汲む用水の手を取らんと、大勢彼所へ馳せ向ひ、城中よりも泉田將監・弟左近・明石田左馬介・大方庵・大河原伊豫・芳賀近內抔といふ一人當千の兵、水の手を取らんと防ぎ戰ひける程に、寄手悉く討たれけれども、事ともせず、新手を入替へ〱攻めければ、終に此水の手を取り、敵味方の死骸を入れて埋めければ、城中此外に用水なかりければ、唯天水を待つ計りなり。寄手より城中へ、矢文を射入れける。

　泉田と賴む水の手取れぬればのどの乾きを何と將監

泉田將監殿參るとぞ書きにけり。城中には、水の手を埋められけれども、兩度雨降りければ、水不足なる事もなく、城內堅固に持固めける。箭田野房州は、上方へ登りし道にて此事を聞き、中途より引歸り、大里城へ打入らんとしけれども、三帀の圍なれば、爭でか入らるべき故に、佐竹へ行き給ひける所に、羽柴筑前守秀吉公、奥州へ御馬を出さるゝとて、上方の兵、日夜引きも切らず、大勢下りければ、大里の寄手、思の外に圍を解きにける。箭田野房州は、其儘上方へ登り給ひ、秀吉公へ御目見ある

ならば然るべきに、詮なく歸りし事と、皆人いひあへり。

會津仙道爲氏卿の知行の事

羽柴筑前守秀吉公は、五畿七道を殘らず打隨へ給ひ、太閤豐臣の朝臣秀吉と號し奉り、上古末代にも例少なき御威勢、天下を治め給ひける。江州日野住人俵藤太秀郷の末孫、蒲生飛驒守氏鄕に、會津・仙道・伊達・信夫・白岩まで、百二十萬石を給はり、會津の城へ入部あり。正宗は仙臺へ入部あり。白河義親・石川昭光・田村淸秋も城を明け、仙臺へ引退きけり。義親は天津兒屋根命の後胤結城上野入道の末孫、石川昭光は源氏にて、賀茂次郎源太有光より御家を繼ぎ、田村淸秋は、田村丸の末葉、何れも高家にて、正宗の御家に劣り給はねども、世に隨ふ習とて、正宗を主君と賴み奉る御心の內、推量られて淺ましや。早速太閤へ出仕あるならば、何れも御家立つべきに、白河義親は、正宗と御同道にて御登り、結城上野入道より、重代相傳せし太刀を、進らせべき由宣ひければ、正宗聞き給ひ、長々の御旅御大儀に候。又上方の樣子、如何

樣に之あるも叶られず候。先づ我等罷登り、委しく樣子を窺ひて罷下りて後に、太閤へ御禮然るべく候。其太刀をば某持參し、是は白河義親進物の由申し、太閤へ捧げ、貴客の御事、宜しく取成披露申さん。御登些と遲くとも苦しからずと宣ひ、義親を留置き、太刀をば正宗請取りて上方へ登り、此太刀をば、正宗の手前の進物にせられける。此の如く重代の太刀を、益なき他門の寶とし、代々相傳の所領にも放れ給ふ事、上方へ御登なき故なり。太閤は、奥州へ御出馬ありて、會津へ出御ありけるが、何とか思召されけん、曲輪の內へ御入なくして、早速御歸陣あり、長沼新國上總介城へ入御あり、奥州悉く御手に入りければ、長沼より卽ち上方へ御登ありけり。秀吉公天下を治め給ひて、文祿二壬巳歲、日本の軍勢百八十萬騎を率し、高麗國を攻取り給ひ、後に豐國大明神と祝はれさせ給ひ、天下泰平國土安穩の御代となりにけり。

仙道軍記卷之下終

大正三年六月十二日印刷
大正三年六月十五日發行

國史叢書 石田軍記 全 仙道軍記 全

定價金一圓

編者 黑川眞道

發行者 國史研究會

右代表者 小瀧淳
東京市本郷區駒込林町二二四番地

印刷者 楢山定吉
東京市神田區三崎町三丁目一番地

印刷所 友文社
東京市神田區三崎町三丁目一番地

不許複製

發行所
東京市本郷區駒込林町二百廿四番地
振替貯金口座東京二七〇二四番
國史研究會